

兵庫県伊丹市

御願塚古墳発掘調査報告書

—第 8・9・10 次調査—

2008 年 3 月

伊丹市教育委員会

序

本市には、国指定史跡「有岡城跡」・「伊丹廃寺跡」とならんで、
県指定史跡「御願塚古墳」が所在します。

御願塚古墳は、伊丹市城南郊から尼崎市域にかけて所在していた
“猪名野古墳群”のひとつにあたります。その中で唯一、周濠が残り
古墳の形態を留めていたことから、昭和41年に県の史跡に指定
されました。その後、発掘調査により、現存する周濠の外に更に
濠が巡る古墳であることがわかりました。

本報告書は、第8次・第9次・第10次の調査成果をとりまとめた
ものです。これらの調査で、当古墳が二重周濠をもつ帆立貝式古墳
であるだけでなく、「造り出し」をもつことなどが新たにわかりま
した。

本報告書が、学術研究だけにとどまらず、郷土の歴史に関する資
料として、また広く学校教育・社会教育の分野でも活用されるこ
とを願っています。

最後になりましたが、発掘調査をはじめとして、本市の文化財行
政全般にわたってご指導いただいている関係各位に対し、厚くお礼
申し上げます。

平成20年3月

伊丹市教育長 中西 幸造

例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市御願塚4丁目に所在する御願塚古墳の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 本書に収めた調査成果及び調査期間は下記の通りである。
御願塚古墳第8次調査 平成10年5月29日～8月21日
御願塚古墳第9次調査 平成12年11月17日～平成13年1月31日
御願塚古墳第10次調査 平成17年2月1日～2月18日
3. 発掘調査は、伊丹市教育委員会生涯学習部社会教育課、小長谷正治（現伊丹市立博物館館長）・中畔明日香・細川佳子（元嘱託）が担当した。
発掘調査・整理作業の体制は以下のとおりである。
発掘担当者 小長谷正治 中畔明日香 細川佳子
調査補助員 瀬川眞美子 高須賀由美 岡野理奈 川見典久 栗原早苗 亀家千代
整理補助員 瀬川眞美子 吉川敬子 岡野理奈 岩田朱美 丸岡たかみ 三輪隆子
4. 本報告の執筆は、第1章・第2章を中畔が、第3章を中畔・小長谷・瀬川が、補論Ⅱを和島恭仁雄が、第4章を中畔・瀬川が担当した。補論Ⅰについては、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏に執筆頂いた。また、記して感謝いたします。
5. 編集は中畔の指示のもと、瀬川・吉川が担当し、和島が補佐した。
6. 発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料は、伊丹市教育委員会が保管している。
7. 本報告書をまとめるにあたって、花園大学高橋克壽准教授からさまざまなご教示を頂いた。記して感謝いたします。
8. 今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたり、上記のほか多くの方々や機関からご助言、ご指導、ご協力を頂いた。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
兵庫県教育委員会文化財室
兵庫県立考古博物館（旧兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）
尼崎市教育委員会
本田喜雄 櫃本誠一 川口宏海 和田晴吾 小川良太 水口富夫（故人） 村上泰樹
山下史朗 篠宮 正 鐘方正樹 上田 睦 河内一浩 関 真一 青木美香 永井正浩
大野 薫 沼澤 豊 渡辺伸行 柏原正民 山本 誠 小栗明彦 花谷 浩

凡 例

1. 本書で示す方位は、日本測地系国土座標第Ⅴ系にしたがった。標高は、東京湾平均海面値（T.P.）を基準とした。
2. 本書の土色表記は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。

本文目次

| | |
|-----------------------|-----|
| 序文 | |
| 例言 | |
| 凡例 | |
| 第1章 位置と環境 | 1 |
| 第2章 調査経過 | 9 |
| 第3章 調査成果 | 11 |
| 第1節 御願塚古墳第8次調査 | 11 |
| 第2節 御願塚古墳第9次調査 | 65 |
| 第3節 御願塚古墳第10次調査 | 89 |
| 補論 | |
| I 土製品の表面に見られる砂礫 | 101 |
| II 御願塚古墳に関する資料(古文書)から | 105 |
| 第4章 総括 | 121 |
| 参考文献 | |

挿図目次

| | |
|--------------------------------|-------|
| 第1図 遺跡位置図 | 1 |
| 第2図 猪名野古墳群分布図 | 4 |
| 第3図 御願塚古墳第1次調査トレンチ設定図 | 5 |
| 第4図 御願塚古墳第2～10次調査調査区設定図 | 6 |
| 御願塚古墳第8次調査 | |
| 第5図 外濠部平面図・断面図 | 13・14 |
| 第6図 第I～IVトレンチ平面図 | 16 |
| 第7図 第I・III・IVトレンチ平面図・断面図 | 18 |
| 第8図 第IIトレンチ平面図・断面図 | 19 |
| 第9図 第IIトレンチ埴輪列平面図・立面図 | 20 |
| 第10図 埴輪の各部名称 | 22 |
| 第11図 口縁部形状模式図 | 23 |
| 第12図 突帯形状模式図 | 23 |
| 第13図 第IIトレンチ出土韓式系土器 | 34 |
| 第14図 第IIトレンチ出土埴輪(1) | 40 |
| 第15図 " (2) | 41 |
| 第16図 " (3) | 42 |
| 第17図 " (4) | 43 |
| 第18図 " (5) | 44 |

| | | |
|--------------------|---------------------------------------|-----|
| 第 19 図 | 第Ⅱトレンチ出土埴輪 (6) | 45 |
| 第 20 図 | " (7) | 46 |
| 第 21 図 | 第Ⅱトレンチ出土土師器・須恵器 | 47 |
| 第 22 図 | 第Ⅱトレンチ出土須恵器 | 48 |
| 第 23 図 | 第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ出土埴輪 (1) | 49 |
| 第 24 図 | " (2) | 50 |
| 第 25 図 | 外濠部出土埴輪 (1) | 51 |
| 第 26 図 | " (2) | 52 |
| 第 27 図 | " (3)、第Ⅱ・Ⅲトレンチ・外濠部出土遺物 | 53 |
| 御願塚古墳第9次調査 | | |
| 第 28 図 | 平面図・断面図 | 66 |
| 第 29 図 | 墳頂部の埴輪列と段築部の埴輪列平面図・立面図 | 69 |
| 第 30 図 | 墳頂部出土埴輪 | 78 |
| 第 31 図 | 段築部出土埴輪 (1) | 79 |
| 第 32 図 | " (2) | 80 |
| 第 33 図 | " (3) | 81 |
| 第 34 図 | " (4) | 82 |
| 第 35 図 | " (5)、出土遺物 | 83 |
| 御願塚古墳第10次調査 | | |
| 第 36 図 | 平面図・断面図 | 90 |
| 第 37 図 | 出土埴輪 (1) | 95 |
| 第 38 図 | " (2) | 96 |
| 第 39 図 | " (3)、出土遺物 | 97 |
| 第 40 図 | 御願塚古墳平面図復元一案 | 122 |
| 第 41 図 | 御願塚古墳断面図復元一案 | 123 |

図 版 目 次

御願塚古墳第8次調査

| | |
|----------|----------------------------|
| 図版 1 - 1 | 第Ⅰ・Ⅲトレンチ全景 (西北より) |
| 2 | 第Ⅰトレンチ全景 (西北より) |
| 3 | " 南壁断面と平坦面 (西北より) |
| 4 | " 石列検出状況 (北東より) |
| 5 | " 石列検出状況 (西北より) |
| 図版 2 - 1 | 第Ⅱトレンチ全景 (西北より) |
| 2 | " 拡張前 (西北より) |
| 3 | " と第Ⅳトレンチ (北より) |
| 4 | " 北壁断面 (南西より) |
| 5 | " 埴輪列検出状況 (東南より) |

- 図版 3-1 第Ⅱトレンチ北側埴輪列 埴輪 A～H (南西より)
 2 " 南側埴輪列 埴輪 I～N (北東より)
 3 第Ⅱトレンチ北側埴輪列 埴輪 A～H (東南より)
 4 " 南側埴輪列 埴輪 I～N (東南より)
 5 " " 埴輪 I～N (西北より)
 6 第Ⅱトレンチ北側埴輪列掘り方 (東南より)
 7 " 南側埴輪列掘り方 (東南より)
 8 " " と埴輪 O (西北より)
- 図版 4-1 第Ⅲトレンチ全景 (西北より)
 2 " 北壁断面と葺石転落状況 (南西より)
 3 第Ⅲトレンチから造り出し (第Ⅱトレンチ) を見る (北東より)
 4 第Ⅳトレンチ全景
 5 " 南壁断面 (北東より)
- 図版 5-1 外濠部全景 (東より)
 2 " 西壁断面と外濠畦断面 (東北より)
 3 " 外濠内埴輪出土状況 (東北より)
- 図版 6 出土遺物 (1)
 図版 7 " (2)
 図版 8 " (3)
 図版 9 " (4)
 図版 10 " (5)
 図版 11 " (6)
 図版 12 " (7)
 図版 13 " (8)
 図版 14 " (9)
 図版 15 " (10)
 図版 16 " (11)
 図版 17 " (12)

御願塚古墳第9次調査

- 図版 18-1 調査時航空写真 (南より)
 2 全景 墳頂部から段築部を望む (南東より)
- 図版 19-1 墳頂部の埴輪列 (南東より)
 2 墳頂部の埴輪列と東壁断面 (西より)
 3 墳頂部の埴輪列 (東より)
 4 埴輪 1 A と東壁断面 (西より)
 5 墳頂部の埴輪列掘り方 (西より)
 6 " (東より)
- 図版 20-1 段築部の埴輪列と葺石 (北西より)
 2 段築部から墳頂部を見る (北西より)
 3 葺石と葺石転落状況 (南東より)

- 図版 20 - 4 段築部の埴輪列と東壁断面（西より）
 5 段築部の埴輪列（西南より）
 図版 21 出土遺物（1）
 図版 22 "（2）
 図版 23 "（3）
 図版 24 "（4）
 図版 25 "（5）

御願塚古墳第 10 次調査

- 図版 26 - 1 全景（南西より）
 2 外濠検出状況（南西より）
 3 埴輪・須恵器出土状況（北より）
 4 北壁断面（南より）
 5 東壁断面（西より）
 図版 27 出土遺物（1）
 図版 28 "（2）
 図版 29 "（3）

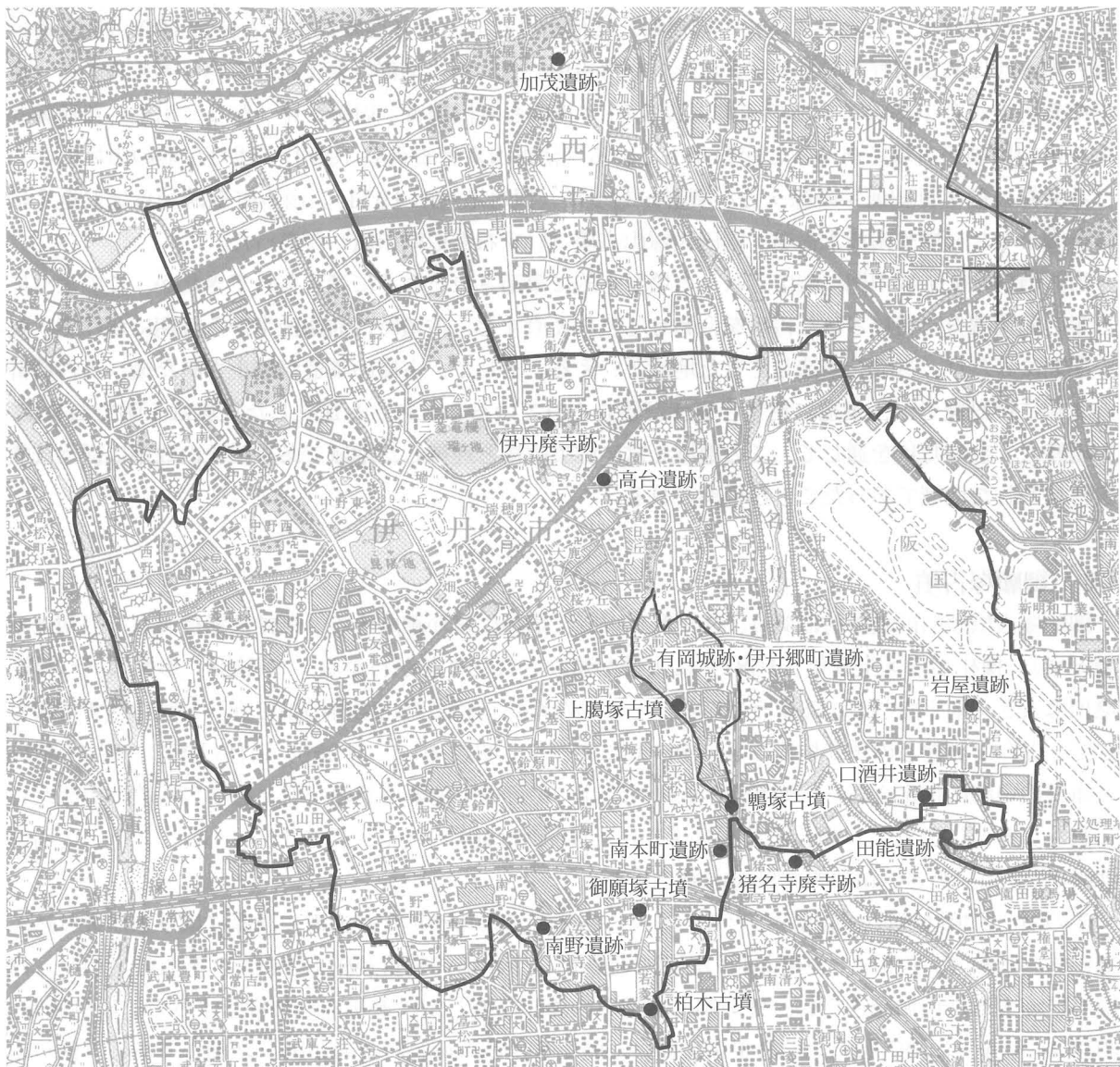
表 目 次

| | | |
|----------------------|---------------------|-----|
| 表 1 | 猪名野古墳群一覧 | 3 |
| 表 2 | 御願塚古墳発掘調査一覧 | 7 |
| 御願塚古墳第 8 次調査 | | |
| 表 3 | 埴輪観察表（1） | 54 |
| 表 4 | "（2） | 56 |
| 表 5 | "（3） | 58 |
| 表 6 | "（4） | 60 |
| 表 7 | 形象埴輪観察表 | 62 |
| 表 8 | 土師器・須恵器・韓式系土器観察表（1） | 62 |
| 表 9 | "（2） | 63 |
| 表 10 | 遺物観察表 | 63 |
| 御願塚古墳第 9 次調査 | | |
| 表 11 | 埴輪観察表（1） | 84 |
| 表 12 | "（2） | 86 |
| 表 13 | 形象埴輪観察表 | 86 |
| 表 14 | 遺物観察表 | 88 |
| 御願塚古墳第 10 次調査 | | |
| 表 15 | 埴輪観察表 | 98 |
| 表 16 | 形象埴輪観察表 | 100 |
| 表 17 | 遺物観察表 | 100 |

第1章 位置と環境

御願塚古墳^{ごがづか}の所在する伊丹市は兵庫県の南東端にあり、猪名川と武庫川の2つの河川に挟まれ、山も海も持たない比較的平坦な地形である。伊丹台地（段丘）が市域のほぼ中央に位置し、北から南に向かって標高約40 mから5 mと緩やかに傾斜して、尼崎市の平野部に続いている。

猪名川の東側には口酒井遺跡^{くさけ}・田能遺跡^{たのう}・岩屋遺跡などの縄文時代末期から弥生時代の遺跡が発見されている。台地の上では、高台遺跡第4地点において、縄文時代晩期～奈良時代にかけての集落跡が発見されている（伊丹市教育委員会 1998）。奈良時代のはじめ頃に建立された伊丹廃寺跡は、その北西500 mにある。また、台地の中央から南東にかけ、段丘縁に沿って有岡城跡・伊丹郷町遺跡（戦国～江戸時代）が、その南に南本町遺跡（古墳～奈良時代）がある。台地中央から尼崎市域にかけては中期のものを中心に古墳が点在している。川西市の加茂遺跡（弥生時代）や尼崎市の猪名寺廃寺跡（奈良時代）も、同台地上にある。



第1図 遺跡位置図（平成14年 S=1/50,000「大阪西北部」に加筆）

(1) 猪名野古墳群

伊丹市域から尼崎市域にかけては、かつて古墳時代中期を中心として、数多くの古墳が分布していた。明治18年の測量図を見ると、現在、古墳の位置であるところに小山の記載が見られ、この地域に古墳が点在していたことがわかる。古墳の分布を見ると、伊丹台地上に形成されたことが推察される。残念ながら本格的な発掘調査が行われないまま、池田山古墳・園田大塚山古墳（尼崎市）を含めて多くの古墳が消滅し、現在は御願塚古墳など数基しか残っていない。これらの古墳を総称して、“猪名野古墳群”と呼んでいる。

猪名野古墳群の多くの古墳は、伊丹台地上に築造されていた（第2図「猪名野古墳群分布図」）。同じ伊丹台地上にある有岡城跡・伊丹郷町遺跡内^{じょうろう}上臈塚砦の推定地点から、近年古墳基底部のくびれ部が発見され、前期（4世紀後半）の前方後円墳「上臈塚古墳」の存在が明らかになった（伊丹市教育委員会2001、伊丹市・六甲山麓遺跡調査会2003、浅岡2001他）。また、その100m東ではほぼ同時期の埴輪円筒棺が発見されている（兵庫県教育委員会2006）。同遺跡南端には「鶉塚古墳^{ひよどり}」が残り、隣地調査で出土した埴輪から前期（4世紀末）に築造された古墳であることがわかってきた（伊丹市教育委員会1992・2005、廣瀬2003他）。また、御願塚古墳の北東にある南本町遺跡からは、中期末1基・後期前葉3基の計4基の古墳が新たに検出されている（兵庫県教育委員会1998他）。御願塚古墳南西にある南野遺跡で発見された「南野古墳」も、当古墳群に含まれるものと考えられる（伊丹市教育委員会1999）。市域の南端に残る^{かしわぎ}柏木古墳も発掘調査で周濠が見つかり、出土した埴輪から5世紀中頃の古墳であることがわかっている（伊丹市教育委員会1999）。伊丹台地の市域内における北端には7世紀前半の緑ヶ丘古墳群があった（伊丹市役所1971）。南本町遺跡からほど近くには^{けま}食満1・2号墳や南清水古墳・園田大塚山古墳（いずれも尼崎市域）があった。

当古墳群は従来は中期に限定され、古墳が点的に築造されたように考えられてきたが、このように近年の発掘調査で発見された古墳を合わせてとらえ直すと、古墳時代前期後半から後期にかけて、長い期間にわたり、古墳を築造してきた地域といえる。そして、古墳の築造が停止された後、当古墳群の北端に伊丹廃寺が、東端に猪名寺廃寺が建立されている。どちらも建立した氏族は不明であるが、古墳時代・奈良時代を通じて、この地域が常に中央政権と連携した地域であり、その政権に従う氏族を首長とした地域であったことが推察される。

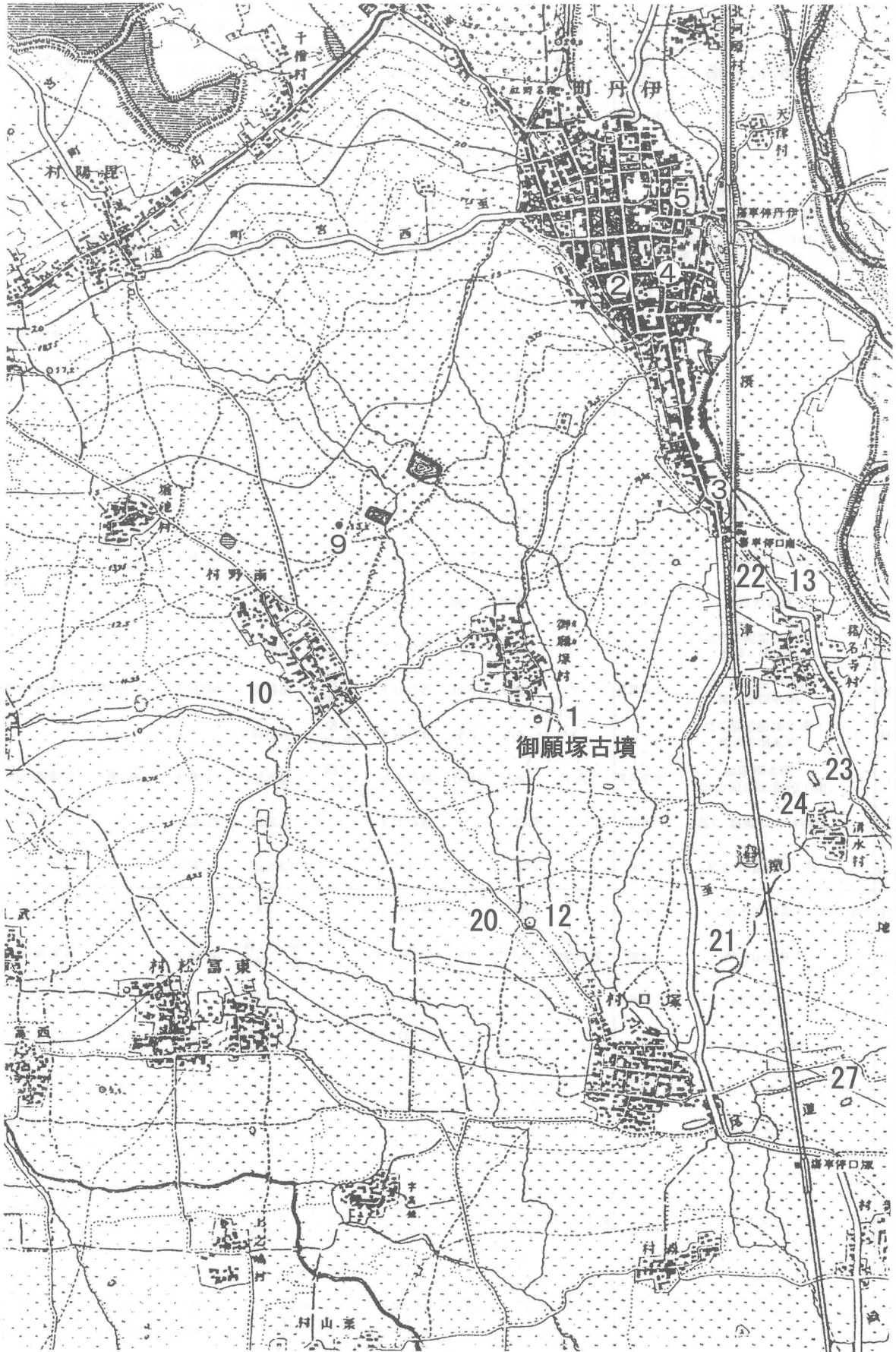
(2) 御願塚古墳

御願塚古墳は旧御願塚村にあり、江戸時代以降、墳頂に宮が鎮座する（祭神は孝徳天皇、当初は孝謙天皇）。棟札から延宝9年（1681）に上葺が建立されたことがわかる（「補論Ⅱ」参照）。その際、墳頂は大きく削平されているようである。しかしながら、猪名野古墳群の中で唯一全容を残す古墳として、保存が必要との声が地元の人々を中心に上がり、昭和40年（1965）に伊丹市の、翌41年に兵庫県の史跡に指定された。昭和42年3月には、伊丹市史編纂事業の一環として当古墳の実測が行われた。それによると、墳丘の全長は52m、前方部は前幅19m・長さ13m・高さ2m、後円部は直径39m・高さ7mの帆立貝式古墳である。

その頃、古墳は墳丘の崩落がひどく、また、古墳周辺の市街地化が進み、周濠には下水が入り込んでいた。昭和43年度に、古墳北側の周濠外堤側に、下水道の配管が施工された。それに合わせ、周濠内に溜まった汚泥をさらい、外堤側に石積み護岸を施して、遊歩道を整備しようという計画が、昭和44年4月に決定した。その工事に伴い、同年8月から行われたのが第1次調査である（伊丹市教育委員会1971）。

| 市 | 古墳(遺跡)名 | | 墳丘 | 周濠 | 規模(m) | 埋葬形態 | 埴輪 | 出土品 | 築造時期 | 調査歴 | 報告書発行年・元 | |
|----|---------|--------------------------------|--------|-----------|-------|--------|-----------|-----------|-------------|----------|--------------------|------------------|
| 1 | 伊丹 | 御願塚古墳 | 残存(境内) | 帆立貝(造り出し) | 2重 | 52 | 不明 | IV期(円・形) | 須恵器土師器 | 5C後半 | S44市～(計10回) | 伊丹市1971、伊丹市1993 |
| 2 | " | 上臈塚古墳 | 埋没発見 | 前方後円? | あり | 70 | 残存せず | II期(円・形) | ガラス小玉 | 4C後半 | S60市、H8県(震災) | 伊丹市2001、六甲山麓2003 |
| 3 | " | 鶯塚古墳 | 残存 | 円? | 不明 | 径20~30 | 不明 | II期(円・形) | なし | 4C後半 | H元市、H10県(震災) | 伊丹市1992、伊丹市2005 |
| 4 | " | 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第204次調査(1基) | 埋没発見 | — | — | — | 埴輪円筒棺 | II期(円) | なし | 4C後半 | H10県 | 兵庫県2006 |
| 5 | " | 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203・217・231次調査(1基) | 埋没発見 | 円? | あり | 不明 | 残存せず | V期(円・形) | 須恵器 | 6C前半 | H7・8・9市(震災) | 伊丹市2007 |
| 6 | " | 満塚 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 7 | " | 温塚 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | 兵庫県1984 |
| 8 | " | 掛塚 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 9 | " | 破塚 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 10 | " | 南野遺跡(1基) | 埋没発見 | 方? | あり | 不明 | 残存せず | V期(円) | 須恵器 | 5C末~6C前半 | H8市(震災) | 伊丹市1999 |
| 11 | " | 平塚古墳 | 残存 | 方? | 不明 | 一辺16 | 不明 | 不明 | — | — | 未 | — |
| 12 | " | 柏木古墳 | 残存(墓地) | 円か前方後円? | あり | 径55 | 不明 | III期(円・形) | なし | 5C前半 | H7県(震災) | 伊丹市1999 |
| 13 | " | 黄金塚古墳 | 残存 | 円 | 不明 | 10弱 | 不明 | 不明 | 須恵器 | — | 未 | 伊丹市史1 |
| 14 | " | 南本町遺跡第3次南本町1号墳 | 埋没発見 | 円 | あり | 15~16 | 残存せず | V期(円・形) | 須恵器 | 6C前半 | H7・8・9県 | 兵庫県1998 |
| 15 | " | 南本町遺跡第3次南本町2号墳 | | ? | あり | 不明 | 残存せず | V期(円・形) | 須恵器 | | | |
| 16 | " | 南本町遺跡第3次南本町3号墳 | | ? | あり | 不明 | 残存せず | V期(円・形) | 須恵器 | | | |
| 17 | " | 南本町遺跡(南①区埋没古墳ST01) | 埋没発見 | 方? | あり | 9以上 | 残存せず | V期(円) | 須恵器 | 6C前半 | H9県 | 兵庫県2007 |
| 18 | " | (伊丹)台地東縁(2基) | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | — | 須恵器 | 7C前半 | — | 伊丹市史1 |
| 19 | " | 緑ヶ丘古墳群(2基) | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | — | 須恵器 | 7C前半 | — | 伊丹市史1 |
| 20 | 尼崎 | 琵琶塚古墳 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 21 | " | 池田山古墳 | 消滅 | 前方後円 | あり? | 71 | 石槨? | — | 鏡・刀・鉄鏃・土師器 | 4C後半 | — | 兵庫県1925 |
| 22 | " | 蛭塚古墳 | 消滅 | 不明 | | 現存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 23 | " | 園田大塚山古墳 | 消滅 | 前方後円 | 不明 | 42 | 粘土槨・竪穴式土坑 | — | 鏡・刀・鞍ほか、須恵器 | 6C前半 | S45・54・55・58・59・61 | 尼崎市1987 |
| 24 | " | 南清水古墳 | 残存(境内) | 帆立貝 | あり? | 46 | 不明 | — | — | 6C? | 未 | 尼崎市史11 |
| 25 | " | 食満1号墳 | 一部残存 | 不明 | | 不明 | | 不明 | | 未 | 未 | 尼崎市史11 |
| 26 | " | 食満2号墳 | 消滅 | 不明 | | 残存せず | | 不明 | | — | — | — |
| 27 | " | 御園古墳 | 残存(墓地) | 前方後円? | 不明 | 60 | 粘土槨・組合式石棺 | (円) | 直刀須恵器 | 5C末、6C | 未 | 尼崎市史11 |
| 28 | " | 岡院の石棺 | | — | — | — | 石棺 | — | — | 5C | — | — |
| 29 | " | 伊居太古墳 | 一部残存 | 不明 | | 92 | 現存せず | 不明 | | 5C | S25・40 | 尼崎市史11 |

表1 猪名野古墳群一覽

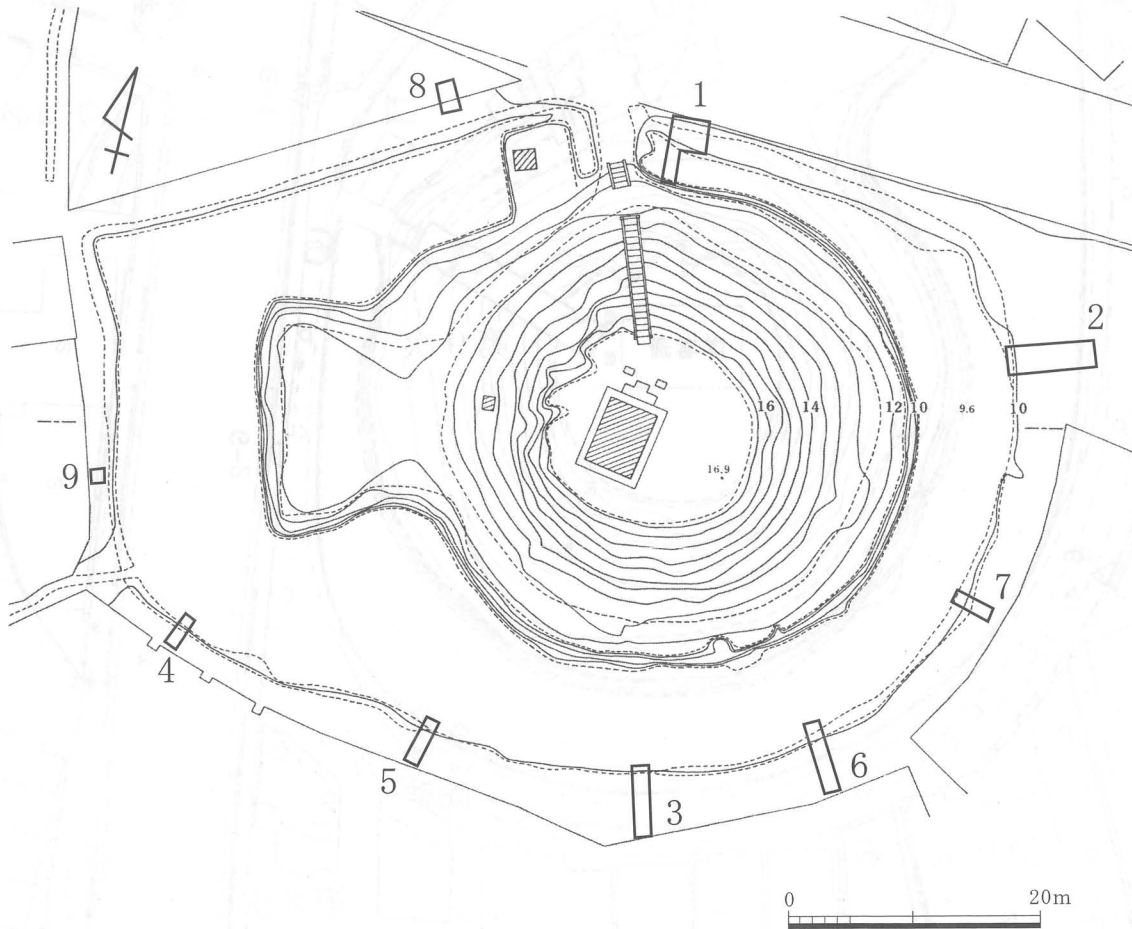


第2図 猪名野古墳群分布図 (明治18年測量 1/20,000 仮製地形図「伊丹町」に加筆)

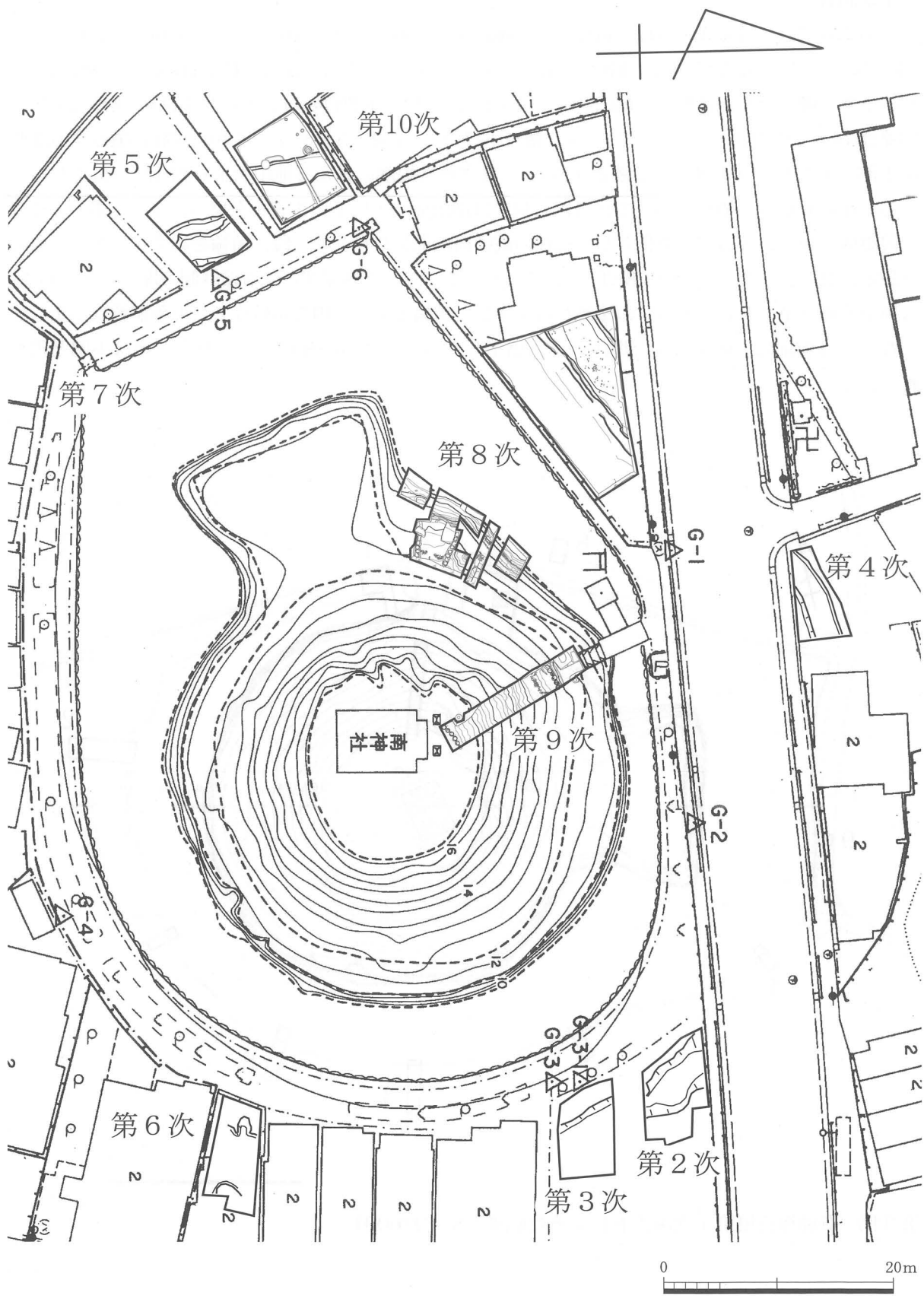
第1次調査

この調査では、周濠底・外堤の遺存状況を確認するために、計9カ所にトレンチが入れられている(第3図)。それによると、外堤の層序は「表土10-15cm下に赤みがかった粘土質の薄い土層があり、その下すぐ礫を混じた黄褐色の地山層になっている」(伊丹市教育委員会1971/4頁)。東から南側の周濠は明治・大正期に水田として、「深く掘り下げられ」(同/5頁)ているが、濠底が遺存する北側東半部(第1トレンチ周辺)で確認すると、「深さが外堤部に見える地山面より約1.0m低くなっている」(同/6頁)。「墳丘についていえば、封土は地山面の上にそのまま土を盛ったようであり、その二段築成の封土の下段部と墳頂ちかい現在の截頭周縁部あたりとの二段に埴輪をめぐらしていたものと想定されるにいたった」(同/8頁)としている。ここでいう外堤部とは周濠外側の堤のことである。

周濠北側(第1トレンチ内)の濠底から出土した埴輪はすべて円筒埴輪片で、形象埴輪は出土していない。外堤部は「礫を含んだ地山の上に盛土したらしい」(同/8頁)が、高さ・幅は不明と書かれている。



第3図 御願塚古墳第1次調査トレンチ設定図 (S = 1/600)



第4図 御願塚古墳第2～10次調査調査区設定図 (S = 1 / 500)

周濠外側の敷地において店舗・個人住宅の建設工事に伴い、数次の調査（第2～7次調査）が行われた（第4図）。それにより、当古墳の周濠に並行して、外側にもう一重の濠（以後、「外濠」と呼ぶ）が検出された。現在残存している周濠（以後、「内濠」と呼ぶ）の外側に「堤」が築かれ、さらに外濠が巡る二重の濠をもつ古墳であることが明らかになってきた（伊丹市教育委員会 1993・1999 他）。

第2次調査

後円部北東、外堤の規模を確認するために行われた第2次調査で、周濠にほぼ沿って巡る溝を検出した。溝底はレンズ状を呈す。溝の埋土からは、御願塚古墳と同種の円筒埴輪片が出土し、この溝が当古墳の外濠であることが裏付けられた。また、埴輪片は「古墳側から入り込んだと考えられ」、堤とそこに樹立していた埴輪列の「存在がほぼ確実なものとなった」と報告されている（同 1993）。

第3次調査

第2次調査の南側隣地において、前調査で発見された外濠の続きを検出した。「当地点では幅5m以上に広が」り、「内側はやや急勾配」、「外側は緩やかに立ち上がっていく」。なお、外濠の外側の立ち上がりは調査区外となる（同 1993）。

第4次調査

後円部北側で行われた。外濠の外側の立ち上がりは「2.4～2.5mの平坦な底面が続き」、再度「緩やかに落ちていく」ことが確かめられた（同 1993）。

第5次調査

前方部正面で行われた。前調査区同様、外濠の外側は平坦な面をもち、立ち上がる（同 1994）。

第6次調査

後円部の東南で行われた。外濠は検出されたが、遺存状況は悪く、形状はゆがんでいる（同 1999）。

第7次調査

前方部南西隅にある既存排水施設付け替え工事による調査である（未報告）。

（中略）

| 調査回数 | 調査期間 | 調査面積 | 調査場所 | 調査内容 |
|------|-------------------|------|-------------|--------------------|
| 第1次 | 69/08/25～70/03/31 | — | 周濠外縁部（9カ所） | 周濠（内濠）範囲を確認 |
| 第2次 | 87/12/14～87/12/26 | 40㎡ | 堤東側 | 外濠を発見 |
| 第3次 | 92/01/20～92/01/25 | 37㎡ | 堤東側 | 〃 確認 |
| 第4次 | 92/12/11～92/12/16 | 26㎡ | 堤北側 | 〃 確認 |
| 第5次 | 93/04/22～93/04/29 | 42㎡ | 堤西側 | 〃 確認 |
| 第6次 | 95/12/01～95/12/13 | 75㎡ | 堤東側 | 〃 確認 |
| 第7次 | 97/04/30～97/04/30 | 3㎡ | 堤西側 | |
| 第8次 | 98/05/29～98/08/21 | 180㎡ | 堤北側、後円部裾部北側 | 外濠の確認、造り出し（埴輪列）の発見 |
| 第9次 | 00/11/17～01/01/31 | 33㎡ | 後円部北側 | 墳丘・第1段テラス（埴輪列）の発見 |
| 第10次 | 05/02/01～05/02/18 | 52㎡ | 堤西側 | 外濠を確認 |

表2 御願塚古墳発掘調査一覧

第2章 調査経過

(1) 第8次調査

当古墳を“史跡公園”として整備するため、古墳の北西側の土地を平成9年度に取得した。この土地を含め周濠外側の遊歩道と墳丘裾部の環境整備及び周濠内の浚渫を行うため、平成10年度に調査を行った。これは墳丘部の初調査である。調査後、整備工事に着手し、平成11年度に竣工式典を開催した。以下、調査日誌をもとに略記する。

- 5・29 調査開始
- 6・1 周濠内を土嚢で堰き止める。ポンプにて水をあげる。
- 6・5 外濠部の重機掘削を開始する。
- 6・8 人力による掘削・精査を開始する。
- 6・9 再度、重機により掘り下げを行う。
- 6・11 地山面検出。人力により精査。外濠の位置確認。
- 6・15 外濠内の掘削開始。埋土上層より埴輪片とともに瓦器碗出土。
前方部にほど近い後円部の裾部にトレンチ2本設定（北より第Ⅰ・Ⅱトレンチとする）。
- 6・16 第Ⅰ・Ⅱトレンチの掘削を開始する。
- 6・18 第Ⅱトレンチに平坦な面を確認。須恵器・埴輪片出土。造り出しの可能性大。
- 6・23 造り出しにて埴輪列A～F確認。
櫃本誠一氏来訪、「造り出しと見て間違いない。形状・規模を確認することが望ましい」との指導を受ける。
- 6・24 全景写真撮影。造り出しの規模確認のため、両側に1.5m拡張する。
- 6・30 第Ⅰトレンチの北側に新トレンチ設定（第Ⅲトレンチとする）。
- 7・1 造り出し南端検出のため、最南側に第Ⅳトレンチ設定。
- 7・9 和田晴吾氏来訪、「造り出しで間違いない。さらに拡張して規模をきちんと確認すべき」との指導を受ける。
- 7・14 外濠部の埋め戻し開始（～7/17終了）。
- 7・21 造り出しの北南両端をともに拡張（北側埴輪列を北に0.3m、南側を南に0.9m拡張）。
- 7・23 北側埴輪列でさらに埴輪2基確認（全部で8基に／A～H）。南側にも埴輪列（5基／I～M）確認。
- 7・29 造り出し北側及び後円部とのとりつき部で、葺石の堆積を検出（墳丘盛土流出による？）。埴輪Mから西側は大きく破壊されている。
- 7・31 埴輪I東側より埴輪Oを発見。
- 8・4 庁内にて記者発表。
埴輪C内部より、埴輪口縁部・須恵器（有蓋高杯）・土師器小型壺を発見。
- 8・11 作図終了後、埴輪の取り上げ開始。
- 8・17 第Ⅱトレンチの埋め戻しを開始する。
- 8・21 調査終了。

(2) 第9次調査

後円部墳頂に鎮座する南之神社参拝のために取り付けられた階段及び手すりの改修工事に伴い、平成12年度に発掘調査を実施した。以下、調査日誌をもとに略記する。

- 11・17 調査開始
- 11・29 既存石段・手すりを撤去後、人力掘削開始。
- 11・30 モルタル・コンクリート製の基礎及び、木製の基礎検出。江戸時代の陶磁器発見。
- 12・1 全景写真撮影。調査区を西側に0.4 m拡張し、土層確認のサブトレンチとする。
- 12・12 墳頂部にて円筒埴輪列検出。
- 12・13 墳丘斜面確認のため、調査区東側に幅0.7 mのサブトレンチを設定。
- 12・14 段築部に、斜面から転落した葺石の堆積を発見。
- 12・26 段築部にて円筒埴輪列（第1段テラス）発見。
- 12・27 全景写真撮影。仮養生。
- 1・10 墳頂部・第1段テラスの埴輪列の検出作業。
- 1・11 兵庫県教育委員会の調査にあわせて航空写真撮影実施。
- 1・15 調査区平面・断面の実測開始。
- 1・24 原位置樹立の埴輪の取り上げ。
- 1・31 全作業完了。

(3) 第10次調査

個人住宅建設に伴う発掘調査（国庫補助事業）。平成16年11月30日付で届出がなされ、遺跡が破壊される範囲を記録保存するための発掘調査（19㎡）及び学術調査（範囲内容確認調査／33㎡）として行った。以下、調査日誌をもとに略記する。

- 2・1 調査区設定。
- 2・2 重機掘削後、人力により精査。遺構（外濠）検出。
外濠内掘削。
- 2・7 全景写真撮影。
- 2・8 平面・断面の実測。
- 2・9 調査終了。
- 2・18 埋め戻しほか全作業終了。

(中略)

第3章 調査成果

第1節 御願塚古墳第8次調査

| | |
|-------|-----------------------|
| 調査面積 | 外濠部：120㎡、墳丘部（4カ所）：60㎡ |
| 調査期間 | 平成10年5月29日～8月21日 |
| 調査主体 | 伊丹市教育委員会 |
| 調査担当者 | 小長谷正治 中畔明日香 |

1. 調査の概要

御願塚古墳は、標高9m前後の比較的平坦な地形のところに築かれた帆立貝式古墳である。墳頂部に社殿が営まれているとはいえ、ほぼ完存した古墳としては当地域では唯一のものであり、周辺の市街化に合わせて、史跡公園計画が持ち上がったことはすでに前章で述べた。

しかし、墳丘や濠の正確な規模や形状、埴輪の配列や葺石などについては、過去の7次の調査では十分な情報を得られていない。そこで、購入した古墳北西側の土地の公園整備及び古墳環境整備（周濠内浚渫等）にあわせて発掘調査を実施したものである。

調査区は、内濠外側と、その対岸となる墳丘くびれ部にほど近い、後円部裾側の2カ所に設定した。公園用地側の調査区は、過去の調査事例から二重周濠の外濠が検出される可能性があり、いっぽう後円部の調査区設定については、周濠浚渫工事に際して、墳丘裾部の状況が把握できる可能性が期待された。同時に、墳丘測量図にみられる墳丘の等高線が反対側の裾部と大きく異なることから、「造り出し」がみつかることも予測された。なお、現在の前方部平坦面の高さに合うように、後円部中段に遊歩道が巡っているが、これは墳丘第1段テラスを反映していると見られてきた。墳丘側へのトレンチの拡張はこの遊歩道手前までとした。

(1) 外濠部

公園予定地の敷地の形状に合わせて、南北15m・東西13mの調査区を設定し、調査を開始した。地山直上までの表土などを重機で掘削し、その後、人力で掘削・精査、図面作成・写真撮影を行った。また、調査区脇の周濠（内濠）内を土嚢で堰止めた上、ポンプにて排水し、内部を残土置き場とした。調査終了後、残土はすべて調査区内に埋め戻した。また、検出された外濠内は堆積状況を確認するため、濠内に畦を設定し、断面実測を行った。

(2) 墳丘部

当初、2カ所の調査区を設定し、調査を開始した。調査の進行に合わせて、調査区の拡張・新規設定を適宜行った（詳細は第2章参照）。調査区は、設定した順に第Ⅰ～Ⅳトレンチとした（第6図）。これらのトレンチは、すべての掘削を人力で行った。残土は、人力による埋め戻しを考慮し、それぞれの調査区脇に土嚢にて囲い、仮置きした。造り出し上で原位置で出土した円筒埴輪は、実測終了後、すべて取り上げた。

以下、各トレンチの概要を述べる。

第Ⅰトレンチは、遊歩道下から内濠までの幅1m・長さ5.8mのトレンチである。第Ⅱトレンチは、当初第Ⅰトレンチの南側に第Ⅰトレンチと同じく幅1mで設定した。しかし、推定された後円部第1段テラスより低い位置で埴輪列が見つかったため、そこが「造り出し」と判断され、その規模や形状

を把握するために拡張を数度行い、最終的には幅約5m・長さ6.4mとなった。第Ⅲトレンチは、幅2.5m・長さ3mのトレンチで、第Ⅰトレンチの北側に位置する。墳丘（後円部）裾から周濠（内濠）にかけての残存状況を確認するために設定した。第Ⅳトレンチは、幅2.6m・長さ2.3mのトレンチで、第Ⅱトレンチの南側に位置する。造り出しの西側、墳丘くびれ部や前方部の形状を確認するために設定した。

2. 層序

外濠部・墳丘部の調査区を合わせて報告する。墳丘に古墳造営時の旧表土が残っている。当時の地表面が残っている場合は、旧表土（10YR 2/3 黒褐色土層）が約0.2m、地山上層（7.5YR 4/4 褐色粘質土層）が約0.4～0.5m、地山下層（2.5Y 6/6 明黄褐色砂礫層）と続く。また、江戸時代の社殿建立の際に後円部頂が大きく削平されており、墳丘にはその流出土が厚く堆積していた。

これに対して、墳丘外（堤・外濠）では、後世の削平や攪乱によってほとんどは地山下層での遺構検出となる。

堤（外濠内側）の残存部上には地山直上に10YR 4/1 褐色粘質土が約0.15～0.3m堆積していた。耕作に利用されてきたことが考えられる。

いっぽう、外濠内の埋土は断面観察によると6層確認された。

3. 調査成果

（1）外濠部（第5図 図版5）

推定されていた位置に近いところで、外濠を検出した。埋土を見る限り、水の溜まっていた形跡はない。埴輪の出土から、堤上に埴輪が樹立されていたことが考えられる。

発掘調査により、削平された堤上面のレベルで幅4.7m、深さ0.3mの外濠が確認された。現在の内濠ときれいに並行している。そのため、内濠は後世多くの改変を受けているが、この調査区に隣接する部分に関しては、築造時に近い形状を保っている可能性が高い。円筒埴輪や蓋・家形などの形象埴輪片が、埋土下層から出土した。形象埴輪片は、外濠埋土断面観察のために設定した畦の東側に集中していた。埋土上層には、埴輪片とともに瓦器片が含まれていた。

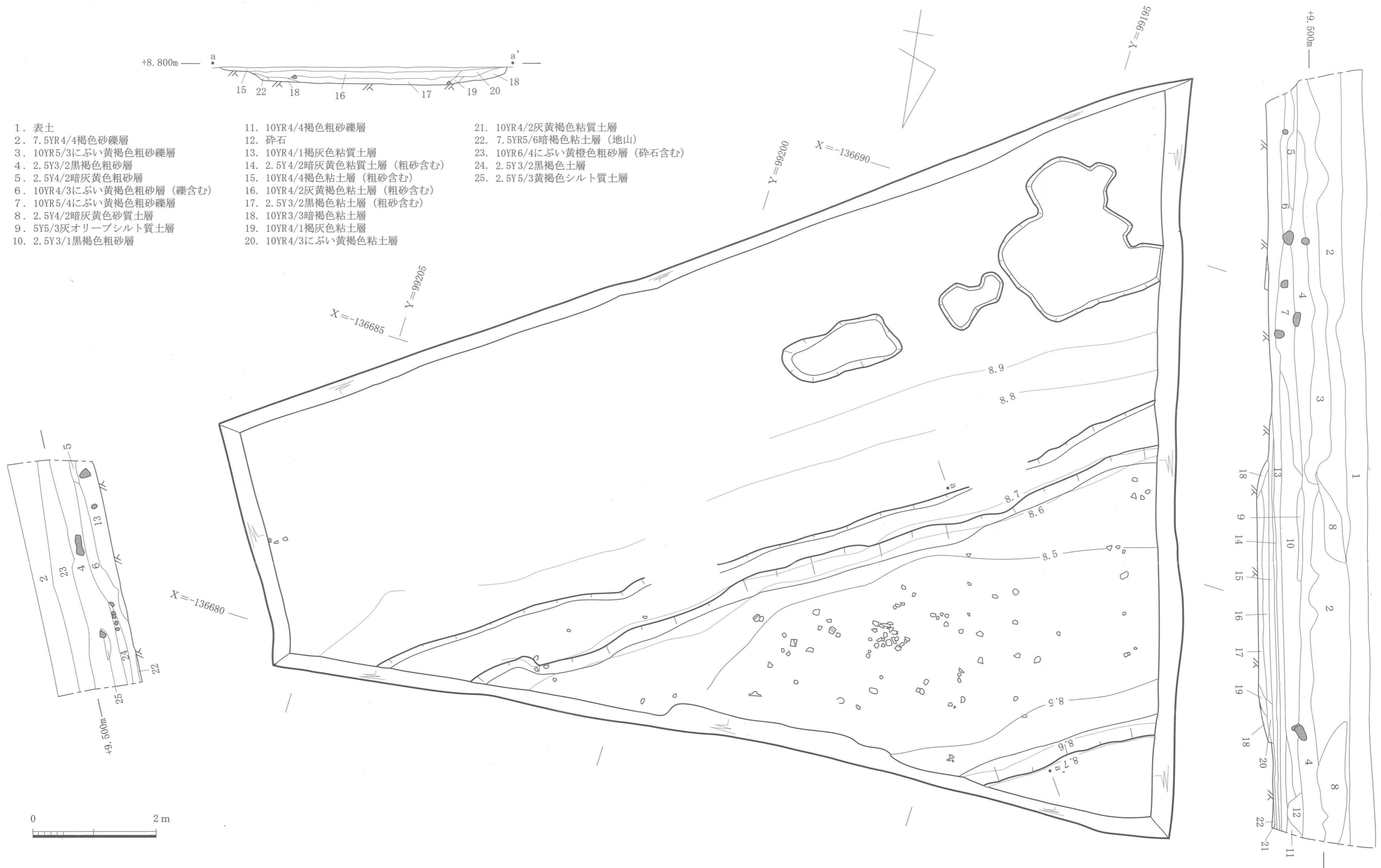
堤は、今回検出された外濠と内濠までの距離から推定すると、下端で幅約6mとなる。堤の高さは標高8.9m、外濠外側の残存部の高さは8.7mである。堤が外濠外側より若干高い。調査区東側の堤は、水田耕作に関わると思われる施設により破壊されていた。堤上のちょうど中央付近と推定される部分では、形状の定まらない浅い土坑が3基検出され、埴輪の据付掘り方の可能性が考えられる。

なお、外濠の外側に、さらに区画の溝が回り、いわゆる外堤状になっていたかどうかについては確認できていない。またその部分に埴輪が樹立されていたかどうかもわからない。これまでの過去の調査で、外濠外側は平坦面を持ち立ち上がることが確認されている。今回についても調査区北端の外濠外側が平坦であるため、その可能性が高い。

（2）墳丘部（第6～8図 図版1～4）

両端に埴輪列をもつ「造り出し」が確認された。神社境内としての現状保存（樹木の維持ほか）の関係上、造り出し全体を確認するには至らなかったが、おおよその構造が判明した。

以下に各トレンチについて述べる。



第5図 外濠部平面図・断面図

<第Iトレンチ>

腐葉土・墳丘流出土の堆積は、0.4～1.4 mと幅がある。トレンチ内の墳丘裾（地山直上）の最下層には、ビニールが入っていた。墳丘流出土の下に、墳丘盛土（7.5YR 4/6 礫混褐色粘質土層）があり、その下に古墳築造時の旧表土が確認できる。

内濠から1.8 mの位置（標高8.7 m）に、20cm大の不定形の石が並べられていた。そこから墳丘側には、幅約1.5 mの平坦な面（標高8.7～8.8 m）が広がり、もと墳丘の葺石だったと考えられる約10cm大の石が溜まっていた。そこから円筒・形象埴輪片や須恵器片が出土した。この平坦面の高さは、後に述べる造り出し上面よりも低い。造り出しに隣接する位置であるため、造り出しに付随する施設、あるいは造り出しを載せる基壇状のものと思われる。また、この平坦面は、地山下層（礫層）上面を掘り残して成形してあった。

この平坦面に据えられた石列は、それを起点（境）として内濠への傾斜が始まるので、平坦面の際に並べられた見切りの石列となっている。また、この石列の下（標高8.5 m）には葺石が溜まっていた。平坦面から下の傾斜角は、25度と比較的ゆるやかである。しかし下方のほとんどが、攪乱されている。

トレンチ東端は、標高約9.8 mである。そこから内濠側の0.6 mの間は、前述した平坦面（8.7 m）に続いて、断面で地山・旧表土・墳丘盛土の層序が確認できる。平坦面に続くきわめてゆるやかな傾斜（～9.6 m）面では、埴輪列は見つかっていないが、墳丘第1段テラスにかかっている可能性がある。

<第IIトレンチ>

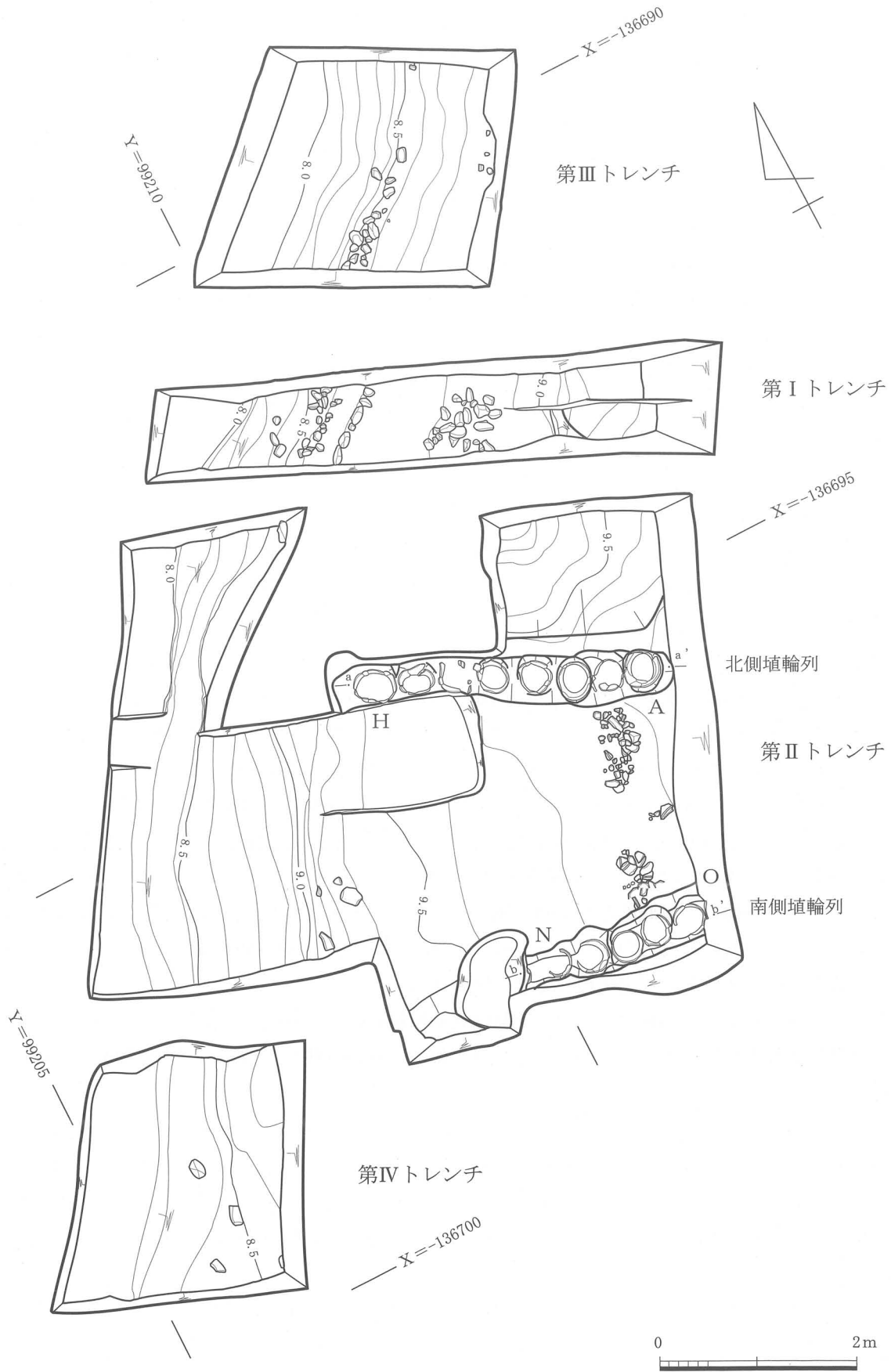
第Iトレンチと同様に、トレンチ西端内濠内からはビニールが見つかっており、攪乱されている事がわかる。最上層は腐葉土。その下は、江戸時代の瓦片・遺物が含まれる褐色土層が0.1～0.3 m、墳丘流出土が0.05～0.4 m堆積する。以下、第Iトレンチ同様、墳丘盛土・旧表土・地山と続く。

ここでは両側に円筒埴輪列をもつ「造り出し」を検出した。埴輪列と埴輪列は、内濠に向かって若干ハの字状に広がる。埴輪列は、北側に埴輪8基（A～H）、南側に埴輪7基（I～O）が並ぶ。埴輪Aから東には、埴輪はなかった。埴輪列間は、後円部側の埴輪AとIでは心々間で2.6 mの間隔がある。すべての埴輪は、基底部分が原位置に据わった状況で検出されたが、後世の削平により埋設部分及びその直上のみ残存したものと考えられる。整理において、埴輪内部や周辺より見つかった破片と接合できたものも多いが、完全に復元できた埴輪はない。

造り出し北側の斜面も一部検出できた。それは北側埴輪列のすぐ外側から落ちだしている。北側埴輪列の外側を造り出し端とすると、造り出し上面の幅は、後円部側が約3.8 m、内濠側が4.5 mに復元できる。

検出した造り出しの高さは、後円部側で標高9.8 m、内濠側で9.6 mである。現存する埴輪列の埴輪の埋まり方や断面観察から考えると、本来9.8 mで平坦な面をもっていたと推定される。第Iトレンチで検出された造り出し北側裾に展開する平坦面より約1 m高く、逆に第Iトレンチで推定された第1段テラス（標高10.0 m前後）よりも若干低い。なお、造り出しと後円部とは、直角に取り付かず、漸移的に接続する。

トレンチ北東隅の拡張部分で、造り出しの斜面を検出する際、10cmに満たない大きさの円礫がまとまって見つかった。それを取り除くと、非常に緩やかな傾斜を持つオチが検出された。これらの石は、墳丘本体の葺石か第1段テラスと造り出しとの間の段差（小斜面）に葺かれた石が転落して溜まったものだろう。



第6図 第I~IVトレンチ平面図

造り出し直上からは、大量の須恵器片が出土した。須恵器片は、ほとんどすべてが細かく割れていた。当初置かれた状態を保っていると判断されるものは1点もない。だが、埴輪Nの北西でまとまって出土しており、この位置に置かれた可能性は高い。埴輪Nから内濠側には大きな木の根痕があり、円筒埴輪は確認できなかった。そのため、マツリを行うために埴輪を抜いたのか、もともと途切れた部分があったのかは決めかねる。

また、造り出し西端、つまり内濠側端では、埴輪列は見つかっていない。造り出しと内濠とが接する部分が、地山下層（礫層）が剥き出しとなるほど削られており、本来あるべきはずの墳丘盛土・旧表土・地山上層という層序は失われてしまっていた。そのため、築造当初は造り出し上面にコの字ないし口の字形に埴輪列を回していたが、後世の墳丘盛土の流出や人為的な破壊によってそれが失われてしまった可能性が高い。それらを考慮して、造り出しの長さを推定すると、4 m以上となる。なお、造り出し東端（後円部との境）の埴輪列も見つかっていない。

<第Ⅲトレンチ>

上から、腐葉土・江戸時代以降の堆積土・墳丘流出土の順に、0.9～1.2 m堆積する。地山の上には、埴輪片しか含まない墳丘流出土が堆積しており、このトレンチ内は浚渫時の攪乱の形跡はない。

トレンチの後円部側検出面の高さは、標高 8.8 mである。ほぼ第Ⅰトレンチで検出された平坦面と同じ高さである。このトレンチでは平坦な面は確認されず、すべてが斜面（標高 8.8～8.0 m）であった。第Ⅰトレンチで検出された平坦面の高さ（8.7 m）や、第1段テラスの高さ（10.0 m前後／推定）、造り出しの高さ（9.8 m）に照らしてみると、結果としてトレンチ全体が、後円部第1段テラスより外側におさまると考えられる。斜面の傾斜角は30度で、傾斜はほぼ均一である。攪乱の痕跡がないため、トレンチ西端の低い平坦面（標高約 8.0 m）が、築造時の内濠底であった可能性が高い。だが、基底石や転落した葺石はなかった。

いっぽうで、トレンチのほぼ中央（標高 8.5 m）付近で、墳丘（後円部）から流出したものと思われる葺石や円筒埴輪片が溜まっていた。その部分の高さは、第Ⅰトレンチで検出された平坦面と内濠の境を示す石列の下に葺石が留まっていた高さ（8.5 m）と合致する。この付近が墳丘裾かと思われる。

<第Ⅳトレンチ>

ここでもトレンチ西端内濠埋土からビニールなどが見つかった。上から攪乱土・腐葉土が0.4～0.9 m堆積している。トレンチの西半分は、攪乱を受けている。墳丘側は、葺石と考えられる15～20 cm大の石や埴輪片を含む土が標高 8.5～8.8 mあたりに最大0.4 m堆積する。

トレンチ北東隅に平坦な面を検出した。高さは、標高約 8.6～8.7 mである。第Ⅰトレンチの平坦面とほぼ同じレベル値であり、土層も同じである。そのため、第Ⅰトレンチの平坦面と同様、造り出しに隣接する平坦面（基壇状部分）であると考えられる。

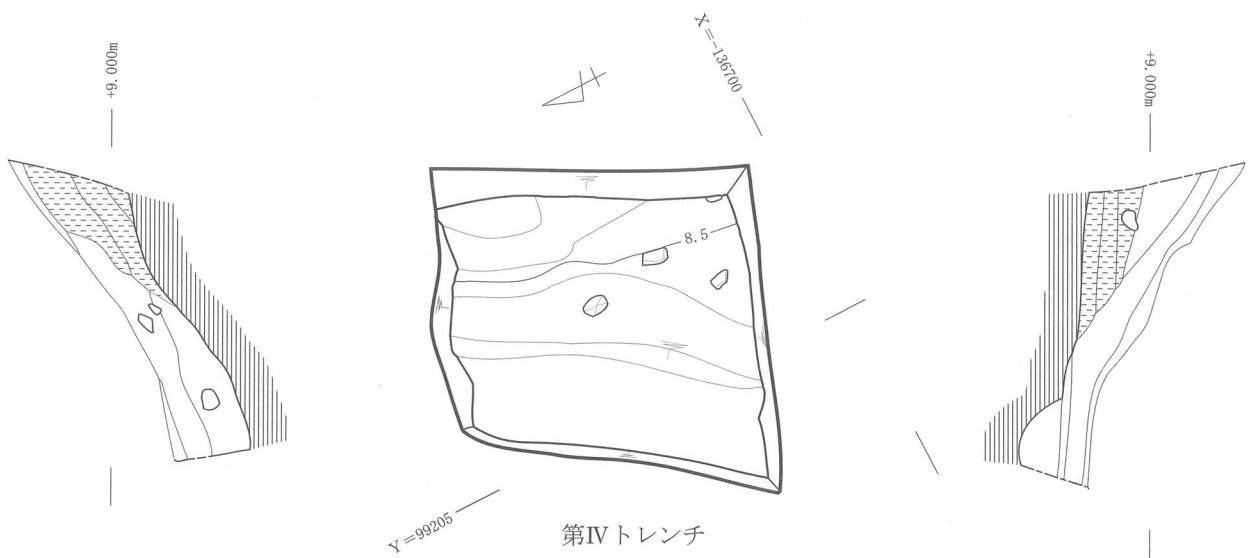
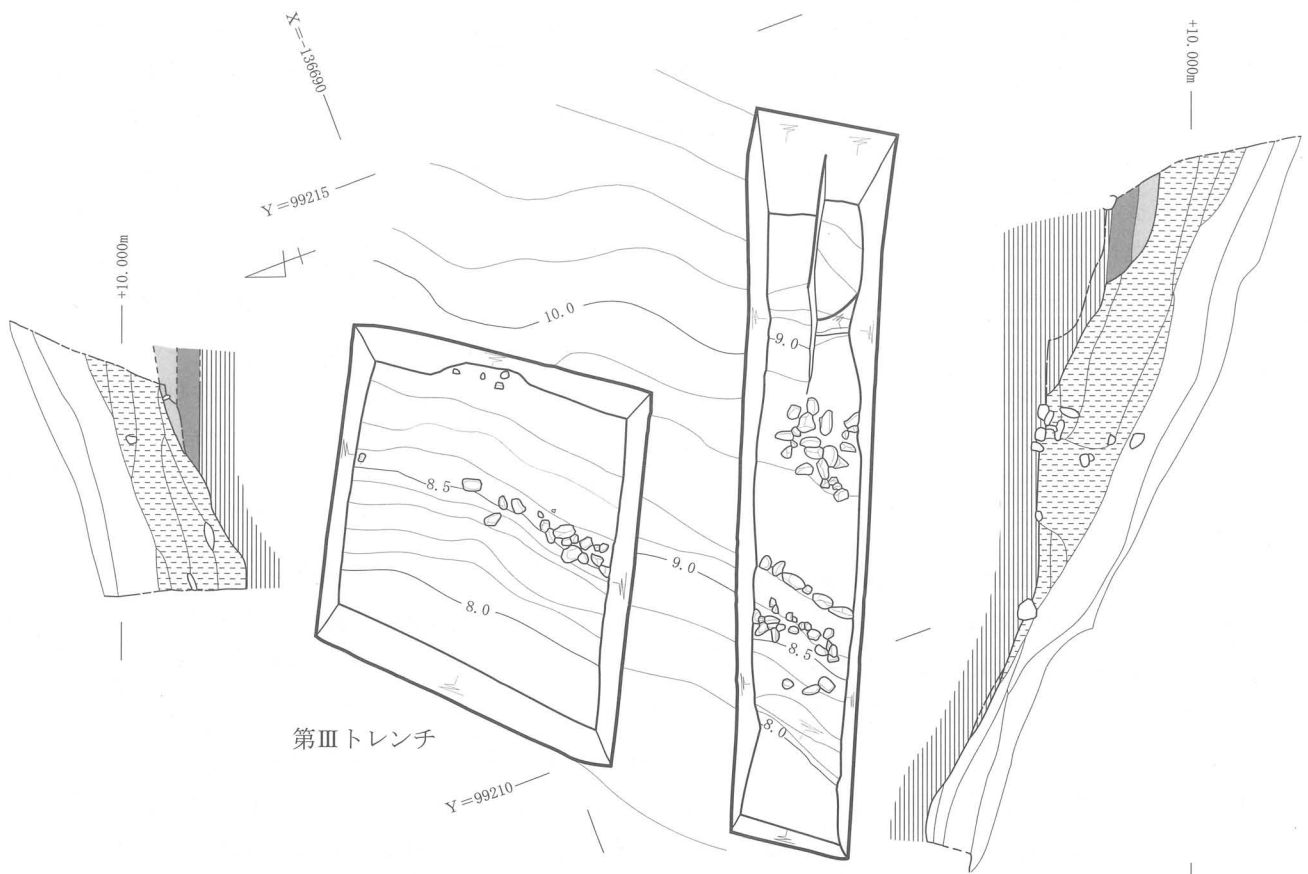
この平坦面から外側の斜面は、大きく破壊されていたため、基底石・内濠底は確認できなかった。






トレンチ南端は、前方部に限りなく近く、調査範囲は前方部のくびれ部分にあたると考えられる。

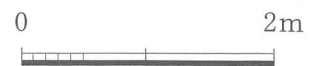
トレンチ南東隅は、標高 8.5 mと平坦面より低い。なお、前方部裾は確認できないので、前方部の裾の位置は、第Ⅳトレンチ調査区のさらに南側と思われる。

このトレンチからは、形象埴輪・須恵器は出土していない。

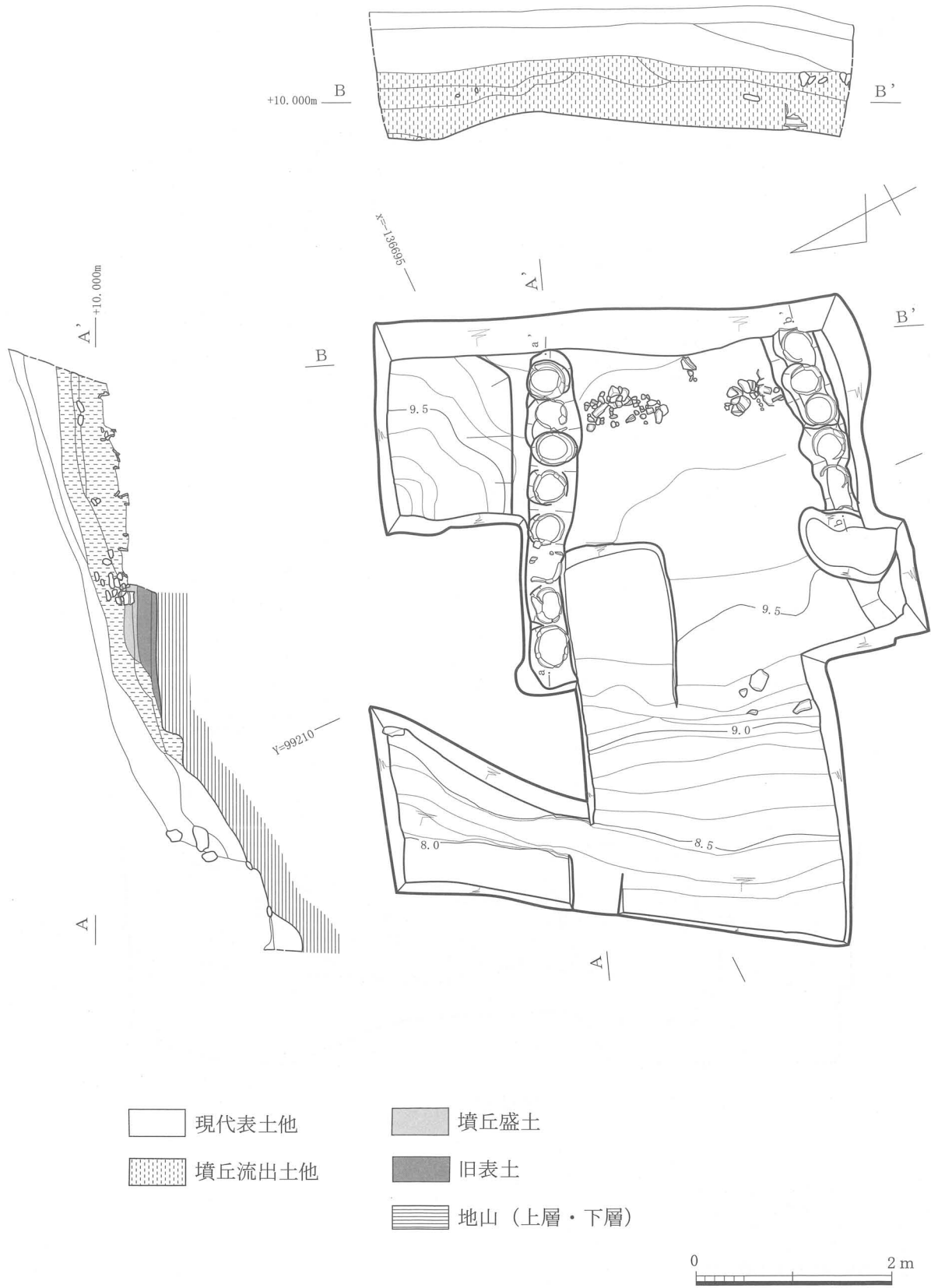
（中畔）



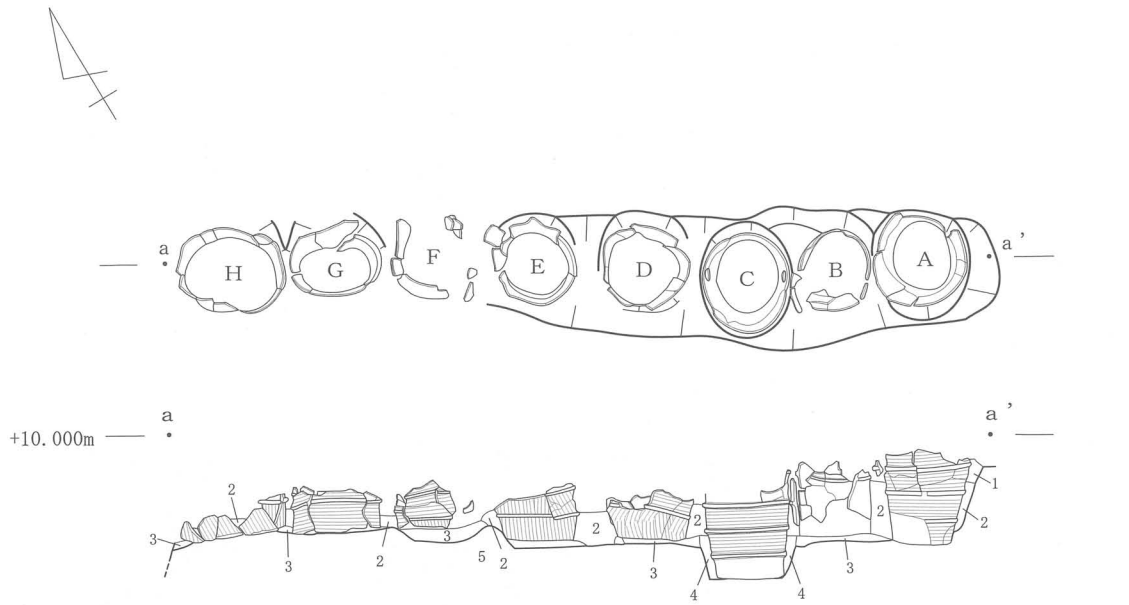
- | | |
|--|--|
|  現代表土他 |  墳丘盛土 |
|  墳丘流出土他 |  旧表土 |
| |  地山 (上層・下層) |



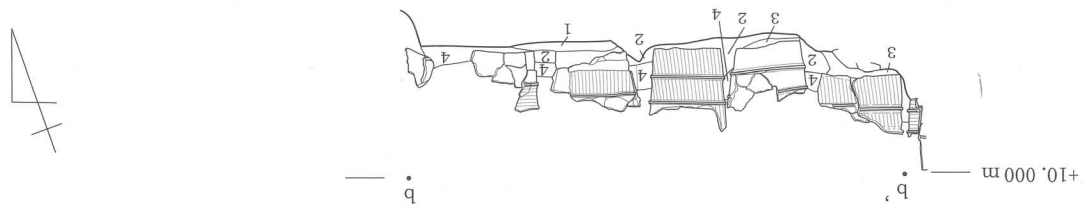
第7図 第I・III・IVトレンチ平面図・断面図



第8図 第Ⅱトレンチ平面図・断面図



北側埴輪列



南側埴輪列

1. 7.5YR4/3褐色土層 (粗砂混)
2. 7.5YR4/4褐色粘質土層 (粗砂～1 cm大の小石混)
3. 7.5YR4/4褐色シルト質土層 (埴輪据え置き時に高さ調整のために置いた土)
4. 7.5YR4/4褐色粘質シルト層
5. 10YR2/3黒褐色土層 (旧表土)



第9図 第Ⅱトレンチ埴輪列平面図・立面図

4. 出土遺物

今回の出土遺物は埴輪がその大半を占めているが、祭祀に使用されたと思われる土師器・須恵器もあり、後世の堆積層からは中近世の遺物が出土している。トレンチごとに、それぞれについて報告するが、中近世の遺物は最後にまとめて記述している。

埴輪の属性について

埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が見られる。ここでは第Ⅱトレンチ（造り出し）に樹立していた埴輪、第Ⅰ～Ⅳトレンチ・外濠部出土の埴輪片、および形象埴輪⁽¹⁾について報告する。

円筒埴輪は上部を失っているものがほとんどで、全形を復元できる個体は少ないが、口縁部の出土状況から可能な限りの復元を試みている。朝顔形埴輪は円筒埴輪の上に肩部～口縁部が載る形をとるので、それ以外の破片では円筒埴輪と区別がつかないため、肩部以上で朝顔形と判断できるものについて項目を設けている。

報告にあたっては、個別説明のほかに、掲載しているすべての埴輪に対して観察表を作成しているが、特に円筒埴輪・朝顔形埴輪に関しては特徴を的確に把握するために、次のような諸属性を取り上げて説明することにした。属性としているのは焼成状態、形態、法量、口縁部形状、突帯形状、色調、器面調整、透かし孔、突帯間隔設定技法であるが、特徴的な事柄に対しては備考を設けて注記している。

各属性は今後の調査によって埴輪資料が充実した際に、今回の調査成果と合わせて埴輪の型式を捉えることができるよう分類している。

焼成状態

出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪には外面に黒斑があるものはなく、すべて窖窯焼成と考えられる。焼成状態には土師質（軟質）、土師質（硬質）、須恵質が観察でき、土師質（軟質）の割合が多く、大半を占めているが、須恵質のものも1/3程度見られる。

形態

完形に復元可能な資料が数点あるが、いずれも口縁部は樹立部分との接合面を失っていることから、突帯間隔や透かし孔の位置を加味して図上復元している。したがって、仮定ではあるが、円筒埴輪では3つの規格を提示している。朝顔形埴輪は第9次調査で1個体のみ完形に図上復元している。全形を把握できない大半の資料は「部位」として残存部分を表記している。その場合は、基底部から上が残っている場合は1段目－2段目－3段目…、最上段から下が残っている場合は最上段－上から2段目－同3段目…と記述している。今回の調査で想定した埴輪の形態は、次の円筒埴輪3形態と朝顔形埴輪1形態である。

円筒埴輪 — 5条突帯6段構成 6条突帯7段構成 7条突帯8段構成
朝顔形埴輪 — 5条突帯6段構成

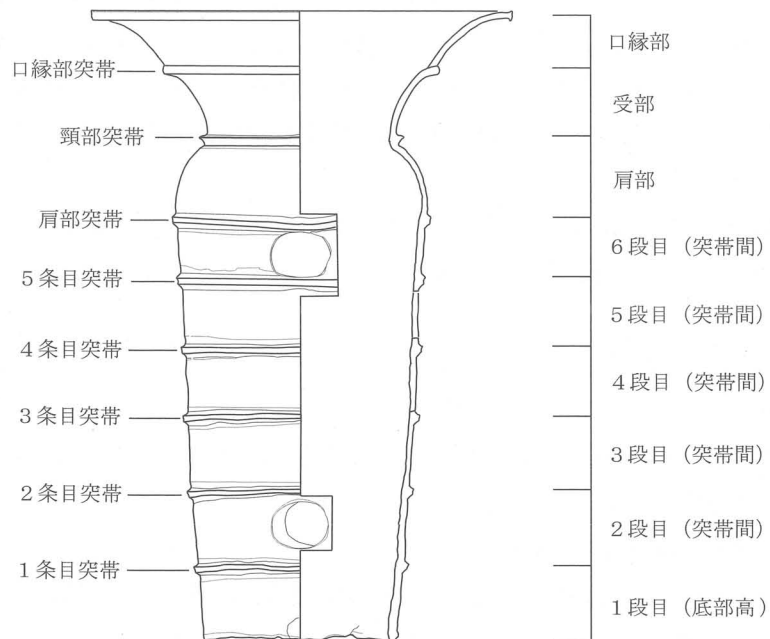
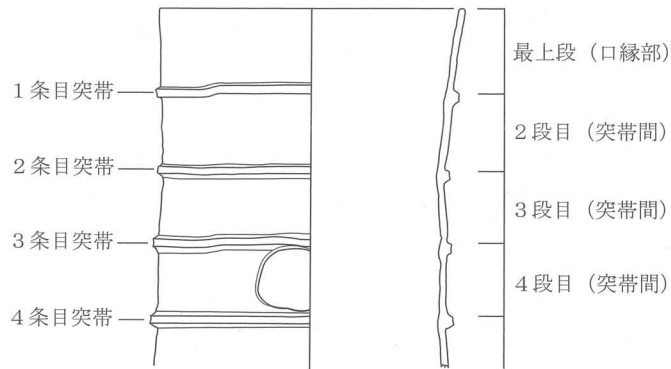
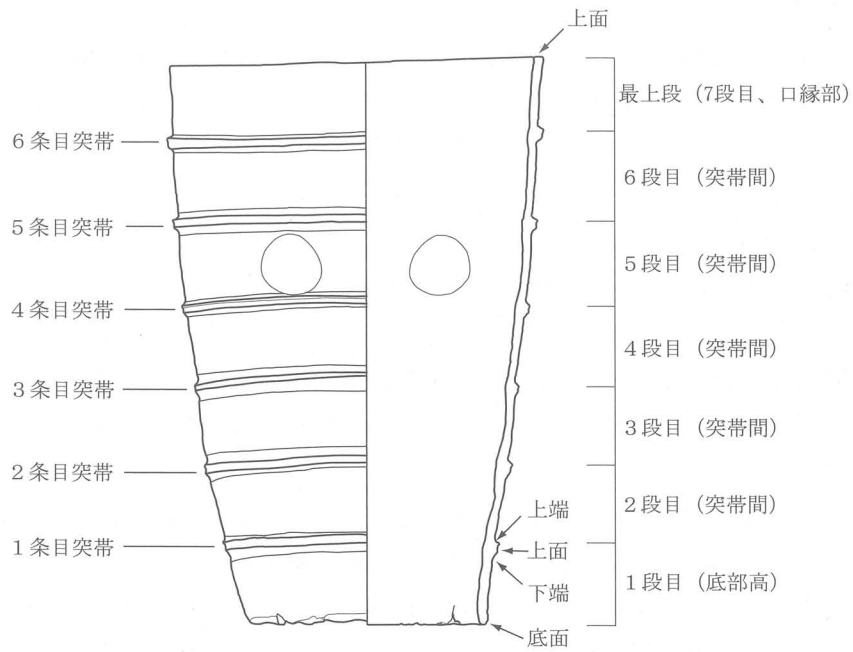
法量

1 器高・底径・口縁部径

器高は完形の資料がないため、すべて復元高である。（数字）は残存高を示している。底径（底部径）は外法で計測しており、断面が楕円形を呈する埴輪は長軸×短軸でそれを表している。口縁部径（口径）は外法で計測している。

2 底部高・突帯間隔・最上段高

1段目の底縁から1条目突帯の上縁までの間を底部高とし、突帯間隔は突帯の上縁と1段上の突帯上縁との間の距離としている。最上段高は口縁部上端から下の突帯上縁の距離である。観察表の突帯間隔の欄は、1段目が残っている場合は下から2段目・3段目…、最上段が残っている場合は上か



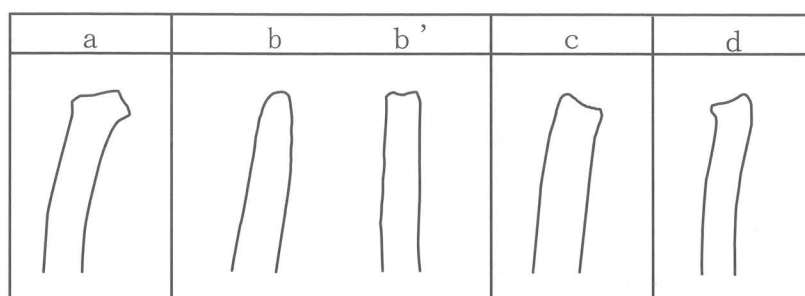
第 10 図 埴輪の各部名称

ら2段目・3段目…の数値である。

口縁部形状

樹立している埴輪の大方は上部が失われていることから、分類対象となる口縁部はほとんどが破片によるものである。

- a 直線的、外反気味に立ち上がり、上面は内傾する広い平坦面である。上端は肥厚し、引き出された端部は面を持っている。
- b 直線的に立ち上がり、上面は水平な平坦面 (b') か丸くおさめている。
- c 直線的に立ち上がり、上面が外傾している。
- d 直線的に立ち上がり、上面が内傾している。



第11図 口縁部形状模式図

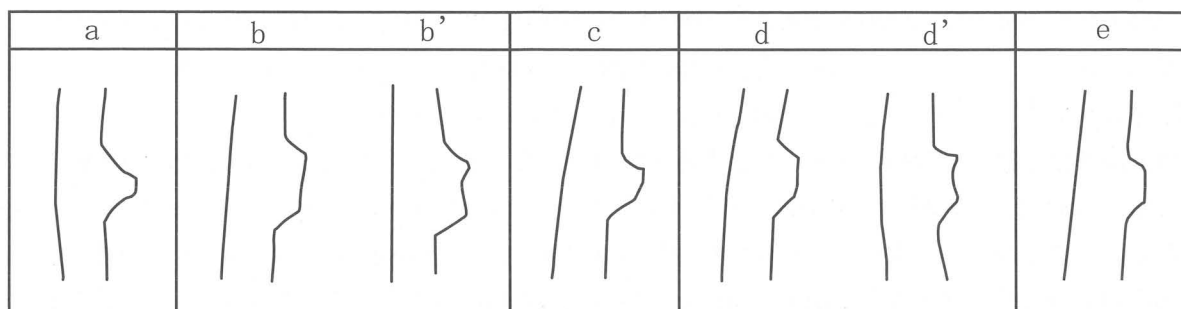
突帯形状

突帯の形状は1個体の埴輪においても調整の仕方などによるばらつきが認められることから、なるべく同じ条件で観察・分類を行うため、1条目突帯をその基準としている。欠損していれば2条目、3条目の順で繰り上げて観察している。

突帯の形状は基本的に断面形が台形であるが、上面が強いナデによりM字形になるものもみられる。M字形のものは突帯 b・d で確認することができるが、上面以外の特徴は同じである。それらを b' d' としている。

- a 断面は山形を呈し、突出度が高いもの (幅 2 cm 前後、高さ 1 cm 以上)
- b 幅が広く、突出度の高いもの (幅 2 cm 前後、高さ 0.8 cm 前後)
- c 幅が狭く、突出度の高いもの (幅 1.5 cm 前後、高さ 0.8 cm 前後)
- d 幅が広く、突出度の低いもの (幅 2 cm 前後、高さ 0.5 cm 以下)
- e 幅が狭く、突出度の低いもの (幅 1.5 cm 前後、高さ 0.5 cm 以下)

突帯は粘土貼り付け後、ナデを行って整形・調整されているが、1段目突帯に突帯の上面を板状工具で押圧する「押圧技法」(川西 1978) で整形されたものがみられる。



第12図 突帯形状模式図

色調

色調は土色帖（凡例2参照）を用いた肉眼観察による。基本的に土師質の埴輪は橙色を呈し、須恵質の埴輪は灰色・灰黄色を呈している。

器面調整

1 外面調整

外面調整は1段目・突帯間・最上段（口縁部）に分けて観察している。タテハケによる1次調整の後、ヨコハケによる2次調整を行う個体と、1次調整のタテハケのみの個体に大別され、前者には1段目への2次調整の有無が加わる。2次調整のヨコハケには次の4種（一瀬1988、埋蔵文化財研究会2003）を確認している。

Bb種 ハケ工具幅が狭く、突帯間に2周以上のヨコハケを施している。

Bc種 ハケ工具を器壁から離さずに、突帯間を1周の動作のヨコハケで埋めている。静止痕は突帯に対してほぼ垂直に残っており、静止痕の間隔も細かい。

Bd種 Bc種と同様にヨコハケを施すが、静止痕が斜めに傾くものである。

Ca種 1ストロークが比較的長い連続的なヨコハケ。

2 内面調整

内面調整は斜め・タテ方向に指ナデ上げを施すものと、ハケ調整（タテハケ・ヨコハケ）を施すものに分けられ、その割合は7：3である。前者はほとんどの個体で突帯貼り付け位置に指オサエやヨコナデを加えている。

透かし孔

透かし孔の配置は基本的に3・5段目であるが、3・6段目に設けられているもののほかに、埴輪17のように各段に透かし孔を持つもの、2・5・6段（第9次調査・朝顔形埴輪2A）の変則的なものがある。いずれも直交方向に2孔1対で設けられている。透かし孔は円形であるが、突帯間隔が狭い場合や横断面が楕円形を呈する円筒埴輪には明らかに楕円形に穿孔されたものが見られる。

突帯間隔設定技法

確認している突帯間隔設定の痕跡は1・2条の凹線によるものである。1条の場合の凹線幅は3～5mm、2条の場合は2mm幅の凹線が2条廻る。凹線を廻らせるための設定工具が、器面に触れた痕跡は観察できなかった。

<第Ⅱトレンチ>

1. 埴輪

1) 円筒埴輪（第14～20図、図版6～10）

埴輪A 残存高36.5cm、底部径31.5cm、底部高9.2～9.6cm、突帯間隔は9.9～10.3cmである。突帯剥離面に突帯間隔設定の凹線が認められ、凹線までの間隔は1段目で9cm、2段目以上は10cmである。突帯の形状は（b）で、幅2.5cm、高さ0.8cmを測る。基底は3cm幅の2枚の粘土帯を交互に貼り合わせて輪を形作っている。その上に幅2.5cm、3cm、4cmの粘土紐を積み上げている。

外面調整は1段目を含め、タテハケによる1次調整の後、Bc種ヨコハケによる2次調整を施す。静止痕の間隔は、1段目6～6.7cm、2段目以上4～4.5cm。ハケ工具原体には5～9本/cmが使用されていることから、1次・2次調整は同一原体で行われた可能性がある。底部端縁をナデ調整する。

内面調整は斜め・タテ方向に指ナデ調整し、粘土紐の継目には丁寧にナデを加えている。下端はナデ調整を行う。3段目に6.5×8.7cmの2孔1対の円形透かし孔を持つ。

胎土は1～4mm大の石英粒、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈している。底面に棒状圧痕、藁状圧痕が残る。

埴輪A内から出土している埴輪22は、胎土・焼成状態・調整などから口縁部の可能性が考えられる。口縁の形状は（b）で、口縁部径は32.0cmである。

外面調整はタテハケによる1次調整の後、Bc種ヨコハケを施し、内面調整はヨコハケによる。ハケ原体は条数5～9本/cmである。

埴輪B 残存高27.5cm、底部径は28.6cm、底部高は12.9～13.1cm、突帯間隔は10.1～10.3cm。突帯の形状は（b'）で、幅2.2cm、高さ0.7cmを測る。粘土紐は2～2.5cm幅と3.5～4cm幅のものを積み上げている。

風化が著しく外面調整は不明瞭であるが、1段目以外にわずかに1次調整のタテハケと2次調整のヨコハケが観察できる。内面調整は斜め方向の指ナデの後、突帯貼付け位置をヨコナデする。

3段目に2孔1対の円形透かし孔を持つ。胎土は1～5mmの石英・長石・チャートが目立ち、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈している。基底部外縁端は人為的に打ち欠いている。

埴輪C 残存高39.9cm、底部径は32.2cm、底部高は9.4～9.5cm、突帯間隔は9.2～9.7cm。突帯の形状は（b）で、幅2.0cm、高さ0.8cmを測る。基底は4～5cm幅の粘土帯2枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に1.5～3cm幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる1次調整を行っているが、2段目に僅かに観察できるだけである。1段目はハケ状工具によるナデ上げ・ヨコナデを行い、下端をヨコナデする。2段目以上はBc種ヨコハケ（板ナデ）を施すが、ヨコハケ原体条数は緻密で抽出できない。静止痕の間隔は4～4.5cmである。内面調整は斜め方向に強く指ナデを施した後、粘土紐の接合位置付近に横位の爪状痕が帯状に残る。下端に指オサエを加える。

3段目に7×7.4cmの2孔1対の円形透かし孔を持つ。胎土は1～2mmの石英・長石粒が多く、クサリ礫、砂粒を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈する。

内側に落ち込んだ状態で検出された埴輪16が上部である可能性が高いが、接合面を失っているため判断できない。

埴輪D 最上段との接合面を失っているが、全形は6条突帯7段構成と推定される。復元高65cm、口縁部径44.2cm、底部径28cm×24.5cmで、自重に拠ってやや楕円形になっている。底部高9.7～10.7cm、突帯間隔は2段目9.3cm、3段目9.1cm、4段目9.5cm、5段目10cm、最上段高8.5cmである。

突帯剥離面に突帯間設定の幅4mm程の凹線が見られ、凹線までの間隔は1段目9cm、2段目以上は約9.5cmである。突帯は幅2.2cm、高さ0.6cmで、形状は（b'）であるが、1条目突帯に限り上面に板押圧を加えたあと、ナデ調整を行っており、断面台形を呈している。口縁の形状は（b）である。

基底は4～6cmの粘土帯2枚を交互に貼り合わせて輪を形作り、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整の後、2段目以上にBd種ヨコハケによる2次調整を施している。最上段は突帯間幅が狭いにも関わらずヨコハケを2周させている。静止痕の間隔は4.5～10cmで、一定していない。ヨコハケ工具原体は4～7本/cmで、タテハケには原体幅約5cm、4～7本/cmの工具が使用されている。外面1段目下端をナデ調整する。

内面調整は5段目以下には斜め方向の指ナデの後、突帯貼付け位置にヨコナデ、指オサエを加える。6段目と最上段はヨコ方向に指ナデを施した後、突帯貼付け位置をヨコナデ、指オサエする。

3段目と5段目に直交方向に、8×7cmの2孔1対の円形透かし孔を持つ。底面に棒状圧痕、木目痕が残る。胎土は1～3mmの石英・長石粒を含む。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。
埴輪E 残存高19.9cm、底部径29.8cm、底部高9.4cm、突帯間隔9.7cm。突帯の形状は（b）で、幅2.0cm、高さ0.8cmを測る。1条目突帯上面に板押圧の痕跡が残る。基底は幅3cmの2～3枚の粘土帯を貼り合わせて形作り、その上に2～3.5cm幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる1次調整のみで、ハケ工具原体は5～6本/cmである。内面調整は指オサエ、斜め方向の指ナデ、ヨコナデ、ハケナデを施しているが、粘土紐の継目は大変目立つ。

胎土は0.2～1.2mmの礫・長石・石英、砂粒、クサリ礫を含み粗い。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈す。底面に棒状圧痕が残っている。

埴輪F 残存高24.0cm、底部径30.6cm、底部高8.5cm、突帯間隔は2段目8.8cm、3段目9.4cmである。突帯の形状は（c）で、幅1.5cm、高さ0.7cmを測る。基底部外縁端は人為的に打ち欠いている。基底の様子は分からないが、2～3.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、2段目以上にBd種ヨコハケによる2次調整を施す。静止痕の間隔は2.5～3.5cmで細かいピッチを刻む。ヨコハケ原体条数は緻密で10～12本/cm、タテハケ原体は5本/cmである。

内面調整はタテ方向に強い指ナデを行った後、1段目に原体幅2cmのハケナデを施している。突帯貼付け位置はヨコナデ、指オサエを加え、粘土紐の接合痕を丁寧にナデ消している。

透かし孔は3段目に2孔1対で穿孔されるもので、径7.5cmの円形である。胎土は長石・石英粒、砂粒、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪G 残存高23.8cm、底部径32.4×18.7cm、底部高12～12.5cm、突帯間隔9.5cmを測る。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪である。突帯の形状は（b'）で、幅2.5～3.0cm、高さ0.8cmを測る。

基底は幅5cmほどの粘土帯1枚で形作られ、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、Bc種ヨコハケによる2次調整を施す。2段目は突帯間を1周のヨコハケで施し、静止痕の間隔は3.8～5cmである。1段目は突帯間隔が広く、1周のヨコハケでは満たすことが出来ないため、ヨコハケを2周させている。その後、部分的に斜め方向の強いナデ上げを行う。静止痕の間隔は1周目が5cm、2周目は3.5cmで、静止痕が斜めに傾いている。タテハケ原体は7本/cm、ヨコハケ原体は7～8本/cmである。

内面調整はタテ・斜め方向の強い指ナデを施し、突帯貼付け位置は細かくヨコナデしている。

3段目に2孔1対の円形透かし孔を持つと思われる。胎土は2～4mmの礫、長石・石英粒、クサリ礫、雲母、砂粒を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。底面に藁状圧痕、7mm幅の棒状圧痕が残っている。

埴輪H 残存高21.8cm、底部径32.9cm、底部高10.5～11.3cm、突帯間隔9.8cm。突帯の形状は（c）で、幅1.6cm、高さ0.7cmである。基底は幅7～8cmの2枚の粘土帯を同じ側に貼り合わせて輪を形作っており、その上に2～3.5cm幅の粘土紐を積み上げている。接合痕が良く観察できる。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、ハケ原体は8本/cm、原体幅は約3cmである。タテハケはやや斜め方向に丁寧に施されている。底部下端にナデ調整を加える。内面調整はタテ・斜め方向のハケナデ、指ナデを施し、底部下端をヨコナデする。突帯貼付け位置にはヨコナデを施している。

胎土は2～8mmの長石・石英粒、クサリ礫、砂粒を多く含む。土師質（硬質）である。色調は1段目と2段目以上とでは明瞭に異なっている。1段目は内外面ともに明赤褐色を示し、それ以外は内外面ともに灰褐色を呈している。また、2段目の内外面調整の残り具合は悪いが、1段目は明瞭に残っ

ている。おそらく1条目突帯以下が埋められていて、風化を免れたためだと思われる。

埴輪I 残存高 20.5cm、底部径 32.0 × 26.5cm、底部高 10.3 ~ 10.7cm、突帯間隔 9.5cm。突帯の形状は(c)で、幅 1.6cm、高さ 0.7cmを測る。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪である。

基底は幅 4cmほどの2枚の粘土帯を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に2 ~ 2.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は1段目がタテハケ、2段目はタテハケと斜めハケによる1次調整だけで、ハケ原体は8本/cm、原体幅は約3cmである。タテハケは垂直方向に丁寧に施されている。

内面調整は斜め方向のハケナデを施し、突帯貼付け位置は細かく指オサエする。下端はヨコナデを行う。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕が残っている。胎土は1 ~ 5mmの長石・石英粒、砂粒、雲母を含んでいる。土師質(硬質)で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪J 残存高 30.3cm、底部径 28.8cm、底部高 7.5 ~ 9.5cm、突帯間隔 9.5cm。1条目突帯剥離面に突帯間設定の幅5mmの凹線が残っており、1段目の凹線までの間隔は6.5 ~ 8.5cmである。

突帯の形状は(b)で、幅 2.3cm、高さ 0.7cmを測る。基底は3.5 ~ 5cm幅の2枚の粘土帯を交互に貼り合わせて輪を作り、その上に2 ~ 4.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は表面の風化によりかなり不明瞭であるが、3条目突帯上面にタテハケが認められ、タテハケによる1次調整が行なわれていたことが分かる。1段目はナデ上げを施し、2段目以上はBd種ヨコハケによる2次調整を施す。静止痕の間隔は4cm前後である。内面調整はタテ・斜め方向の強い指ナデを施している。

3段目に2孔1対の円形透かし孔を持つと思われる。底面に棒状圧痕、木目痕が残っている。

胎土は2 ~ 4mm程の長石・石英・黒色粒・チャート、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質(硬質)で、内外面ともに橙色を呈している。

埴輪K 残存高 31.5cm、底部径 29.6cm、底部高 10.7 ~ 10.9cm、突帯間隔 9.9 ~ 10.2cm。3条目突帯剥離面に突帯設定の痕跡が破線状に残っている。突帯の形状は(d')で、幅 2.2cm、高さ 0.5cmを測る。

基底は7 ~ 8cm幅の粘土帯3枚を時計回りに貼り合せて輪を形作り、その上に1.5 ~ 2.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、ハケ原体は4 ~ 5本/cmである。3段目の外面調整は2段目以下に比べて風化によりかなり不明瞭となっていることから、2条目突帯までが埋まっていた可能性がある。内面調整は板状工具による斜め方向のナデを丁寧に施し、突帯貼り付け位置と下端に指オサエを加えている。粘土帯付近は接合痕を良く残している。

3段目に2孔1対の円形透かし孔を持つ。胎土は1 ~ 2mmの長石・石英・チャート、砂粒を含んでいる。土師質(軟質)で、内外面ともに橙色を呈す。底面に0.8 ~ 2.2cm幅の棒状圧痕が残っている。出土状況から埴輪18が上部片である可能性が高いが、接合面を失っているため判断できない。

埴輪L 残存高 24.8cm、底部径 30.0cm、底部高 8.5cm、突帯間隔 8.6cm。突帯剥離面に突帯間設定の3mm幅の凹線が見られ、凹線までの間隔は1段目 8.3cm、2段目 8.5cmである。突帯の形状は(d)で、幅 2.0cm、高さ 0.5cmを測る。基底は5cm幅の粘土帯をおそらく2枚以上貼り合わせて輪を形作り、その上に2cm、3cm、3.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は1段目と3段目が風化と剥離により不明瞭になっているが、2段目の様子からタテハケによる1次調整だけと判断できる。タテハケは真っ直ぐ丁寧に施されている。ハケ原体は8本/cmで、原体幅は2.7cmである。

内面調整は、基底の粘土帯にタテナデを施し、それ以上は粘土紐ごとに斜め方向の指ナデを施して

いる。ナデは接合位置にほとんど及んでおらず、接合痕が大変目立っている。

3段目に2孔1対の円形透かし孔を設けている。胎土は2～6mmの石英・長石粒が多く、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪M 4段目の一部を欠いているが、全形は5条突帯6段構成に復元できる。高さ61.7cm、口縁部径36.0cm、底部径24.3cm、底部高11.0～11.6cm、突帯間隔10.0～10.2cm、最上段高10.2cmである。

口縁の形状は（b）。突帯の形状は（b'）で、幅2.2cm、高さ0.6cmを測る。基底は幅6cm程の粘土帯を2枚以上貼りあわせて輪を形作り、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整を行っているが、突帯付近や1段目でわずかに確認できるだけである。1段目は板状工具によるナデ上げを施し、2段目～5段目はBb種ヨコハケによる2次調整を施しており、突帯間を1周のヨコハケで満たすことが出来ないため、ヨコハケを2周させている。静止痕の間隔は1周目が3.8～5cm、2周目は4.5～7cm、静止痕はやや斜めに傾いている。最上段はヨコハケを2周させ、口縁部に強いヨコナデを加えている。ヨコハケ原体は4～7本/cmである。

内面調整は1段目～2段目には斜め方向の指ナデ、3段目～最上段はヨコナデ、突帯貼り付け位置は指オサエを行う。粘土紐の接合痕がナデ消されずに良く残っている。

3段目に2孔1対の円形透かし孔が残っている。おそらく5段目にそれと直交する透かし孔を持っていたと推測される。底面に棒状圧痕が残っている。胎土は砂粒、1～10mmの石英・長石粒などを多く含んでいる。須恵質で、内外面ともに灰黄褐色を呈する。

埴輪N おそらく横断面が楕円形の円筒埴輪になると思われる。残存高17.0cm、底部径30.0cm、底部高10.5cmである。突帯の形状は（c）で、幅1.7cm、高さ0.7cmを測る。基底は幅6cm程の粘土帯を2枚以上貼り合わせて輪を形作っていると考えられ、その上に1～2cm幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、2段目はその後にヨコナデを施して、タテハケをナデ消している。ハケ原体は9本/cmである。内面調整は粘土帯を斜め方向に指ナデし、突帯貼り付け付近は広く指オサエしている。2段目は斜め方向のナデを行う。粘土紐の接合痕は内面調整を施しているにも関わらず大変目立っている。底面に棒状圧痕、藁状圧痕が残っている。胎土は砂粒、1～5mmの石英・長石粒などが目立っている。土師質（硬質）で、内外面はにぶい橙色～橙色を呈している。

埴輪O 最上段との接合面を失っているが、全形は7条突帯8段構成と推定される。復元高64.9cm、口縁部径37.4cm、底部径24.0cm、底部高8.2cm、突帯間隔7.8～9.0cm、最上段高5.7～6.5cmである。

7条目突帯剥離面に突帯間設定の2mm幅の凹線が2条見られる。凹線までの間隔は最上段で7.5～8cmである。口縁の形状は（b）で、上面は強いヨコナデによりM字状になっている。

突帯の形状は（b）で、幅1.8cm、高さ0.7cmである。上端は接合痕を丁寧にナデているが、下端は接合痕が良く残っており、1次調整のタテハケが突帯を越えて施されているようすが観察できる。基底は5～6cm幅の粘土帯を時計回りに3枚貼り合わせて輪を形作り、その上に1.5～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、1段目を除いてBc種ヨコハケによる2次調整を施す。静止痕の間隔は3～7cmで一定しておらず、4・7段目の静止痕はやや傾いている。最上段はヨコハケを2周させており、静止痕の間隔はいずれも8.5cmである。タテハケは原体幅約5.5cmで、6本/cm、ヨコハケ原体は6本/cm。突帯間に施されているヨコハケの幅とタテハケ原体幅はほぼ同じであることから、同一工具を使用していたと推測できる。

内面調整は1段目～5段目にタテ方向に強い指ナデを施している。6・7段目はヨコ方向の強い指

ナデ、最上段はヨコハケの後、突帯貼り付け位置と粘土紐接合痕に指オサエを行う。ヨコハケ原体は6本/cmで、外面調整のハケ工具と同一と考えられる。

透かし孔は8.5×5cmの楕円形で、3段目と6段目に2孔1対で穿孔されているが、直交していたかは不明である。透かし孔の形状は、突帯間幅が他の埴輪と比べてかなり狭いことに規制された結果であろう。最上段に逆「ノ」字状のヘラ記号が付けられている。底面に棒状圧痕、藁状痕が残っている。胎土は1～4mmの石英・長石粒が目立ち、砂粒を多く含んでいる。須恵質で、灰色を呈す。

埴輪 16 上から5段目までの破片である。埴輪C内に落ち込んだ状態で検出したもので、出土状況・内外面の調整・胎土・焼成状態などから埴輪Cの上部と考えられるが、接合面を失っているため確定できない。残存高45.3cm、口縁部径38.5cm、最上段高10.2～10.7cm。突帯間隔は2段目9.6～9.8cm、3段目9.1～9.3cm、4段目9.7cmである。3条目突帯剥離面に突帯間設定の2mm幅の凹線がわずかに観察できる。口縁の形状は(b)、突帯の形状は(b)で、幅2.0cm、高さ0.8cmを測る。

外面調整はタテハケによる1次調整の後、Bc種ヨコハケ(板ナデ)を施すが、ヨコハケ原体条数は緻密で抽出できない。2段目～3段目は突帯間を1周のヨコハケで施し、静止痕の間隔は3.5～5.7cmである。最上段は突帯間隔が広く、1周のヨコハケでは満たすことが出来ないため、ヨコハケを2周させている。静止痕の間隔は1周目が3～6cm、2周目は4.7～5.7cmである。そのあと上端をヨコナデする。

内面調整は斜め方向に強くナデを施し、突帯貼り付け付近は広く指オサエ・ヨコナデをする。その後、斜め・ヨコ方向に横位の爪状圧痕を残す。最上段は斜め方向のナデの後、上端を丁寧にヨコナデしている。胎土は1～2mmの長石・石英・チャート・黒色粒、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質(軟質)で、橙色を呈している。3段目に「×」状のヘラ記号を描いている。

4段目に9×7.7cmの2孔1対の円形透かし孔を持つ。埴輪O・埴輪17を除き、検出している円筒埴輪の透かし孔は1段置きに配置されている。埴輪16が埴輪Cの上部であると仮定した場合、3段目と5段目に直交方向に2孔1対の円形透かし孔を持つ7条突帯8段構成の円筒埴輪に復元することができるが、高さは76cmとなり、全形を復元している円筒埴輪(埴輪D・K・M・O)の高さが61.7～65cmであることを考えると、約1段分高いものとなる。第9図で埴輪が据えられていた状態を見てみると、他の埴輪より1段分深く埋められている様子が分かる。埴輪Cは他の埴輪より器高が高かったと考えられるが、おそらく、深く埋設することで埴輪列の高さを調整していたものと推測される。

埴輪 17 上から4段目までの破片である。埴輪C内および周辺から検出されたものであるが、周囲に樹立している埴輪とは形状が異なるため、墳丘上から流出した埴輪と考えられる。

残存高37.0cm、口縁部径38.2cm、最上段高10.5～10.7cm、突帯間隔は10.0～10.4cmである。口縁の形状は(b)で、端部が外反し、上面は強いヨコナデによりM字形を呈する。突帯の形状は(b)で、幅2.1cm、高さ0.7cmである。埴輪製作においては1.8～3cm幅の粘土紐を積み上げているが、接合痕はほとんどナデ消されている。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、最上段はその後に端部を強くヨコナデする。ハケ原体は6本/cmである。内面調整は斜め方向に強い指ナデを施した後、突帯貼り付け位置には2条の強いヨコナデ、最上段端部は丁寧にヨコナデを行う。

径6～7cmの円形透かし孔が各段ごとに直交する位置に2孔1対で穿孔されている。このような透かし孔の配置を持つ円筒埴輪は他に確認していない。胎土は2～5mmの石英・長石・チャート、砂粒を含む。土師質(硬質)で、橙色を呈す。

埴輪 18 上から3段目までの破片である。埴輪K内に落ち込んだ状態で検出されたもので、出土状況・内外面の調整・胎土などから埴輪Kの上部と考えられるが、接合面を失っているため確定できない。残存高34.0cm、口縁部径32.6cm、最上段高10.7cm。突帯間隔は2段目が10cm、3段目は10.5cmである。1条目突帯剥離面に突帯間設定の4mm幅の凹線が見られ、凹線までの間隔は最上段で10.8cmである。口縁の形状は(c)で、端部が僅かに外反する。突帯の形状は(d')で、幅2.3cm、高さ0.5cmである。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、最上段はその後に端部をヨコナデする。ハケ原体は4～5本/cmである。

内面調整は板状工具による斜め方向のナデを施し、突帯貼り付け位置と粘土紐接合痕に指オサエを加えている。胎土は3mmの長石・石英・チャート、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質で、内外ともに橙色を呈している。

埴輪18が埴輪Kの上部であると仮定した場合、全形を5条突帯6段構成に復元することができ、高さ63cmで、3段目と5段目に直交方向に2孔1対の円形透かし孔を持つ円筒埴輪となる。

埴輪 19 埴輪N西側の土坑から出土した埴輪である。埴輪Gに対面する埴輪と考えられるが残りが悪く、樹立していなかった。基底部には径22cmの破片と、緩く湾曲する直線的な破片があり、横断面が楕円形の円筒埴輪であった可能性がある。実測図は底部径22cmで復元している。底部高は8.7cmで、突帯の形状は(e)で、幅1.5cm、高さ0.5cmである。

基底は幅4cm程の粘土帯で形作られ、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げているようである。

風化が著しく内外面の調整は不明瞭であるが、2段目の外面にB種ヨコハケが観察できる。

胎土はクサリ礫、2～3mmの石英・長石・チャート、砂粒を多く含む。土師質(軟質)で、橙色を呈している。底面に棒状圧痕が残っている。

埴輪 20 埴輪Hの西側で検出した円筒埴輪の基底部である。底部径26.8cm、底部高は9.8cm。突帯の形状は(d)で、幅2.0cm、高さ0.5cmを測る。基底は約6cm幅の粘土帯の上に、1.5～2cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整の後、2段目以上はB種ヨコハケによる2次調整を施し、下端はヨコナデする。タテハケ原体は4本/cm、ヨコハケ原体は5本/cmである。

内面調整はタテ方向の強い指ナデを行っている。胎土は2～6mmのチャート・石英・長石、砂粒、クサリ礫、雲母を含む。土師質(硬質)で、にぶい赤褐色を呈す。底面に棒状圧痕が残る。

埴輪 21 造り出し西側際で検出した埴輪である。底部径32.0cm、底部高11.0cmを測り、底部下端を打ち欠いている。突帯の形状は(a)で、幅2.0cm、高さ1.1cmを測る。

胴部径32.0cmを測り、粘土紐接合面で大きく剥離している。突帯と本体の境目には丁寧な調整がほとんどなされておらず、突帯粘土幅がそのまま観察できる。

外面調整はタテハケ(8本/cm)による1次調整を行い、内面は風化により調整が不明瞭であるが、斜め方向にハケナデを施しているようである。円形透かし孔が穿孔されているが、配置は不明。

胎土は2～3mmの長石・石英・チャート、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質(軟質)で、橙色を呈す。今回の調査では2列の埴輪列を閉じる南北方向の埴輪列を確認することができていないが、埴輪20・21がその痕跡である可能性も考えられる。

埴輪22～32 円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状から、(b)埴輪22～25、(c)埴輪26～31、(d)埴輪32に分類することができる。いずれも上面は強いナデにより、M字形をなすものが多い。

最上段の外面調整を観察した限りでは、タテハケによる1次調整だけのものはほぼ土師質に、2次調整のヨコハケを施すものは土師質(硬質)・須恵質に焼成されている。しかし、外面調整と口縁

形状とは互いに規制されていない。

埴輪 23 は接合しないが埴輪Mの口縁部である。弧状のヘラ記号が付けられている。

埴輪 26 は埴輪Oと同じ特徴を持つものである。口縁部径 36.0cm、最上段高 5.8cm、突帯間隔 8.9cm。口縁の形状は (c) で、やや外反気味に立ち上がる。突帯の形状は (e) で、幅 1.6cm、高さ 0.5cm を測り、上端は丁寧なヨコナデ調整をするが、下端は雑なヨコナデや連続の指オサエを行う。外面調整はタテハケによる 1 次調整の後、2 次調整の Bc 種ヨコハケを施しており、静止痕の間隔は 3.4 ~ 7.4 cm である。口縁部に逆「ノ」字状のヘラ描きを付している。

透かし孔は残存状態から楕円形と思われる。最上段高・突帯間隔が狭い、透かし孔、内外面の調整、突帯調整の様子、胎土などが埴輪Oと共通しており、同類型の埴輪と考えられる。

埴輪 27 は口縁部径 32.4cm、最上段高 9.9cm、突帯間隔 9.2cm を測り、口縁の形状は (c) で、少し傾きながら立ち上がる。突帯の形状は断面台形 (d) で、幅 2.0cm、高さ 0.5cm を測り、突帯付近を幅広くヨコナデしている。外面調整はタテハケ (板ナデ) による 1 次調整の後、Bd 種ヨコハケによる 2 次調整を行っている。静止痕の間隔は 3cm 前後、ヨコハケ原体は 11 ~ 13 本 /cm で非常に密で抽出し難い。

最上段は 1 周のヨコハケでは満たすことができずヨコハケを 2 周させるが、上半に加えられた 2 周目のヨコハケは雑である。内面調整は斜め方向のハケナデの後、突帯貼り付け位置および接合痕に指オサエを加えている。内外面は同一のハケ原体を使用している。埴輪C内からの出土であるが、樹立している埴輪と同じ特徴を持つものは見られない。

埴輪 32 は口縁部形状が (d) である。上端は丸みを帯び、強くヨコナデしている上面は内側に若干肥厚する。外面調整は 2 次調整に B 種ヨコハケを施し、内面は強くヨコナデする。

埴輪 33 ~ 43 突帯部付近の破片で、突帯の形状により 5 種類に分類している。(a) 埴輪 42・43、(b) 埴輪 38 ~ 41、(c) 埴輪 34、(d) 埴輪 35 ~ 37、(e) 埴輪 33。

埴輪 40 は接合しないが埴輪Gの短軸側的一部分であろう。透かし孔を持っているが、既に埴輪Gには長軸側の 3 段目に透かし孔の穿孔が認められるため、おそらく 5 段目以上に位置すると思われる。突帯は (b') で、幅 2.3cm、高さ 0.7cm。外面の 2 次調整は Bc 種ヨコハケ (7 本 /cm) で、静止痕はやや傾いている。静止痕の間隔は約 5cm である。

埴輪 41 は突帯部下端に 3 個の刻み目が残っている。左から右に抜けており、突帯部調整後につけられた痕跡である。ハケ工具のアタリとも考えられるが、他例がなく詳細は不明である。外面調整はタテハケによる 1 次調整の後、Bd 種ヨコハケを施しているが、1 周のヨコハケでは満たせなかったようで、ハケナデ状に 2 周目を施している。

埴輪 42・43 の突帯形状は (a) で、確認しているのはこの 2 点と埴輪 21 だけである。突帯と本体の接合面はほとんどナデ調整されておらず、突帯粘土幅がよく分かる。いずれも器壁は 1.5cm と厚く、内外面はハケメ調整を行っている。

他に、ヘラ記号のある破片が出土している (埴輪 34・39・40・44・45)。ヘラ記号はヘラ描きによるものであるが、全体の様子は不明で、描かれている位置は分からない。描かれている位置の分かる個体では埴輪M・埴輪O・埴輪 25 が口縁部に、埴輪 16 は上から 3 段目に認められる。確認できる絶対数が少なすぎるが、口縁部やその近くに描かれているようである。

2) 朝顔形埴輪 (第 20 図、図版 11)

埴輪 46 埴輪J内に落ち込んだ状態で検出した朝顔形埴輪の受部~口縁部である。胎土・焼成状態からは埴輪Jと同一個体とは考えられず、また、周囲の埴輪とも様相を異にすることから、墳丘上の

埴輪が流れ落ちたものと考えられる。

口縁部径 55.7cm、最上段高 10.2cm、突帯部径 41.0cmを測る。口縁部はやや外反気味に大きく広がり、端部はさらに外反して先端部を外側へ引き出す。突帯は上面を強くヨコナデしたことで断面M字形となっている。外面調整は口縁部にタテハケ（5本/cm）を施したあと、突帯付近を強くヨコナデしている。受部は丁寧にヨコナデしている。内面は口縁部に斜め・ヨコ方向のハケ目（5本/cm）を施したあと、受部にヨコ・斜め方向の強い指ナデ調整をしている。内外面のハケは同一原体による。

胎土は2～7mmのチャート・石英・長石、クサリ礫、砂粒、雲母などを多く含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪 47 口縁部突帯である。突帯部径は約41cmで、埴輪46と同じ大きさの口縁部になると思われる。突帯は強くヨコナデされ、幅2cm、高さ1.1cmのややM字形の断面台形となっている。

外面調整はタテハケ（7本/cm）を施し、突帯付近を強くヨコナデする。内面はタテハケ（7本/cm）のあと、受部をヨコナデしている。内外面のタテハケは同一原体による。胎土は1～2mmの長石・石英、砂粒を含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪 48 頸部である。突帯は幅3cm、高さ1.5cmの断面台形である。突帯貼り付け位置を溝状にヨコナデした様子が観察でき、突帯貼り付け後に受部の外面にタテハケを施している。

内面は突帯までをヨコハケ調整、以下はナデ調整である。胎土は1～5mmのチャート・長石、砂粒を含む。土師質で、橙色を呈す。

3) 形象埴輪（第20図、図版11）

造り出し（第Ⅱトレンチ）で出土した形象埴輪は蓋形埴輪である。

埴輪 49 飾り板の破片である。タテハケの後、ミガキ状の調整を行っている。並行する2条の線刻と、上位の線刻と交差する1条の線刻が認められる。裏面は剥離が著しく線刻を確認できなかった。

埴輪 50 笠部中位突帯付近である。突帯は幅2.3cm、高さ約0.5cmの扁平で幅広いものである。風化により調整はかなり不明瞭であるが、笠部は外面にヨコハケ調整を施し、内面はナデ、台部との接合部は指オサエしているようである。

埴輪 51 笠部中位突帯付近である。突帯は幅2.2cm、高さ0.4cmで、断面形は扁平で幅広である。突帯部の復元径は37.8cmである。笠部はタテハケ（5本/cm）を施し、突帯周囲に幅広くヨコナデを行っている。笠下半部内面はヨコ方向に強く指ナデし、台部との接合位置には密に指オサエを加えている。

2. 土師器（第21図 図版12）

52 小型壺である。埴輪C内からほぼ完形で出土しており、口縁部を一部欠損しているが、打ち欠いた様子は見られない。口径7.1cm、口縁部高2cm、器高7.1cm、胴部最大径8.4cmを測る。体部は扁球形で、底面は座りが良いように小さな平坦面を作っている。内湾気味の口縁部は外に開いて立ち上がる。外面体部下半はヨコ方向のヘラケズリを施し、上半部から口縁部は丁寧にヨコナデする。内面は底面を指ナデ、体部から口縁部はヨコナデ調整を行っている。胎土は1～2mm大の長石・石英粒、クサリ礫、雲母を含んでいる。

3. 須恵器（第21・22図 図版12・13）

53 杯蓋である。口径12.7cm、器高4.8cmを測る。天井部は丸みを帯びており、口縁部は外反し、端部は内傾する。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。天井部外面は回転ヘラケズリ調整を行っているが、その施される範囲は天井部全体の2/3以上に及んでいる。内面は丁寧な回転ナデ調整を行

い、中央部に不定方向のナデを施している。

54 杯身である。口径 10.4cm、器高 5cm を測る。底部は丸みを帯びており、立ち上がりは高く、弓なりに内傾する。端部は内傾する広い凹面を呈しており、器壁は薄くシャープな感がある。受部は比較的長く上外方に延び、全体に鋭角的な作りである。受部内面に沈線が廻っている。

底部外面は回転ヘラケズリ調整し、その範囲は体部との境まで及ぶ。底部内面は回転ナデ調整を行う。内外面には風雨に晒されて荒れた状況が残り、底部外面はそれが大変顕著である。胎土には黒色微粒が多く含まれている。

55～57 有蓋高杯蓋である。内湾気味の口縁部が直下に下り、端部は内傾して段を持っている。天井部は少し丸みを帯びているが、53 に比べるとかなり平坦である。天井部と口縁部の境の稜は鋭さを失い、小さく突出するだけである。ツマミは高さを失っており、かなり扁平である。

天井部外面の回転ヘラケズリ調整は、全体の 2/3 程で、回転ナデの範囲が広がっている。内面は回転ナデ調整を丁寧に行い、中央部に不定方向のナデを施す。

杯蓋・有蓋高杯蓋は破片を多く検出しているものの、全形を知り得る資料は少ないため、両者の区別はツマミの有無で判断しているが、口縁の形状でもその違いが認められる。杯蓋の口縁は外反し、端部は内傾しているが、段を有していない。それに対して、有蓋高杯蓋は口縁部がやや丸みを帯びて直下に下り、端部は内傾して、段を有するという特徴をもっている。

58～61 有蓋高杯である。59 は埴輪 C 内から割れた状態で小型壺とともに出土している。立ち上がりから受部にかけての破片が多く出土しているが、杯身との区別はつかない。立ち上がりは高く、54 のように外反するものと、58 のように直線的に内傾するものの二者があり、端部は内傾するもの、内傾して凹面をなしているもの、内傾して明瞭な段を有するものなど多様である。受部は長く上外方に延び、先端は比較的鋭い。杯底部はあまり丸みを帯びておらず扁平である。脚部はハの字形に外反して、裾が大きく広がる。端部は基本的に外傾面を呈しており、凹線を廻らす、直立する、あるいは強い回転ナデにより小さく外反するなど、端面にはかなりバラエティーが認められる。杯部外面底部を回転ヘラケズリする他は、丁寧に回転ナデ調整を施している。中位に円形透かし孔を三方に伴っている。

62～66 甕である。62 の口頸部は緩やかに外反し、口縁下に断面三角形の鋭い凸線を 2 条有する。凸線間には文様は無く、頸部上位に斜めに傾く波状文を施している。内外面は回転ナデ調整。

63 は小型の甕である。口頸部は外反し、端部が上方に延びる。肩部がなだらかに落ちた位置で最大径を持ち、やや角張った球体を呈している。外面体部上半はタテ方向に平行タタキ、下半はヨコ方向に平行タタキを施したあと、体部中位にカキ目調整を行う。内面底部は強く指ナデし、その他は回転ナデ調整する。口頸部から口縁部にかけては強い回転ナデによって鋭角的になっている。

64 は口頸部が緩やかに外反し、端部は肥厚せず上方に摘み上げている。断面三角形の鋭い凸線を 2 条廻らせ、各凸線下に波状文 (10～14 本 / 1 条) による文様帯を有する。外面肩部に平行タタキが認められ、他は回転ナデ調整を施している。

65 は口頸部が大きく外反し、口縁下端が凸線状を呈している。外面口頸部は回転カキ目調整、体部は平行タタキのあと回転カキ目調整を行っている。内面は口頸部を回転ナデ調整し、体部は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。

66 は大きく外反する口頸部は比較的短く、口縁端部は台形状に肥厚する。体部上位 1/3 にその最大径を持ち、扁球体を呈している。体部外面は 2/3 を正立状態で上方から下方へ平行タタキを施し、1/3 は倒立させて体部から底部に向かって平行タタキを施している。ガラス質の自然釉が掛かっ

ている。内面は回転ナデ調整のあと、体部は同心円文の当て工具痕を半スリケシ調整している。

67・68 器台である。67は台部から脚部上半と脚部下半の資料である。接合面を失っているが、脚部の波状文、焼成状態、器面調整などが似通っていること、さらに同様の特徴を持った三角形透かしと長方形透かしを有する脚部片が認められることから、同一個体であると判断した。

高さ43.3cm、口径33.1cm、底径28.8cmを測る。台部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は上方で小さく外反し、端部は上方に伸びる。口縁下に2条、体部中位に1条の凸線を廻らせ、その間に波状文(8~10本/1条)を2条配している。体部中位以下の外面には平行タタキ痕が明瞭に残り、内面は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。脚部はハの字形に外反してひらき、裾部近くで「く」の字形に内湾する。端部は面をなしており、内面端部が接地している。

脚部は2条一組の凸線を4段に配し、凸線間に振幅の大きな波状文(8~10本/1条)が2条施されている。最上部には凸線が廻らず、クシ工具のアタリが屈曲部に残っている。凸線は上下に凹線を廻らせることで目立たせた隆起線である。透かし孔は上2段が長方形、下2段が三角形で、千鳥状に開けられている。内外面調整は回転ナデによる。

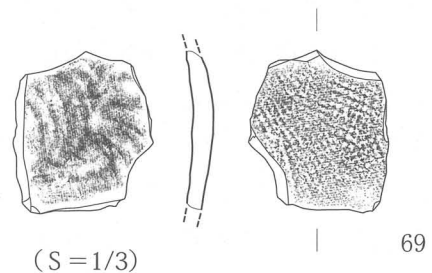
68は高さ36.5cm、口径33.6cm、底径26.3cmを測る。67に比べて台部の立ち上がりは直線的である。口縁部は外反し、端部は上方に伸びる。端面は強い回転ナデが加えられて凹面状を呈しており、内面にも凹線状のへこみが入る。口縁下に2条、体部中位に1条の凸線を廻らせ、凸線間に2条の波状文(10本/1条)を配している。外面には体部下半から底部に平行タタキが施され、凸線より下をカキメ調整している。内面は回転ナデで調整されているが、平行タタキが施される位置には同心円文の当て具痕が残し、意識的にスリケシ調整されている。

脚部はハの字形に外反してひらき、裾部近くで内湾する。端面は、内面端部が接地している。2条一組の凸線を3段に配しているが、下段は凹線の方が目立っている。最上部には凸線を廻らせていない。凸線で画された文様帯は3段で、カキ目を施したあと、上・下段は3条、中段は2条の波状文(10本/1条)を施している。透かし孔は三角形で、千鳥状に開けている。

内面は回転ナデ調整で、裾部や上部に指オサエを加えている。台部との接合面にクシ目を入れて接着し易くしている。

4. 韓式系土器(第13図)

韓式系土器の破片1点(69)が出土している。外面に格子タタキが施され、内面は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。甕の体部片と思われる。土師質で、にぶい橙色を呈している。



第13図 第IIトレンチ出土 韓式系土器

<第I・III・IVトレンチ>

1. 埴輪

第I・III・IVトレンチ検出の埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、埴丘流出土、内濠埋土、「造り出し」に隣接する平坦面直上からの出土である。いずれも破片で、埴丘上の埴輪が崩れ落ちたものと考えられるが、第I・IVトレンチは第IIトレンチに隣接して設けられたトレンチであることから、造り出しから流れ込んだ可能性もある。

1) 円筒埴輪 (第23・24図 図版16)

埴輪1～3 円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状により (b) 埴輪1、(c) 埴輪2・3の2種類を確認している。埴輪3は口縁部径30cmを測り、口縁は大きく外反して、上面は強いヨコナデによりわずかにM字形をなしている。外面調整はタテハケによる1次調整の後、Bc種ヨコハケ(8～15本/cm)による2次調整を施し、内面はヨコハケ調整(9本/cm)する。外面にヘラ記号が描かれており、第Ⅱトレンチ埴輪0や埴輪26と同じ記号になると思われる。

埴輪4～18 突帯部付近の破片である。突帯の形状により5種類に分類しているが、a類は出土していない。(b) 埴輪12～18、(c) 埴輪6・7、(d) 埴輪8～11、(e) 埴輪4・5である。

埴輪4・5の突帯は幅1.4～1.5cm、高さ0.5cmの幅狭で扁平な断面台形である。いずれも外面にはB種ヨコハケによる2次調整を行い、内面は斜め・ヨコハケを施している。

埴輪7は突帯幅1.4cm、高さ0.7cmを測り、幅狭で突出度の高い断面台形の突帯である。タテハケによる1次調整のあと、B種ヨコハケによる2次調整を施している。ヨコハケは突帯上端まで及んでおり、2周以上させている。内面は強い指ナデを行っている。

埴輪9は円形透かし孔を持つ胴部片で、突帯は幅2.1cm、高さ0.5cmの幅広で突出度の低い断面台形である。外面はBb種ヨコハケによる2次調整を施しており、ヨコハケを2周させている。静止痕は上下で同じ位置にそろっている。

内面は斜め方向に幅広くナデ調整し、突帯貼り付け位置にはヨコナデを加えている。

埴輪10は外面にタテハケによる1次調整のあと、ヨコハケによる2次調整を施しているが、強いナデ上げにより、ほとんどナデ消されている。内面は強い指ナデによる。須恵器のように硬く焼き締まっている。

埴輪19・20 円筒埴輪の基底部である。埴輪20は底部径33.8cm、底部高10.5cm、突帯は扁平で幅広な(d)で幅2.0cm、高さ0.4cmを測る。外面調整はタテハケによる1次調整のあと、2段目以上はヨコハケ調整している。底面に幅2cm程の棒状圧痕が残っている。

2) 朝顔形埴輪 (第24図 図版16・17)

埴輪21・22 口縁部突帯である。いずれも口縁部内外面はタテハケ調整している。

埴輪23～25 頸部突帯である。突帯には断面三角形(埴輪24)と断面台形(埴輪23・25)があり、内面調整では前者は突帯貼り付け位置を境に受部側をタテハケ、肩部側をヨコハケ調整し、その間に指オサエを加えている。後者は受部を斜め・ヨコハケ調整し、接合部と肩部には指オサエ・ナデ・ヨコナデを行っている。埴輪25の外面調整は、受部に斜め方向の強い指ナデ、肩部にヨコハケを施し、突帯付近は幅広くヨコナデしている。肩部上位に透かし孔(円形?)を持つ。

3) 形象埴輪 (第24図 図版17)

埴輪26 蓋形埴輪の飾り板で、内縁を残す資料である。表面にはタテ方向にハケ調整が施され、内縁に並行するような2条の線が刻まれている。

埴輪27 牛形埴輪の角⁽²⁾の可能性がある。残存長7.5cm、最大幅3.3cm。先細りの円錐を内湾させた形である。中空で、内側に絞ったような痕跡が残っており、棒状の物に粘土板(紐)を貼り付けて形作ったようである。外面は丁寧にナデ調整を加えている。第Ⅲトレンチ内濠埋土からの出土である。

埴輪28 家形埴輪の壁破片である。側廻突帯を大きく欠いているが、上に開口部が設けられている。内側には床状の表現がなされているが、約2cm幅の張り出し部が廻るだけで、吹き抜け状になっている。壁から床までを一続きで形作っている。内外面の風化が著しく調整は不明瞭である。

<外濠部>

1. 埴輪

遺物は外濠埋土内、あるいは外濠内に貼りついた状態で出土しており、堤に並んでいた埴輪が外濠内に落ち込んだものと思われる。出土している埴輪はいずれも破片で、かなり風化している。

1) 円筒埴輪 (第 25・26 図 図版 14)

埴輪 1～4 円筒埴輪の口縁部である。埴輪 1 は口縁端部を丸くおさめている (b)。外面は斜め方向のハケ調整を施し、口縁上端は幅広くヨコナデを行っている。内面は斜め方向に指ナデしている。

埴輪 2 の口縁部形状は (b)。外面調整はタテハケによる 1 次調整の後、Bd 種ヨコハケによる 2 次調整を施す。タテ・ヨコハケ原体は 6～9 本/cm で、同一工具によるハケ調整と思われる。内面はタテハケの後、斜め方向の指ナデを行う。タテハケは外面調整のハケ工具と同一のものを使用しているようである。接合痕はナデ消されず目立っている。

埴輪 3・4 の口縁部形状は (a) で、口縁部径 32.4～33.6cm、最上段高は 9.1～10.0cm。突帯形状は (b') で、幅 2.2～2.7cm、高さ 0.6～0.7cm である。外面調整は 2 次調整に B 種ヨコハケを施し、ヨコハケの静止痕は垂直である。最上段はヨコハケを 2 周させている。ハケ原体は 4～6 本/cm で、ハケ調整が同一工具で行われたことが推測される。内面はヨコナデし、突帯貼り付け位置は指オサエを加えている。焼成は須恵質で、硬く焼き締まっている。胎土は石英・長石粒が大変多く目立っている。

埴輪 5～16 突帯部付近の破片である。埴輪 6 は外面にヨコハケによる 2 次調整を施した後、3.5cm 幅の鋸歯文の文様帯をヘラ描きする。突帯形状は (d') で、幅 2.3cm、高さ 0.5cm を測る。

埴輪 7・8 は外面にタテハケによる 1 次調整を施しており、ハケ原体の条数は密である (9～10 本/cm)。内面は指ナデ調整し、突帯貼り付け位置は指オサエしている。突帯形状は (d') で、幅 1.9～2.0cm、高さ 0.4～0.5cm である。胎土には石英・長石・白色粒が大変多く目立っている。

埴輪 15 の突帯は断面三角形で、幅 1.7cm、高さ 0.7cm を測る。外面はヨコナデ、内面はヨコハケ (4～6 本/cm) 調整している。

埴輪 16 は突帯の形状は (b) を呈し、幅 2.0cm、高さ 0.7cm を測る。外面調整はタテハケによる 1 次調整のあと、2 次調整の B 種ヨコハケを施しており、静止痕は突帯に対してほぼ垂直である。ハケ原体条数は 6 本/cm で、タテ・ヨコハケ調整は同一工具によるものと思われる。胎土は 1～6mm の石英・長石・黒色礫、砂粒が大変多く目立っている。

埴輪 17～19 円筒埴輪の基底部である。埴輪 17 は土師質で、外面に 1 次調整のタテハケが残っている。内面調整は風化により不明瞭であるが、斜め方向にナデを行っているようである。

埴輪 18 は須恵質で大変硬く焼き締められている。外面は強く指ナデされ、下端にハケによる調整痕が見られる。内面は斜め方向に強い指ナデを施す。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、粘土帯の貼り合わせ痕が残っている。

埴輪 19 は底部径 28.0cm を測る。外面調整はタテハケによる 1 次調整のみで、ハケ原体の条数は密である (9～11 本/cm)。内面は斜め方向に強い指ナデを施し、下端には指オサエを加えている。胎土、焼成、調整の様子から埴輪 8 の基底部であると推測される。

2) 形象埴輪 (第26・27 図版14～16)

形象埴輪は蓋形埴輪(埴輪20～28)、家形埴輪(埴輪29・30)、不明形象埴輪(埴輪31)が出土している。

①蓋形埴輪

埴輪20～23は飾り板である。

埴輪20は器面にハケ調整(8本/cm)を施し、表裏に文様を刻んでいる。文様は相對して刻まれていないようであるが、内縁に沿って緩く弧線を描く2条の平行線と下端でそれと重なるであろう直線が配されている。赤色顔料がわずかに残っている。

埴輪21は器面の摩滅が進んでいるが、わずかにハケ調整が観察できる。文様は表裏で若干異なっているが、基本的には内縁に沿うやや直線的な2条の平行線と、上方に2条の弧線を刻んでいる。図向かって左の面の弧線は上部で閉じている。

埴輪22は器表面に不定方向にハケ調整(8～9本/cm)を施し、表裏に2条の平行する弧線を刻んでいるが、線刻は粗雑で、相似形にはなっていない。

埴輪23は器面の摩耗が著しいが、片面にハケ調整(9本/cm)が残っている。表裏で文様の描き方が異なっており、図向かって右の面は2条の平行線が鈍角に屈曲して開き、反対の面には緩く弧を描く2条の線を刻んでいる。この面に赤色顔料がわずかに残っている。

埴輪24・25は飾り板の交差部分の破片である。相對する2枚の飾り板を繋げてから、直交する他の2枚の飾り板を取り付けたようすがわかる。かなり風化しているが表面に施されたハケ調整が部分的に観察できる。飾り板に線刻は観察できない。赤色顔料がごくわずかに残っている。

埴輪26は飾り板受部である。内面上部には飾り板の剥離面が残っている。摩耗により内外面の調整は不明瞭であるが、塗布された赤色顔料がわずかに観察できる。胎土は精良である。

埴輪27は笠部中位突帯付近で、突帯を挟んで上下笠部が残っている。突帯は幅2.2cm、高さ0.5cmを測り、断面形は扁平で幅広である。表面は風化しており外面調整は不明瞭であるが、笠下半部内面は同心円状に強いヨコナデを行い、台部との接合位置には指ナデ、指オサエをしている。表面には赤色顔料が塗布された形跡がある。

埴輪28は笠下半部である。「く」の字状を呈し、屈曲部から上はタテハケ、下はヨコハケを施している。ヨコハケは向かって右から左へ工具を動かして、2.5cm間隔の真直ぐな静止痕を残している。これは、方形板の右側が上に重なるような笠部をヨコハケの静止痕で表現しているものである。ハケ原体の条数は5本/cm。内面は横位に強いヨコナデを施している。

②家形埴輪

埴輪29は家形埴輪の屋根部分で、四注部のコーナーにあたる。幅4cm、高さ0.6cmの水平方向に廻る突帯が残っている。摩耗のため内外面の調整は不明瞭である。外面に赤色顔料が薄く残っている。

埴輪30は屋根と壁の接合部分である。内部には幅2.1cm、高さ1.1cmの張り出し部が廻り、貼り付け位置を強くヨコナデしている。壁内面は斜め方向に指ナデを行う。屋根部分は摩耗が著しく、調整や網代などの表現は観察できない。

③不明

埴輪31は種別不明の破片であるが、径4.5cm程の筒状ないし棒状のものに取り付き、それを中心に3方向に延びていたようである。表面の調整は不明である。

その他の遺物（第27図）

ここでは第Ⅱ・Ⅲトレンチ、外濠部で出土した埴輪以外の遺物についてまとめて報告する。

1～4 外濠部外濠埋土からの出土である。

1は須恵器杯身で、口径10.8cm、器高4.0cmを測る。内外面はロクロナデし、口縁端部は強いヨコナデにより玉縁状を呈する。7世紀後半。

2・3は瓦器碗である。2は口径11.8cmで、内面に平行線状ミガキがわずかに残っている。外面口縁部はヨコナデ、体部は指オサエする。3は粘土紐を貼り付けただけの形骸化した高台である。摩耗が著しく調整は不明瞭である。13世紀後半。

4は白磁碗の高台である。高台径7.0cm、内面見込みに沈線が1条廻る。高台立ち上がりはケズリ調整を施し、外面は無釉である。これらの遺物は外濠の埋没時期を示すものである。

5・6 造り出し（第Ⅱトレンチ）検出時に後世の堆積層から出土したものである。

5は丁銀形土製品である。残存長6cm、幅3cm、厚さ1cm。一見、元文元年（1736）～文化2年（1805）鑄造の元文丁銀、あるいは文政3年（1820）～天保8年（1837）鑄造の文政丁銀を模しているように思われるが、「文」字・「寶」字・「大黒・恵比寿像」の下に、おそらく「大黒・恵比寿像」が横位に配されているようである。型作りで、裏面には押圧時の指頭圧痕が残っている。上部に円孔が穿たれていることから、御守りとして首にかけていたものと考えられる。

6は左巻き三巴文軒丸瓦である。外縁幅は2cm、外縁高は0.5cmである。文様の出は浅く、扁平な感じを受ける。

7～9 第Ⅲトレンチの近世の堆積土から出土したものである。

7はロクロ成形の土師質土器皿である。口唇部に煤が付着している。

8は手捏ねの土師質土器皿である。口唇部に煤の付着が見られる。9は瀬戸・美濃焼天目碗高台である。外面は露胎、内面に鉄釉がかかる。 (瀬川)

5. 小結

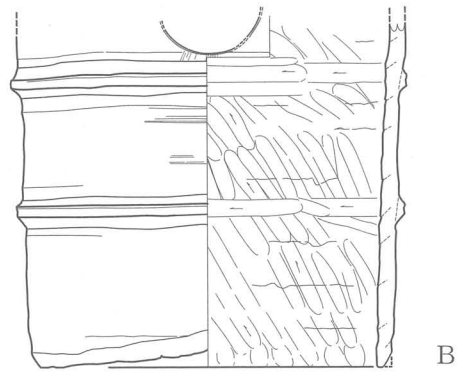
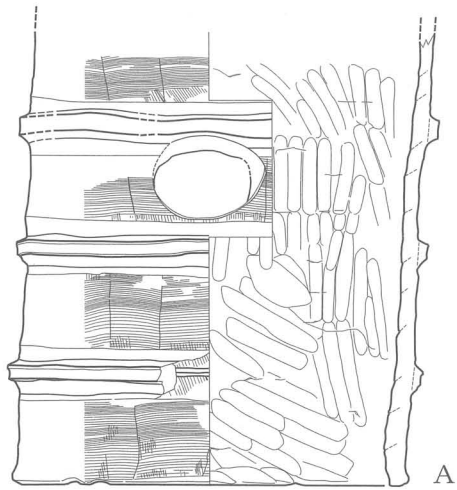
今回の調査では、多くの新しい知見が得られた。以下、調査結果を述べたい。

- ① 外濠が内濠に並行して見つかった。また、外濠埋土内からは、円筒埴輪とともに形象埴輪が出土した。そして内濠と外濠の間の堤上には、埴輪が樹立していた可能性が高くなった。堤は、下端で推定幅6m。外濠の外周が外堤状となるかどうかについては、確認できなかった。
- ② 今回検出された堤の位置は、内濠をはさんで造り出しの対岸（正面）にあたる。蓋・家形などの形象埴輪が出土した。
- ③ 堤は、過去の外濠部の調査成果を含め、ほぼ標高8.7～8.8mに揃っているが、古墳築造時の面は、後世削平を受けており、本来はそれより高い位置に面があったと考えられる。
- ④ 造り出し北側（第Ⅰトレンチ）で、造り出し裾の平坦面を画する石列が見つかった。その高さは標高8.7mである。地山上層（粘土層）を掘り下げ、地山下層（礫層）で成形されている。
- ⑤ 内濠底は標高約8.0mである。第1次調査によると、濠の深さは「地山を約1mほど掘り下げた程度」と推察されているが、今回の調査で検出した地山上層上面（標高9.4m）からの深さは、1.4mとなる。
- ⑥ 幅3.8～4.5m・長さ4m以上の「造り出し」を確認した。造り出しからは2列の埴輪列を検出した。
- ⑦ 造り出しは地山を削り残して成形されており、古墳築造時に造り出しも造られたことがわかる。

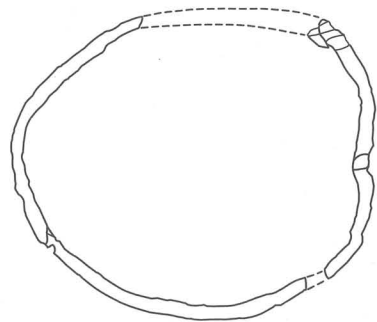
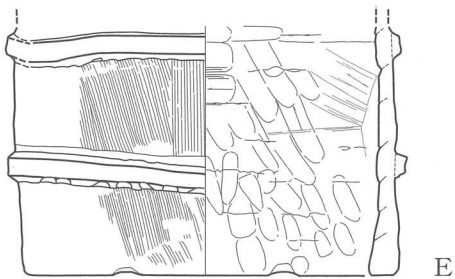
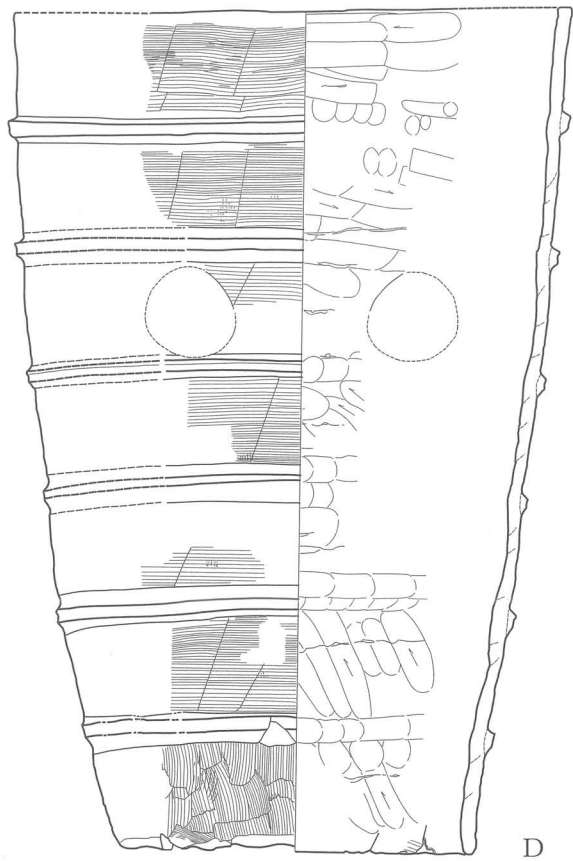
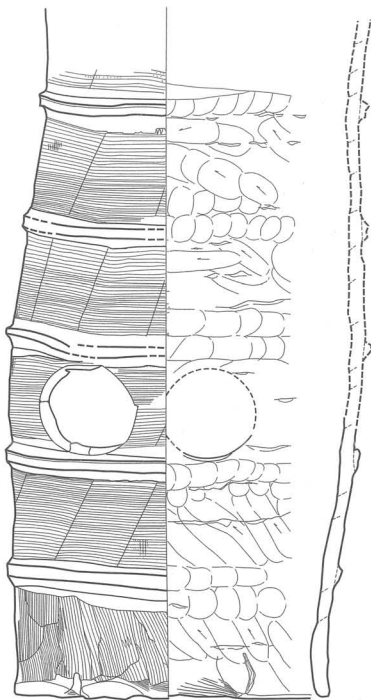
- ⑧ 造り出し南側埴輪列の埴輪Nより西には埴輪が見つからなかった。埴輪が見つからなかった地点の内側から、須恵器がまとまって出土した。
- ⑨ 造り出しの内濠側は、大きく破壊されており、埴輪列は確認されなかったが、本来埴輪列は、他の古墳造り出し同様、ロの字ないしコの字に囲んでいたものと考えられる。
- ⑩ 造り出し南側（前方部とのくびれ部分）では、形象埴輪・須恵器は検出できず、マツリの跡は確認されていない。 (中畔)

註

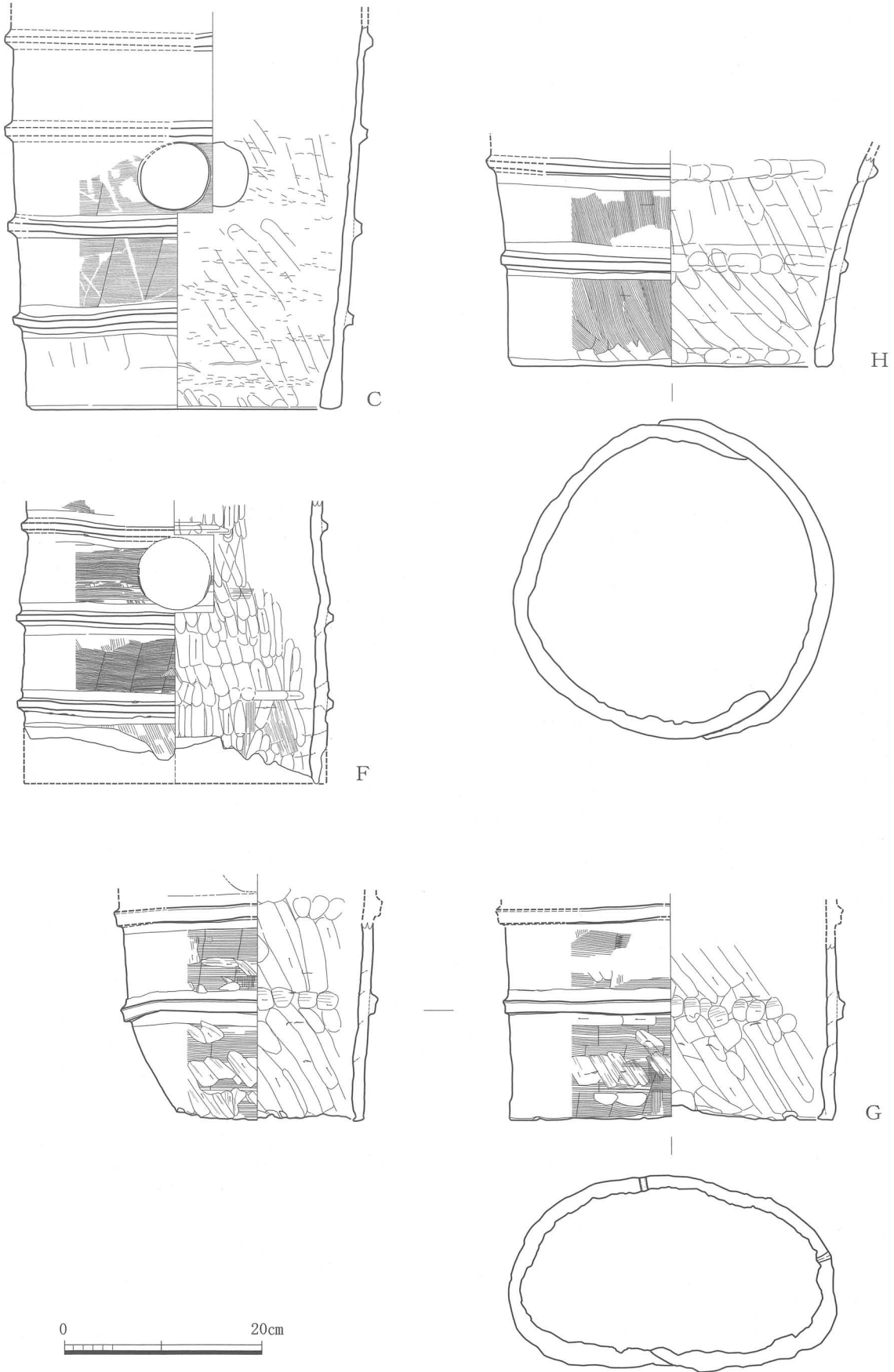
- (1) 形象埴輪については高橋克壽氏にご教示いただいた。
- (2) 牛形埴輪の出土は全国でも数例しか確認されていない。本例は中空であることや、他の形象埴輪と胎土が異なることなどから、土師器甕・甔などの把手の可能性も考えられる。



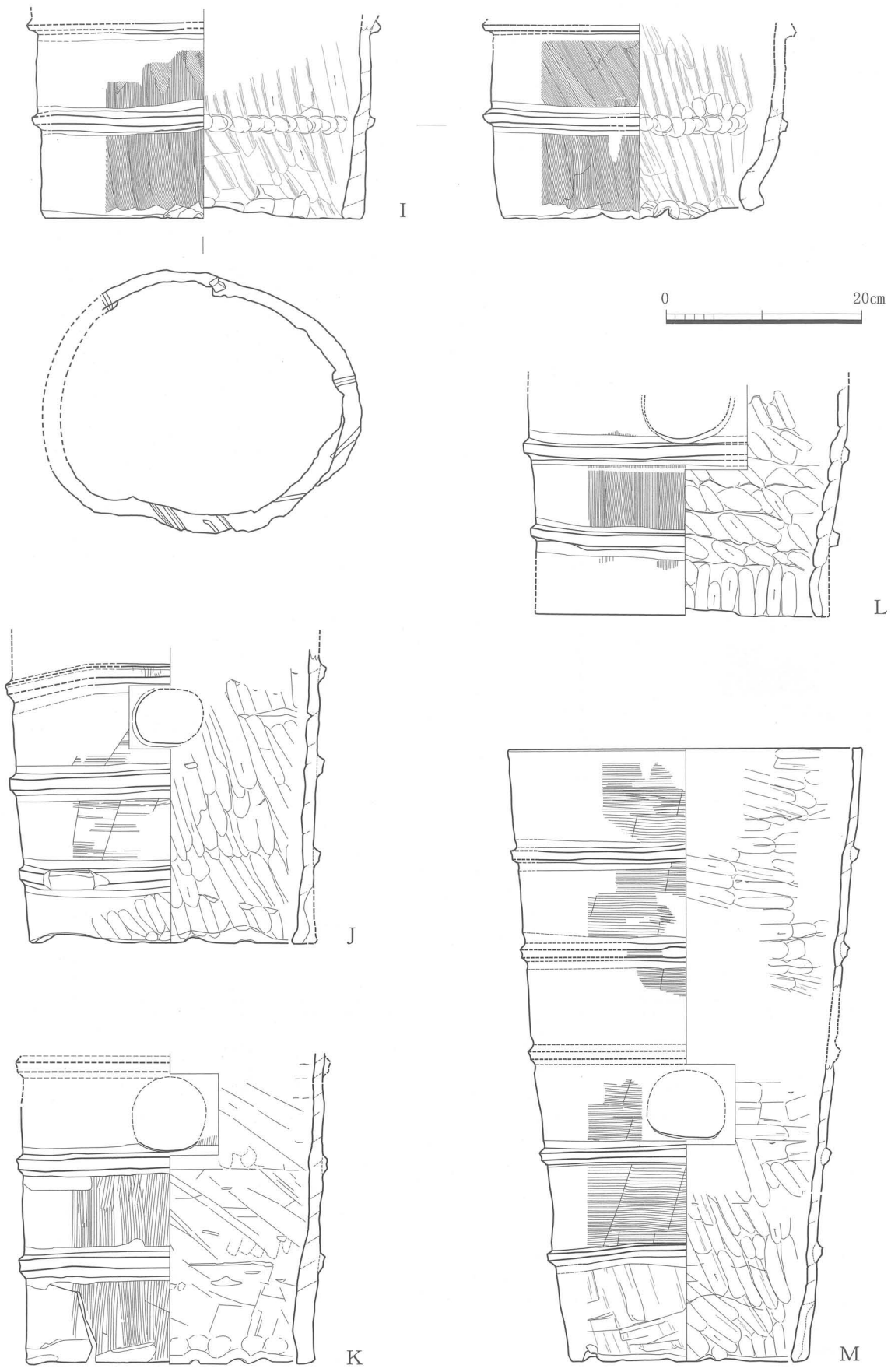
0 20cm



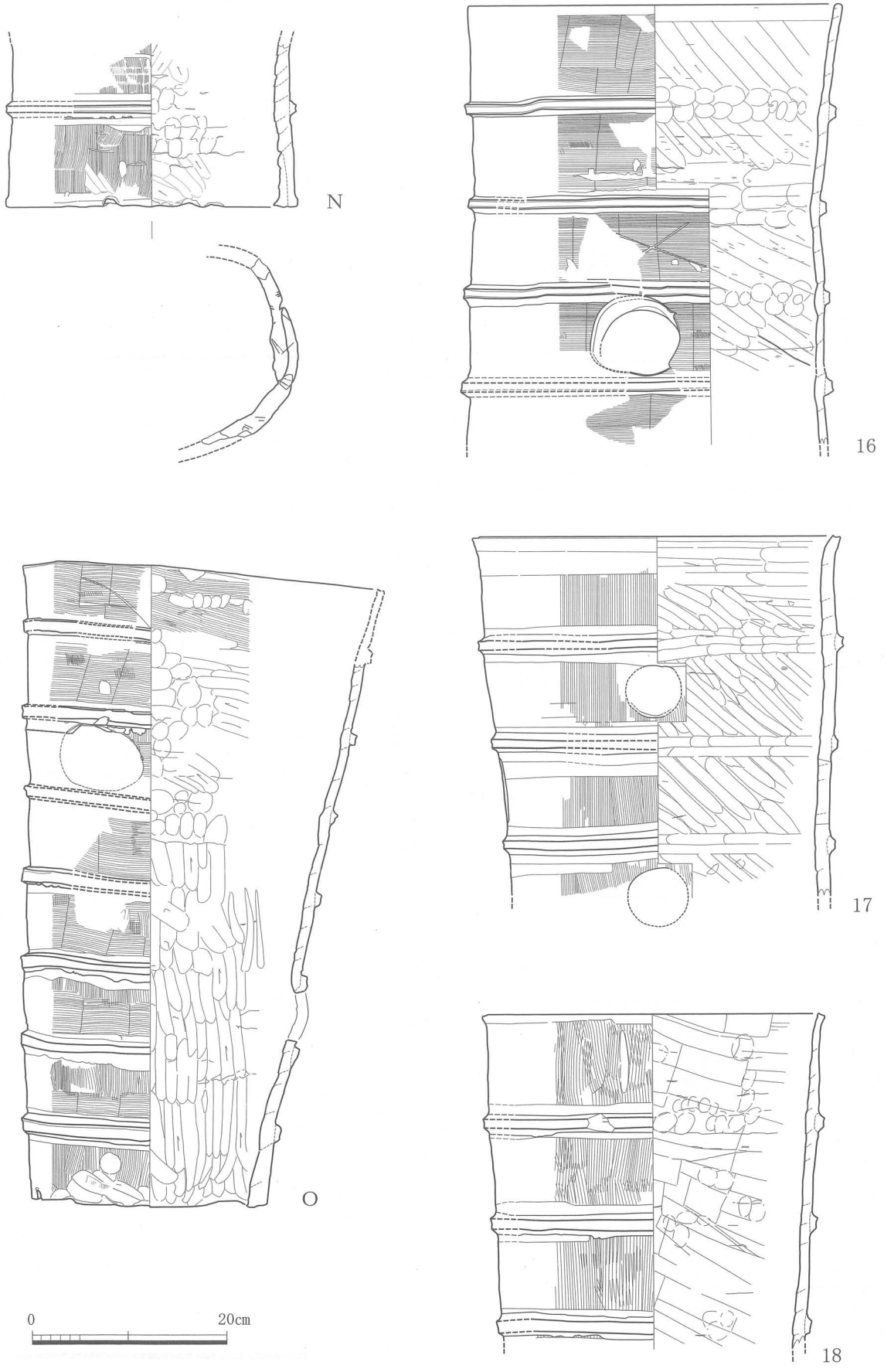
第14図 第Ⅱトレンチ出土埴輪(1)



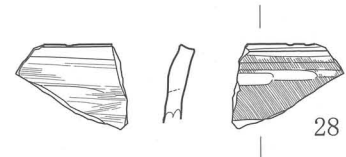
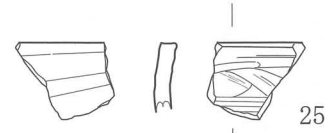
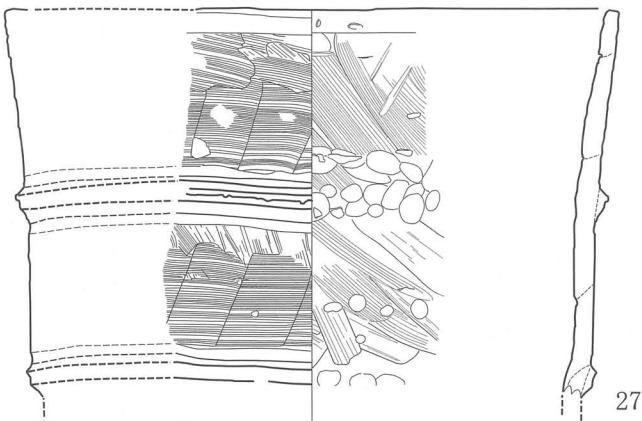
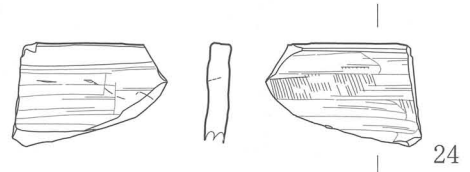
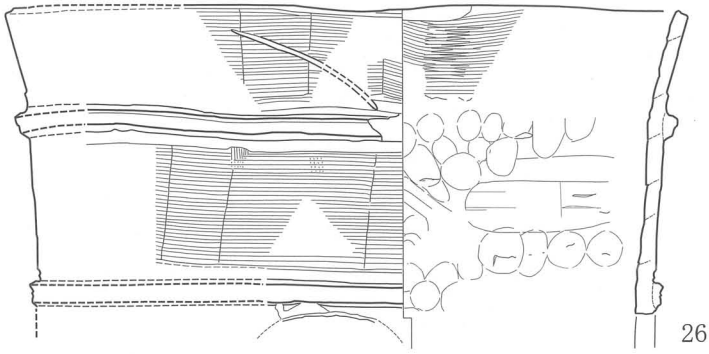
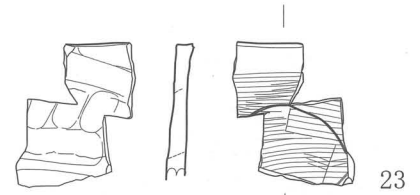
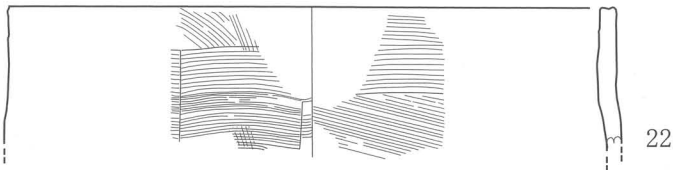
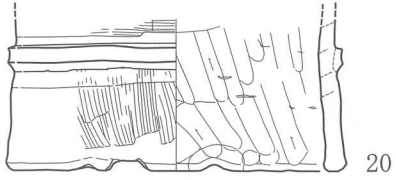
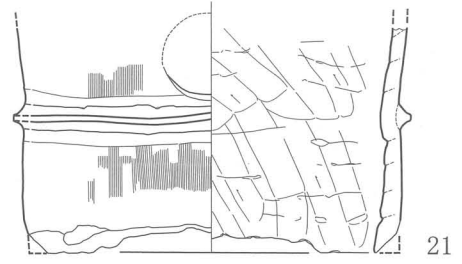
第15図 第Ⅱトレンチ出土埴輪(2)



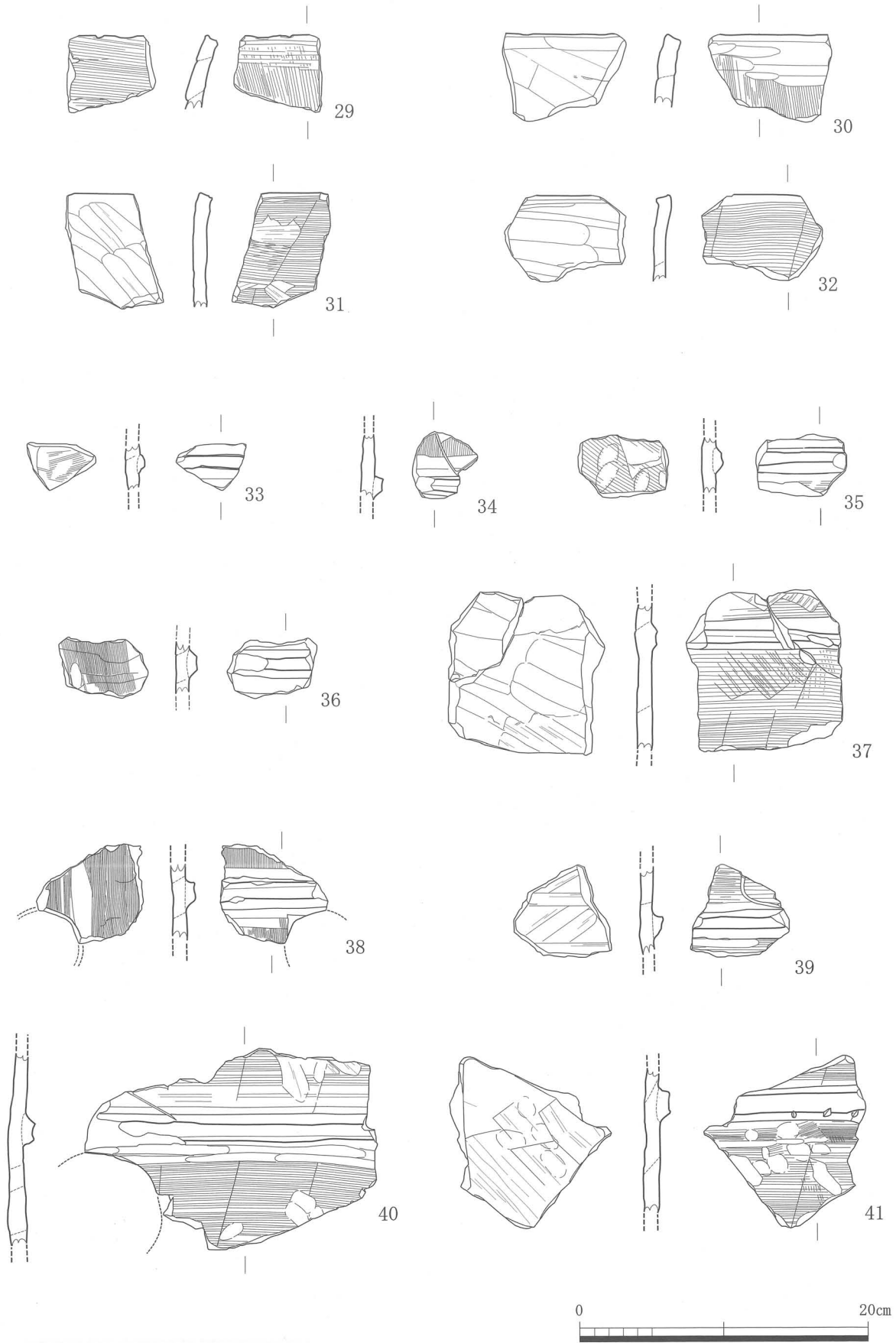
第 16 図 第Ⅱトレンチ出土埴輪 (3)



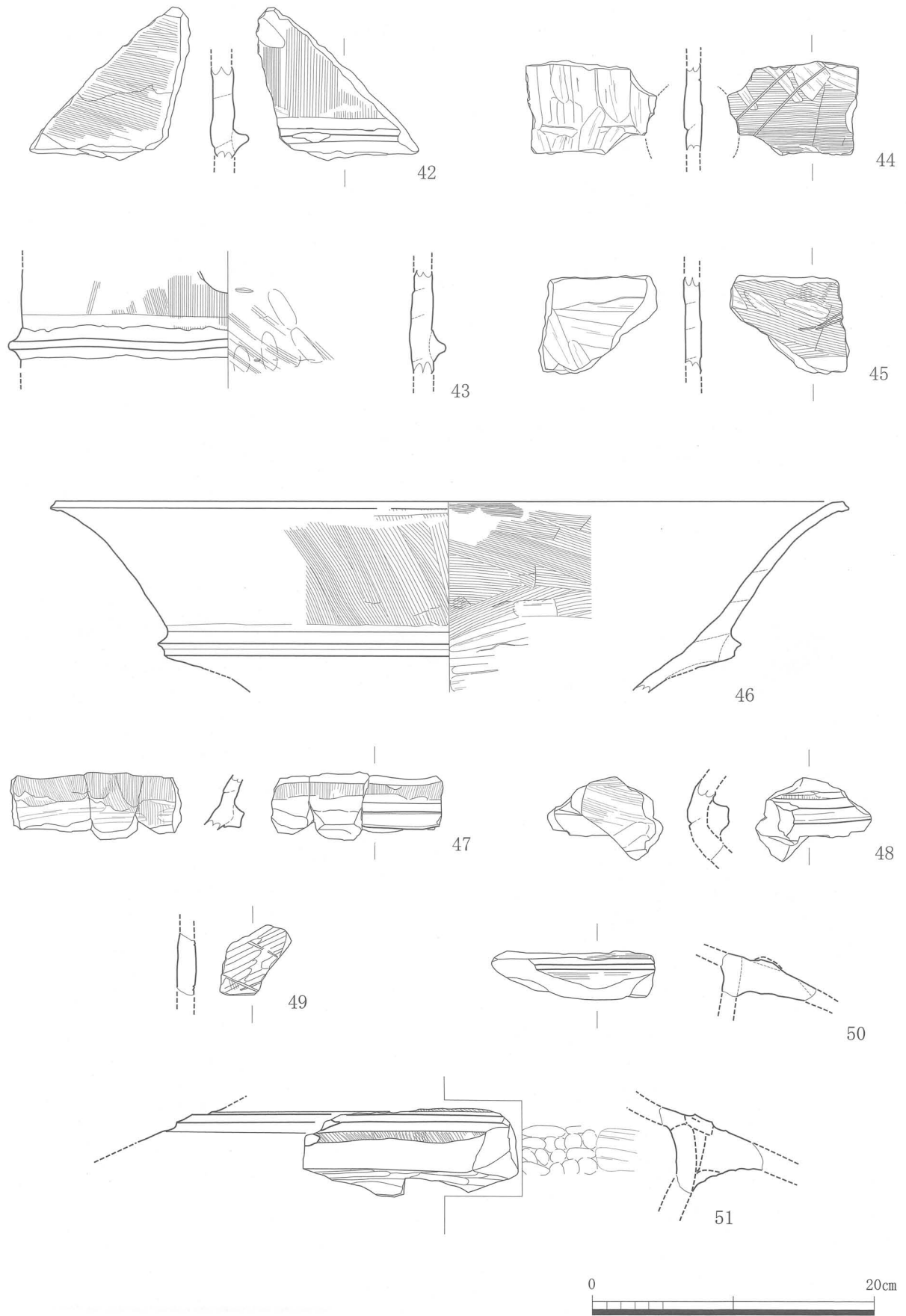
第17図 第Ⅱトレンチ出土埴輪(4)



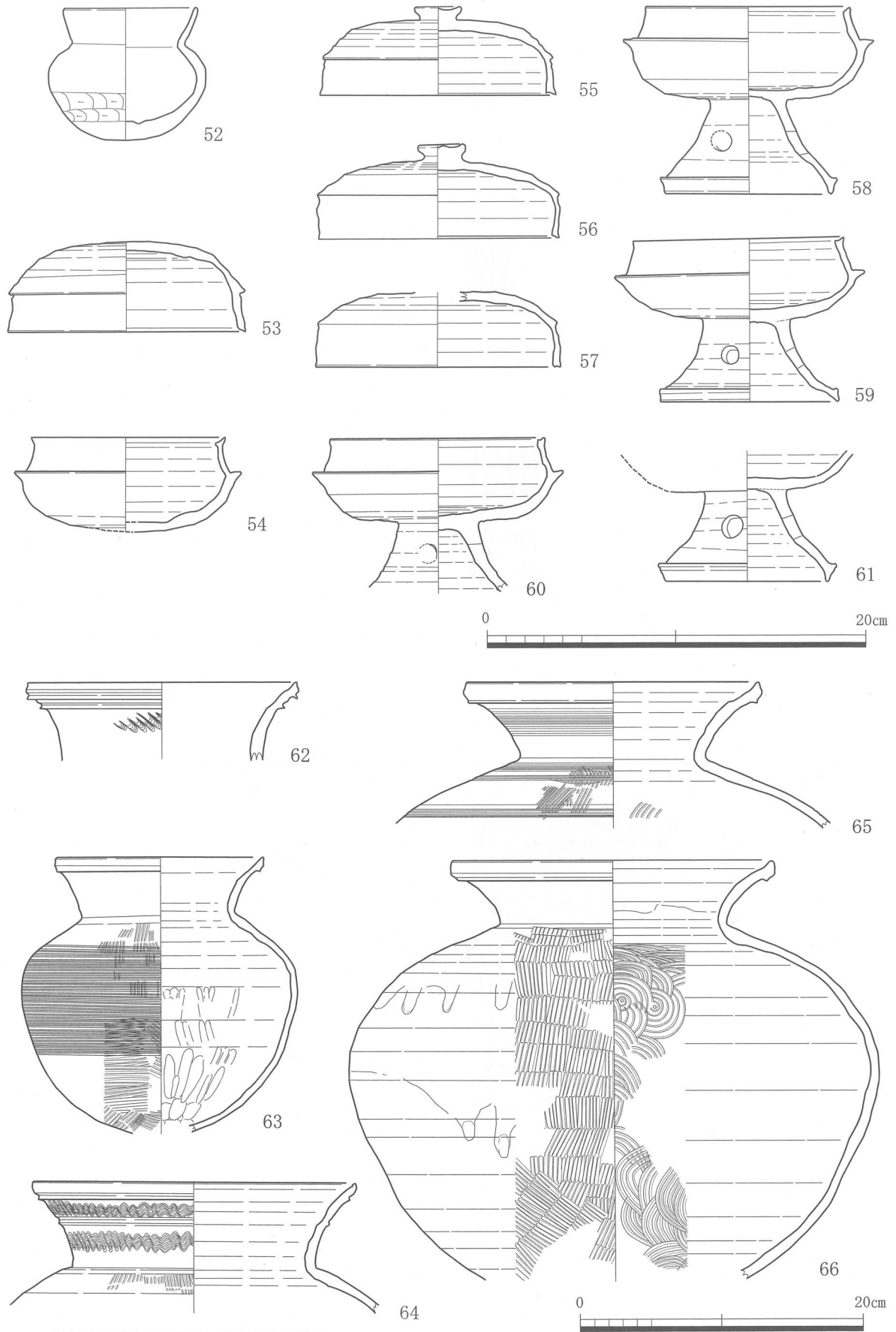
第 18 図 第 II トレンチ出土埴輪 (5)



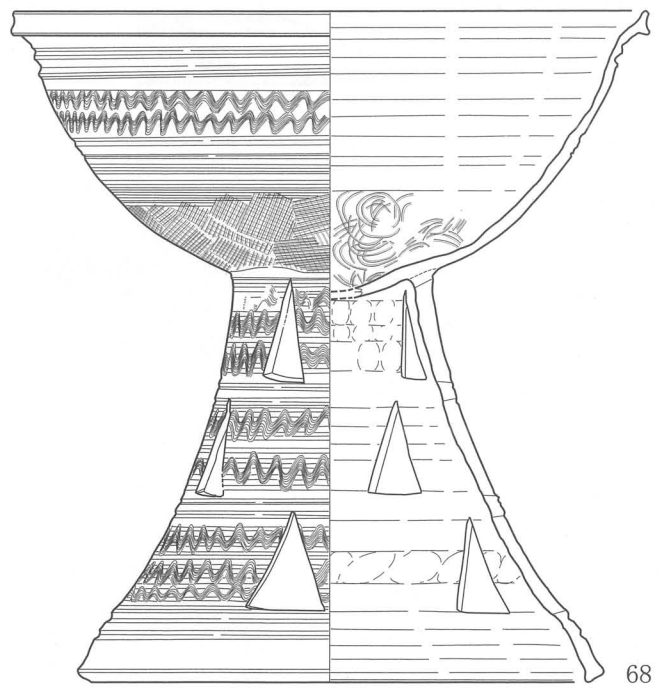
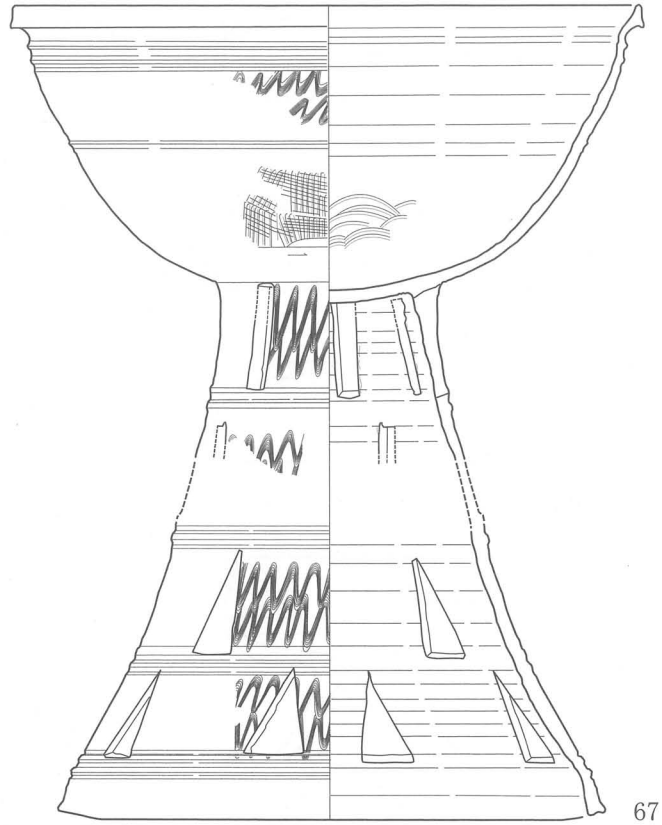
第19図 第Ⅱトレンチ出土埴輪(6)



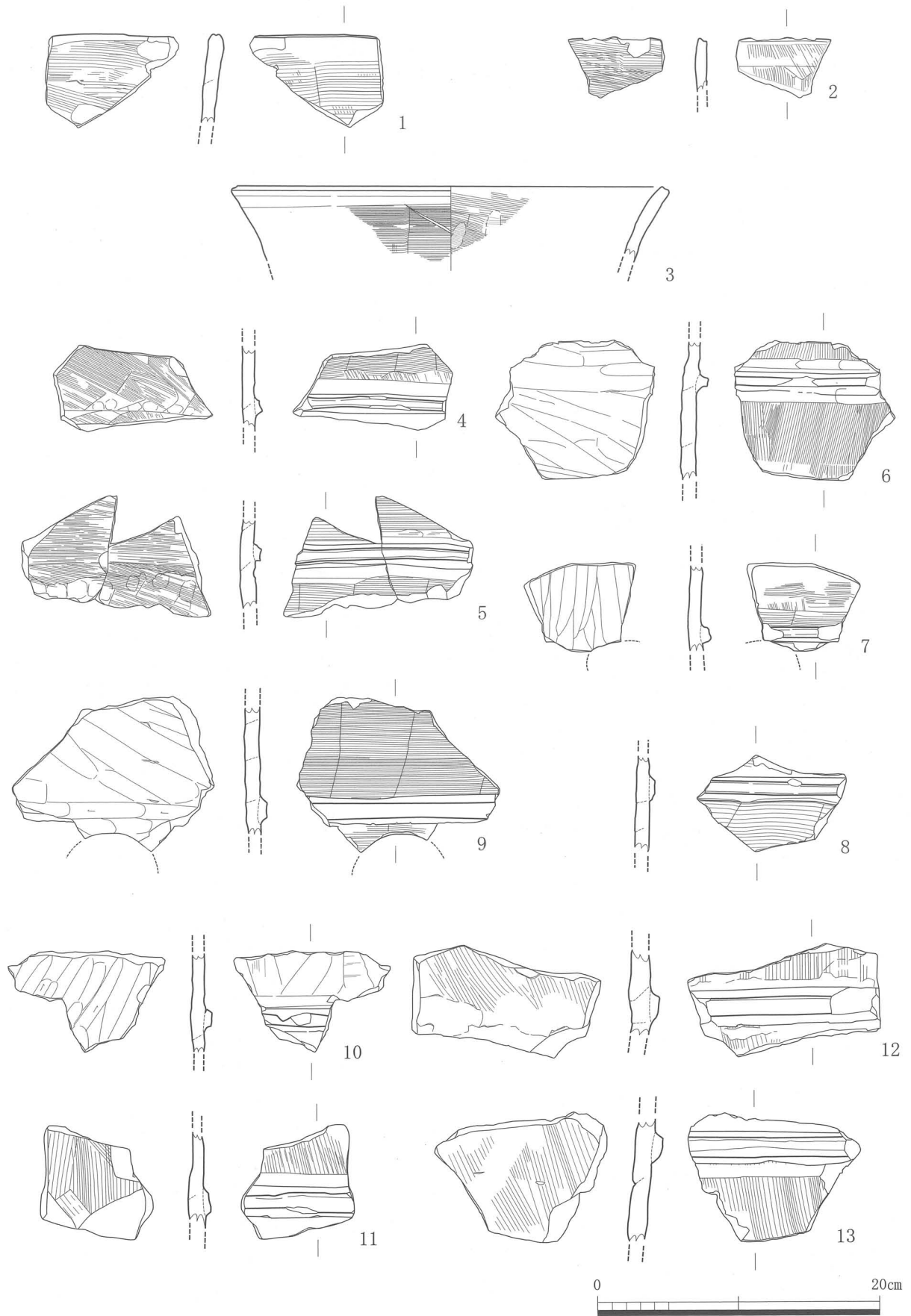
第20図 第Ⅱトレンチ出土埴輪(7)



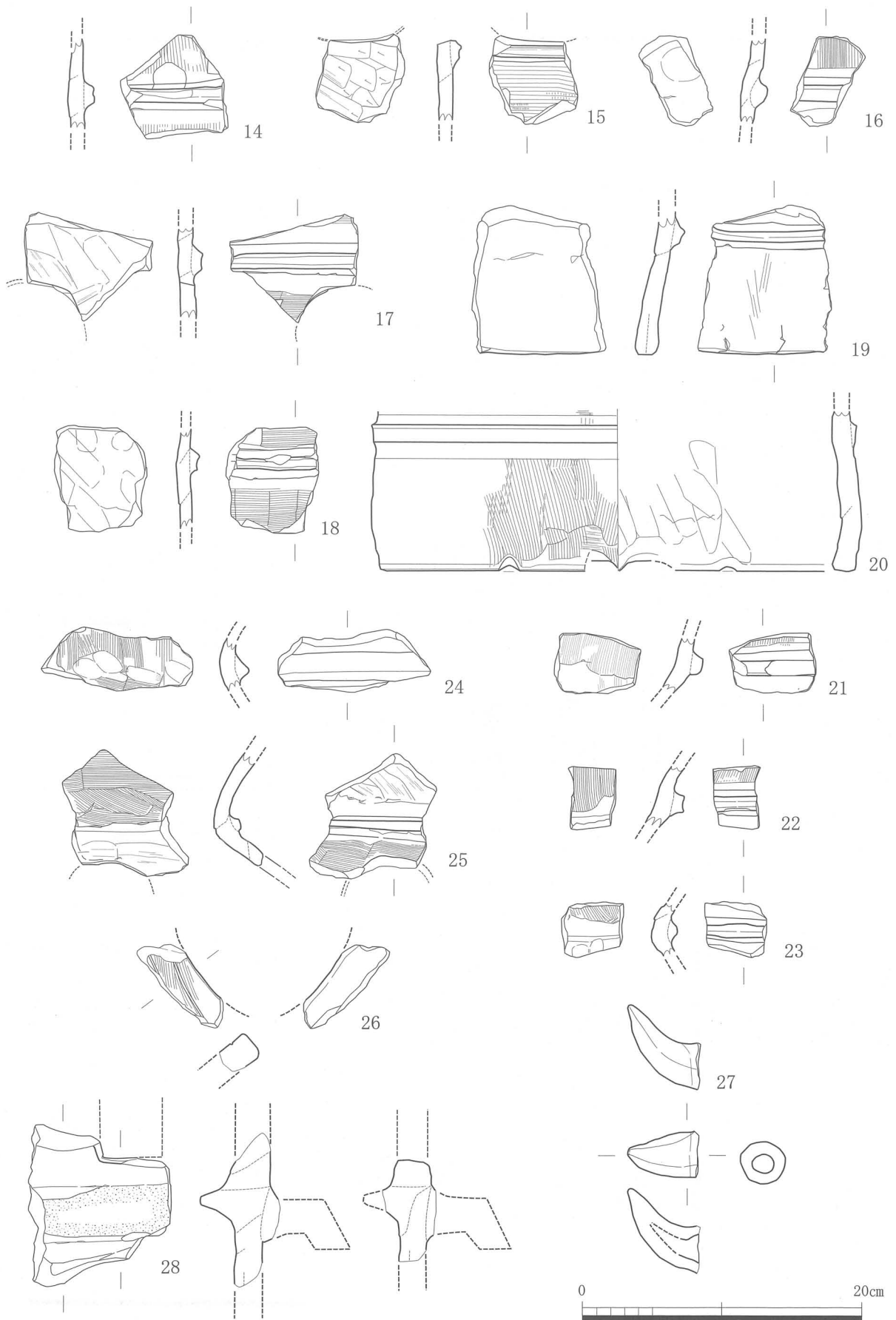
第21図 第Ⅱトレンチ出土土師器・須恵器



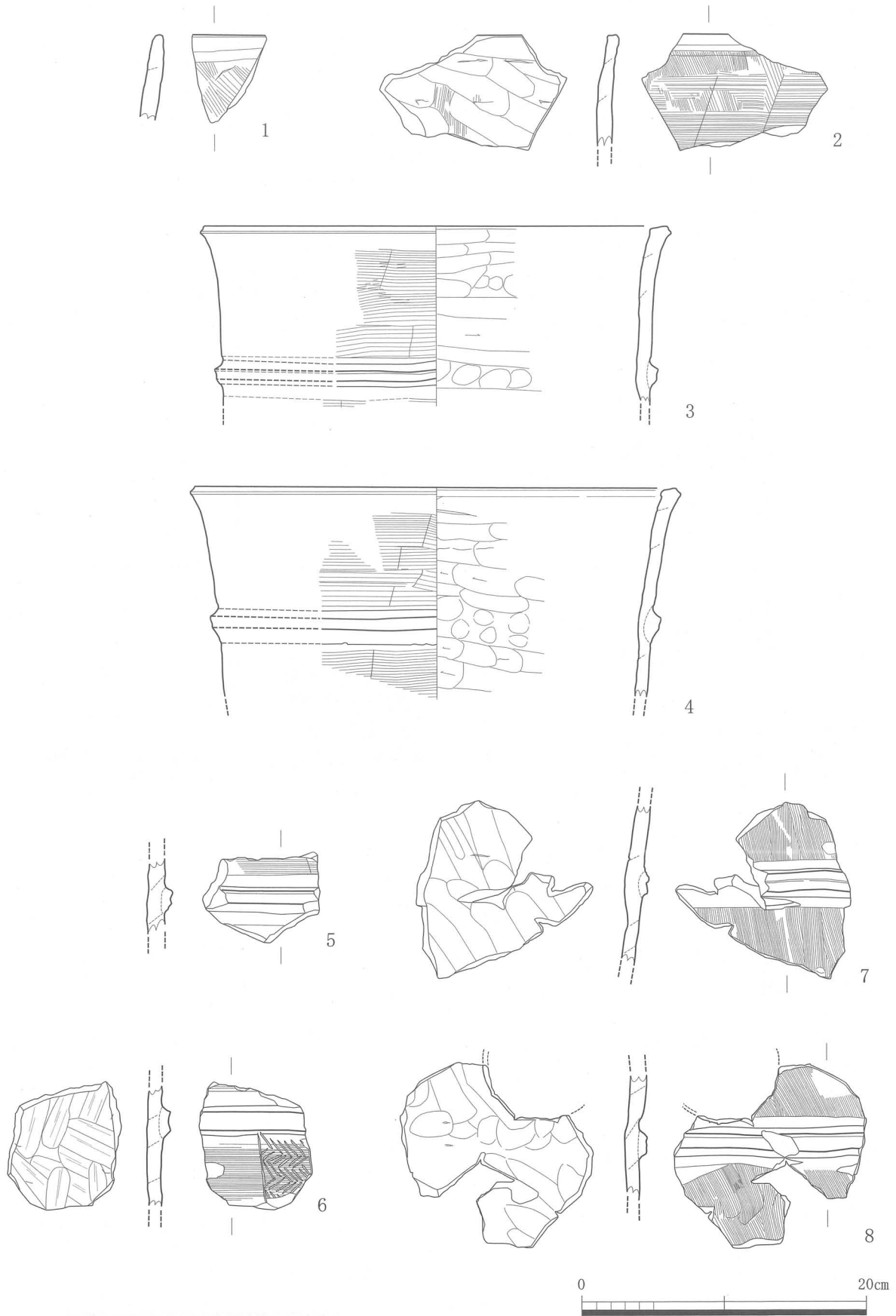
第 22 図 第Ⅱトレンチ出土須恵器



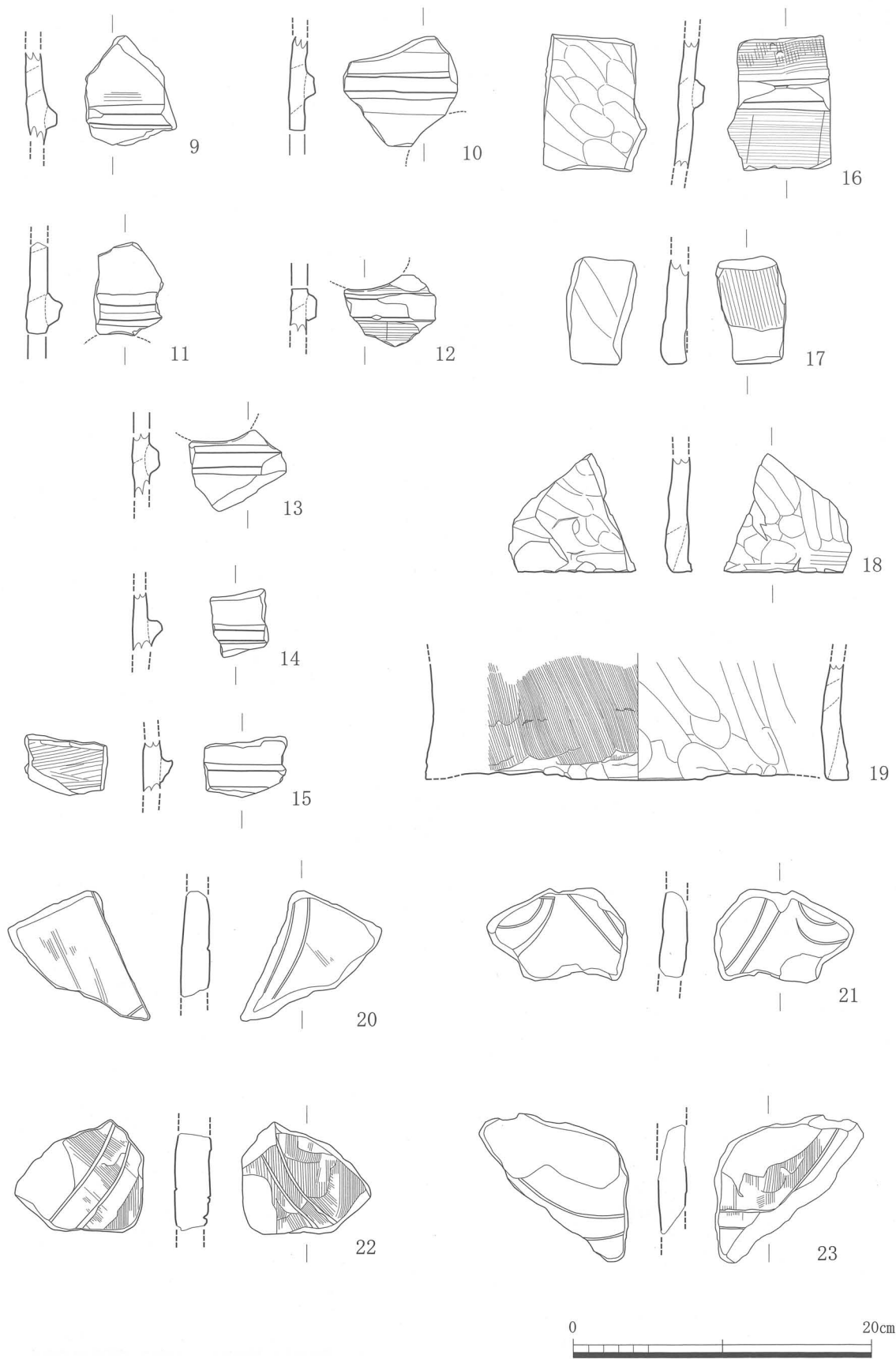
第23図 第I・III・IVトレンチ出土埴輪(1)



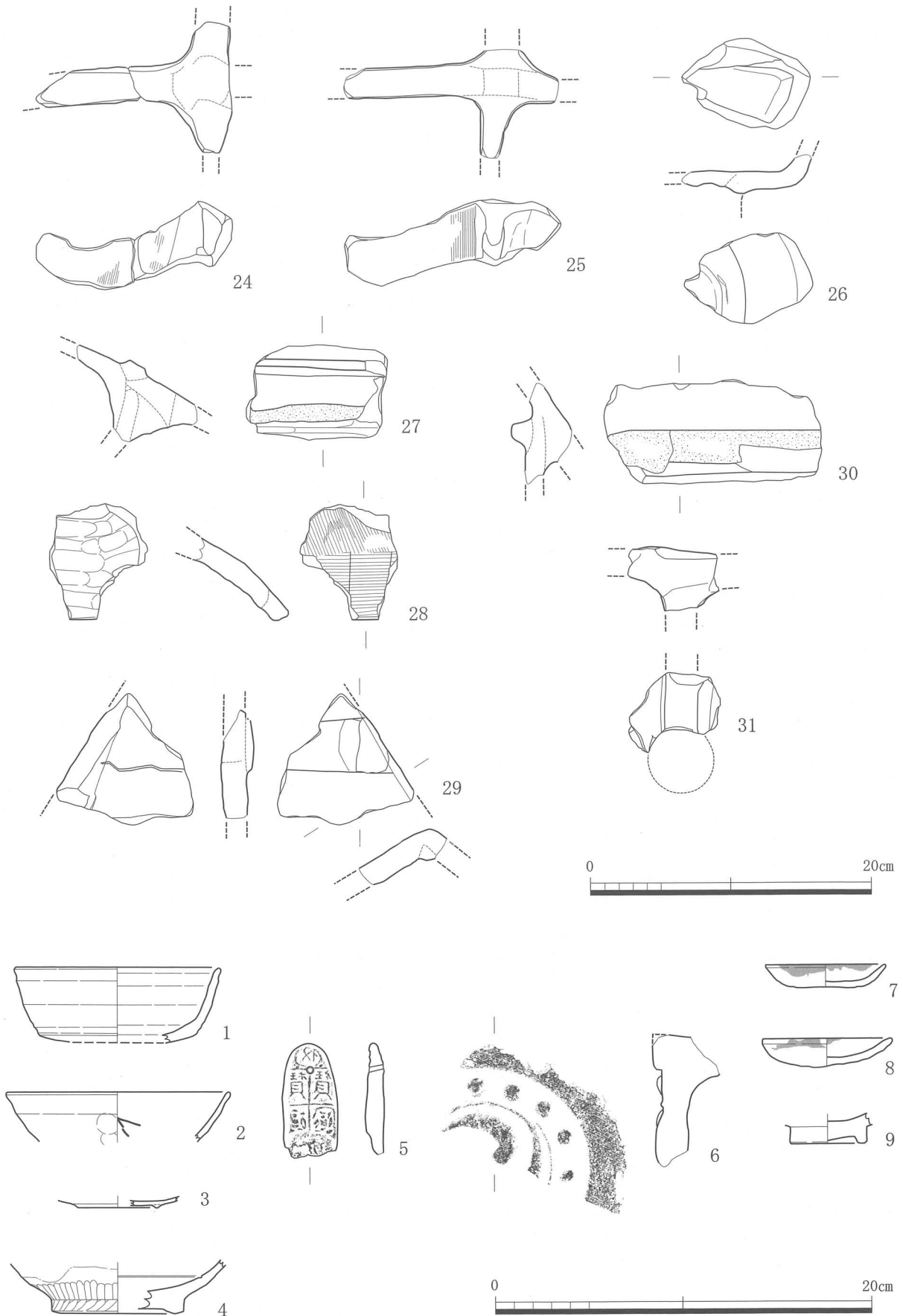
第24図 第I・III・IVトレンチ出土埴輪(2)



第25図 外濠部出土埴輪(1)



第 26 図 外濠部出土埴輪 (2)



第27図 外濠部出土埴輪(3)、第Ⅱ・Ⅲトレンチ・外濠部出土遺物

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 1段目/以上 | 口縁部 形状 | 突帯 | | 焼成 |
|------|------------|----|-------------|--------|-------------------|------|-----------|--|-----------|--------------------|-----------|----|----------------|-------------|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | | | 形状 | 幅/高さ | |
| 埴輪A | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (36.5) | 31.5 | — | 9.2～9.6 | 9.9～10.0 9.9～10.3 | — | 1.1～1.5 1.7 | — | b | 2.5 0.8 | 土師質 |
| 埴輪B | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (27.5) | 28.6 | — | 12.9～13.1 | 10.1～10.3 | — | 1.0～1.4 1.5 | — | b' | 2.2 0.7 | 土師質 |
| 埴輪C | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (39.9) | 32.2 | — | 9.4～9.5 | 9.2～9.3 9.6～9.7 9.4～9.6 | — | 0.7～1.2 2.2 | — | b | 2.0 0.8 | 土師質 |
| 埴輪D | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 6条7段 | 65.0 | 28 × 24.5 | 44.2 | 9.7～10.7 | 10.0 9.5 9.1 9.3 | 8.5 | 0.9～1.2 1.3 | b | b' | 2.2 0.6 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪E | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (19.9) | 29.8 | — | 9.4 | 9.7 | — | 1.2～1.4 1.3～2.3 | — | b | 2.0 0.8 | 土師質 |
| 埴輪F | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (24.0) | 30.6 | — | 8.5 | 9.4 8.8 | — | 0.9～1.3 1.5 | — | c | 1.5 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪G | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (23.8) | 32.4 × 18.7 | — | 12～12.5 | 9.5 | — | 1.0～1.2 1.1～1.5 | — | b' | 2.5～3.0 0.8 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪H | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (21.8) | 32.9 | — | 10.5～11.3 | 9.8 | — | 1.0～1.2 1.1～3.0 | — | c | 1.6 0.7 | 土師質 |
| 埴輪I | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (20.5) | 32.0 × 26.5 | — | 10.3～10.7 | 9.5 | — | 1.0 1.2～2.2 | — | c | 1.6 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪J | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (30.3) | 28.8 | — | 7.5～9.5 | 9.5 | — | 1.0～1.2 1.0～2.5 | — | b | 2.3 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪K | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (31.5) | 29.6 | — | 10.7～10.9 | 9.9～10.2 | — | 1.0～1.6 1.7～2.2 | — | d' | 2.2 0.5 | 土師質 |
| 埴輪L | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 3段目 | (24.8) | (30.0) | — | 8.5 | 8.6 | — | 1.0～1.5 | — | d | 2.0 0.5 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪M | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 5条6段 | 61.7 | 24.3 | 36.0 | 11～11.6 | 10～10.2 | 10.2 | 0.8～1.0 1.0～1.8 | b | b' | 2.2 0.6 | 須恵質 |
| 埴輪N | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (17.0) | (30.0) | — | 10.5 | — | — | 1.5 1.5～1.8 | — | c | 1.7 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪O | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 7条8段 | 64.9 | 24.0 | 37.4 | 8.2 | 8.6 (8.0～8.2) 8.2～8.7 8.3～9.0 7.8～8.1 8.2～8.6 | 5.7～6.5 | 0.8～1.5 1.9 | b | b | 1.8 0.7 | 須恵質 |
| 埴輪16 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 最上段～ 5段目 | (45.3) | — | 38.5 | — | 9.6～9.8 9.1～9.3 9.7 | 10.2～10.7 | 0.9 0.8～1.0 | b | b | 2.0 0.8 | 土師質 |
| 埴輪17 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 最上段～ 4段目 | (37.0) | — | 38.2 | — | 10.0～10.4 10.2～10.4 | 10.5～10.7 | 1.1～1.4 1.3～1.5 | b | b' | 2.1 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪18 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 最上段～ 3段目 | (34.0) | — | 32.6 | — | 10.0 10.5 | 10.7 | 0.7～1.2 1.0～1.3 | c | d' | 2.3 0.5 | 土師質 |
| 埴輪19 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (14.0) | (22.0) | — | 8.7 | — | — | 1.2～1.3 1.3～2.0 | — | e | 1.5 0.5 | 土師質 |
| 埴輪20 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (12.1) | 26.8 | — | 9.8 | — | — | 1.1 1.6～1.8 | — | d | 2.0 0.5 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪21 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 1段目～ 2段目 | (17.9) | (32.0) | — | 11.0 | — | — | 1.0～1.6 | — | a | 2.0 1.1 | 土師質 |
| 埴輪22 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | 32.0 | — | — | — | 1.0 | b | — | — | 土師質 |
| 埴輪23 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.7～1.0 | b | — | — | 須恵質 |

表3 第8次調査埴輪観察表(1)

第1節 御願塚古墳第8次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔 | 突帯間隔 | 備考 |
|-----------------------|-------------------|------------------------|--------------------------|---|---------------|------|---|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | 配置 | 設定技法 | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (5~9本/cm) | Bc種ヨコハケ (5~9本/cm) | タテハケ+ Bc種ヨコハケ | 斜め、タテ方向の指ナデ。粘土紐の継ぎ目は丁寧にナデを加える。 | 3段目 | 凹線 | 底面に棒状圧痕。外面調整のタテ・ヨコハケは同一原体。突帯上部にハケ原体の「アタリ」が残る。 |
| 7.5YR6/8 橙色 | タテハケ | ヨコハケ | — | 斜め方向の指ナデ。突帯貼付け位置はヨコナデする。 | 3段目 | — | 基底部分外端線を打ち欠いている。風化が著しく外面調整は不明瞭。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bc種ヨコハケ (板ナデ) | ナデ上げ | 斜め方向の指ナデ。爪痕が横位に残る。 | 3段目 | — | 外面基底部分にヨコナデ。ハケ原体の条痕は非常に密で、抽出できない。6条7段に復元できる。 |
| 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | タテハケ (4~7本/cm) | Bd種ヨコハケ (4~7本/cm) | タテハケ (4~7本/cm) | 斜め方向の指ナデ。最上段と6段目はヨコナデ。突帯貼付け位置はヨコナデ・指オサエ。 | 3・5段目 (直交) | 凹線 | 最上段はヨコハケを2周させる。外面基底部分をナデ調整する。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (5~6本/cm) | × | タテハケ (5~6本/cm) | 指オサエ、斜め・ヨコ方向の指ナデ、ハケナデ。 | — | — | 底面に棒状圧痕。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (5本/cm) | Bd種ヨコハケ (10~12本/cm) | タテハケ (5本/cm) | タテ方向の指ナデ、1段目は1単位2cmのハケナデを施す。突帯貼付け位置はヨコナデ・指オサエを加えている。粘土紐継ぎ目は丁寧にナデ消されている。 | 3段目 | — | Bd種の静止痕ピッチは細かい。ハケ原体の条痕は非常に密で、板ナデのよう。基底部分を打ち欠いている。 |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (7本/cm) | Bc種ヨコハケ (7~8本/cm) | タテハケ+ Bb種ヨコハケ | 斜め方向の強い指ナデ、突帯貼付け位置は細かくヨコナデする。 | 3段目 | — | 横断面が楕円形を呈する円筒埴輪。1段目のヨコハケは2周し、斜め方向のナデ上げを施す。 |
| 5YR5/6 明赤褐色 | タテハケ (8本/cm) | × | タテハケ (8本/cm) | 斜め・タテ方向のハケナデ・指ナデ。下端付近をヨコナデ。 | — | — | 外面タテハケは丁寧に。外面底部下端をナデ調整する。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (8本/cm) | × | タテハケ 斜めハケ (8本/cm) | 斜め方向のハケナデ。突帯貼付け位置は細かく指オサエする。下端付近をヨコナデする。 | — | — | 横断面が楕円形。外面タテハケは丁寧に。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bd種ヨコハケ | ナデ上げ | 斜め・タテ方向の強い指ナデ。 | 3段目 | 凹線 | 3条目突帯端面にタテハケ残る。 |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (4~5本/cm) | × | タテハケ (4~5本/cm) | 板状工具による斜め方向のナデ。突帯貼付け位置は軽く指オサエする。 | 3段目 | 凹線? | 埴輪18の下部か? 5条6段に復元できる。 |
| 7.5YR7/6 橙色 | タテハケ (8本/cm) | × | タテハケ (8本/cm) | 粘土帯はタテナデ、それ以上は斜め方向の細かい指ナデ。 | 3段目 | 凹線 | 外面タテハケは丁寧に |
| 10YR6/2 灰黄褐色 | タテハケ | Bb種ヨコハケ (4~7本/cm) | タテハケ+ 板状工具による ナデ上げ | 1段目~2段目は斜め方向の指ナデ。3段目~最上段はヨコ方向の指ナデ、突帯貼付け位置は指オサエ。 | 3段目 | — | ヨコハケは突帯間を2周する。底面に棒状圧痕。 |
| 7.5YR6/4 にぶい 橙色 | タテハケ (9本/cm) | × | タテハケ (9本/cm) | 粘土帯は斜め方向の指ナデ。1条目突帯貼付け付近は指オサエ。2段目以上は斜め方向のナデ。 | — | — | 外面タテハケは丁寧に施される。底面に棒状圧痕。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪か。 |
| 5YR5/1 灰色 | タテハケ (6本/cm) | Bc種ヨコハケ (6本/cm) | タテハケ (6本/cm) | 5段目まではタテ方向の強い指ナデ。6~7段目はヨコ方向の強い指ナデ、最上段はヨコハケの後、突帯貼付け位置に指オサエ。 | 3・6段目 | 凹線 | 最上段のヨコハケは2周する。透かし孔は楕円形で3・6段目に穿孔。最上段にヘラ記号。 |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bc種ヨコハケ (板ナデ) | Bc種ヨコハケ (板ナデ) | 斜め方向の強いナデ。突帯貼付け位置に指オサエ・ヨコナデ。斜め・ヨコ方向に横位の爪状圧痕を加えている。最上段は斜め方向のナデの後、上端を丁寧にヨコナデしている。 | 4段目 | 凹線 | 埴輪Cの上部か?。6条突帯7段構成、高さ64cm、透かしは3・4段に復元できる。3段目にヘラ記号。最上段はヨコハケを2周する。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (6本/cm) | × | タテハケ (6本/cm) | 斜め方向の強い指ナデ。突帯貼付け位置に2条のヨコナデ、最上段端部はヨコナデする。 | 2~4段目 (直交) | 凹線? | |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (4~5本/cm) | × | タテハケ (4~5本/cm) | 板状工具による斜め方向のナデ。突帯貼付け位置は指オサエする。 | — | 凹線 | 埴輪Kの上部か? 5条突帯6段構成、高さ63cmに復元できる |
| 5YR6/8 橙色 | — | B種ヨコハケ | — | 不明瞭 | — | — | 埴輪Gと対面位置の埴輪か |
| 5YR5/4 にぶい 赤褐色 | タテハケ (4本/cm) | B種ヨコハケ (5本/cm) | タテハケ (4本/cm) | タテ方向の指ナデ | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (8本/cm) | × | タテハケ (8本/cm) | 斜め方向のハケナデ? | — | — | 円形透かし孔を持つ。風化が著しく内面調整は不明瞭。 |
| 10YR7/6 明黄褐色 | タテハケ (5本/cm) | — | Bc種ヨコハケ (5~9本/cm) | ヨコハケ(5~7本/cm) | — | — | 埴輪Aの口縁部か |
| 2.5Y6/2 灰黄色 | — | — | B種ヨコハケ | ヨコ方向のナデ、指オサエ | — | — | 埴輪Mの口縁部 弧状のヘラ描き |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 1段目/以上 | 口縁部 形状 | 突帯 | | 焼成 |
|------|------------|----|-------------|--------|----|------|-----|------|------|---------------|-----------|----|------------|-------------|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | | | 形状 | 幅/高さ | |
| 埴輪24 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | b | — | — | 土師質 |
| 埴輪25 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.8 | b | — | — | 土師質 |
| 埴輪26 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 最上段～ 2段目 | (16.7) | — | 36.0 | — | 8.9 | 5.8 | 0.8 0.9 | c | e | 1.6 0.5 | 須恵質 |
| 埴輪27 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 最上段～ 2段目 | (25.5) | — | 32.4 | — | 9.2 | 9.9 | 0.9～1.1 | c | d | 2.0 0.5 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪28 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.0 | c | — | — | 土師質 (硬質) |
| 埴輪29 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.9～1.1 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪30 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪31 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.0 | c | — | — | 土師質 (硬質) |
| 埴輪32 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | d | — | — | 須恵質 |
| 埴輪33 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.0 | — | e | 1.4 0.4 | 土師質 |
| 埴輪34 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.7～1.0 | — | c | 1.6 0.6 | 土師質 |
| 埴輪35 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | d | 1.9 0.5 | 土師質 |
| 埴輪36 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | d | 2.0 0.5 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪37 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9～1.1 | — | d | 2.1 0.4 | 土師質 |
| 埴輪38 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9～1.0 | — | b | 2.1 0.6 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪39 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | b | 1.8 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪40 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.2 | — | b' | 2.3 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪41 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.1 | — | b | 2.4 0.8 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪42 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.5 | — | a | 1.7 1.1 | 土師質 |
| 埴輪43 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.5 | — | a | 2.3 1.0 | 土師質 |
| 埴輪44 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯間 | — | — | — | — | — | — | 1.0～1.3 | — | — | — | 土師質 (硬質) |
| 埴輪45 | 第Ⅱ トレンチ | 円筒 | 突帯間 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | — | — | 土師質 (硬質) |
| 埴輪46 | 第Ⅱ トレンチ | 朝顔 | 受部～ 口縁部 | (13.5) | — | 55.7 | — | — | 10.2 | 0.7～1.2 | — | — | 2.1 1.1 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪47 | 第Ⅱ トレンチ | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 土師質 (硬質) |
| 埴輪48 | 第Ⅱ トレンチ | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 土師質 |

表4 第8次調査埴輪観察表(2)

第1節 御願塚古墳第8次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔 配置 | 突帯間隔 設定技法 | 備考 |
|-----------------------|-------------------|--------------------------------|----------------------------|--|------------|--------------|---|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | — | タテハケ (7本/cm) +ヨコナデ | ヨコ方向のハケナデ | — | — | ハケ原体の条痕は非常に密で抽出できない |
| 7.5YR6/4 にぶい 橙色 | — | — | ヨコハケ (5本/cm) | ヨコナデ | — | — | ナデ上げの後、ヨコハケ調整する。 |
| 7.5YR5/3 にぶい 褐色 | タテハケ | Bc種ヨコハケ (6本/cm) | Bc種ヨコハケ (6本/cm) | 最上段ヨコハケ(6本/cm)、2段目以下 はヨコナデ、突帯貼り付け位置に指オ サエ。 | 6段目? | — | 埴輪Oと同じ特徴を持つ 透かし孔は楕円形 最上段にヘラ記号 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bd種ヨコハケ (板ナデ) | Bd種ヨコハケ (板ナデ) | 斜め方向にハケナデ(板ナデ)、突帯 貼り付け位置・接合痕に指オサエ | — | — | 最上段はヨコハケを2周させるが、2周目のヨ コハケは雑である。ハケ原体の条痕は緻密 で、抽出できない。 |
| 7.5YR6/4 にぶい 褐色 | タテハケ | — | タテハケ (12本/cm) | ヨコハケ | — | — | |
| 7.5YR6/6 褐色 | タテハケ | — | タテハケ (5~6本/cm) +ヨコナデ | ヨコハケ(5~6本/cm) | — | — | |
| 10YR6/4 にぶい 黄褐色 | タテハケ | — | タテハケ (8本/cm) +ヨコナデ | 斜め方向のナデ上げ、ヨコナデ | — | — | |
| 5YR5/4 にぶい 赤褐色 | — | — | Bd種ヨコハケ (7本/cm) | 斜め方向の強い指ナデ | — | — | ヨコハケを2周する |
| 10YR6/2 灰黄褐色 | — | — | B種ヨコハケ (5~7本/cm) | 強くヨコナデ | — | — | |
| 5YR6/8 褐色 | — | — | — | ヨコハケ(9本/cm) | — | — | |
| 7.5YR5/4 にぶい 褐色 | タテハケ (8本/cm) | — | — | 不明瞭 | — | — | V字状のヘラ描き |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | ヨコハケ | — | 斜めハケ(6本/cm)、指ナデ | — | — | |
| 7.5YR6/4 にぶい 褐色 | — | — | — | タテハケ(10~13本/cm) | — | — | タテハケの条痕が非常に密 |
| 7.5YR5/6 明褐色 | タテハケ | Bb種ヨコハケ (4~7本/cm) | — | 斜め方向の強い指ナデ | — | — | ヨコハケは2周させる |
| 7.5YR5/4 にぶい 褐色 | タテハケ (12本/cm) | × | — | タテハケ(12本/cm) | — | — | タテハケの条痕が非常に密 円形透かし孔を持つ |
| 10YR6/4 にぶい 黄褐色 | — | ヨコハケ (4本/cm) | — | 斜め・ヨコナデ | — | — | ヘラ記号 |
| 5YR6/6 褐色 | — | Bc種ヨコハケ (7本/cm) | — | 斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置 は指オサエする。 | 5段目? | — | 埴輪Gの短軸側(5段目以上)か。 円形透かし孔を持つ。ヘラ記号あり。 |
| 5YR6/6 褐色 | タテハケ | Bd種ヨコハケ (7本/cm)+ ハケ(板)ナデ | — | 斜め方向のハケナデ | — | — | 突帯下縁に刻み目 |
| 7.5YR7/6 褐色 | タテハケ (6~9本/cm) | × | — | ヨコハケ(6~9本/cm) | — | — | 突帯貼り付けがよく分かる。 |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ (8~9本/cm) | × | — | 斜め方向の指ナデ、ハケナデ | — | — | 突帯貼り付けがよく分かる。 円形透かし孔あり |
| 7.5YR5/4 にぶい 褐色 | — | B種ヨコハケ (9本/cm) | — | タテ方向のナデ | — | — | 平行線状のヘラ記号。円形の透かし孔を持 つ。 |
| 7.5YR6/4 にぶい 褐色 | — | Bb種ヨコハケ (6本/cm) | — | 斜め・ヨコ方向のナデ | — | — | ヨコハケを2周以上施す。2条のヘラ記号。 |
| 5YR6/6 褐色 | — | — | タテハケ (5本/cm) | 口縁部はヨコ・斜めハケ、受部は強いヨ コ方向のナデ | — | — | 埴輪J内から出土。口縁部タテハケ調整の 後、突帯上端をヨコナデする |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | — | タテハケ (7本/cm) | 口縁部はヨコハケ(7本/cm)、受部はヨ コナデ | — | — | 突帯以下の外面調整はヨコナデ |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | — | — | 受部はヨコハケ、以下はヨコナデ | — | — | 突帯貼り付け後に、受部の外面は2次調整 タテハケ、ヨコナデ調整。突帯貼り付け位置 は丁寧にヨコナデ |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 1段目/以上 | 口縁部 | | 突帯 | | 焼成 |
|------|------------|----|-----------|----|------|------|------|------|------|---------------|-----|----|------------|-------------|----|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | | 形状 | 形状 | 幅/高さ | | |
| 埴輪1 | 第Ⅲ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | b | — | — | 須恵質 | |
| 埴輪2 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | — | c | — | — | 土師質 | |
| 埴輪3 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 口縁部 | — | — | 30.0 | — | — | — | — | c | — | — | 土師質 | |
| 埴輪4 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | e | 1.4 0.5 | 須恵質 | |
| 埴輪5 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8~1.1 | — | e | 1.5 0.5 | 土師質 | |
| 埴輪6 | 第Ⅳ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8~1.1 | — | c | 1.4 0.7 | 須恵質 | |
| 埴輪7 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | c | 1.4 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪8 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | d | 1.9 0.4 | 須恵質 | |
| 埴輪9 | 第Ⅳ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.0 | — | d | 2.1 0.5 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪10 | 第Ⅳ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8 | — | d | 1.8 0.5 | 須恵質 | |
| 埴輪11 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | — | d | 2.1 0.5 | 土師質 | |
| 埴輪12 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.4 | — | b | 2.7 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪13 | 第Ⅲ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2~1.4 | — | b | 2.2 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪14 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.2 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪15 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.0 0.6 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪16 | 第Ⅲ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.2 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪17 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | — | b | 2.5 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪18 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b' | 2.0 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪19 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 基底部 | — | — | — | 8.8 | — | — | 1.0~1.7 | — | b | 2.3 0.8 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪20 | 第Ⅰ トレンチ | 円筒 | 基底部 | — | 33.8 | — | 10.5 | — | — | 1.2~1.7 | — | d | 2.0 0.4 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪21 | 第Ⅰ トレンチ | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | 1.0~1.2 | — | — | 1.6 0.9 | 土師質 | |
| 埴輪22 | 第Ⅰ トレンチ | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | 0.8~1.2 | — | — | 1.9 0.9 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪23 | 第Ⅰ トレンチ | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | — | 1.7 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪24 | 第Ⅲ トレンチ | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 2.2 0.8 | 土師質 | |
| 埴輪25 | 第Ⅰ トレンチ | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.1 | — | — | 1.3 0.5 | 土師質 (硬質) | |

表5 第8次調査埴輪観察表(3)

第1節 御願塚古墳第8次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔配置 | 突帯間隔設定技法 | 備考 |
|-----------------------|-------------------|-----------------------|--------------------------|-----------------------------------|--------|----------|--|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 10YR6/2 灰黄褐色 | タテハケ | — | B種ヨコハケ (5~6本/cm) | タテハケ(6~7本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | — | タテハケ (7本/cm) +ヨコナデ | ヨコハケ(7本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | — | Bc種ヨコハケ (8~15本/cm) | ヨコハケ(9本/cm) | — | — | ヘラ記号 |
| 7.5YR6/4 にぶい 橙色 | タテハケ | B種ヨコハケ (11本/cm) | — | 斜め方向のハケ(11本/cm) | — | — | 内外面のハケ原体は同一 |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | B種ヨコハケ (8~9本/cm) | — | 指ナデ、ヨコ方向のハケナデ(板ナデ) | — | — | |
| 10YR6/2 灰黄褐色 | タテハケ (6~9本/cm) | × | — | 斜め方向の指ナデ | — | — | |
| 10YR7/4 にぶい 黄褐色 | タテハケ | Bb種ヨコハケ (10本/cm) | — | タテ方向の強い指ナデ | — | — | ヨコハケは突帯上端まで及び、2周以上施す。 |
| 10YR6/3 にぶい 黄橙色 | — | Bd種ヨコハケ (5本/cm) | — | ヨコ・斜めのナデ。突帯貼り付け位置・接合痕を指オサエ。 | — | — | |
| 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | — | Bb種ヨコハケ (9~10本/cm) | — | 斜め方向の指ナデ。突帯貼り付け位置はヨコナデ。 | — | — | ヨコハケは2周する。円形透かし孔を持つ |
| 2.5Y6/1 黄灰色 | — | ヨコハケ (板ナデ?) | — | 斜め方向の強い指ナデ | — | — | ヨコハケをナデ消している |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ (5~6本/cm) | × | — | タテハケ(5~6本/cm) | — | — | 内外面のハケ原体は同一 |
| 7.5YR5/4 にぶい 褐色 | タテハケ (5~6本/cm) | × | — | 斜めハケ(5~6本/cm) | — | — | 内外面のハケ原体は同一 |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (5~6本/cm) | × | — | タテハケ(5~6本/cm) | — | — | 内外面のハケ原体は同一 |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (6本/cm) | × | — | ナデか? | — | — | |
| 7.5YR6/4 にぶい 褐色 | タテハケ | ヨコハケ (4~5本/cm) | — | 斜め方向のナデ(ハケナデ) | — | — | 円形透かし孔を持つ |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (10本/cm) | × | — | ナデ | — | — | |
| 7.5YR5/3 にぶい 褐色 | タテハケ | B種ヨコハケ (7本/cm) | — | 斜め方向のナデ | — | — | 円形透かし孔を持つ |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | Bc種ヨコハケ (7~9本/cm) | — | ナデ | — | 凹線 | ヨコハケの静止痕の間隔は2~2.5cm 突帯剥離面に、突帯設定の凹線あり。 |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | — | タテハケ | 不明瞭 | — | — | 粘土帯を貼りあわせている |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ | ヨコハケ | タテハケ (5~6本/cm) | 斜め方向の指ナデ | — | — | 底面に棒状圧痕、藁状圧痕 |
| 7.5YR7/6 褐色 | — | — | タテハケ (7本/cm) | タテハケ(8~9本/cm) | — | — | 外面受部はヨコナデ |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | — | タテハケ (7~8本/cm) | 口縁部はタテハケ(8本/cm)、受部はヨコナデ | — | — | 外面受部はヨコナデ |
| 7.5YR7/6 褐色 | — | — | — | 受部はタテハケ(8本/cm)、肩部はナデ | — | — | |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | — | — | 受部はタテハケ(7~9本/cm)、頸部はヨコハケ(7~9本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 褐色 | — | — | — | 受部はヨコハケ(7~9本/cm)、頸部はヨコナデ、接合部は指オサエ | — | — | 外面受部はナデ上げ、肩部はヨコハケ(7~8本/cm)。肩部に透かし孔を持つ |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 1段目/以上 | 口縁部 | | 突帯 | | 焼成 |
|------|------|----|-------------|--------|------|------|-----|------|------|---------------|-----|----|------------|-------------|----|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | | 形状 | 形状 | 幅/高さ | | |
| 埴輪1 | 外濠内 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | b | — | — | 土師質 | |
| 埴輪2 | 外濠内 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.7~1.0 | b | — | — | 須恵質 | |
| 埴輪3 | 外濠内 | 円筒 | 最上段~ 2段目 | (12.6) | — | 32.4 | — | — | 10.0 | 0.9~1.1 | a | b' | 2.2 0.6 | 須恵質 | |
| 埴輪4 | 外濠内 | 円筒 | 最上段~ 2段目 | (14.7) | — | 33.6 | — | — | 9.1 | 0.8~1.0 | a | b' | 2.7 0.7 | 須恵質 | |
| 埴輪5 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.3 | — | d' | 1.9 0.5 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪6 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.1 | — | d' | 2.3 0.5 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪7 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.7~1.0 | — | d' | 1.9 0.4 | 須恵質 | |
| 埴輪8 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.1 | — | d' | 2.0 0.5 | 須恵質 | |
| 埴輪9 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 1.7 0.8 | 土師質 | |
| 埴輪10 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.0 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪11 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | — | b | 2.2 0.9 | 土師質 | |
| 埴輪12 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 1.9 0.6 | 土師質 | |
| 埴輪13 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.1 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪14 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1.7 0.8 | 土師質 | |
| 埴輪15 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1.7 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪16 | 外濠内 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.0 | — | b | 2.0 0.7 | 土師質 (硬質) | |
| 埴輪17 | 外濠内 | 円筒 | 基底部 | — | — | — | — | — | — | 1.3~1.6 | — | — | — | 土師質 | |
| 埴輪18 | 外濠内 | 円筒 | 基底部 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.6 | — | — | — | 須恵質 | |
| 埴輪19 | 外濠内 | 円筒 | 基底部 | (7.8) | 28.0 | — | — | — | — | 0.9~1.5 | — | — | — | 須恵質 | |

表6 第8次調査埴輪観察表(4)

第1節 御願塚古墳第8次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔配置 | 突帯間隔設定技法 | 備考 |
|-----------------------|------------------------|---------------------|---------------------|------------------------------------|--------|----------|---------------------------------------|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 7.5YR7/6 橙色 | タテハケ | — | タテハケ (5~7本/cm) | 斜め方向の指ナデ、口縁はヨコナデ | — | — | 外面口縁はヨコナデ |
| 10YR6/2 灰黄褐色 | タテハケ (6~9本/cm) | — | B種ヨコハケ (6~9本/cm) | タテハケ(9本/cm)の後、斜め方向に 指ナデ、口縁はヨコナデ | — | — | 外面口縁はヨコナデ。接合痕が目立つ |
| 2.5Y7/1 灰白色 | — | — | B種ヨコハケ (4~6本/cm) | ヨコナデ・指オサエ、突帯貼り付け位置 は指オサエ | — | — | 外面口縁はヨコナデ、ヨコハケは2周する |
| 2.5Y7/2 灰黄色 | — | B種ヨコハケ (6~7本/cm) | B種ヨコハケ (4~6本/cm) | ヨコナデ、突帯貼り付け位置は指オサ エ | — | — | 外面口縁はヨコナデ、ヨコハケは2周する。 2段目の静止痕はほぼ垂直。 |
| 7.5YR7/6 橙色 | — | ヨコハケ (8本/cm) | — | ナデ、指オサエ | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | ヨコハケ (10本/cm) | — | 指ナデ | — | — | 突帯間に綾杉文をへら描きする |
| 2.5Y6/1 黄灰色 | タテハケ (9本/cm) | × | — | 斜め方向に指ナデ | — | — | |
| 2.5Y6/1 黄灰色 | タテハケ (9~10本 /cm) | × | — | 斜め方向に指ナデ、突帯貼り付け位置 は指オサエ | — | — | 円形透かし孔を持つ |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | ヨコハケ | — | 不明瞭 | — | — | |
| 10YR7/3 にぶい 黄橙色 | — | — | — | 不明瞭 | — | — | 透かし孔を持つ |
| 10YR7/4 にぶい 黄橙色 | — | — | — | 不明瞭 | — | — | 透かし孔を持つ |
| 5YR6/6 橙色 | — | B種ヨコハケ (6本/cm) | — | ナデ、指オサエ | — | — | ヨコハケの静止痕は垂直。円形透かし孔を 持つ |
| 10YR7/4 にぶい 黄橙色 | — | — | — | 不明瞭 | — | — | 透かし孔を持つ |
| 7.5YR6/4 にぶい 橙色 | — | — | — | 不明瞭 | — | — | |
| 7.5YR7/6 橙色 | — | — | — | ヨコハケ(6本/cm) | — | — | |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (6本/cm) | B種ヨコハケ (6本/cm) | — | 斜め方向に指ナデ | — | — | 透かし孔を持つ。静止痕は垂直で、間隔は 4.8cm |
| 10YR7/6 明黄褐色 | タテハケ (5~6本/cm) | — | タテハケ (5~6本/cm) | 不明瞭 | — | — | |
| 5YR5/3 にぶい 赤褐色 | — | — | 指ナデ上げ | 斜め方向に強く指ナデ | — | — | 底部端をハケ調整する。底面に棒状圧痕 |
| 7.5Y7/1 灰白色 | タテハケ | — | タテハケ (9~11本/cm) | 斜め方向に指ナデ、下端に指オサエ | — | — | 底面に藁状圧痕、棒状圧痕 埴輪8の基底部か |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|------|--------|------|---------|-------------|------------------------|-------------------------------------|------------------------------|
| 埴輪49 | 第Ⅱトレンチ | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR5/4 にぶい褐色 | 砂粒、雲母を含む | |
| 埴輪50 | 第Ⅱトレンチ | 蓋形埴輪 | 笠部中位突帯 | 土師質 | 7.5YR5/6 明褐色 | 砂粒、クサリ礫、雲母を含む | 笠部外面はヨコハケ調整する。 |
| 埴輪51 | 第Ⅱトレンチ | 蓋形埴輪 | 笠部中位突帯 | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/6 橙色 | 1~2mmの礫(チャート・長石・石英)、 砂粒、雲母を含む | 笠部外面はヨコハケ調整する。 |
| 埴輪26 | 第Ⅰトレンチ | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR7/6 橙色 | 7mm大の礫、4mmまでの石英・礫、砂 粒、クサリ礫、雲母を含む | |
| 埴輪27 | 第Ⅲトレンチ | 牛形埴輪 | 角 | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/4 にぶい橙色 | 砂粒、雲母、クサリ礫を含む | 中空である。土師器壺・瓶などの把 手の可能性あり。 |
| 埴輪28 | 第Ⅳトレンチ | 家形埴輪 | 壁部分 | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/4 にぶい橙色 | 砂粒、雲母、クサリ礫を含む | 壁から床まで一続きで作られている |
| 埴輪20 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR7/6 橙色 | 0.5~1mmの白色粒、クサリ礫を含む | 2条の線刻 |
| 埴輪21 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 10YR7/4 にぶい 黄橙色 | 砂粒、クサリ礫を含む | 2条の平行線と曲線 |
| 埴輪22 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 10YR7/4 にぶい 黄橙色 | 0.5~1mmの白色粒、クサリ礫を含む | 2条の線刻 |
| 埴輪23 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR7/6 橙色 | 0.5~1mm大の石英、砂粒、クサリ礫 を含む | 裏表の線刻は異なる |
| 埴輪24 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板交差部分 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒を含む | 赤色顔料が残る |
| 埴輪25 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板交差部分 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒を含む | 赤色顔料が残る |
| 埴輪26 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 飾り板受部 | 土師質 | 7.5YR7/6 橙色 | 砂粒、雲母を含む | 赤色顔料が残る |
| 埴輪27 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 笠部中位突帯 | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/8 橙色 | 2~3mmの礫(チャート・長石・石英な ど)、砂粒を含む | 赤色顔料が残る |
| 埴輪28 | 外濠内 | 蓋形埴輪 | 笠部下半部 | 土師質 (硬質) | 7.5YR7/4 にぶい 黄橙色 | 砂粒、0.5~3mm大の石英・長石など を多く含む | 方形板をヨコハケ静止痕で表現 |
| 埴輪29 | 外濠内 | 家形埴輪 | 屋根部分 | 土師質 | 7.5YR6/8 橙色 | 砂粒、雲母を含む | 四注部のコーナー |
| 埴輪30 | 外濠内 | 家形埴輪 | 屋根部分 | 土師質 (硬質) | 10YR7/3 にぶい 黄橙色 | 0.5~4mm大の石英・長石、砂粒を多 く含む。クサリ礫を含む | 屋根と壁の接合部分。内側に突起が 廻る |
| 埴輪31 | 外濠内 | 不明 | — | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/6 橙色 | 1~5mmの礫(石英・チャートなど)、 砂粒、雲母を含む | 棒状のものを取り付けていた? |

表7 第8次調査形象埴輪観察表

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | 色調 | 備考 |
|------|--------|-----|-----|-------|------|----|-----------------------|-------------|
| 52 | 第Ⅱトレンチ | 土師器 | 小型壺 | 7.1 | 7.1 | / | 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | 埴輪C内から完形で出土 |
| 53 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 杯蓋 | 4.8 | 12.7 | / | 10YR5/1 灰色 | |
| 54 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 杯身 | 5.0 | 10.4 | / | 5Y5/1灰色 | |
| 55 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 高杯蓋 | 4.7 | 12.7 | / | 7.5YR6/2 灰黄褐色 | 摘み径2.3cm |
| 56 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 高杯蓋 | 5.0 | 12.9 | / | 7.5Y5/1 灰色 | 摘み径2.3cm |
| 57 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 高杯蓋 | (4.0) | 13.0 | / | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 摘み欠損 |

表8 第8次調査土師器・須恵器・韓式系土器観察表(1)

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | 色調 | 備考 |
|------|--------|-------|------|--------|------|------|-----------------------|----------------------------|
| 58 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 有蓋高杯 | 10.1 | 10.8 | 8.8 | 2.5Y4/1 黄灰色 | |
| 59 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 有蓋高杯 | 8.6 | 11.3 | 9.5 | 5Y5/1灰色 | 埴輪C内から割れた状態で出土。 |
| 60 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 有蓋高杯 | — | 11.4 | — | 2.5Y6/2 灰黄色 | |
| 61 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 有蓋高杯 | — | — | 8.7 | N5/0 灰色 | |
| 62 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 甕 | — | 19.0 | / | 5Y5/1灰色 | 頸部に1条の波状文 |
| 63 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 甕 | 19.7 | 14.5 | / | 2.5YR4/1 赤灰色 | 部分的に7.5YR4/1褐灰色を呈す |
| 64 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 甕 | — | 22.6 | / | N4/0 灰色 | 頸部に2条の波状文 |
| 65 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 甕 | — | 20.4 | / | 10YR4/1 褐灰色 | |
| 66 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 甕 | (29.7) | 22.4 | / | 5Y5/1灰色 | 7.5Y5/2灰オリーブ色の自然釉が掛かる |
| 67 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 器台 | 43.3 | 33.1 | 28.8 | 5Y5/1灰色 | 透かしは長方形と三角形 |
| 68 | 第Ⅱトレンチ | 須恵器 | 器台 | 35.5 | 33.6 | 26.3 | 5Y5/1灰色 | 透かしは三角形 |
| 69 | 第Ⅱトレンチ | 韓式系土器 | 甕 | — | — | — | 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | 外面に平行タタキを格子状に、内面に同心円文の当て具痕 |

表9 第8次調査土師器・須恵器・韓式系土器観察表(2)

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | 備考 |
|------|--------|-------|-----|-------|------|-----|----------|
| 1 | 外濠内 | 須恵器 | 杯身 | 4.0 | 10.8 | / | |
| 2 | 外濠内 | 瓦器 | 椀 | — | 11.8 | — | 内面にミガキ |
| 3 | 外濠内 | 瓦器 | 椀 | — | — | 4.0 | 高台は形骸化 |
| 4 | 外濠内 | 白磁 | 碗 | — | — | 7.0 | 中国 内面に沈線 |
| 5 | 第Ⅱトレンチ | 土師質 | 土製品 | (6.0) | — | — | 丁銀形土製品 |
| 6 | 第Ⅱトレンチ | 瓦 | 軒丸瓦 | / | / | / | 左巻き三巴文 |
| 7 | 第Ⅲトレンチ | 土師質土器 | 皿 | 1.2 | 6.5 | / | 口唇部に煤が付着 |
| 8 | 第Ⅲトレンチ | 土師質土器 | 皿 | 1.6 | 7.0 | / | 口唇部に煤が付着 |
| 9 | 第Ⅲトレンチ | 陶器 | 碗 | — | — | 4.0 | 瀬戸・美濃 |

表10 第8次調査遺物観察表

第2節 御願塚古墳第9次調査

調査面積 33.75㎡ (2.5 × 13.5 m)
 調査期間 平成12年11月17日～平成13年1月31日
 調査担当者 小長谷正治

1. 調査の概要

この調査は、御願塚古墳の環境整備事業に伴い、墳頂部にある南之神社に通じる石段下の確認調査を実施したものである。御願塚古墳は、昭和40年に伊丹市が、翌年には兵庫県が史跡に指定した。

この指定を受けたのを期に、地元の強い要望もあって古墳の環境整備事業が進められることになった。環境整備事業の大きな目的は次の3点であった。

1. 墳丘封土の崩れた箇所に盛土する。
2. 周濠の泥土を除去し、水質の浄化を図る。
3. 外堤の護岸を整備し、遊歩道を設ける。

この整備事業に先立ち、昭和44年に主に外堤部にトレンチを入れ、周濠外側の立ち上がりの位置確認や外堤部の埴輪列の有無など、外堤部の状況確認に主眼をおいた調査を行った。この調査では、墳丘そのものに調査の手は及ばなかったが、御願塚古墳の考古学的な調査としては最初のものとなった。

昭和44年の環境整備事業から30年が経過し、周濠には厚く泥土やゴミが溜り、墳丘封土の崩壊も進んだため、再度本格的な環境整備対策を講じる必要が生じてきた。また、市民憩いの場としての史跡公園としての再整備も考える時期にきていたので、古墳入口付近の私有地を購入して新たな整備を行うことになった。

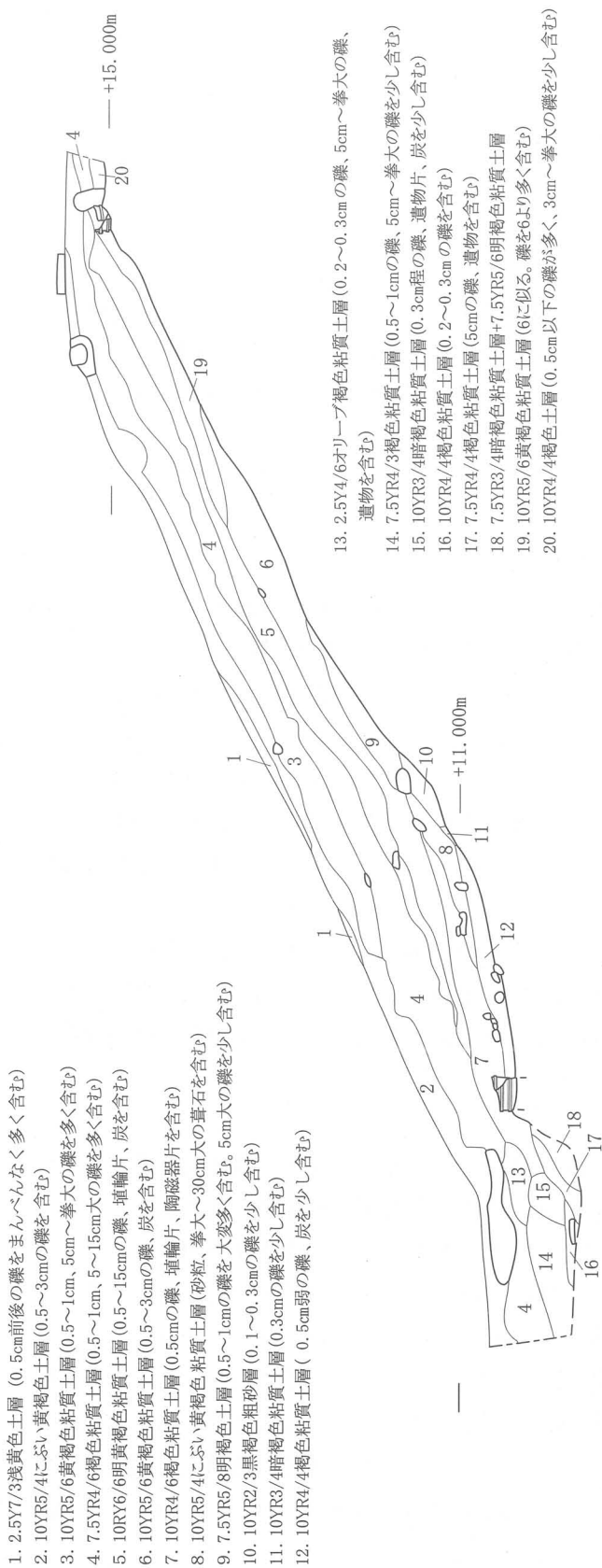
神社に通じる石段の設置時期は明らかではないが、永年の使用により、各段にズレや起伏が生じ危険であることから、環境整備事業にあたり一旦石段をすべて撤去して、据えなおすことになった。その際、石段の片側にステンレス製の手すりを設置する計画であったので、この工事が遺構の保存に問題がないか確かめることになった。

(1) 調査の経過

石段の撤去後、手すりを含めた範囲に、幅2.5m、長さ13.5mの長方形に調査区を設定した。石段直下の面で精査を行ったが、石段下の基礎固めの土と不安定な後世の堆積層と判断されたので、平面図作成および写真を撮影した後、掘り下げることにした。遺構面までの深さが不明なため、下層の状況を探るために試掘することにし、東壁に沿って幅0.5mのサブトレンチを設定した。サブトレンチは墳頂部から裾部にかけて設定し、土層の堆積を確かめながら慎重に掘り下げていった。

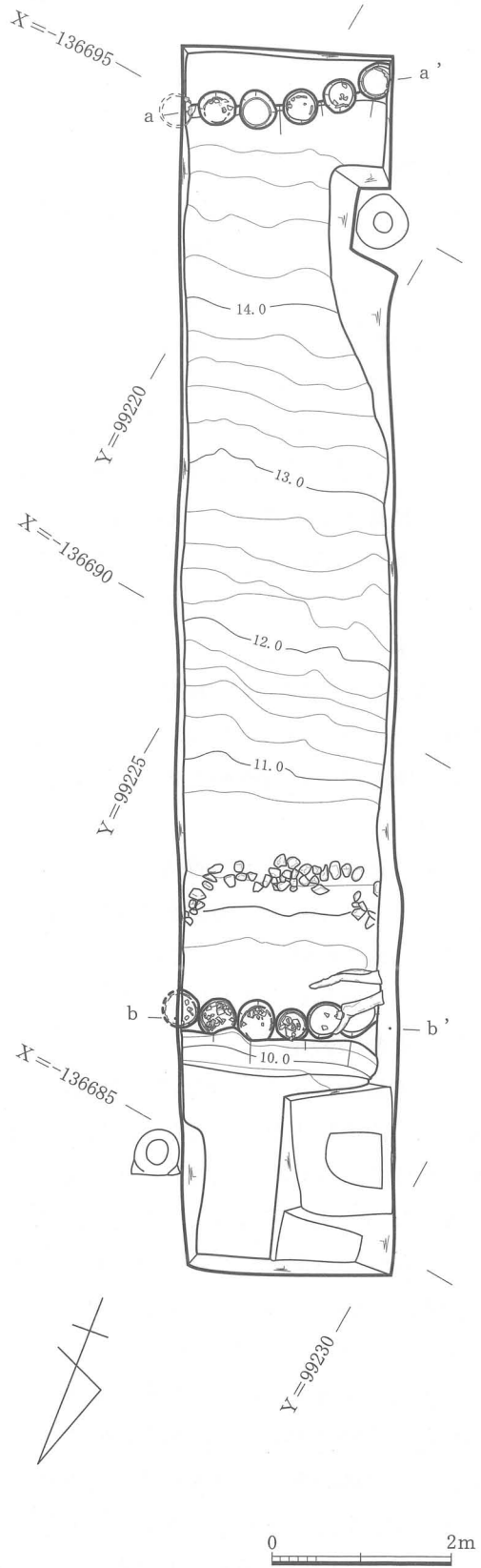
発掘調査前の計画では、地表下0.7mほどで墳丘に到達するものと考えていたが、石段下の後世の堆積層は意外と厚く、墳頂部では0.5m程度であったが、裾部になると1.5mまでさがることがわかった。また、全体に松の根や根跡の軟弱な地盤が所々にあり、サブトレンチでの遺構面の検出は困難を極めたが、墳頂部近くでは搗き固めた土が認められ、裾部では葺石の堆積がみられたので、その深さを目途に全体の掘り下げを行うことを決めた。

トレンチ全体の掘り下げが完了した後、全面的に精査と埴輪列の検出を試みた。墳頂部の平坦面から墳丘斜面の境目に埴輪が集中することがわかったので、その辺りを中心に埴輪片を原位置に残しながら、周囲を若干掘り下げたところ、埴輪列を確認することができた。円筒埴輪は6基で、最も東側



1. 2.5Y7/3浅黄色土層 (0.5cm前後の礫をまんべんなく多く含む)
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土層 (0.5~3cmの礫を含む)
3. 10YR5/6黄褐色粘質土層 (0.5~1cm, 5cm~拳大の礫を多く含む)
4. 7.5YR4/6褐色粘質土層 (0.5~1cm, 5~15cm大の礫を多く含む)
5. 10Y6/6明黄褐色粘質土層 (0.5~15cmの礫, 埴輪片, 炭を含む)
6. 10YR4/6黄褐色粘質土層 (0.5~3cmの礫, 炭を含む)
7. 10YR4/6褐色粘質土層 (0.5cmの礫, 埴輪片, 陶磁器片を含む)
8. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土層 (砂粒, 拳大~30cm大の礫を含む)
9. 7.5YR5/8明褐色土層 (0.5~1cmの礫を大変多く含む, 5cm大の礫を少し含む)
10. 10YR2/3黒褐色粗砂層 (0.1~0.3cmの礫を少し含む)
11. 10YR3/4暗褐色粘質土層 (0.3cmの礫を少し含む)
12. 10YR4/4褐色粘質土層 (0.5cm弱の礫, 炭を少し含む)

13. 2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土層 (0.2~0.3cmの礫, 5cm~拳大の礫, 遺物を含む)
14. 7.5YR4/3褐色粘質土層 (0.5~1cmの礫, 5cm~拳大の礫を少し含む)
15. 10YR3/4暗褐色粘質土層 (0.3cm程の礫, 遺物片, 炭を少し含む)
16. 10YR4/4褐色粘質土層 (0.2~0.3cmの礫を含む)
17. 7.5YR4/4褐色粘質土層 (5cmの礫, 遺物を含む)
18. 7.5YR3/4暗褐色粘質土層+7.5YR5/6明褐色粘質土層
19. 10YR5/6黄褐色粘質土層 (6に似る。礫を6より多く含む)
20. 10YR4/4褐色土層 (0.5cm以下の礫が多く, 3cm~拳大の礫を少し含む)



第28図 平面図・断面図

の円筒埴輪（埴輪1A）は大部分が東壁に埋まり、わずかに4分の1がトレンチ側に出ている状態であった。これらの円筒埴輪は緩く弧を描いて並んでいた。

段築部の埴輪列は、松の大きな根に邪魔され検出が困難であったが、木の成長に影響を与えない範囲で根を切断して埴輪の検出を試みた。その結果、5基の円筒埴輪が確認できたが、裾部の崩壊や根の攪乱により、西側の埴輪の遺存状況は極めて悪かった。これらの円筒埴輪も緩く弧を描いて並んでいるようすが確認できた。

埴輪片は、できる限り原位置で平面実測を行い記録したが、早くに攪乱を受け遊離した埴輪片は土層名を記して取り上げた。葺石は裾部に堆積した状態で確認できたが、墳丘全体に葺かれたには量は少なかった。原位置をとどめているものは平面実測し、記録にとどめた。

（2）調査方法

今回の調査は古墳の環境整備事業に伴うものであったため、調査範囲は必要最小限にとどめる方針で行った。墳頂部に鎮座する南之神社の石燈籠や鳥居などはその場に残す必要がある上、調査中の倒壊を防ぐために十分な安全策を講じる必要があったので、裾部から周濠にかけては十分な調査を行うことはできなかった。

調査は先ず石段を撤去し、一旦その段階の写真撮影や平板を用いた平面測量を行い、それ以後はすべて手作業で掘り下げを行った。また、調査後の埋め戻し作業も人力で行う必要があったため、掘削土はトレンチ脇に配置したベルトコンベアーで墳頂まで送り、そこを土砂置き場とした。埋め戻しにあたっては、土砂の崩壊を防ぐため土嚢に詰めて積み上げる方法を採用した。

遺構や埴輪の実測には、国土座標を基準とする測量杭を設定し、それをもとに実測を行った。また、等高線図の作成にあたっては、水準点の高さを基準に実測を行った。トレンチ内で検出した埴輪はすべて位置を記録した後、取り上げている。墳頂部の埴輪列のうち東端の円筒埴輪（埴輪1A）の4分の3と、段築部の埴輪列のうち東端の円筒埴輪（埴輪2A）の約半分が東壁に入り込んでいたが、検討の結果、埴輪の保存を考慮し、調査の最終段階で壁に入り込んでいた部位も取り上げることにした。

2. 基本層序（第28図、図版19・20）

土層については、トレンチの両側（東壁と西壁）の断面実測を行ったが、両土層断面とも共通した堆積状況を示していたので、比較的残りの良い東壁を用いて土層堆積状況を説明する。

第1層は表層で、浅黄色の締まりのない盛土である。第2・3層は礫を多く含む黄褐色土層で、石段を施工した段階の盛土と考えられる。第4層は、墳頂部から裾部まで厚く堆積する土層で、褐色から黄褐色をし、やや粘性がある。江戸時代後期（19世紀前半）の陶磁器を含んでいることから、この頃の盛土かと考えられる。第5層明黄褐色粘質土、第6・19層黄褐色粘質土、第7層褐色粘質土は、ともに埴輪片を含んでいることから、墳丘上部からの崩土と考えられる。ただし、第7層の上部から江戸時代前期の陶磁器が出土しているので、堆積時期は比較的新しいと見なければならない。第8・12層も崩土で、崩れた葺石を多く含み、第16・17層は褐色粘質土で裾部の堆積層で、埴輪片を含んでいた。

調査を行った石段付近は、周囲より盛り上がっていることが、調査前の等高線図からも確認できていた。とくにこの辺りは墳頂にある南之神社の参拝道として後世の盛土の堆積を予想していたが、結果は予想を上回るものであった。少なくとも、第1～6層の間は、17世紀中頃の神社本殿建築以降の盛土、あるいは境内整備の過程で削平された墳頂の崩土の堆積と見られ、その厚さは下部では1.2mほどにおよんでいる。

3. 調査成果 (第 28・29 図 図版 18～20)

今回の第 9 次調査は、平成 10 年に行った外濠部と造り出しの調査 (第 8 次) に続くものである。墳丘部の調査としては、前回の造り出しに続いて 2 度目の調査である。調査対象となった石段部分は、墳頂にある南之神社の参道として作られていたもので、神社参詣者のみならず古墳見学者にも利用されていたため、石段のズレや起伏を修正し、合わせて手すりを設けることにした。調査範囲は石段修理範囲が対象であったが、今後の環境整備に備える意味でも 2 段築成の状況や埴輪列の存在を確認しておく必要があると判断し、石段の範囲よりやや広めに調査区を設定した。

発掘調査により下記の事実を確認することができた。

1. 2 段築成
2. 葺石
3. 墳頂部の埴輪列
4. 段築部の埴輪列

以下、今回の発掘調査で確認された事実関係について説明を加えたい。

(1) 墳丘と段築

墳丘の規模と形状については、『伊丹市史』編纂時の測量調査により、現況では全長 52 m の帆立貝式古墳で、今回調査を行った後円部は、直径が 39 m、高さ 7 m の 2 段築成という結果が得られていた。

今回の調査範囲は、後円部の北面側で行った。トレンチは現況の墳頂平坦面を 2 m ほど含み、下方では段築平坦面を 1.6 m ほど含んだ範囲で、周濠に架かる橋の手前にある鳥居の下も調査の対象とした。

調査の結果、墳丘裾部では段築は確かに存在し、2 段築成であることが確かめられた。ただし、現状で確認できる段築は、墳丘の崩土の堆積や後世の盛土の上に存在していることがわかった。実際の段築から墳丘への立ち上がりの位置は、現況から内側へ 2.3 m 入り込んでいた。また、深さも 0.4 m ほど下に位置することがわかった。段築の幅は東壁で 1.6～1.8 m を測るが、埴輪列の位置が段築縁辺で認められ、埴輪 2 B と埴輪 2 C の円筒埴輪などが周濠に向かって崩れている状況を見ると、元の段築はもう少し周濠側に広がっていたと考えられる。段築の周濠側への崩壊が進み、かろうじて埴輪列の位置で崩壊が止まったものと推測される。

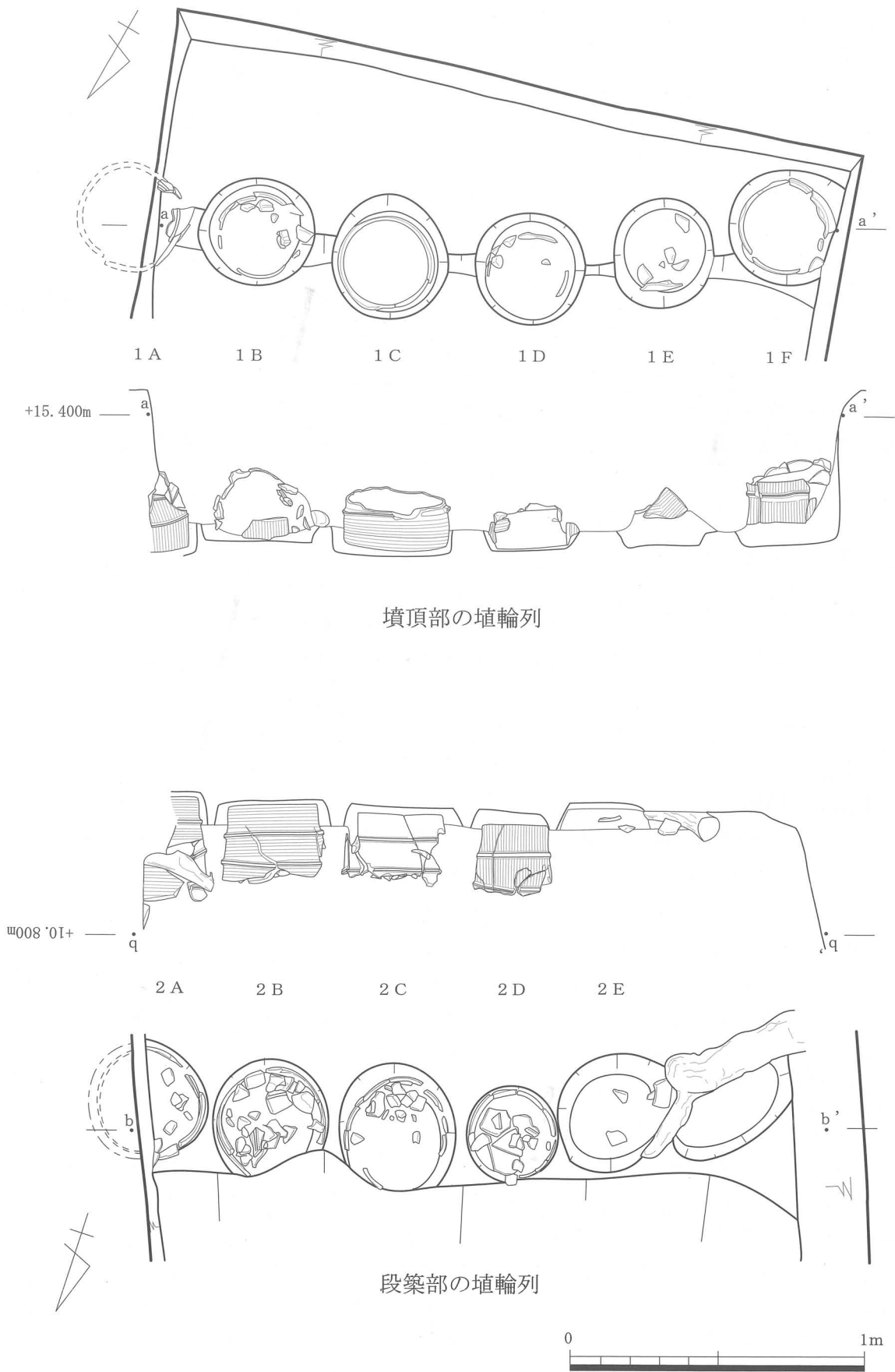
(2) 葺石

段築上に川原石が集中することが確認された。その川原石は、長さ 15～20 cm のものももっとも多く、30 cm におよぶものがわずかに含まれていた。出土状況を見ると、段築より少し上に上方よりの崩土とともに堆積していたものが多く、原位置を保っていたものは、段築から墳丘に立ち上がるわずかな範囲に存在するのみであった。この川原石は墳丘外表を覆うほどの量がなく、これをもって葺石とすることができるか多少の疑問もあるが、平成 10 年度に行った造り出しの調査 (第 8 次) でも、造り出し東側のくびれ部から多量の川原石 (長さ 10～20 cm) が出土しており、葺石の多くが墳丘の崩土とともに下方に流失したものと判断される。ただし、葺石が墳丘全体におよんでいたのか、あるいは段築付近にのみ限定的であったのか、今後の別の地点での調査による検証を待つ必要がある。

ただ、今回と前回の発掘調査から判断すると、限定的範囲で葺石が設けられた可能性が高いと考えられ、その範囲は段築から墳丘斜面にかけてではなかったかと推測する。

(3) 墳頂部の埴輪列

墳頂縁辺から円筒埴輪 6 基 (埴輪 1 A～1 F) が並んで検出された。この埴輪列は緩やかに弧を描



第29図 墳頂部の埴輪列と段築部の埴輪列平面図・立面図

くように並び、その位置は墳頂縁辺に位置していた。埴輪列の位置から傾斜が始まっており、元は掘り方に埋まっていたはずの埴輪基底部が現れるなど、墳丘封土の流出がかなり進んだものと考えられる。円筒埴輪は0.1～0.15mの間隔で配置され、直径0.36～0.4mの掘り方に埋められていた。埴輪の遺存状況をみると、部分的に2条目の突帯まで残るもの（埴輪1A・1B）があるが、埴輪1C・1Fは基底部から1条目の突帯までであり、埴輪1Eは細かく割れ破片のほとんどが流出していた。

（4）段築部の埴輪列

埴輪列は段築縁辺から検出された。トレンチの範囲内からは6基の円筒埴輪が並んでいたと考えられるが、西側の2基（埴輪2E・2F）は崩壊流出しており、掘り方のみの検出にとどまった。段築部でも墳丘封土の流出が著しく、埴輪列の外縁から周濠に向かう斜面が始まり、埴輪2B・2Cなどは、外側が欠失している。またトレンチ西側から延びる松の根による攪乱も著しく、埴輪2E・2Fはその影響を受け埴輪が原位置にて確認できず、破片となって散乱する状況であった。

埴輪列設置の間隔は、埴輪2Aと埴輪2Bが0.06m、埴輪2Bと埴輪2Cが0.09m、埴輪2Cと埴輪2Dが0.1mで、墳頂部に比べかなり狭い。埴輪の遺存状況は墳頂部の埴輪列に比べて良好で、埴輪2A～2Dは2条目突帯から3条目突帯にかけて残っていた。また、埴輪2A～2Dの内部には埴輪片が落ち込んだ状態で検出された。

（5）段築部の埴輪の出土状況

段築部では、葺石に混じって埴輪片が多数出土した。これらの埴輪片のうち、段築の埴輪列周辺から出土したものはそれに関係するものであるが、埴輪列の内側で葺石などとともに出土した埴輪片は墳頂部からの流出と考えられる。大半の破片は円筒埴輪（朝顔形埴輪）であるが、蓋形埴輪などの器材埴輪も出土した。

（小長谷）

4. 出土遺物

（1）墳頂部の埴輪

埴輪については御願塚古墳第8次調査で使用した各属性に準じて報告を行う。墳頂部で検出した埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪片である。全ての円筒埴輪は上部が大きく失われており、周辺でも口縁部は検出されなかった。

1) 円筒埴輪（第30図 図版21）

埴輪1A 残存高25.5cm、底部径30.9cm、底部高10.7～11.6cm、突帯間隔10.2～10.4cm。突帯の形状は（b'）で、幅1.7cm、高さ0.8cmである。基底は5～6cm幅の粘土帯2枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に幅2cmほどの粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整を行っており、原体幅約4cm/30本（7～9/cm）のハケ工具が使用されている。2段目は突帯を貼り付ける際のヨコナデによって広くタテハケがナデ消されている。タテハケはほぼ垂直方向に丁寧に施されている。内面は斜め方向に強く指ナデ調整し、突帯貼り付け位置に指オサエを加えている。3段目におそらく円形となる透かし孔を持つ。

胎土はクサリ礫、砂粒、2～10mmのチャート・石英・長石粒などを多く含んでいる。土師質（硬質）で、明赤褐色を呈している。底面に幅1.5～2cmの棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕が残っている。

埴輪1B 残存高23.1cm、底部径29.6cm、底部高10.8cm、突帯間隔10.0cm。突帯の形状は（b）で、幅2.1cm、高さ0.6cmである。基底は5～6cm幅の粘土帯2枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に約3cm幅の粘土紐を積み上げていく。

外面はタテハケによる1次調整を施し、ハケ原体の条数は12本/cmで大変緻密である。器面にハ

ケ工具のアタリ痕をよくとどめる。内面は風化が著しく調整はあまり明瞭ではない。おそらく、1段目は指ナデ、下端に指オサエを加え、2段目以上には指ナデのあとタテハケを施し、突帯貼り付け位置は指オサエを行っていたようである。3段目に円形の透かし孔が設けられている。

胎土は砂粒、2～7mmのチャート・石英・長石等が多く含まれている。土師質（軟質）で、橙色を呈す。底面に作業台の木目痕が残っている。

埴輪1C 残存高22.6cm、底部径32.1cm、底部高9.9～11.0cm、突帯間隔10.7～11.1cmを測る。

1条目突帯の剥離面に突帯間設定の幅3mmの凹線が残っており、1段目の凹線までの間隔は10cmである。突帯の形状は（b'）で、幅2.3cm、高さ0.8cmを測る。基底は4cm幅の粘土帯を反時計回りに4枚貼り合わせて輪を形作り、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

2段目の残存状態は良好ではないが、外面調整はタテハケによる1次調整のあと、Bc種ヨコハケによる2次調整を施している。2段目に1カ所ヨコハケの重なりが確認できるが、これはヨコハケの始発位置と思われ、ハケ工具を器面の右から左へ移動させて、ヨコハケを施していった様子がわかる。1段目の静止痕の間隔は3.7～5cm、2段目は3.5cm前後の細かいピッチを刻んでいる。タテハケ・ヨコハケ原体条数は5～8本/cmで、同一工具によるハケ調整と考えられる。

1段目の内面調整は風化のため明瞭ではないが、斜め方向にハケ調整し、2段目をヨコハケしたあと、1段目に斜め方向の指ナデを行っている。ハケ原体条数は5～8本/cmで、外面調整と同じハケ工具を用いているようである。粘土紐接合痕がナデ消しきれずに、比較的明瞭に残っている。

下端には指オサエを加えている。底面に木目痕の他、幅1.5～3cmの棒状圧痕が残っているが、幅5cmの圧痕については板状の敷物が想定される。胎土は2～6mmのチャート・石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、明黄褐色を呈する。

埴輪1D 残存高25.4cm、底部径26.2cm、底部高11.3cm、突帯間隔10.0cmである。2条目突帯剥離面に突帯間設定の幅7mmの凹線が確認でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けていくようすが観察できる。突帯の形状は（b）で、幅1.9cm、高さ0.7cmを測る。基底は4～5cm幅の粘土帯をおそらく2枚貼り合わせており、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、2段目以上はCa種ヨコハケを施しており、突帯間を一気に一周し、ハケの終始位置（切り合い）が明瞭に観察できる。ヨコハケは幅が狭く、全く突帯間を満たしていない。1段目にはハケ工具の調整時のアタリが残っている。タテハケ工具原体条数は4～5本/cm、ヨコハケ工具は原体幅6.2cm/26本（4～6本/cm）のものを使用している。

内面調整はタテハケによるが、原体幅約4.2cm/13本（4～5/cm）の工具が使用されており、外面と内面のタテハケ調整には同一工具を使用していたものと推測される。3段目に2孔1対の円形透かし孔を設けている。底面には木目痕、藁状圧痕が残っている。胎土は砂粒、クサリ礫、1～8mmの石英・長石・チャートを含む。土師質で、橙色を呈している。

埴輪1E 残存状態が大変悪く、突帯1条分を残すのみであるが、円形透かし孔が残っていることから、残存部分は3段目と4段目、あるいは5段目と6段目のいずれかであると推測される。胴部最大径は32.5cmである。突帯の形状は（b）で、幅2.0cm、高さ0.9cmを測る。

外面調整はタテハケによる1次調整を施し、内面はヨコハケの後、タテ・ヨコ方向に指ナデを行っている。ハケ原体の条数は4～6本/cmで、内外面のハケ調整には同一工具を使用したようである。

胎土は2～3mmのチャート・長石・石英粒、クサリ礫、砂粒を含んでいる。土師質で、橙色を呈している。

埴輪 1 F 残存高 22.3cm、底部径 30.5cm、底部高 10.5～10.8cm、突帯間隔は 10.2～10.6cmである。突帯間設定は凹線によるものと思われるが、突帯剥離面の残存状態が悪いこともあって、明瞭に痕跡を確認できない。

突帯の形状は (b) で、幅 1.9cm、高さ 0.8cmを測る。4 cm幅の粘土帯を同じ側に 2 枚貼り合わせて基底とし、その上に幅 1.5～2.5cmの粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる 1 次調整を施した後、1 段目に指ナデやヨコナデ、2 段目にはヨコナデを所々に加えている。タテハケには原体幅 3.8cm / 29 本 (6～9 本 / cm) の工具が使用されている。

内面は斜め方向に指ナデ調整し、突帯貼り付け位置には指オサエを行っている。3 段目に透かし孔の痕跡がわずかに確認できる。

胎土は砂粒、クサリ礫、1～5 mmの石英・長石・黒色粒を含んでいる。土師質で、橙色を呈している。底面に藁状圧痕の他に幅 2 cmほどの棒状圧痕が残っているが、幅 3.5cmの半円に刳られたものは、粘土を内側に折り残している。

(2) 段築部の埴輪

段築部では樹立している円筒埴輪のほかに、朝顔形埴輪、形象埴輪を検出している。

1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (第 31～34 図 図版 22～25)

埴輪 2 A 樹立残存部に上半部が落ち込んだ状態で検出された。接合面を失っているため不明確ではあるが、出土状況・内外面の調整・胎土などから同一個体と考えられ、全形は 5 条突帯 6 段構成の朝顔形円筒埴輪であったと推測し、復元的に図化した。復元高 99.4cm、口縁部径 67.2cm、頸部突帯径 32.6cm、底部径 30.7cm、底部高 11.3～11.8cm、突帯間隔は 10.8～12.0cm、肩部高 12.8cmである。1 段目と突帯間はほぼ同じ高さで制作されていると考えられる。2・3 条目突帯剥離面に突帯設定の凹線が観察でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けているようすがわかる。3 段目の凹線までの間隔は 11.7cmである。突帯の形状は (b') で、幅 1.9cm、高さ 0.7cmを測る。頸部突帯は鋭角を持つ三角形で、幅 1.4cm、高さ 0.9cmを測る。

基底は約 5 cm幅の粘土帯を同じ側に 2 枚貼り合わせて輪を形作り、その上に幅 2～3 cmの粘土紐を積み上げている。

外面調整は、タテハケによる 1 次調整のあと、2 段目～5 段目に Bb 種ヨコハケ調整を施している。突帯間隔が広く、1 周のヨコハケでは全く満たされないため、数回に分けて下から上へヨコハケを施している。最初のヨコハケは静止痕が真っ直ぐで、間隔は 3.5cm前後である。2 周目以降のヨコハケには静止痕がほとんど見られず、突帯間を一気にほぼ 1 周している。その間では 1 次調整のタテハケを明瞭に確認することができる。タテハケは原体幅 2.8cm / 24 本 (9 本 / cm) の工具を使用し、ヨコハケは原体幅 5 cm / 41～43 本 (7～10 本 / cm) のハケ工具を使用している。下端をヨコナデする。

内面調整は 1 段目ではタテハケのあと、斜め方向に強く指ナデしている。2 段目から 3 段目はタテハケ、4 段目から 5 段目は斜めハケを施したあとに、突帯貼り付け位置を指オサエ・ヨコナデしており、さらにその上部に同様な幅で横位の爪圧痕が残る。肩部上半はタテハケを施し、6 段目～肩部下半はヨコ・斜め方向に強い指ナデによって斜めハケを丁寧になで消している。頸部突帯貼り付け位置は指オサエを行っている。口縁部はヨコハケ調整である。タテハケ原体条数は 7～10 本 / cmで、器面のハケ条痕のようすからも外面のタテ・ヨコハケ調整と同一工具を使用していると推測できる。

透かし孔は円形で、5 段目と 6 段目に直交方向に 2 孔 1 対と、2 段目に 6 段目と同位置に 2 孔 1 対を設けている。底面に幅 0.5～2 cmの棒状圧痕、藁状圧痕が残る。胎土は砂粒、2～4 mmの礫 (チャート・石英・長石など) を多く含んでいる。土師質 (硬質) で、橙色を呈している。

埴輪 2 B 残存高 34.9cm、底部径 31.0cm、底部高 9.9cm、突帯間隔 9.7～10.1cmである。突帯の形状は (b) で、幅 2.2cm、高さ 0.7cmを測る。

基底は 7～8 cmの粘土帯 2枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に 2～3 cmの粘土紐を積み上げている。接合痕は比較的明瞭に残っている。

外面はタテハケによる 1次調整のあと、Bc種ヨコハケによる 2次調整を施している。静止痕の間隔は 1段目で 4.2～7.4cm、2段目以上は 2.3～6.3cmである。タテハケ原体条数は 4～5本/cm、ヨコハケ原体条数は 6～7本/cmである。

内面は風化による摩耗が進んでいるが、タテハケ調整を施し、突帯貼り付け位置に指オサエ、下端はナデ調整を行っていることが観察できる。タテハケには原体条数 4～5本/cmと 7～8本/cmの工具を併用しており、前者は外面のタテハケ原体と同一である。粘土紐接合痕が比較的明瞭に残る。3段目に 6.5×7.5cmの円形透かし孔を持つ。底面に藁状圧痕が残る。胎土は 0.5～6mmの石英・長石・チャート、クサリ礫を多く含む。土師質で、明黄褐色を呈している。

埴輪 17・18 は埴輪 2 B内から出土した口縁部片である。口縁の形状は (c) で、上端は強いヨコナデにより外反する。内外面は風化により調整がかなり不明瞭ではあるが、外面調整のヨコハケ、内面調整のヨコハケが確認できる。ハケ原体条数は 6～7本/cmである。胎土は長石・石英・チャート、クサリ礫を多く含んでいる。出土状況や属性から見て埴輪 2 Bの口縁部と考えられる。

埴輪 2 C 残存高 24.3cm、底部径 28.6cm、底部高 9.7～10.0cm、突帯間隔 10.1cmである。突帯剥離面に突帯設定の幅 3mmの凹線が観察でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けているようすがわかる。凹線までの間隔は 1段目で 10.0cm、2段目は 9.7cmである。突帯の形状は (e) で、幅 1.6cm、高さ 0.5cmを測る。2条目突帯はヨコナデ調整を施すが、1条目突帯は押し付けによる粘土貼り付けのあと、板押圧による整形を行っている。突帯は扁平で、突帯面に斜め横位のハケ工具圧痕が残っている。基底は幅 5cmの粘土帯 2枚を交互に貼りあわせて輪を形作り、その上に 2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は 1次調整のタテハケのあと、1段目と2段目は同じ調整でタテ・斜め方向に強い指ナデを行い、雑なヨコハケを加える。3段目はBd種ヨコハケを施す。ヨコハケ原体条数は 9本/cmである。

内面は斜め・タテ方向に指ナデ調整し、下端はヨコナデ・指オサエを施す。3段目に円形透かし孔を設けている。胎土は 0.5～5mmの石英・長石・チャート、砂粒を多く含んでいる。土師質で、橙色を呈している。

埴輪 2 D 5段目の一部を欠くが、全形は 6条突帯 7段構成に復元できる。復元高 67.1cm、口縁部径 35.2cm、底部径 27.8cm、底部高 9.0～9.6cm、突帯間隔は 2段目 10.5～11.0cm、3段目～6段目は 9.1～9.5cm、最上段高 9.5cmである。2段目だけが幅広く設定されており、それ以外はほぼ同じ高さを保っている。

口縁の形状は直線的に外方へ開き、上端は外傾している (c)。突帯の形状は (b) で、幅 2.2～2.8cm、高さ 0.7cmを測る。幅 8cmほどの粘土帯 2枚を同じ側に貼り合わせて基底とし、その上に 2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる 1次調整を行い、下端はヨコナデしている。タテハケ原体条数は 4～6本/cmである。内面調整は 1段目から 6段目まではタテハケを施し、最上段はヨコハケ調整をしている。1段目にはタテハケ調整前に施された斜め方向の強い指ナデが残っている。下端には指オサエを行う。6条目突帯貼り付け位置には指オサエが加えられている。粘土紐の接合痕は比較的明瞭に観察できるが、特に 6段目以上には大変顕著に痕跡が残っている。上部は明らかに丁寧さに欠けるので、

この位置で作り手が替わったと推測できる。ハケ原体条数は4～6本/cmであり、内外面のハケ目調整は同一原体工具によるものと思われる。

3段目と5段目に直交する位置で2孔1対の円形透かし孔を設けている。底面に棒状圧痕が残っている。胎土は砂粒、2～4mm大の石英・長石・チャートなどを含んでいる。土師質で、にぶい橙色を呈す。

埴輪 2 E 掘り方内とその周辺に散乱していた破片で、同様な属性を持つ口縁部、突帯部、基底部の各部位が認められた。口縁部の形状は(c)。突帯の形状は(b')で、幅1.8cm、高さ0.7cmである。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、B種ヨコハケによる2次調整を施しているが、静止痕はやや斜めに傾いている。1段目は1次調整だけだったと思われる。最上段におそらく「×」のヘラ記号が付けられていたようである。

内面調整は1段目と突帯部にはタテハケ、最上段はヨコハケのあとタテハケを施している。ハケ原体条数は6～7本/cmで、内外面ともに同一原体を使用している。胎土は雲母、砂粒、1～4mmの長石・石英・チャートを多く含んでいる。土師質(硬質)で、橙色を呈している。

埴輪 12～18 円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状より(b)埴輪12・13、(c)埴輪14～18を確認している。

埴輪12は埴輪2A内から検出しているが、属性の違いから埴輪2Aの口縁部ではないと判断した。上端に強いヨコナデによる沈線が廻る。外面調整はタテハケによる1次調整のあと、ヨコハケを施し、内面はヨコハケ、タテハケ、斜めハケの順にハケ調整を行っている。斜めハケは原体条数5本/cm、それ以外の内外のハケ原体条数は7本/cmである。

埴輪 19～26 円筒埴輪の突帯部である。突帯の形状により(b)埴輪23～26、(c)埴輪20、(d)埴輪21・22、(e)埴輪19の4種類を抽出している。

埴輪19は突出度の低い幅1.4cm、高さ0.5cmの突帯で、押し付けによる粘土貼り付けのあと、板押圧による整形を行い、さらにヨコナデ調整を加えている。1条目突帯と思われる。

外面調整はタテハケによる1次調整がわずかに観察でき、そのあと2次調整のヨコハケを施す。

内面調整は風化により不明瞭であるが、指ナデを行っているようである。板押圧による整形を行っている1条目突帯を持つ埴輪2Cの部分片の可能性はある。

埴輪21は外面調整に1次調整によるタテハケを施し、内面にタテハケ調整を行うものであるが、突帯貼り付け位置付近でハケ原体条数が5本/cmから6～7本/cmに変わっている。小片であるが、このラインで粘土紐積み上げを休止し、作り手が代わったことが窺える。そのように見ると、外面のタテハケは突帯を境にして斜め方向のハケからタテハケに変わっていることに気が付く。

埴輪24は平面形が扁平であることから、横断面が楕円形を呈する円筒埴輪の短軸側の破片と思われる。また、透かし孔を設けていることから、おそらく5段目から最上段にかけての部位にあたると思われる。最上段高8.1cm、突帯間隔9.3～10.4cmを測る。口縁の形状は(c)で、やや外反気味に立ち上がる。突帯の形状は(b')で、幅2.1cm、高さ0.7cmである。透かし孔は楕円形である。

外面調整は斜め方向の強い指ナデによる。内面調整は斜め方向の強い指ナデのあと、5段目にヨコナデ、最上段の突帯貼り付け位置以外にヨコナデを施している。内外面の指ナデは全て上から下へ施されており、このような器面調整を行っている埴輪は他に確認していない。粘土紐積み上げの接合面の傾きは内傾しており、正立していたことを示しているが、そのままでは調整し難い状態である。

埴輪25は突出度の高い幅2.1cm、高さ1.1cmの突帯を持ち、突帯剥離面に突帯間隔設定の幅2mmの凹線2条を残す。突帯の上部を凹線に合わせていることがよく分かる。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、Bd種ヨコハケによる2次調整を施している。ハケ原体条数は5本/cm。内面調整は斜め方向に指ナデを行い、突帯貼り付け位置をヨコナデしている。

埴輪 27～32 朝顔形埴輪である。

埴輪 27は口縁部突帯で、突帯部径は41.7cmである。突帯は強くヨコナデされ、幅約1.9cm、高さ0.9cmの断面M字形をなしている。受部に入れた接合用のキザミ目が陽刻状に残っている。外面調整はタテハケ(9本/cm)を施し、突帯付近をヨコナデする。内面はヨコハケ(7～10本/cm)調整する。胎土は砂粒、クサリ礫、2～3mm大の長石・石英を含んでいる。土師質で、橙色を呈す。

埴輪 28は口縁部突帯で、突帯部径は40.3cmである。外面調整はタテハケ、内面はタテハケ調整を施しているが、粘土紐の接合痕は明瞭に残っており、約2cm幅の粘土紐を積み上げているようすが分かる。ハケ原体条数は5～6本/cmで、内外面ともに同一原体を使用している。胎土は2～4mm大の石英・長石粒、砂粒を多く含んでいる。

埴輪 29～31は頸部突帯から肩部上半である。埴輪 29は突帯部径32.9cm、外面はタテハケ、内面は指ナデを施し、突帯貼り付け位置は指オサエする。

埴輪 30は突帯部径33.7cm、外面はタテ・斜めハケ(7～9本/cm)、内面は肩部をタテハケし、頸部はヨコハケを行い、ハケ原体条数は6～9本/cmである。何れも頸部突帯は鋭角な三角形を呈す。

埴輪 31は突帯部径31.1cm、外面はタテハケを施す。内面肩部は斜め方向の指ナデ、受部はヨコハケ、突帯貼り付け位置はヨコナデを行っている。内外面のハケ原体条数は7本/cmである。

埴輪 32は頸部突帯から肩部突帯付近である。突帯部径31.6cm、突帯先端に沈線状の強いヨコナデを加えている。肩部突帯は突出度の低い断面台形(d)で、幅2.0cm、高さ0.4cmを測る。

外面調整は受部ではタテハケ、肩部は斜めハケ、最上段はB種ヨコハケで、静止痕は左に傾いている。

内面調整は受部ではヨコハケ、肩部以下はヨコ方向の強い指ナデ、突帯貼り付け位置はケズリを施している。受部内外面のハケ原体条数は6～7本/cm、外面肩部以下は7～8本/cmのハケ原体を使用している。胎土は砂粒、1～5mm大のチャート・石英・長石粒が目立っている。

2) 形象埴輪 (第35図 図版25)

形象埴輪では蓋形埴輪の破片が出土している。

埴輪 33・34は飾り板である。埴輪 33は内縁を残す資料で、表裏面は同様の刻線を描いている。下端に2条の平行線を配し、そこから内縁に沿うような2重の弧線と、外縁側にそれと平行する2条の弧線を描く。

埴輪 34は内縁と長方形透かし孔の一辺を残す資料である。表裏面は同様の刻線を持つ。内縁に沿って2重の弧線を刻み、そこから外縁に向かって2条一組の平行する弧線を不等間隔に3組配している。長方形透かし孔は下半の2組の間にあけられている。

埴輪 35は笠部中位突帯付近である。外面笠部上半に斜めハケ、下半にタテハケ調整が確認できる。内面は強いヨコナデを施す。白灰色と灰色を呈する2種類の粘土を混ぜているようすが観察できる。

埴輪 36は立ち飾り軸部である。残存高15.5cm、底径7.8cm。2枚の粘土帯を貼り合せて円筒を作り、絞って形を整えている。外面調整はタテナデ、内面は強く指ナデ調整する。

(3) その他の遺物 (第35図)

トレンチ掘り下げ中に近世の陶磁器が出土している。時期は、江戸時代前期と後期の2時期に分けられる。江戸時代後期の陶磁器は第3・4層から出土したものが多く、江戸時代前期の陶磁器はそれより下層から出土し、もっとも下層は第7層上部からの出土である。灯明皿および花瓶については、

墳頂にある南之神社で使用されたものと考えられる。

37・38 は唐津焼皿である。37 には見込みに胎土目が、38 には砂目が付いている。

39 は肥前陶器鉄絵皿である。見込みに砂目が付いている。17 世紀前半頃の所産で、神社建築時に近い時期の遺物である。

40・41 は肥前磁器染付碗である。

43 は丹波焼播鉢の口縁部片である。内面に段を有し、7 本 1 単位の櫛描きを施す。17 世紀後半頃のものである。

44・45 は京焼系陶器御神酒徳利で、外面にそれぞれ銅緑釉、瑠璃釉が施されている。

46～48 は軟質施釉陶器灯明皿、49 は受皿である。口唇部に煤が厚く付着している。48 のみは煤の付着が認められず、未使用品と思われる。

50 は京焼系陶器灯明皿で、口唇部に煤が付着している。

51 は左巻き三巴文軒丸瓦である。珠文は大粒で、内区を分ける圏線を持つ。44～51 は 19 世紀後半の所産である。他に近代の瀬戸磁器色絵碗 42 が出土しているが、現在も神社が祀られていることからすれば至極当然のことであろう。(瀬川)

5. 小結

今回の調査は、当古墳の墳丘の調査としては造り出しを調査した第 8 次調査に次いで 2 度目の調査になる。両調査とも当古墳の環境整備事業に伴って実施したもので、墳丘全体の規模や構造を調べるためのものではなく、必要最小限の範囲の調査を行ったものであったが、墳頂部と段築部の埴輪列の存在や葺石の確認など多くの成果が得られた。

当古墳は、墳頂に旧御願塚村の 3 社（北ノ神社・中ノ神社・南ノ神社）の一つ南之神社が祀られ、古くから村の崇拜を集めてきた（「御願塚村社寺明細書」明治 12 年）。神社造営の際に墳頂部は削平され、北側の集落に向けて石段が設けられるなど、古墳の外形に少なからず影響を与えてきたが、付近の古墳が消滅していることを考えれば、神社の存在が当古墳の保存に大きく寄与してきたことは否めない事実である。

今回の調査で、神社造営による墳丘への影響についても明らかになった。その一つは、調査地点の石段付近が、石段に沿って大きく盛り上がっていたが、それは後世の盛土で、厚い所では 1.2 m ほどあることがわかった。盛土が行われた時期は、第 7 層から出土した唐津焼胎土目皿(37)、同砂目皿(38・39) などから 17 世紀前半以降の盛土であることがわかった。現在の社殿の建立時期は、建築学的調査によって 17 世紀中期と推定され(伊丹市教育委員会 2000)、また明治 32 年の「御陵墓故跡取調書」(『本田家文書』)所収の社殿棟札の写しによれば、延宝 9 年(1681)の建築となっている(「補論Ⅱ」参照)ので、今回の調査結果が社殿や覆屋建立時期と概ね符合することがわかった。

しかし、盛土は一度に行われたものではなく、神社が造営された延宝 9 年頃に第一段階の盛土が行われ、第 3 層出土の陶磁器(42・44～51)からみて、幕末から明治以降にさらに盛土が行われ、その上に石段が設けられたことがわかった。また、墳頂部の埴輪列については神社境内の整地時に埴輪上部が大きく削平を受けていることもわかった。円筒埴輪は基底部から 1・2 段目までが残っていたに過ぎず、墳丘封土の流出が埴輪列付近まで迫り、基底部が顔を出すような状態であった。

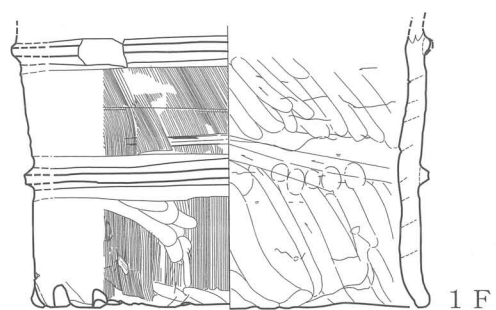
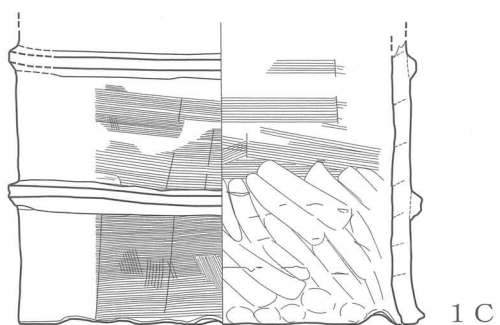
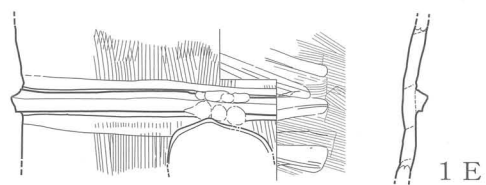
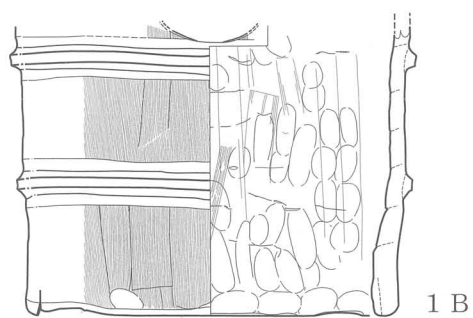
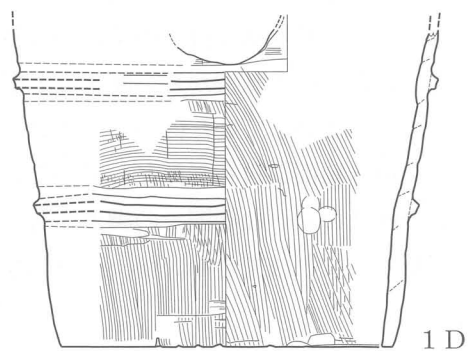
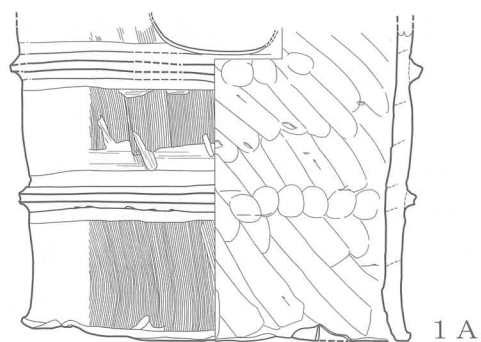
墳頂部では 6 基の円筒埴輪が 0.1～0.15 m の間隔で配列されていた。その配置は緩やかに弧を描いているので、墳頂部を巡っているものであろう。

墳丘裾の段築部では 6 基の埴輪の存在が確認できたが、うち 2 基(埴輪 2 E・2 F)は木の根の攪

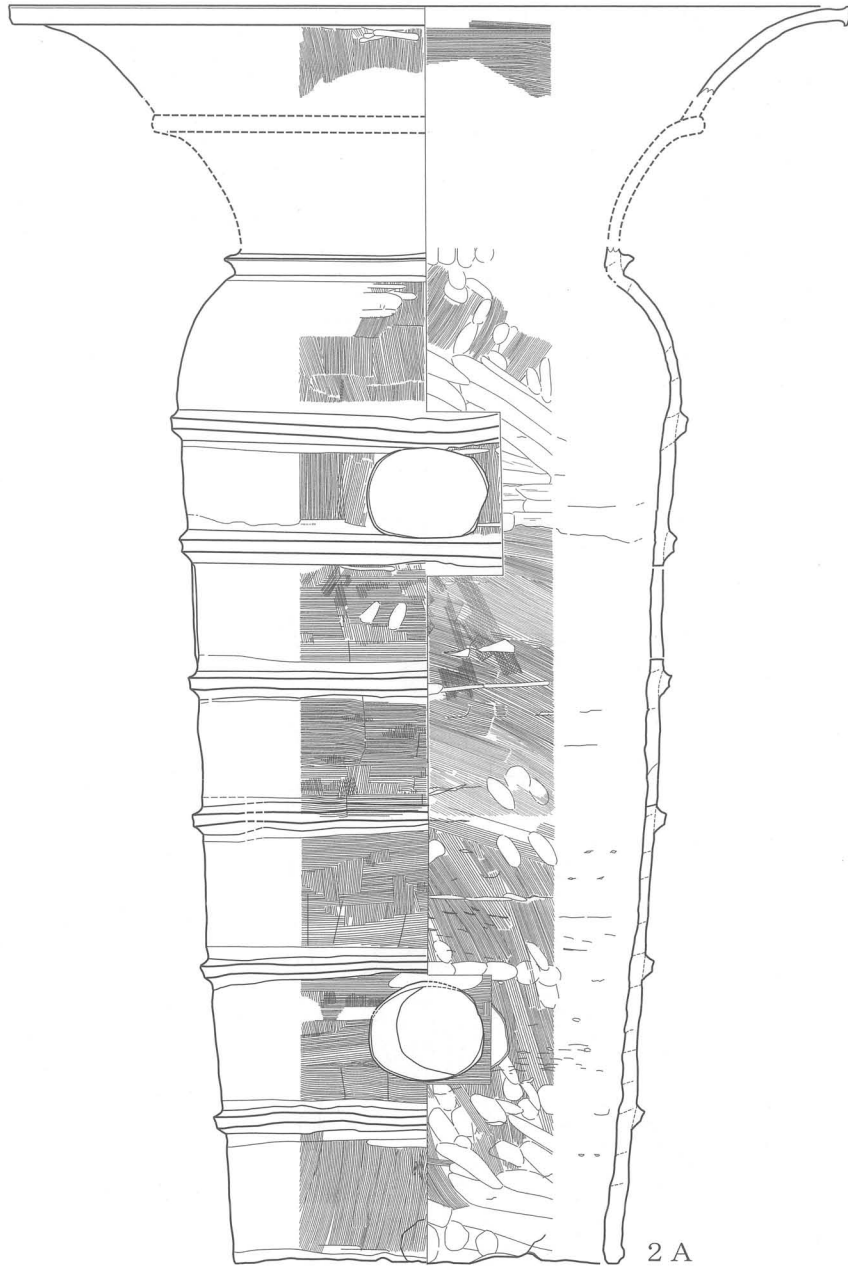
乱および封土の流出によって埴輪埋設の掘り方のみの確認となった。段築部の埴輪2Aは朝顔形埴輪である。この朝顔形埴輪と円筒埴輪がどのような配列で置かれていたのかは、今回の調査では明らかにできなかった。形象埴輪は、段築部から蓋形埴輪が4点出土した。いずれも破片であって原位置は確認できないが、出土状況から判断すると墳頂部に存在した可能性が高いと考えられる。

葺石は、段築に集積していたほか、一部は段築から墳丘斜面に貼り付いた状態で検出された。その出土状態から墳丘斜面に葺石が存在していたことは間違いないが、その量は墳丘全体を覆うほどではなかった。今回はわずかな範囲での調査でもあり、葺石の葺かれていた範囲が限定的なものであったかどうか即断することはできないが、部分的な葺石にとどまっていた可能性があることを指摘しておきたい。

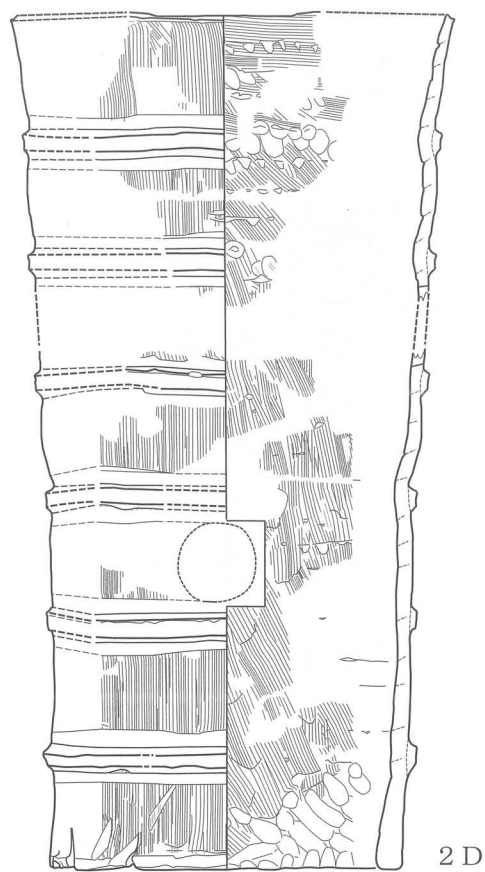
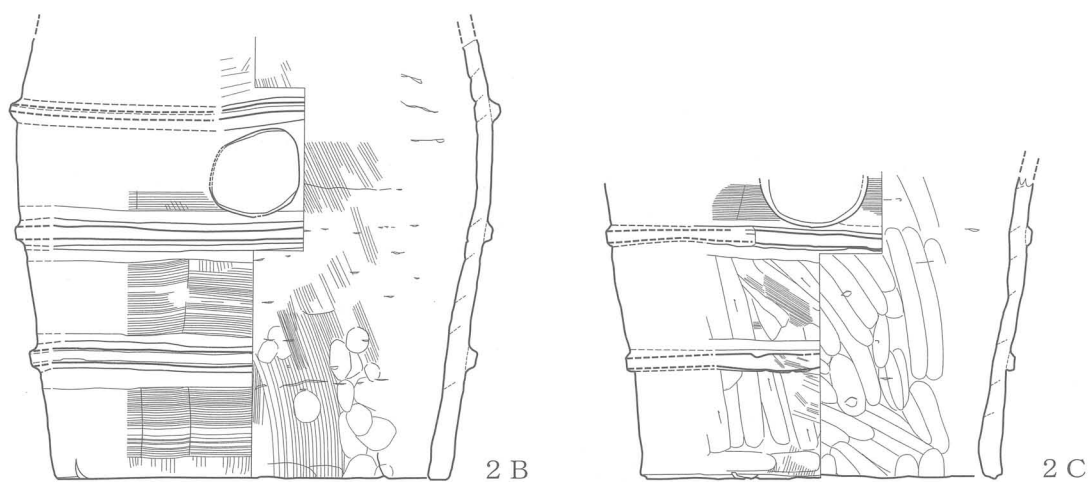
(小長谷)



第 30 図 墳頂部出土埴輪



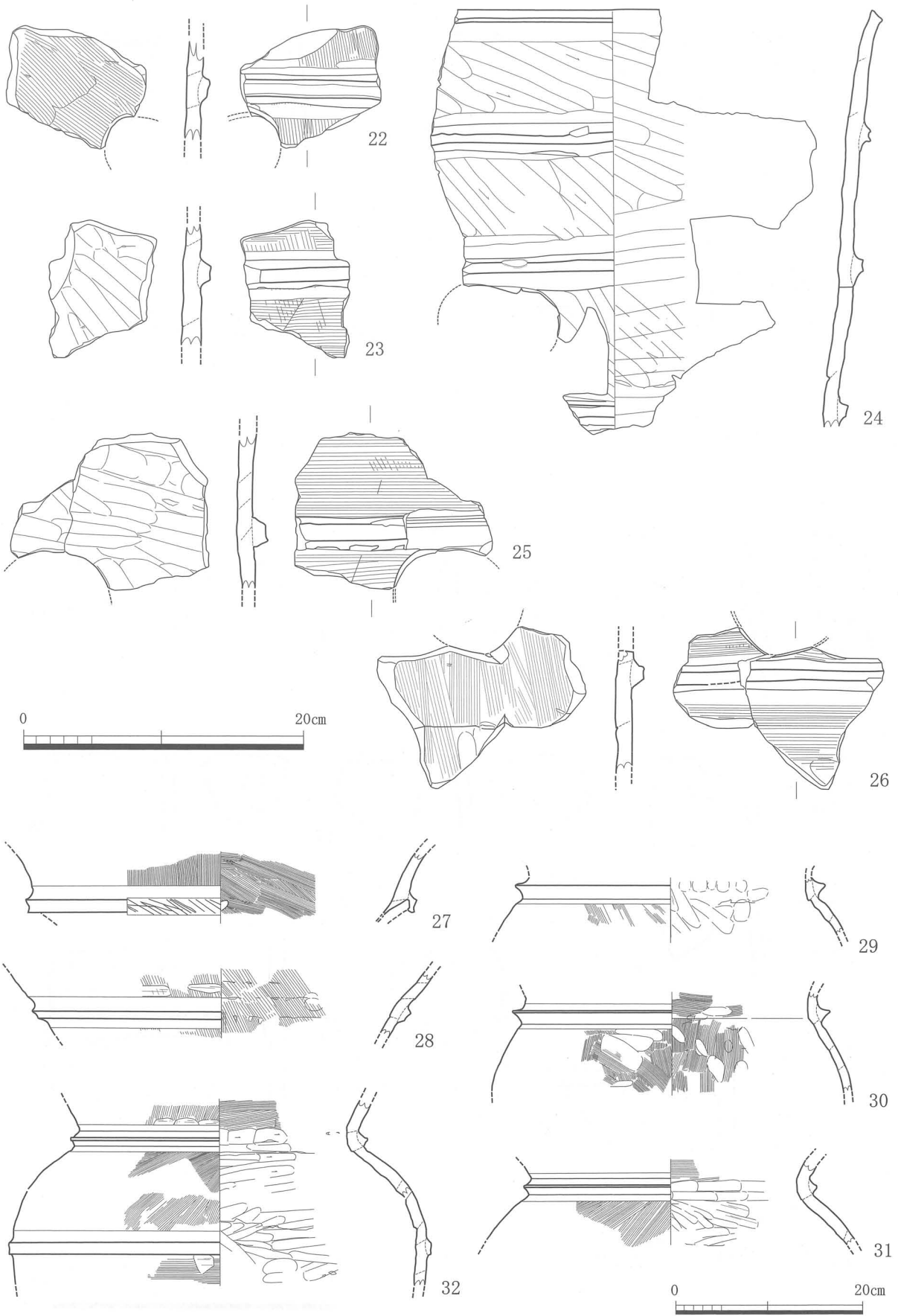
第31図 段築部出土埴輪(1)



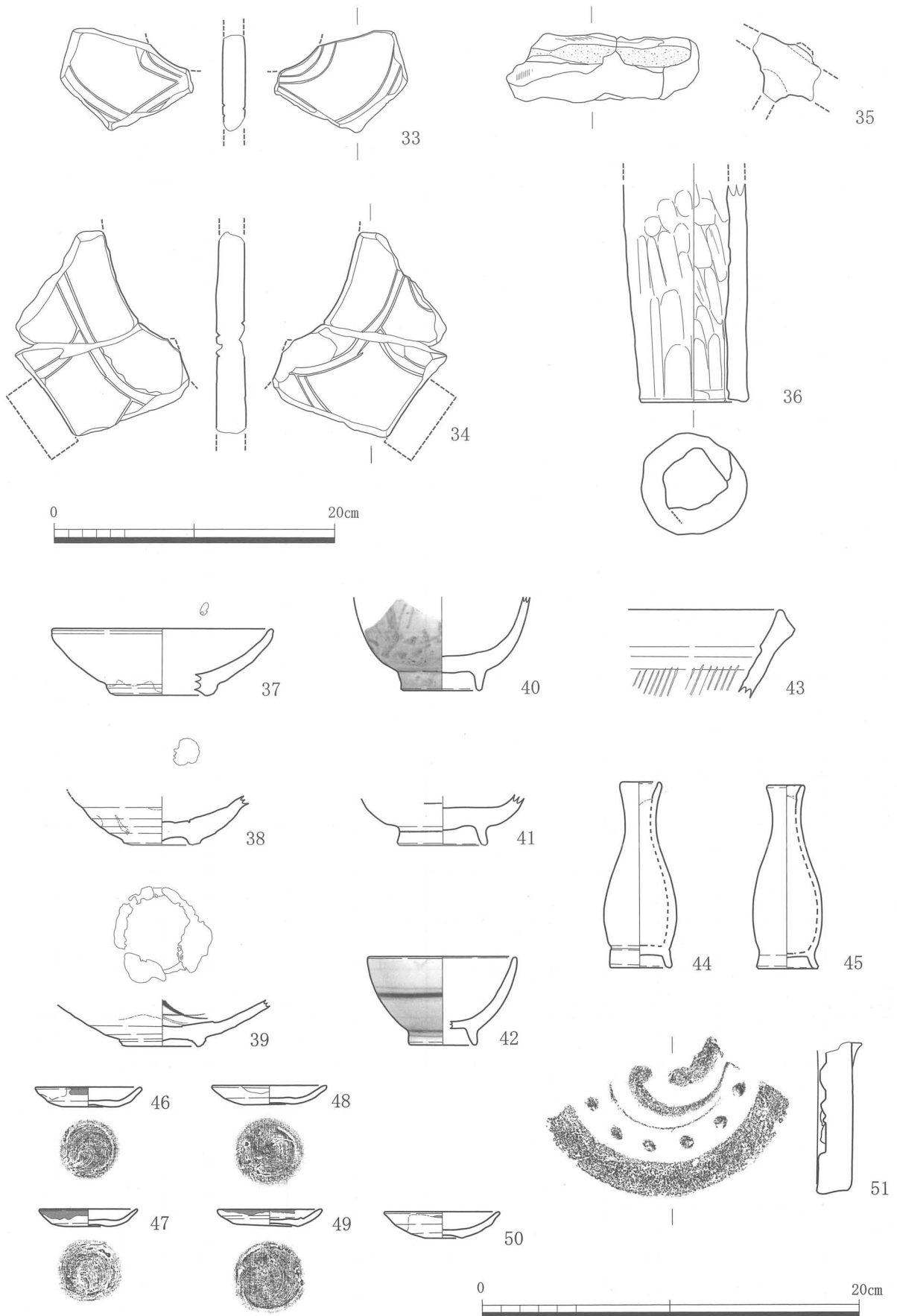
第 32 図 段築部出土埴輪 (2)



第33図 段築部出土埴輪(3)



第34図 段築部出土埴輪(4)



第35図 段築部出土埴輪(5)、出土遺物

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 | 口縁部 | 突帯 | | 焼成 |
|------|------|----|-------------------|--------|------|------|-----------|----------------------|------|--------------------|-----|----|----------------|-------------|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | 1段目/以上 | 形状 | 形状 | 幅/高さ | |
| 埴輪1A | 墳頂部 | 円筒 | 1段目～3段目 | (25.5) | 30.9 | — | 10.7～11.6 | 10.2～10.4 | — | 1.1～1.5 1.2～1.6 | — | b' | 1.7 0.8 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪1B | 墳頂部 | 円筒 | 1段目～3段目 | (23.1) | 29.6 | — | 10.8 | 10.0 | — | 1.2 1.4～2.2 | — | b | 2.1 0.6 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪1C | 墳頂部 | 円筒 | 1段目～3段目 | (22.6) | 32.1 | — | 9.9～11.0 | 10.7～11.1 | — | 1.2～1.4 1.4～1.6 | — | b' | 2.3 0.8 | 土師質 |
| 埴輪1D | 墳頂部 | 円筒 | 1段目～3段目 | (25.4) | 26.2 | — | 11.3 | 10.0 | — | 1.1 1.4 | — | b | 1.9 0.7 | 土師質 |
| 埴輪1E | 墳頂部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～1.1 | — | b | 2.0 0.9 | 土師質 |
| 埴輪1F | 墳頂部 | 円筒 | 1段目～2段目 | (22.3) | 30.5 | — | 10.5～10.8 | 10.2～10.6 | — | 1.7 1.7 | — | b | 1.9 0.8 | 土師質 |
| 埴輪2A | 段築部 | 朝顔 | 1段目～最上段 5条6段 | 99.4 | 30.7 | 67.2 | 11.3～11.8 | 10.8～12.0 | — | 1.2～1.4 1.4～1.6 | / | b' | 1.9 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪2B | 段築部 | 円筒 | 1段目～4段目 | (34.9) | 31.0 | — | 9.9 | 9.7～10.1 | — | 0.7～1.4 1.2～1.4 | — | b | 2.2 0.7 | 土師質 |
| 埴輪2C | 段築部 | 円筒 | 1段目～3段目 | (24.3) | 28.6 | — | 9.7～10.0 | 10.1 | — | 1.1～1.3 1.7 | — | e | 1.6 0.5 | 土師質 |
| 埴輪2D | 段築部 | 円筒 | 6条7段 | 67.1 | 27.8 | 35.2 | 9.0～9.6 | 9.1～9.5 10.5～11.0 | 9.5 | 1.1～1.4 2.0 | c | b | 2.2～2.8 0.7 | 土師質 |
| 埴輪2E | 段築部 | 円筒 | 口縁部 突帯部 基底部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～0.9 1.7～3.0 | c | b' | 1.8 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪12 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.9～1.2 | b | — | — | 土師質 |
| 埴輪13 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.2～1.4 | b | — | — | 土師質 |
| 埴輪14 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪15 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪16 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～0.9 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪17 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪18 | 段築部 | 円筒 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | 0.8～0.9 | c | — | — | 土師質 |
| 埴輪19 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0～1.1 | — | e | 1.4 0.5 | 土師質 |
| 埴輪20 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.6～0.8 | — | c | 1.6 0.7 | 須恵質 |
| 埴輪21 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0～1.2 | — | d | 2.5 0.6 | 土師質 |
| 埴輪22 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0～1.1 | — | d | 2.0 0.5 | 土師質 |
| 埴輪23 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1～1.4 | — | b | 2.1 0.7 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪24 | 段築部 | 円筒 | 最上段～5段目 | (30.4) | — | — | — | 9.3～10.4 | 8.1 | 0.8～1.1 | c | b' | 2.1 0.7 | 須恵質 |
| 埴輪25 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0～1.1 | — | b | 2.1 1.1 | 土師質 |

表 11 第9次調査埴輪観察表(1)

第2節 御願塚古墳第9次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔配置 | 突帯間隔設定技法 | 備考 |
|-----------------------|-------------------|-----------------------|----------------------|---|-------------------|----------|--|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 5YR5/6 明赤褐色 | タテハケ (7~9本/cm) | × | タテハケ (7~9本/cm) | 斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置は指オサエ | 3段目 | — | タテハケは丁寧に施す。ハケ原体幅約4cm/30本。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (12本/cm) | × | タテハケ (12本/cm) | 指ナデのあとタテハケ。下端は指オサエ | 3段目 | — | タテハケは大変丁寧に施す。底面に作業台の木目痕 |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ (5~8本/cm) | Bc種ヨコハケ (5~8本/cm) | Bc種ヨコハケ (5~8本/cm) | 1段目は斜めハケ調整のあと指ナデ。2段目はヨコハケ。 | — | 凹線 | 基底は4枚の粘土帯を反時計周りに貼り合わせる |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (4~5本/cm) | Bd種ヨコハケ (4~6本/cm) | タテハケ (4~5本/cm) | タテハケ(4~5本/cm) | 3段目 | 凹線 | 底面に木目痕、藁状圧痕 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (4~6本/cm) | × | — | ヨコハケ(4~6本/cm)、ヨコナデ | ○ | — | 胴部最大径32.5cm。3段目と4段目、あるいは5段目と6段目 |
| 2.5YR6/6 橙色 | タテハケ (6~9本/cm) | × | タテハケ (6~9本/cm) | 斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置は指オサエ | 3段目 | 凹線? | タテハケは丁寧に施す。底面に藁状圧痕、棒状圧痕 |
| 5YR6/8 橙色 | タテハケ (9本/cm) | Bb種ヨコハケ (7~10本/cm) | タテハケ (9本/cm) | 1段目はタテハケのあと斜め指ナデ。2・3段目はタテハケ、4・5段目は斜めハケ、肩部上半はタテハケ、6段目~肩部下半は斜めハケのあとヨコ・斜めの指ナデ。口縁部はヨコハケ。ハケ原体条数7~10本/cm。 | 6段目 5段目 2段目 | 凹線 | タテ・ヨコハケは丁寧。口縁部外面はタテハケ(9~10本/cm) |
| 10YR7/6 明黄褐色 | タテハケ (4~5本/cm) | Bc種ヨコハケ (6~7本/cm) | Bc種ヨコハケ (6~7本/cm) | タテハケ(4~5本/cm、7~8本/cm)、下端はナデ調整、突帯貼り付け位置は指オサエ | 3段目 | — | 底面に藁状圧痕。埴輪17・18が口縁部。外面調整ヨコハケ(6~7本/cm)、内面はヨコハケ調整(6~7本/cm) |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bd種ヨコハケ (9本/cm) | タテ・斜めの指ナデ | 斜め・タテ方向の指ナデ、下端はヨコナデ・指オサエ | 3段目 | 凹線 | 1条目突帯は板押圧による整形 |
| 5YR6/4 にぶい 橙色 | タテハケ (4~6本/cm) | × | タテハケ (4~6本/cm) | 最上段はヨコハケ、以下はタテハケ調整(4~6本/cm)。 下端は指オサエ | 3・5段目 | — | 内外面ハケ目は同一原体を使用。底面に棒状圧痕 |
| 7.5YR5/6 明褐色 | タテハケ (6~7本/cm) | B種ヨコハケ (6~7本/cm) | タテハケ (6~7本/cm) | 1段目と突帯部はタテハケ調整、最上段はヨコハケの後、タテハケ調整 | — | — | 最上段にヘラ記号 内外面ハケ目は同一原体 |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ (7本/cm) | — | ヨコハケ (7本/cm) | ヨコハケ、タテハケ、斜めハケ(5本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (4~6本/cm) | — | タテハケ (4~6本/cm) | 斜めハケ(4~6本/cm) | — | — | |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (5本/cm) | — | タテハケ (5本/cm) | 斜めハケ(5本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (5本/cm) | — | タテハケ (5本/cm) | 斜めハケ(5本/cm) | — | — | |
| 5YR6/6 橙色 | — | — | ヨコハケ (6本/cm) | ヨコハケ・タテハケ(6本/cm) | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | — | ヨコハケ (6~7本/cm) | ヨコハケ(6~7本/cm) | — | — | 埴輪2Bの口縁部 |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | — | ヨコハケ (6~7本/cm) | 斜め・ヨコハケ(6~7本/cm) | — | — | 埴輪2Bの口縁部 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | ヨコハケ (7本/cm) | — | 指ナデ | — | — | 突帯は板押圧整形、1条目突帯か |
| 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | — | ヨコハケ (7~8本/cm) | — | ヨコハケ(7~8本/cm)、ナデ・指オサエ | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (6~7本/cm) | × | — | タテハケ(6~7本/cm・5本/cm) | — | — | 内面タテハケ原体が突帯位置で異なる |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (6~7本/cm) | × | — | 斜めハケ(5~6本/cm) | ○ | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (4本/cm) | B種ヨコハケ (5本/cm) | — | 斜め方向の指ナデ | — | — | 静止痕が斜めに傾く |
| 2.5YR6/6 橙色 | 斜め指ナデ | × | 斜め指ナデ ヨコナデ | 斜め方向の指ナデ、5段目にヨコナデ、突帯貼り付け位置はヨコナデ | 5段目 | — | 横断面が楕円形の円筒埴輪 透かし孔は楕円形 |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ | Bd種ヨコハケ (5本/cm) | — | 斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置はヨコナデ | ○ | 凹線 | 凹線は2条 |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 | 口縁部 | | 突帯 | | 焼成 |
|------|------|----|-------------|----|----|----|-----|------|------|---------|-----|----|------------|-----|----|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | 1段目/以上 | 形状 | 形状 | 幅/高さ | | |
| 埴輪26 | 段築部 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.2 | — | b | 2.2 0.8 | 土師質 | |
| 埴輪27 | 段築部 | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.4 | — | / | 1.9 0.9 | 土師質 | |
| 埴輪28 | 段築部 | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | — | / | 2.3 0.7 | 土師質 | |
| 埴輪29 | 段築部 | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.0 | — | / | 2.5 1.1 | 土師質 | |
| 埴輪30 | 段築部 | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | / | 2.7 1.1 | 土師質 | |
| 埴輪31 | 段築部 | 朝顔 | 頸部突帯 | — | — | — | — | — | — | 1.3 | — | / | 1.7 0.6 | 土師質 | |
| 埴輪32 | 段築部 | 朝顔 | 頸部突帯 ~肩部 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.2 | — | d | 2.0 0.4 | 土師質 | |

表 12 第9次調査埴輪観察表(2)

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|------|------|------|--------|-----|----------------|------------------------------------|-------------------------------|
| 埴輪33 | 段築部 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 砂粒、クサリ礫、1~3mm大の石英・長石・チャート粒を多く含む | 内縁を残す |
| 埴輪34 | 段築部 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 砂粒、クサリ礫、1~3mm大の石英・長石・チャート粒を多く含む | 内縁と長方形透かし孔の一边を残す |
| 埴輪35 | 段築部 | 蓋形埴輪 | 笠部中位突帯 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 0.5~8mm大の石英・長石、砂粒を多く含む | 7.5Y7/1白灰色と7.5Y5/1灰色の胎土がマーブル状 |
| 埴輪36 | 段築部 | 蓋形埴輪 | 立ち飾り軸部 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 砂粒、雲母、クサリ礫、2mm大の礫(長石・石英・チャートなど)を含む | |

表 13 第9次調査形象埴輪観察表

第2節 御願塚古墳第9次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔 配置 | 突帯間隔 設定技法 | 備考 |
|-----------------------|----------------------|---------------------|-------------------|---|------------|--------------|---|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ | B種ヨコハケ (6~7本/cm) | — | タテハケ(6~7本/cm) | ○ | — | |
| 10YR6/4 にぶい 黄橙色 | — | — | タテハケ (9本/cm) | ヨコハケ(7~10本/m) | — | — | 突帯部径は41.7cm |
| 7.5YR6/3 にぶい 褐色 | — | — | タテハケ (5~6本/cm) | タテハケ(5~6本/cm) | — | — | 突帯部径は40.3cm |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ (9本/cm) | — | — | 指ナデ | — | — | 突帯部径は32.9m |
| 7.5YR6/4 にぶい 褐色 | タテ・斜めハケ (7~9本/cm) | — | — | 肩部はタテハケ、頸部はヨコハケ(6~9本/m) | — | — | 突帯部径は33.7cm |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (7本/cm) | — | — | 肩部は斜め方向の指ナデ、受部はヨコハケ、突帯貼り付け位置はヨコナデ | — | — | 突帯部径は31.1cm |
| 7.5YR6/6 橙色 | タテハケ (7~8本/cm) | B種ヨコハケ (7~8本/cm) | — | 受部はヨコハケ(6~7本/cm)、突帯貼り付け位置はケズリ、肩部以下はヨコナデ | — | — | 肩部突帯幅2.0m、高さ0.4cm 突帯部径31.6cm 受部外面はタテハケ(6~7本/cm) |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | | 備考 |
|------|-------|--------|-------|------|------|-----|--|---------------------|
| | | | | | | 高台径 | | |
| 37 | 第7層 | 陶器 | 皿 | 3.6 | 11.7 | 5.2 | | 唐津 胎土目 |
| 38 | 第7層 | 陶器 | 皿 | — | — | 4.1 | | 唐津 砂目 |
| 39 | 第7層 | 陶器 | 皿 | — | — | 4.0 | | 肥前 鉄絵 砂目 |
| 40 | 第2層 | 磁器 | 碗 | — | — | 4.0 | | 肥前 染付 畳付無釉 |
| 41 | 第2層 | 磁器 | 碗 | — | — | 4.6 | | 肥前 染付 畳付無釉 |
| 42 | 第3層 | 磁器 | 碗 | 4.8 | 7.8 | 3.5 | | 瀬戸 色絵 |
| 43 | 第2・3層 | 陶器 | 播鉢 | — | — | — | | 丹波 |
| 44 | 第3層 | 陶器 | 御神酒徳利 | 10.0 | 2.0 | 3.2 | | 京焼系 外面に銅緑釉、高台は露胎 |
| 45 | 第3層 | 陶器 | 御神酒徳利 | 9.8 | 1.9 | 3.1 | | 京焼系 外面に瑠璃釉、高台は露胎 |
| 46 | 第3層 | 軟質施釉陶器 | 皿 | 1.1 | 5.7 | / | | 口唇部に煤付着 |
| 47 | 第3層 | 軟質施釉陶器 | 皿 | 0.9 | 5.2 | / | | 口唇部に煤付着 |
| 48 | 第3層 | 軟質施釉陶器 | 皿 | 1.0 | 6.1 | / | | 口唇部に煤の付着なし |
| 49 | 第3層 | 軟質施釉陶器 | 受皿 | 0.9 | 5.6 | / | | 口唇部に煤付着 |
| 50 | 第3層 | 陶器 | 皿 | 2.1 | 6.2 | / | | 京焼系 口唇部に煤付着 |
| 51 | 第3層 | 瓦 | 軒丸瓦 | / | / | / | | 左巻き三巴文 |

表 14 第9次調査遺物観察表

第3節 御願塚古墳第10次調査

調査面積 52㎡ (6.5 × 8 m)
 調査期間 平成17年2月1日～2月18日
 調査担当者 小長谷正治 細川佳子

1. 調査の概要

この調査は、個人住宅建設に伴う、発掘調査と範囲確認のための学術調査を実施したものである。当調査地点は御願塚古墳の前方部の西側に位置し、近年の調査で明らかになった二重目の周濠（以下、外濠）の南側延長上にあたっている。従前建物は木造2階建てであったため、地下遺構の存在が危ぶまれたが、建物解体時に基礎が地山まで及んでいないことが分かり、外濠の確認を主眼とする調査となった。

調査方法

今回の調査は外濠を検出することが目的であったため、南隣接地で行った第5次調査成果（伊丹市教育委員会1994）をもとに調査範囲の設定を行った。敷地内の南・北側は隣接家屋があるため、東寄りに住宅建設で杭を打つ部分（19㎡）を中心に南北6.5 m、東西8 mの長方形の調査区を設定した。

調査は遺構を確認できる直前までを重機で掘削し、それ以後はすべて人力で掘り下げ・精査を行った。適宜、実測・写真撮影を行い記録保存につとめた。

掘削残土は場外搬出せずに調査区西側に仮置きし、調査終了後に速やかに埋め戻した。

2. 基本層序（第36図 図版26）

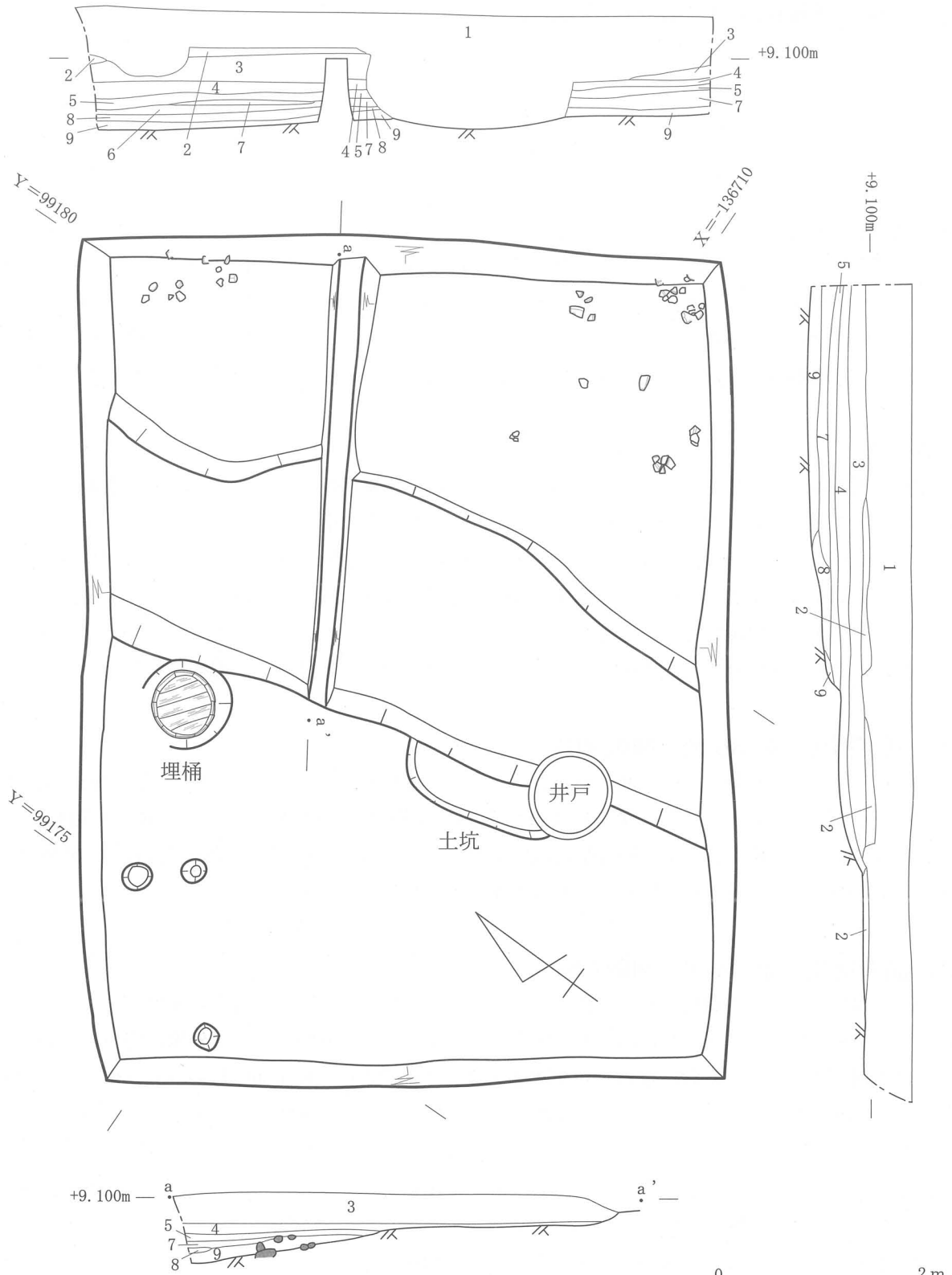
土層については、トレンチ南・北・東壁と、外濠内の堆積状況を観察するために外濠中央に設けた東西畦で断面実測を行っている。第1層は表土で、従前建物に伴う堆積層である。調査区全体に0.4～0.5 mの厚さで堆積する。第2層は暗灰黄色土層で、この層を除去すると地山が現れる。遺構はすべて地山で検出している。第3層から9層は外濠埋土である。

3. 調査成果（第36図 図版26）

今回の調査で検出した遺構は外濠の他に、コンクリート枠の井戸1基、近世の埋桶1基、ピット3基、土坑1基である。ピットからは時期を示す遺物は出土していない。土坑は外濠に切られている。

外濠は調査区内を南北方向に走る西肩を確認することができた。検出面の標高は約9.0 mで、規模は長さ6.3 m、最大幅5.3 m、最深部の深さ0.6 mである。外濠の西側法面は下端から上端まで一度に傾斜せず、2段に落ちる構造を呈していることが確認できた。西肩から0.11～0.16 mで落ちる傾斜角30度の斜面から、幅1.1～2.1 mのテラス状の平坦面が続き、そこからさらに東壁に向かって約0.4 mの比高差で傾斜（傾斜角10度）していく。

外濠は先ずシルト（第9・8層）と埴輪片を多く含む粘土層（第7・6層）の上に、第5層が堆積してテラス東側が埋まり、7世紀から16世紀の遺物を含む第3・4層で外濠全体が埋没する。外濠内から埴輪片が出土しているが、テラス側では全く検出されず、テラス東側、特に東壁寄りで検出されていることから、堤に並べられていた埴輪類が外濠内に落ち込んだものと考えられる。埴輪片は底面に貼り付いた状態ではなく、全て0.1 m以上浮いた状態、あるいは埋土からの出土である。第8・9層は10cm大の礫を多く含んでいるが、古墳に伴うものかどうかは不明である。



- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| 1. 表土 | 6. 10YR3/3暗褐色粘土層 |
| 2. 2.5Y4/2暗灰黄色土層 | 7. 10YR3/2黒褐色粘土層 |
| 3. 2.5Y5/6黄褐色粘質土層 | 8. 10YR3/4暗褐色シルト層 |
| 4. 5Y5/3灰オリーブ色砂質土層 | 9. 10YR4/1褐灰色シルト層 (10cm大の礫を多く含む) |
| 5. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土層 | |

第36図 平面図・断面図

4. 出土遺物

外濠内から埴輪片、須恵器片が出土した。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪を確認している。須恵器はほとんどが甕の体部破片であるが、器形を把握できる資料はなかった。須恵質の埴輪片は器面調整がよく残っているが、土師質の埴輪片は風化による磨耗が著しく、器面調整はかなり不明瞭であった。埴輪の記述に関しては第8次調査の埴輪属性に準じている。

1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (第37・38図 図版27)

埴輪1 上から4段目までの破片である。残存高35.8cm、口縁部径41.9cm、最上段高11.0cm、突帯間隔は9.5cmと11.1cmである。口縁の形状は(b)で、上面は強いナデによりM字形を呈している。突帯の形状は(d')で、幅2.4cm、高さ0.4cmである。

外面調整はタテハケによる1次調整のあと、2段目にBc種ヨコハケを施す。静止痕の間隔は5～7cm前後で、静止痕の長さからヨコハケ原体幅は8.5cm(10本/cm)程度であったと考えられる。突帯間隔の狭い3段目にはヨコハケが施されていないことから、4段目も突帯間隔が狭いものと推測される。タテハケ原体条数は10本/cmで、タテ・ヨコハケは同一工具によるものと思われる。

内面調整は4～3段目はタテ方向に指ナデ、3段目～最上段は斜め方向に指ナデを施す。胎土は砂粒、1～5mm大の長石・石英・白色粒が大変目立っている。

埴輪2 上から2段目までの破片である。残存高22.2cm、口縁部径33.2cm、最上段高11.5cmを測る。口縁の形状は(b)で、上面に強いヨコナデを加えている。突帯形状は(d')を呈し、幅2.0cm、高さ0.5cmである。

外面調整は2次調整によるB種ヨコハケを施している。最上段のヨコハケは1周で、静止痕は垂直である。2段目は突帯間を、1周のヨコハケで満たすことが出来ないため、ヨコハケを少なくとも2周させている。静止痕はやや傾いているが、静止痕の間隔は3.5～5.5cmである。ハケ原体条数は8本/cmで、原体幅は7cm程度と思われる。

内面調整は2段目に斜め方向の指ナデを施し、最上段は原体条数7本/cmの斜めハケ調整を行っている。最上段下に円形透かし孔を設けていることから、透かし穿孔位置が5段目であり、埴輪2が5条突帯6段構成であったことが推測される。胎土は砂粒、1～10mm大の石英・長石・チャートなどが大変多く含まれている。

埴輪3～埴輪22 突帯部の破片である。突帯の形状により(b)埴輪10～22、(c)埴輪5、(d)埴輪6～9、(e)埴輪3・4の4種類を確認している。

埴輪3・4は幅1.3cm、高さ0.4cmを測るたいへん小振りな突帯で、埴輪5はそれらよりも高さを持つ突帯である。

埴輪6～9は外面に2次調整のヨコハケを施しているが、静止痕はほぼ垂直になっており、静止痕の間隔は短い。内面は指ナデやタテハケ調整を行っている。

埴輪20は外面にB種ヨコハケを施し、静止痕は垂直に残っている。透かし孔を持っている。砂粒、クサリ礫、石英・長石粒を多く含む胎土である。

埴輪23 胎土・焼成状態・内面調整などの特徴から埴輪1の基底部と考えられる。外面は指ナデ、内面は斜め方向に指ナデ調整し、下端を指オサエしている。

埴輪24 朝顔形埴輪口縁部突帯である。突帯の形状は断面台形で、幅2.5cm、高さ0.8cmを測る。器面調整は風化によりかなり不明瞭であるが、外面はタテハケを施し、内面にはヨコハケ調整が認められる。ハケ原体条数は6本/cmである。

2) 形象埴輪 (第 38・39 図 図版 28・29)

形象埴輪には蓋、家、大刀、人物、馬が見られる。⁽¹⁾

①蓋形埴輪

埴輪 25・26 は飾り板である。風化による器面剥離が著しく、線刻はかなり不明瞭である。

埴輪 25 は内外縁を残す資料で、外縁に沿って平行線を 2 条配し、内縁側の刻線には V 字状に弧線が結ぶ。向かって左面も同様の刻線であったと思われる。

埴輪 26 は内縁を失っているが、それに沿って配された 2 条の平行線が辛うじて残っている。表裏面は同様の線刻を持っていたと思われる。

②家形埴輪

埴輪 27 は入母屋造りの上屋根部分である。内側下端に突起が廻っていて、上・下屋根が分離する組み合わせ式の可能性があるが、下屋根上端と接する部分が擬口縁状になっているだけかもしれない。

外面には屋根材を押さえる押縁を表現した粘土帯の剥離面が桁行方向に残っているが、屋根材の表現はなされていない。内外面はナデ調整を施している。

埴輪 28 は切妻形の屋根部分で、破風板に直角に取り付く 2 本のレール状の部材と剥離痕が残存する。その上に堅魚木が載ると見られる。破風板の表面には円弧状の線刻が残っており、棟木の剥離痕も残っている。風化のため表裏面の調整は不明瞭であるが、上面に赤色顔料がわずかに残る。

埴輪 29 は切妻形の屋根の部材で、おそらく破風板に接して取り付くものである。

埴輪 30 は屋根部片で網代文様が描かれている。網代は格子区画内に縦・横線を線刻で表現している。裏面に壁の剥離面が残っている。

③大刀形埴輪

埴輪 31 は柄頭または柄元の飾り部分である。幅 4 cm、厚さ 1.3 cm で、長方形を呈していたと思われる。磨耗のため、調整や装飾は不明瞭である。

④人物埴輪

埴輪 32 は美豆良である。先端から 4.7 cm ほどが残存しており、断面は 1.9 × 1.5 cm のやや楕円形である。磨耗が著しく調整は不明瞭。

埴輪 33 は胴部片である。腰に締めた幅広の腰帯から上衣の裾が開く。裾にはタテハケを施し、帯と内側はナデ調整を行っている。

⑤馬形埴輪

埴輪 34 は断面 T 字形のたてがみである。頂部は幅 4.7 cm の丸みを帯びた平坦面を呈している。斜め方向のハケ調整を施し、それ以外はヨコナデを施している。

埴輪 35 は右耳の付根付近である。耳と面繫は剥離している。左側先端部にたてがみのハケ目が確認できる。外面は不定方向にナデ調整し、内面は耳の貼り付け位置に強くナデを加えている。

埴輪 36 は右顔である。面繫の剥離面と、そこから下の顔側面を形作る粘土板の剥離面が平行して残っている。板の上に鞍に結ぶ手綱が貼り付けられている。磨耗が著しく、外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整が観察できる。

埴輪 37 は右顔の破片である。埴輪 36 に比べてかなり小型の馬形埴輪で、顔側面は一続きに作られている。面繫の剥離面が残っており、その下の手綱には幅 1 cm、高さ 0.7 cm の断面台形の突帯を貼り付けている。

埴輪 38 は馬の脚で、埴輪 37 のような小型馬の脚であったと思われる。粘土板を筒状にして絞り込

んで成形したもので、内面にその痕跡が残っている。脚は円柱ではなく、足先を屈曲させて蹄を作りだしている。外面調整は磨耗により不明瞭である。

⑥不明

埴輪 39 は板状の部分が途中から二又に分かれた破片で、馬の頭部かもしれない。表面はタテハケ、裏面にはヨコ・斜めハケを施している。ハケ原体幅は約 2.8cm、条数 8～9 本/cm である。たてがみに当たる頂部は丁寧にヨコナデする。首部はヨコ方向の強い指ナデ、内面はナデ調整を施している。

埴輪 40 は埴輪 39 がたてがみとすると、その前端部にあたると思われる。右上端が外反しており、たてがみ先端の飾りへ続く。二面ともタテ・ヨコハケを施している。

埴輪 41 は動物埴輪の胴部と脚の付根部分かと思われる破片で、直立する脚部から胴部へ向かって湾曲していくようすや粘土紐を積み上げているようすが観察できる。外面は下から上への強い指ナデ、内面は強くヨコナデを施している。焼成状態や内外面の調整、胎土などから判断して埴輪 39 と同一個体と考えられる。

埴輪 42 は動物埴輪の胴部かと思われ、復元径約 3.8cm の孔が穿たれている。孔は外側から内側に向かって穿孔されており、内外面はナデ調整を施している。

3) その他の遺物 (第 39 図)

外濠埋土第 3・4 層から古墳時代以降の遺物が出土しており、外濠の埋まった時期をある程度示している。図示した遺物のほかに、土師器、黒色土器、龍泉窯青磁碗などが出土している。

43 は須恵器平瓶の口縁部である。口縁部はハの字に大きく開き、上面は丸くおさめている。中位に 1 条の凹線が巡っている。

44 は須恵器甕口縁部である。外面肩部に平行タタキ、内面に青海波痕が確認できる。

45 は備前焼播鉢である。口縁の縁帯はすでに幅広であるが、凹線による段は発達していない。端面は内傾して、強いヨコナデを加えられている。内面にやや斜め方向の櫛目を刻んでいる。口縁部は灰赤色、体部内外面はにぶい赤褐色を呈している。

46 は瓦質碁盤である。縦横の線刻によって、約 2 cm 四方の柵目を作っている。

5. 小結

今回の調査では調査範囲が狭かったものの、かなり良好な状態で外濠を検出することができた。従前の調査成果と合わせて、外濠の構造や埴輪についてまとめておく。

これまでの調査では後世の削平もあり、検出された外濠の深さは 0.2～0.3 m の浅いものであったが、今回は最深部で 0.6 m を測り、実際にはかなり深さがあつたことがわかった。外濠幅は東肩が調査区外であるため確実な幅を確認することが出来なかったが、残存幅が 5.3 m あり、上面幅はそれ以上であることは明らかである。南隣接地の第 5 次調査で検出された外濠の幅は 3.4～3.8 m で、当調査区に比べてかなり狭くなっている。検出面の標高は約 8.8 m で、当調査区より 0.2 m ほど低くなっていることから、より削平をうけた結果だと思われる。ここでは外濠内側肩を検出しており、第 8 次調査の外濠内側肩ラインとあわせて外濠プランを推定すると、約 5.8 m の外濠幅を導きだすことができる。

ここで第 10・5 次調査区を合わせて外濠外側肩のラインを見てみると (第 40 図)、直線ではなく緩く弧を描いていることに気づく。現在の前方部西側の形状は直線を呈しているが、内濠は後世多くの改変を受けているため、築造時に近い形状を保っている可能性は極めて低い。改変を受ける以前の

形状がどうであったかを知る手掛りとして、明治から大正期に描かれた御願塚古墳の絵図面が残されている（P 107 図B、P 114 図D）。それらを見ると前方部西辺は直線ではなく弧状に描かれ、対する内濠外縁（内濠）も弧状を呈していたことがわかる。今回確認した弧状を呈する外濠は、絵図面を考古学的に評価しえるものである。

外濠の形状は、今回の調査と第5次調査成果から判断して、前方部側の外濠外肩は2段に落ち、内肩はそのまま立ち上がる構造であることが分かった。外濠外側の堤（外堤）の有無であるが、今回の調査では確認することができなかった。しかし、外濠内肩側（墳丘側）には堤が存在していることを考えれば、それとは違った外濠形状（2段落ち）を示している西側にはあえて堤を造らなかった、あるいは必要としなかった可能性も考えられる。

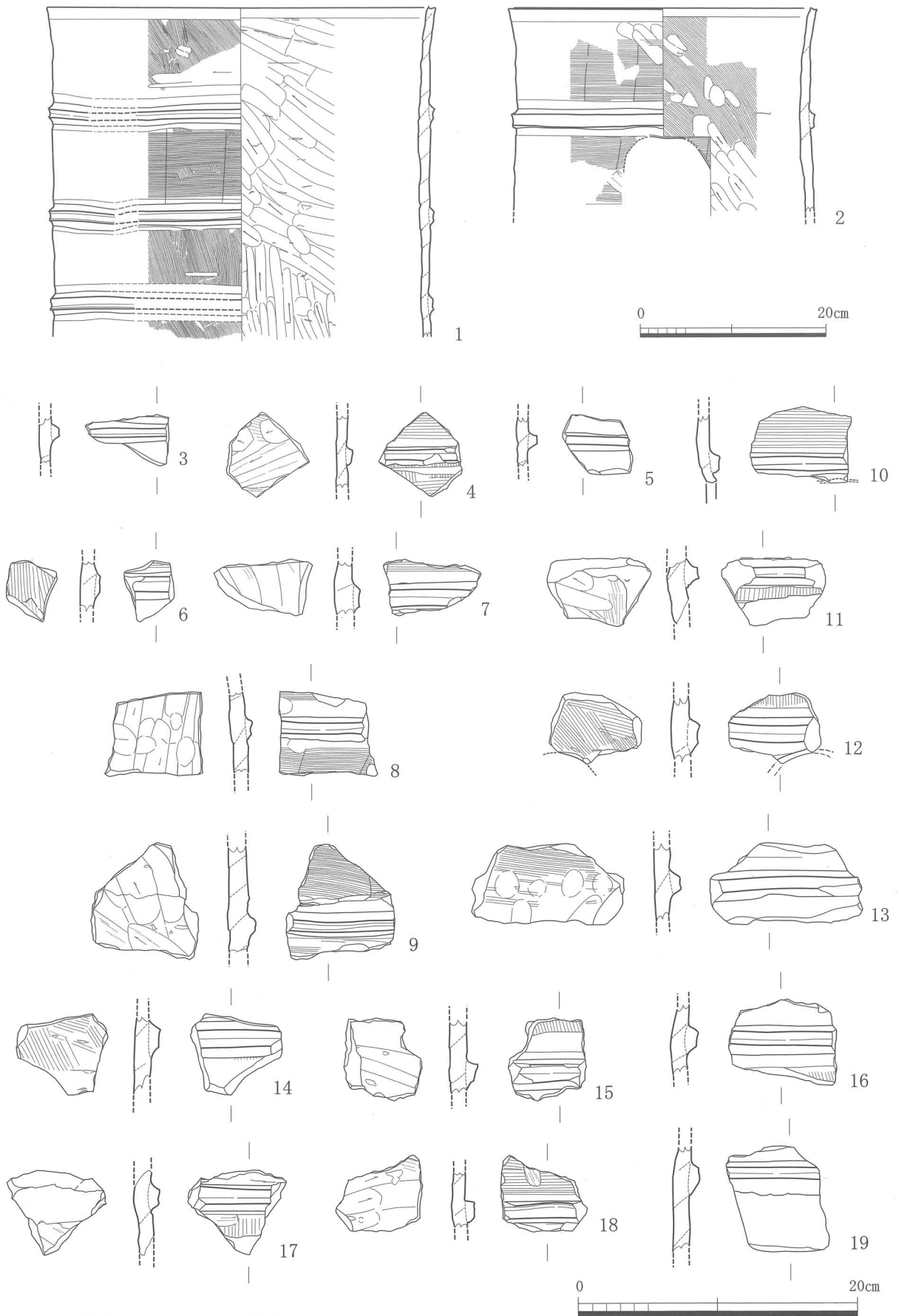
外濠から円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪を検出している。埴輪はすべて外濠の東側で検出されていることから、堤に並べられていた埴輪類が次第に外濠内に落ち込んでいったものと考えられる。円筒埴輪・朝顔形埴輪に関しては、土師質の埴輪片が多くを占めているが、須恵質のものも1/3程度見られ、器体には黒斑が認められないことから、窖窯焼成であることが分かる。外面調整はタテハケによる1次調整だけのものと、B種ヨコハケによる2次調整を施すものが観察できる。B種ヨコハケには、静止痕が真っ直ぐに残っているBc種ヨコハケが盛行している中で、Bd種ヨコハケが一定量認められるなど、第8・9次調査の埴輪と同じ様な特徴を備えていることから、川西編年第IV期（川西1978）に属するもので、5世紀後半の年代が与えられる。

形象埴輪は蓋・家・大刀・人物・馬がある。中でも馬形埴輪には大小が揃っていたことが窺え、たてがみがT字形の馬も見られる。さらに、人物埴輪は小型馬形埴輪に伴う馬引き（馬子）である可能性が指摘されている。第8次調査の外濠部（以下、第8次調査）と同様に、これまでの外濠の調査に比べると、形象埴輪が豊富に検出されたと言える。外濠をすべて調査したわけではないので想像の域を出ないが、第8次調査位置が「造り出し」という特別な場所と対峙しているために、そのような特殊性を示しているのではないだろうか。そうであれば、当調査区の様相は、前方部正面にあたる堤が特別に意識され、そこに形象埴輪が並べ立てられていたことを物語っているのかもしれない。円筒埴輪の様相から、検出した埴輪類は古墳築造当初から堤に並べられていたものと判断している。

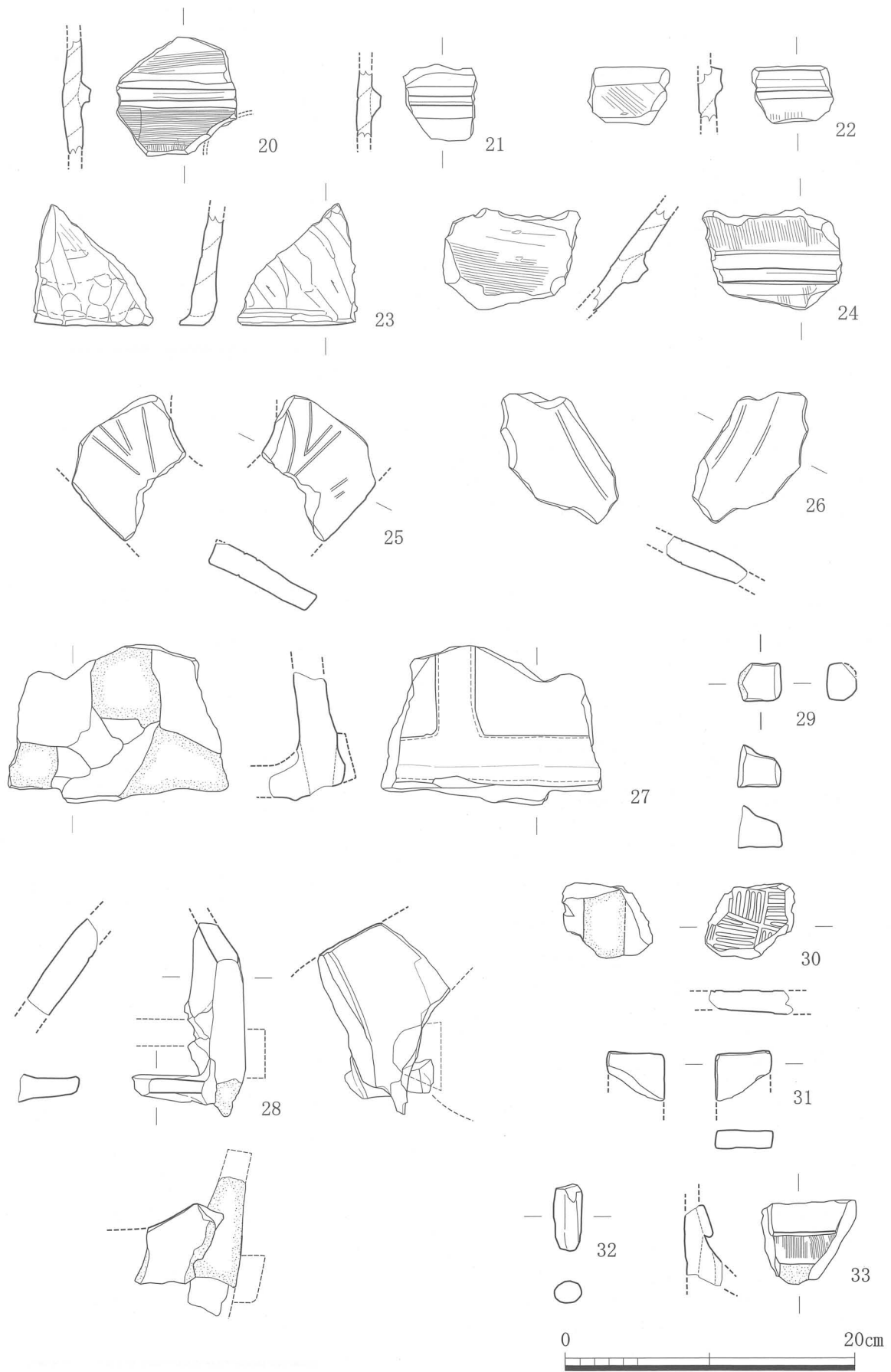
（瀬川）

註

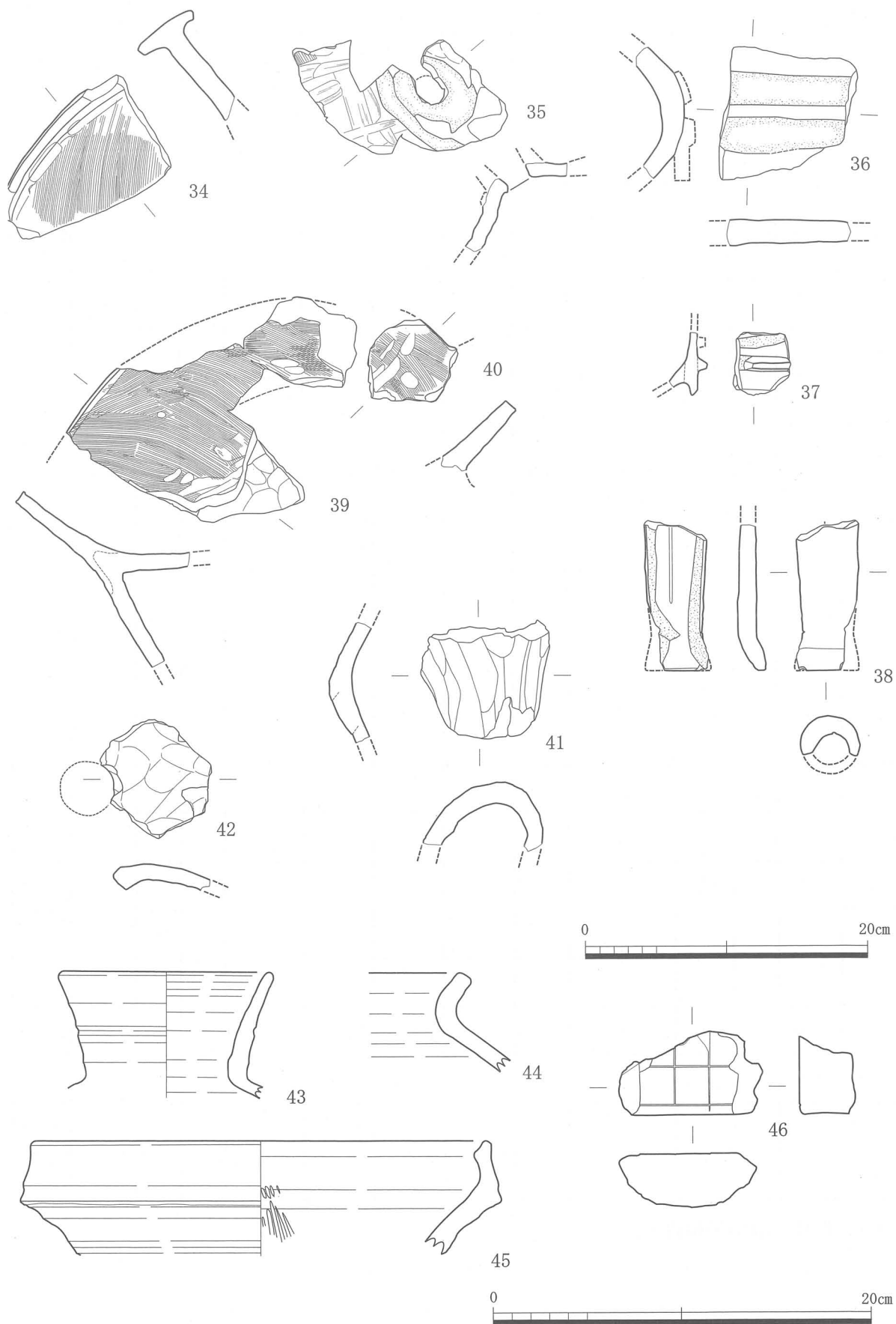
（1）形象埴輪については高橋克壽氏にご教示いただいた。



第37図 出土埴輪(1)



第 38 图 出土埴輪 (2)



第39図 出土埴輪(3)、出土遺物

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 法量 | | | | | | 器壁厚 1段目/以上 | 口縁部 | | 突帯 幅/高さ | 焼成 |
|------|------|----|-------------|--------|----|------|-----|-------------|------|---------------|-----|----|------------|-------------|
| | | | | 器高 | 底径 | 口径 | 底部高 | 突帯間隔 | 最上段高 | | 形状 | 形状 | | |
| 埴輪1 | 外濠 | 円筒 | 最上段~ 4段目 | (35.8) | — | 41.9 | — | 11.1 9.5 | 11.0 | 0.8~1.3 | b | d' | 2.4 0.4 | 須恵質 |
| 埴輪2 | 外濠 | 円筒 | 最上段~ 2段目 | (22.2) | — | 33.2 | — | — | 11.5 | 0.7~1.2 | b | d' | 2.4 0.5 | 須恵質 |
| 埴輪3 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | e | 1.3 0.4 | 土師質 |
| 埴輪4 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.7~0.9 | — | e | 1.3 0.4 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪5 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.8 | — | c | 1.3 0.6 | 土師質 |
| 埴輪6 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | d | 1.9 0.3 | 土師質 |
| 埴輪7 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1~1.2 | — | d | 2.1 0.4 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪8 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | d | 1.7 0.4 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪9 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.3 | — | d | 1.8 0.5 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪10 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9 | — | b | 1.8 0.6 | 土師質 |
| 埴輪11 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.3 | — | b | 2.1 0.8 | 土師質 |
| 埴輪12 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | — | b | 2.6 0.7 | 土師質 |
| 埴輪13 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.1 | — | b | 1.8 0.7 | 土師質 |
| 埴輪14 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.1 | — | b | 2.7 0.8 | 土師質 |
| 埴輪15 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | — | b | 2.2 0.8 | 土師質 |
| 埴輪16 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 0.9~1.0 | — | b | 2.2 0.6 | 土師質 |
| 埴輪17 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | — | b' | 2.2 0.6 | 土師質 (硬質) |
| 埴輪18 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 1.6 0.6 | 土師質 |
| 埴輪19 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | — | b | 2.4 0.7 | 土師質 |
| 埴輪20 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.2 | — | b | 1.9 0.7 | 土師質 |
| 埴輪21 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.0 | — | b | 2.2 0.7 | 土師質 |
| 埴輪22 | 外濠 | 円筒 | 突帯部 | — | — | — | — | — | — | 1.1 | — | b | 2.3 0.7 | 土師質 |
| 埴輪23 | 外濠 | 円筒 | 基底部 | — | — | — | — | — | — | 1.1~1.8 | — | — | — | 須恵質 |
| 埴輪24 | 外濠 | 朝顔 | 口縁部 突帯 | — | — | — | — | — | — | 1.0~1.3 | — | — | 2.5 0.8 | 土師質 |

表 15 第 10 次調査埴輪観察表

第3節 御願塚古墳第10次調査

| 色調 | 外面調整 | | | 内面調整 | 透かし孔配置 | 突帯間隔設定技法 | 備考 |
|--------------------|-------------------|---------------------|--------------------|--------------------------------------|--------|----------|-------------------------------|
| | 1次調整 | 2次調整 | 1段目(最上段) | | | | |
| 7.5YR6/2 灰褐色 | タテハケ (10本/cm) | Bc種ヨコハケ (10本/cm) | タテハケ (10本/cm) | 最上段～3段目は斜め方向の指ナデ。 4段目以下はタテナデ。 | — | — | 2段目には2次調整にBc種ヨコハケを施し、突帯間隔は広い。 |
| 10YR5/2 灰黄褐色 | — | Bb種ヨコハケ (8本/cm) | Bc種ヨコハケ (8本/cm) | 2段目に斜め方向の指ナデを施し、最上段は原体条数7本/cmの斜めハケ調整 | 5段目? | — | Bb種ハケは上方が広い。5条突帯6段構成か? |
| 2.5Y7/4 浅黄色 | — | — | — | — | — | — | |
| 10YR6/4 にぶい黄褐色 | — | ヨコハケ (6本/cm) | — | ヨコナデ、ヨコハケ | — | — | |
| 2.5Y7/4 浅黄色 | — | — | — | — | — | — | |
| 5YR6/6 橙色 | — | ヨコハケ | — | タテハケ(5本/cm) | — | — | |
| 7.5YR5/6 明褐色 | — | ヨコハケ | — | タテナデ | — | — | |
| 7.5YR6/4 にぶい橙色 | — | B種ヨコハケ (8本/cm) | — | タテナデ | — | — | |
| 7.5YR6/6 橙色 | — | B種ヨコハケ (9本/cm) | — | タテナデ | — | — | |
| 2.5Y6/3 にぶい黄色 | — | B種ヨコハケ (6本/cm) | — | ナデ? | ○ | — | |
| 10YR7/4 にぶい黄褐色 | タテハケ | ヨコハケ | — | タテハケ、斜め方向のナデ | — | — | |
| 2.5Y7/4 浅黄色 | タテハケ (6本/cm) | — | — | 斜め・ヨコハケ(6本/cm) | ○ | — | |
| 10YR7/2 にぶい黄褐色 | — | — | — | ヨコハケ、ナデ、突帯貼り付け位置を指オサエ | — | — | |
| 10YR7/3 にぶい黄褐色 | タテハケ | — | — | 斜めハケ | — | — | |
| 5YR6/6 橙色 | タテハケ (6本/cm) | — | — | ナデ | — | — | |
| 10YR7/3 にぶい黄褐色 | タテハケ | — | — | — | — | — | |
| 7.5YR5/4 にぶい褐色 | タテハケ (4～5本/cm) | — | — | 斜め方向のナデ | — | — | |
| 7.5YR6/4 にぶい橙色 | — | B種ヨコハケ (6本/cm) | — | ヨコナデ | — | — | |
| 7.5YR7/4 にぶい黄褐色 | — | — | — | — | — | — | |
| 10YR6/6 明黄褐色 | タテハケ | B種ヨコハケ (9本/cm) | — | — | ○ | — | 静止痕は垂直 |
| 10YR7/4 にぶい黄褐色 | タテハケ? | — | — | — | — | — | |
| 10YR7/4 にぶい黄褐色 | タテハケ | — | — | 斜めハケ | — | — | |
| 10YR5/1 褐灰色 | — | — | 斜め方に指ナデ | 指ナデ、指オサエ | — | — | 埴輪1の基底部 |
| 10YR7/6 明黄褐色 | — | — | タテハケ (6本/cm) | ヨコハケ(6本/cm) | — | — | |

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 部位 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|------|------|-------|---------|-------------|-------------------|-----------------------------|--------------------|
| 埴輪25 | 外濠 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR5/6 明褐色 | 1~3mm大の長石・石英粒、砂粒、クサリ礫を多く含む | 内外縁を残す |
| 埴輪26 | 外濠 | 蓋形埴輪 | 飾り板 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を多く含む | |
| 埴輪27 | 外濠 | 家形埴輪 | 上屋根 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 2~4mmの長石・石英粒、砂粒、クサリ礫を含む | |
| 埴輪28 | 外濠 | 家形埴輪 | 上屋根 | 土師質 | 5YR6/6 橙色 | 2mm大の長石・石英、砂粒、クサリ礫を含む | 破風板に線刻 |
| 埴輪29 | 外濠 | 家形埴輪 | 屋根部材 | 土師質 | 5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒を含む | 棟木? |
| 埴輪30 | 外濠 | 家形埴輪 | 屋根材 | 土師質 (硬質) | 5YR6/6 橙色 | 2~3mm大の石英・長石、砂粒を多く含む | 網代文様を線刻 |
| 埴輪31 | 外濠 | 大刀形埴輪 | 飾り | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 雲母、砂粒を含む | 柄頭あるいは柄元の飾り部分 |
| 埴輪32 | 外濠 | 人物埴輪 | 美豆良 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 雲母、砂粒を含む | |
| 埴輪33 | 外濠 | 人物埴輪 | 胴部片 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | 砂粒・クサリ礫を含む | 馬子? |
| 埴輪34 | 外濠 | 馬形埴輪 | たてがみ | 土師質 | 10YR5/6 黄褐色 | 2~3mm大の石英・長石粒、砂粒、雲母、クサリ礫を含む | 断面T字形のたてがみ |
| 埴輪35 | 外濠 | 馬形埴輪 | 右耳付根 | 土師質 | 7.5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒、1~3mmの礫を多く含む | 耳と面繫の剥離痕 |
| 埴輪36 | 外濠 | 馬形埴輪 | 右顔側面 | 土師質 | 5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒を含む | |
| 埴輪37 | 外濠 | 馬形埴輪 | 右顔側面 | 土師質 | 7.5YR5/6 明褐色 | 砂粒、クサリ礫、雲母を含む | 小型馬。面繫の剥離面、手綱突帯が残る |
| 埴輪38 | 外濠 | 馬形埴輪 | 脚部 | 土師質 | 10YR5/6 黄褐色 | クサリ礫が目立つ。砂粒、雲母を含む | 埴輪37のような小型馬の脚 |
| 埴輪39 | 外濠 | 不明 | たてがみ? | 土師質 (硬質) | 7.5YR5/3 にぶい褐色 | 砂粒・クサリ礫、2~3mm大の石英・長石粒などを含む | 馬か? たてがみと頭部が一続き? |
| 埴輪40 | 外濠 | 不明 | たてがみ? | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/6 橙色 | 砂粒・クサリ礫、2~3mm大の石英・長石粒などを含む | 埴輪39の前端部? |
| 埴輪41 | 外濠 | 不明 | 脚と胴部の付根 | 土師質 (硬質) | 7.5YR5/6 明褐色 | 1~2mm大の石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を多く含む | 埴輪39と同一個体? |
| 埴輪42 | 外濠 | 不明 | 胴部 | 土師質 (硬質) | 7.5YR6/6 橙色 | クサリ礫、砂粒、1~3mmの礫を多く含む | 穿孔あり。埴輪39と同一個体? |

表 16 第 10 次調査形象埴輪観察表

| 遺物番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | 備考 |
|------|------|------|----|----|------|----|------------------------------------|
| 43 | 外濠 | 須恵器 | 平瓶 | — | 11.0 | — | |
| 44 | 外濠 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | |
| 45 | 外濠 | 備前陶器 | 播鉢 | — | 24.0 | — | 口縁部7.5YR4/2灰赤色、体部内外面2.5YR5/4にぶい赤褐色 |
| 46 | 外濠 | 瓦質土器 | 碁盤 | — | — | — | |

表 17 第 10 次調査遺物観察表

補 論

I. 土製品の表面にみられる砂礫

御願塚古墳から出土した埴輪・土師器・須恵器資料の一部、42点の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。初めに資料全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率25倍の実体顕微鏡で調べた。観察した砂礫構成をもとに砂礫の採取地について推定した。

砂礫の特徴

識別された砂礫種は、花崗岩・流紋岩・砂岩・泥岩・チャート・石英・長石・黒雲母・角閃石である。砂礫の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大8mmである。石英と長石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、黒色、褐色、赤褐色、茶褐色、赤茶色、茶色と様々で、粒形が角、亜角、亜円、円、粒径が最大12mmである。石基はガラス質である。石英の斑晶があるものや溶結がみられるものがある。

砂岩：色は灰色、褐色、黄灰色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大8mmである。細粒砂からなり、丹波層群に分布するような古期層の硬い砂岩である。

泥岩：色は灰色、暗灰色、黒色で、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大8mmである。古期層の泥岩である。

チャート：色は暗灰色、灰色、茶褐色、粒形が角、亜角、粒径が最大5mmである。

石英：無色透明、灰色透明で、粒形が角、粒径が最大2mmである。複六角錐あるいはその一部がみられるものがある。

長石：灰色、黄灰色、淡桃色で、粒形が角、亜角、粒径が最大2mmである。

黒雲母：黒色、金色で、板状をなし、粒径が最大2mmである。

角閃石：黒色、粒形が角、亜角、粒径が最大0.2mmである。短柱状、粒状をなす。

砂礫構成と砂礫の採取推定地

観察した砂礫を砂礫の構成をもとに類型に区分し、砂礫の採取地を推定する。砂礫構成は、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする1類型と流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする4類型である。更に、少量含まれる砂礫をもとに細区分すれば、1類型は1b類型、1bd類型、1bdg類型、4類型は4a類型、4ab類型、4ag類型、4agn類型、4d類型、4g類型、4gn類型、4n類型となる。砂礫の採取推定地については、土製品出土地に一番近い地で同じような砂礫構成を示す地層が分布する付近とする。また、地域の区分として、安威川以東の摂津を東部、千里丘陵から武庫川の範囲を中部、西宮市以西を摂津西部とする。

1b類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域の砂礫と推定され、西宮市付近が推定される。

1bd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域の砂礫と推定され、西宮市付近が推定される。

1 bdg 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域で、古期層の砂岩や泥岩の砂礫も含まれる安威川付近が推定される。

4 a 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4 ab 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4 ag 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4 agn 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、チャートや他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4 d 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

4 g 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、泥岩やチャートや砂岩の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

4 gn 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩や他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫相を示す砂礫は泉北丘陵に分布する大阪層群の粘土層中の砂礫の一部に似ている。丘陵北部の日置荘付近の砂礫とは異なる。

4 n 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

おわりに

埴輪の配列と埴輪に含まれる砂礫との関係をみれば、酷似・類似する砂礫構成の埴輪が2本～4本ずつ並んでいる場合がみられる。埴丘上段では1 C・1 D・1 E、下段では2 D・2 E、造り出しの南側ではI・J、北側ではF・Gの埴輪が流紋岩のみの砂礫で、流紋岩と花崗岩を含む砂礫からなる埴輪は埴丘上段の1 A・1 B、造り出しの北側ではK・L・M・N、流紋岩と角閃石を含む埴輪は造り出し北側のC・D・Eである。このような現象は同じ粘土を使用して作られた埴輪が並べられているように考えられる。

I. 土製品の表面にみられる砂礫

古市付近の埴輪に形態的に似ていることから、古市付近で製作された埴輪ではないかと言われていたが、埴輪に含まれる砂礫構成は古市や土師里付近の砂礫構成とは全く異なり、流紋岩質岩が分布する地域で製作された埴輪と花崗岩質岩が分布する地域の埴輪である。千里丘陵から武庫川にかけての付近の河川の砂礫や丘陵地の粘土層に含まれる砂礫を検討すれば、より詳細な埴輪の製作地が推定されるだろう。

(奥田尚)

表1 御願塚古墳出土土製品の表面にみられる砂礫

| 資料番号 | 器種 | 石 | | | | | | | | | | | | 鉱物 | | | | | | | | | | | | 類型と砂礫の採取推定地 | | |
|--------|-------------|----------|----------|-----|-----|-----------|-----------|----|-----------|-----------|----------|----------|-----------|----|-----|-------|-----|------------|------------|-----|-----|----------|----------|-----|-----|----------------|-----------------|-----|
| | | 花崗岩 | | 閃緑岩 | | 流紋岩 | | 砂岩 | | 泥岩 | | チャート | | 片岩 | | 火山ガラス | | 石英 | | 長石 | | 黒雲母 | | 角閃石 | | | 輝石 | |
| | | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | 裸眼 | 30倍 | | 裸眼 | 30倍 |
| A | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | M-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-中 E-僅 | L-微 | M-僅 | | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| B | 円筒埴輪 | | M-微 角 | | | L-僅 垂角 | L-稀 垂角 | | L-僅 垂角 | | | | | | | | | M-僅 | | M-僅 | | | | | S-僅 | | 1bdg 類型 摂津東部 | |
| C | 円筒埴輪 | | | | | L-稀 垂角 | L-中 垂角 | | | | | | | | | | | M-僅 | L-僅 E-僅 | M-僅 | M-中 | | | | S-微 | | 4n 類型 摂津中部 | |
| D | 円筒埴輪 | | | | | L-稀 垂角 | M-中 垂角 | | | | | | | | | | | | M-中 E-僅 | M-僅 | M-僅 | | | | S-稀 | | 4n 類型 摂津中部 | |
| E | 円筒埴輪 | | | | | L-中 垂角 | M-僅 垂角 | | | | | | | | | | | | M-僅 | | M-僅 | | | | S-稀 | | 4n 類型 摂津中部 | |
| F | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | M-中 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-中 E-僅 | M-中 | | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| G | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-中 | | L-中 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| H | 円筒埴輪 | | | | | L-中 垂角 | M-僅 垂角 | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | M-僅 | M-中 | M-僅 | M-僅 | | | | | | 4g 類型 摂津中部 | |
| I | 円筒埴輪 | | | | | L-多 垂角 | M-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-僅 | M-多 E-僅 | M-僅 | S-多 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| J | 円筒埴輪 | | | | | L-微 垂角 | M-微 垂角 | | | | | | | | | | | M-稀 | M-僅 E-僅 | M-僅 | S-僅 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| K | 円筒埴輪 | M-稀 角 | | | | | M-稀 垂角 | | | | | L-微 角 | M-微 角 | | | | | L-僅 | S-多 E-僅 | M-僅 | S-中 | | | | S-稀 | | 4agn 類型 摂津中部 | |
| L | 円筒埴輪 | | M-稀 角 | | | L-僅 垂角 | L-微 垂角 | | | L-稀 角 | S-稀 角 | L-僅 角 | | | | | | M-僅 | M-多 L-多 | M-稀 | | | | | | 4ag 類型 摂津中部 | | |
| M | 円筒埴輪 | | L-微 角 | | | L-僅 垂角 | L-多 垂角 | | | | | | | | | | | L-中 | M-多 L-中 | S-僅 | | | | | | | 4a 類型 摂津中部 | |
| N | 円筒埴輪 | | L-稀 角 | | | L-中 垂角 | L-中 垂角 | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | M-中 | L-僅 E-僅 | M-微 | | | | | | | 4ag 類型 摂津中部 | |
| O | 円筒埴輪 | L-稀 角 | M-僅 角 | | | | | | | | | | | | | | | | S-微 板 | L-僅 | M-多 | | S-微 板 | S-微 | | | 1b 類型 摂津西部 | |
| 71 | 円筒埴輪 | | | | | L-微 角 | L-中 垂角 | | | | | | | | | | | M-稀 | M-中 E-僅 | L-微 | M-僅 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 1-A | 円筒埴輪 | L-僅 角 | | | | | M-僅 角 | | | | | | L-稀 角 | | | | | M-僅 | M-多 E-中 | L-中 | M-微 | | | | | | 4ag 類型 摂津中部 | |
| 1-B | 円筒埴輪 | | M-微 角 | | | L-多 垂角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | L-僅 | M-中 E-僅 | L-僅 | M-微 | | | | | | 4a 類型 摂津中部 | |
| 1-C | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | M-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-多 E-僅 | L-微 | M-僅 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 1-D | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-多 E-僅 | | M-僅 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 1-E | 円筒埴輪 | | | | | L-微 垂角 | L-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-僅 | M-中 E-僅 | M-微 | M-僅 | L-稀 板 | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 1-F | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | M-微 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-多 E-僅 | M-微 | M-微 | | | S-稀 | | | 4n 類型 摂津中部 | |
| 2-A | 朝顔形 埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-僅 垂角 | | | | | | L-稀 垂角 | | | | | L-微 E-僅 | M-僅 | | M-僅 | | | | | | 4g 類型 摂津中部 | |
| 2-B | 円筒埴輪 | | | | | L-中 角 | L-僅 垂角 | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | M-僅 | M-中 | M-微 | S-中 | | | | | | 4g 類型 摂津中部 | |
| 2-C | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-中 垂角 | | | M-稀 垂角 | | | | | | | | M-微 | M-中 E-僅 | L-中 | M-僅 | | | | | | 4g 類型 摂津中部 | |
| 2-D | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | M-僅 角 | | | | | | | | | | | M-僅 | M-中 E-僅 | M-中 | M-中 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 2-E | 円筒埴輪 | | | | | M-微 垂角 | L-僅 垂角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-中 | M-微 | S-中 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第24図19 | 円筒埴輪 | L-稀 角 | | | | L-中 垂角 | L-微 垂角 | | | | | | | | | | | M-中 | M-微 | M-多 | | | | S-微 | | | 4ab 類型 摂津中部 | |
| 第24図20 | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-多 垂角 | | | | | | | | | | | M-僅 | S-中 | M-僅 | S-多 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第24図26 | 円筒埴輪 | | | | | L-中 角 | L-多 角 | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | M-中 | L-僅 | M-僅 | | | | | | | 4g 類型 摂津中部 | |
| 第20図51 | 円筒埴輪 | | | | | L-僅 垂角 | L-稀 垂角 | | | | | | | | | | | M-僅 | M-中 E-僅 | M-稀 | M-僅 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第25図4 | 円筒埴輪 | | | | | L-中 垂角 | L-中 垂角 | | | | | | | | | | | L-僅 | M-中 E-中 | M-僅 | L-中 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第25図3 | 円筒埴輪 | | | | | L-中 垂角 | L-中 角 | | | | | | | | | | | M-稀 E-稀 | M-中 | L-僅 | L-多 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第25図8 | 円筒埴輪 | L-僅 角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-微 | M-中 | L-僅 | L-多 | | | S-微 | | | 1b 類型 摂津西部 | |
| 第26図17 | 円筒埴輪 | L-稀 角 | | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | | | | | L-僅 | M-中 | M-僅 | M-多 | | | S-僅 | | | 1bd 類型 摂津西部 | |
| 第20図44 | 円筒埴輪 | | | | | | M-中 角 | | | | | | | | | | | M-微 | S-僅 E-稀 | M-僅 | S-多 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 実171 | 形象埴輪 | | | | | | | | | | | | | | | | | S-中 | | S-多 | | S-微 板 | S-微 | | | | 1b 類型? 摂津西? | |
| 第21図52 | 土師器 小形丸底 | | | | | L-稀 角 | M-中 角 | | | | | | | | | | | L-稀 | M-中 E-僅 | M-中 | | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |
| 第27図1 | 須恵器 | | | | | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | M-中 E-僅 | M-僅 | M-多 | | | | S-微 | | | 4n 類型 摂津中部 | |
| 第21図60 | 須恵器 高坏 | | | | | M-僅 垂角 | M-稀 垂角 | | | | | | | | | | | L-稀 | M-僅 E-多 | | | | | S-稀 | | | 4gn 類型 和泉北部 | |
| 実41 | 須恵器 坏身 | | | | | L-僅 角 | L-僅 角 | | | L-稀 垂角 | | | | | | | | M-中 E-多 | | | | | | S-稀 | | | 4gn 類型 和泉北部 | |
| 実45 | 須恵器 | | | | | | S-多 角 | | | | | | | | | | | | S-中 | | S-中 | | | | | | 4d 類型 摂津中部 | |

裸眼=裸眼観察 裸眼による観察: L=粒径が2mm以上 M=粒径が2mm未満0.5mm以上 S=粒径が0.5mm未満 非=量が非常に多い 多=量が多い 中=量が中 僅=量が僅か 微=量がごく僅か 稀=量がごくごく僅か 30倍=実体顕微鏡の倍率が30倍 実体顕微鏡による観察: L=粒径が1mm以上 M=粒径が1mm未満0.3mm以上 S=粒径が0.3mm未満 --=以下の粒径がある E=自形 類型区分は奥田の区分(1992)「庄内式土器研究」2を参照。

*実41・45・171は図版未掲載

II. 御願塚古墳に関する史料（古文書）から

古文書の概要

御願塚の本田喜應氏宅に御願塚古墳に関する書類綴りが伝わっている。各書類は明治期に試みられた発掘の状況、墳頂に鎮座する南之神社の祭神に関する教部省・内務省とのやりとり、古墳にまつわる伝承等、興味深い内容を含んでいる。そのうち発掘状況については高井悌三郎「御願塚古墳」（『伊丹市史』第4巻）にも一部引用されている。

形態は、おおむね前半部はB4版（その多くは罫紙）、後半部はA4版の用紙を用いて筆書きし、袋綴じ（挿図は折り込み）にしてコヨリで綴じた文書20点（中に挿図8点）を、最終的にコヨリで綴じて一括している。中には書きこみ・訂正があって明らかに下書きと思われるもの、また、以前に書かれた文書を翻案・転記している文書もあり、内容的に重複する部分も多い。

翻刻の方法

今回、発掘調査報告書の刊行にあわせ、前記重複部分を除いて編冊の順に翻刻することとした。史料の性格上、縦組みとするので、次ページ以後に掲載する。なお、見開きページでは右ページ→左ページの順にレイアウトした。

翻刻は、旧字体の使用を避けて当用漢字を主体とし、句読点を適宜補った。原文で抹消されているものは曰で、虫損・湿損等により判読不能の文字は□（字数が不明の場合は〔 〕、または□）で示し、前後から文字が推定できる場合は右側に（ ）または（ カ）で記した。また誤字・脱字が明らかな場合も、同様に（ ）を付して訂正した。（ママ）は誤記であるが、原文のまま記したことを示す。

史料の内容

翻刻した範囲で史料に記された事実および伝承のうち、今回の報告に関するものを抽出して以下に記し、あわせて年表（108頁）を作成した。なお、とくに注記のないものは史料10による。

- ①塚地築造の伝承 史料13によれば、『摂陽群談』塚の部を引用し、天平勝宝年中（749～57）聖武天皇の勅願により行基が四十九院を開いて熊野権現を勧請したとき、天皇が行幸して49カ所の中央であることからこの塚を築かせ、御願塚と命名したと記す。なお、亀形の丘であることから亀甲山車塚とも称するという。
- ②「御願塚」の称 御願塚に加え掛塚・抜目塚・破レ塚・三ツ塚の4塚があることから「五ヶ塚」と称したが、昆陽寺を開基した行基が弘法のためこの塚に祈願した由縁から、後に御願塚村に改めたという。①に記した説とは異なるが、地名のいわれとしては現在はこちらの説がよく用いられる。なお、4塚の名には種々の字が当てられるが、『伊丹の文化財』では掛塚・温塚・破塚・満塚としている。
- ③「孝謙天皇」「孝徳天皇」の称 棟札から延宝9年（1681）9月に上葺（雨覆・覆い屋）を建立したことが明らかだが、それが初めてのことかどうかは不明で、このうちに祀られた社殿（本殿であろう）の創造年代も不詳という。また、享保4年（1719）2月29日付の修復時の棟札には「孝謙天皇社」とあり、また、古老の口碑でも古来より孝謙天皇御陵として奉仕してきたという。ところが文政5年（1822）雨覆普請願いを大阪町奉行所に提出した際、神職が不在であることから孝謙天皇ではなく孝徳天皇であると指導を受け、以来孝徳天皇御陵墓と称することになった。しかし、

奉行所側に確固とした根拠があったのかどうかは知らないという。

石田茂輔「大阪磯長陵^{しながのみささぎ}」(吉川弘文館『国史大辞典』)によれば、孝徳天皇陵はすでに「元禄の山陵探索の際、(中略)現陵に決められた」とある(⑥参照)。こうした不明確さが、維新後の明治8年(1875)の発掘調査につながっていくことになる。

- ④土器の出土 50～60年前(1820年前後)に樹木(史料19では霧島・五月)を植えるため東北側の塚腹を掘削したとき、口径7～8寸(25cm前後)の壺が1個出土した。ある人の説に「御陵墓の周囲には必ず12個の壺があり、12人の侍女が頭髪を切って壺に納めて埋める例がある」といい、この壺はその12個の一つで、御陵墓である証拠であるという。
- ⑤明治8年の発掘 明治8年9月ごろ、兵庫県社寺係官吏のカミ谷氏が巡回の際、この山陵について質問があり、本村には確たる書類がないと答えたところ、「普通の神社ではないので、掘穿して結果を見るがよい」といわれた。村民は「この山陵を鋤・鍬で掘穿すれば、即座に体に障りがあるとの言い伝え」により辞退したが、カミ谷氏から「そのようなことは決してない。現場に出動するので掘穿せよ」指示され、掘穿に着手した。その結果、6尺(約2m)余り下から濃栗色で油分を含んで日光を反射しそうな漆喰を山高の形に平坦に敷き、その下に野面石で亀甲の形に組み立てた石垣があった。その上面は同一で、周囲に厚さ7～8寸(25cm前後)の漆喰が幅5尺(約1.65m)ほど敷かれていた。官吏(カミ谷氏)は以上の状況を実見の上、現場をそのままにして概ねの形状を伺い出るよう命じた。そこで絵図面を添え、兵庫県令神田孝平あて同年10月25日付で現地見分取調べを願う伺書を提出した。なお、史料11に添付された図Dによると、このとき発掘されたのは南之神社本殿の床下であり、上屋をいったん取り除いて行われたものと思われる。
- ⑥否定された天皇陵 史料11によれば、県は⑤の伺書を受けて取り調べの上、村から提出された書面・絵図を添えて教部大輔穴戸磯あて11月27日付で「陵所の儀に付き上申」した。これに対する国の答は、早くも同年12月7日付で返され、「御願塚村孝徳天皇神社と伝える社内の古塚は今までどおり埋め置くこと。孝徳・孝謙両天皇の山陵は確定済み」とのことであった。孝徳天皇陵は大阪磯長陵(大阪府南河内郡太子町)、孝謙天皇陵は高野陵(奈良市山陵町)にそれぞれ決められている。
- ⑦再発掘願(明治32年) 村民は⑥により御陵墓であることを否定されても、なお「高位貴官の御墳墓」であると信じていた。そして、このまま放置することは不敬であり、将来のためにも事実を明らかにする必要があるとして、もう1回掘穿することを申請した(明治32年9月14日付。宛先不明。史料9)。同日付で川辺郡長佐藤忠夫宛にも実地見分を上申している(史料4)。これに先立つ同年3月27日付で内務大臣西郷従道に宛てた「御陵墓故跡取調書」(史料19)でも、史料10に記された経緯を再掲の上、「両天皇陵は確定している旨を達せられ、実に遺憾であったこと。有馬王子が有馬温泉へ行く途中、当村で亡くなったという言い伝えがあること」を記し、一度発掘して実証を確認することが本村の年来の希望であると述べている。
- ⑧円筒埴輪の発掘 御願塚古墳の埴丘部1反2畝25歩(実測面積1反3畝7歩=約1310㎡)は国有林法第8条第3号により大正2年(1913)7月14日付で払い下げを受けた。これを受けてか、翌3年3月中旬、埴丘に桧・杉苗木2000本余りを植え込んだが、その際、地中より円筒埴輪に似た種々の土器破片が出土した(史料19)。
- ⑨丘陵発掘願 おそらくは⑧の埴輪出土に刺激され、村民一同は一致協力して、大正4年3月付で発掘願いを兵庫県知事服部一三宛提出した。添付された「発掘理由書」には⑦で上げられた理由

のほか、「土中から掘り出された古器・埋却物を我が国歴史上の故実調査の資料に供し、微力ながら国家に貢献したい」という意図が示されている。

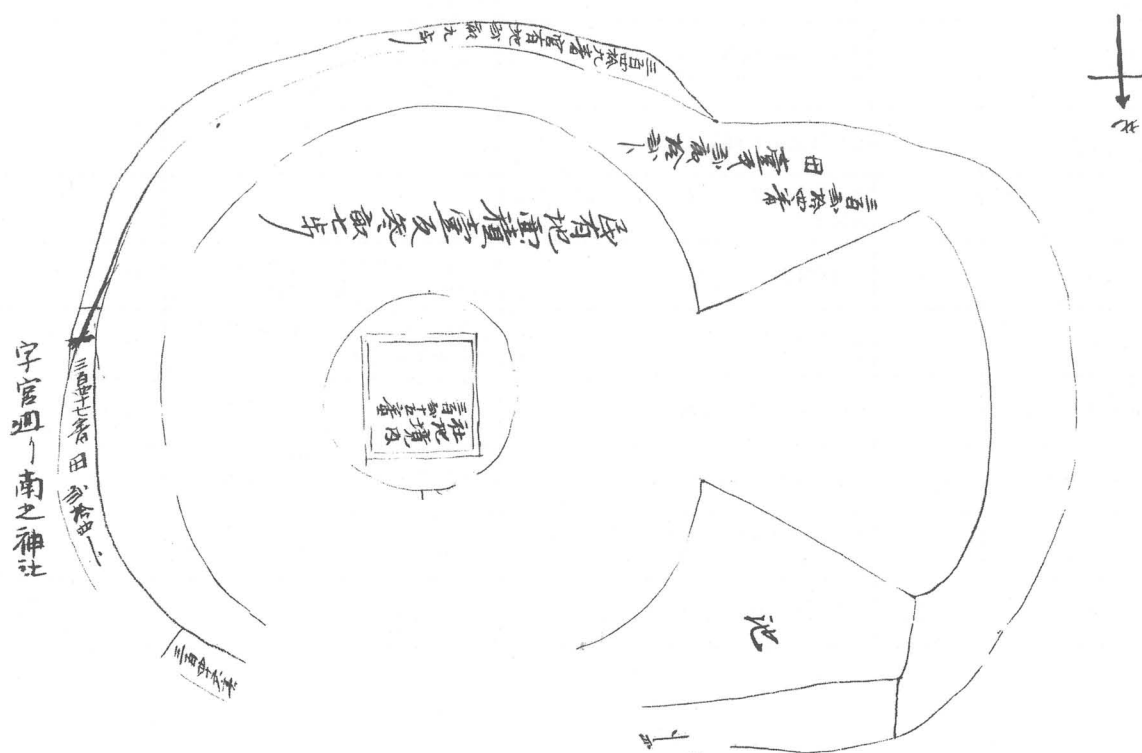
これと関係があるのかどうかは不明だが、同6年4月ごろ、内務省大臣官房地理課の職員が史蹟調査のため出張してきた。その際、地元御願塚の本田熊次郎区長がおそらくは⑦の「御陵墓故跡取調書」（史料 19）を持参して現地説明を行った。稲野村役場の福井書記がその書類を借用して謄写本を地理課へ発送した後、返却している（史料 11 添付の図 D および史料 12）。

おわりに

以上、史料の内容を概説したが、とくに興味深いのは明治8年の発掘が地元の発意によるのではなく、「兵庫県社寺係官吏カミ谷氏」の強い指導によって行われた経緯が明らかとなったことである。カミ谷氏は自ら現場に出勤して発掘を監督し、その結果から「大いに御陵墓の感を起さし」て県令に報告し、その報は教部大輔まで上申されたが、地元で伝承されていた「孝徳・孝謙両天皇の山陵」は確定済みとのことで却下されてしまった。大正4年の再度の調査願いについての回答書は綴られていないが、おそらくは再度却下の憂き目に終わったことと思われる。

今後、周辺の古墳とあわせてさらに調査が進展することを期待したい。

（和島恭仁雄）



図B 南之神社敷地図

御願塚古墳関連年表 本田家文書より

| 年 月 日 | 西 暦 | 表 題 または 内 容 | 差出人 → 宛て名 | 資 料 名 |
|------------------|-------------|---|-------------------------------------|-----------------|
| 延宝9年9月 | 1681 | 亀甲山車塚に上葺1宇建立 | | 資料3・10・13・14・18 |
| 延宝 | 1673 ～81 | 塚中腹北手の黄金の松枯れ死 | | 資料18・19 |
| 享保4年 2月29日 | 1719 | 孝謙天皇社頭1宇修覆 | | 資料3・10・14・18 |
| 寛保 | 1741 ～44 | 大阪奉行所への書類に「孝謙天皇神社」※「享保」の誤りか | | 資料10 |
| 文政5年 2月28日 | 1822 | 孝徳天皇雨覆修覆。この時、大阪町奉行所の指導により孝謙天皇から改称 | | 資料3・10・13・14・18 |
| | 1839 ～49 | この頃、東北の塚腹より口径7～8寸の壺出土 | | 資料3・10・18・19 |
| 明治8年9月 | 1875 | 兵庫県社寺係カミ谷氏見分巡廻の際、試掘を指示され、6尺余り下より漆喰の上に築いた亀甲形石垣出土 | | 資料3・10・13・18 |
| 明治8年 10月25日 | 1875 | 伺い書（現地見分取り調べ願い） | 鞍谷繁右衛門、副戸長北市十郎・村上弥左エ門、寛惣右衛門 | 資料6・10 |
| 明治8年 11月27日 | 1875 | 陵所の儀に付き上申（孝徳天皇神社取り調べ報告） | 兵庫県令神田孝平 →教部大輔穴戸磯 | 資料10・11 |
| 明治8年 12月8(7)日 | 1875 | 孝徳天皇神社内古塚は従前通り埋め置くように。孝徳・孝謙天皇山陵は確定済み | | 資料11 |
| 明治32年 3月14日 | 1899 | 伺い書（再発掘許可願い） | 氏子惣代北市十郎、寛熊治郎、寛和三郎、区長本田熊次郎 | 資料5・9 |
| 明治32年 3月14日 | 1899 | 上申書（実地ご見分願い） | 御願塚村区長本田熊次郎 →川辺郡長依藤忠夫 | 資料4・8 |
| 明治32年 3月27日 | 1899 | 御陵墓故跡取調書付。保存法方補助願い | 御願塚村区長本田熊次郎、稲野村長前田半兵衛 →兵庫県知事大森鐘一 | 資料3・7・18 |
| 大正2年 7月14日 | 1913 | 国有林法第8條第3号により払い下げ | | 資料2 |
| 大正3年3月中旬 | 1914 | 桧・杉苗木数千本植え込みの際、円筒埴輪出土 | | 資料2 |
| 大正4年3月 | 1915 | 丘陵発掘願い | 南之神社信徒惣代 寛熊次郎、本田熊次郎、尾部岩次郎 | 資料2・14 |
| 大正4年5月 | 1915 | 御陵墓御調査願い | 南之神社信徒惣代 本田熊次郎、寛熊次郎、尾部 | 資料2 |
| 大正6年 | 1917 | 内務省地理課史蹟調査のため出張 | | 図D・資料12 |
| 大正6年4月 | 1917 | 亀甲山車塚丘陵無格神社由緒調査書 | 信徒惣代本田熊次郎→内務省 | 資料13 |
| 大正6年4月6日 | 1917 | 内務省地理課史蹟調査の際借用の取り調べ書返却 | 稲野村書記福井□□→本田熊次郎 | 資料11・12 |
| 大正6年7月 | 1917 | 無格社南之神社祭神・考証等 | 本田熊次郎 | 資料19 |

【資料1】 (罫紙使用、下半欠損)

一 御願成就塚 河辺郡 御

右御願成就塚御願塚村南ノ 経リ七拾間余、高サ三間半程、

伝 勝宝年中 聖武 勅願ニ依テ行基菩薩ノ

権現ノ神靈ヲ勸 天皇于是行幸 此塚ヲ築シメ御願

則地名是ニ因ル 祠在、御願ノ宮ト唱 不相知ト雖モ

孝徳天皇ヲ奉祭、伝来ノ旧記 得トモ中昔ノ頃焼失スル

御座候

【資料2】 (罫紙使用、下半欠損)

御陵墓^御調査願

兵庫県川辺郡稲野村之内御 廻リ龜甲山車塚^{天皇}ト称シ、維新南之神

社ト称シ奉ル、古来ヨリ無 皇ト拜奉ル、大正貳年七月拾四日付

林法第八條第參号依リ払下ヲ受タリ、 參年三月中旬檢・

杉苗木数千 地中ヨリ円筒埴輪ニ相 尚又種々之埴片ヲシキ

物 三月廿五日丘陵発掘願 伝エル由緒書相添上申仕

御陵古墳御調査成被 添御願申上候

川辺郡稲野村ノ内御願
無格社南之神社信徒惣代

本田熊次

篁熊

大正四年五月

尾部

【図A】 南之神社見取り図(図Cと略同様につき省略)

【図B】 南之神社敷地図 (107ページに掲載)

【資料3】 御陵墓及有名家墳墓故跡取調書(資料10と同様につき省略)

【資料4】 (罫紙使用)

上 申 書

川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ御座候我氏神々社、村中之人民御
高貴ノ山陵ト段々申立、何分往古以來確タル書類無之候得共、古来ヨ
リ書類・口碑ニ聞伝来り候、別紙書之通り有之而已御座候得共、最
度掘穿之御許可御伺モ有之候間、猶々实地ニ付テは口碑ニ伝聞候義モ
有之、何分筆ヲ耕ス不能、右様之次第ニ付、实地御見分之上は、往古
聞仕候言種々申上度事有之間、甚々恐縮ニ御座候得共、何卒一応御見
分被成下度、此段上申候也

明治三拾貳年三月十四日

川辺郡長依藤忠夫殿

川辺郡稲野村ノ内御願塚村区長
本田熊次郎

【資料5】 伺書(資料9と同様につき省略)

【資料6】 伺書(資料10と同様につき省略)

【資料7】 (罫紙使用)

保存方法御伺理由

一 我本村氏神素盞男神社、且外二大神宮老社、猶龜井山トモ云ヒ御願

一所在地 川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ

一建立若クハ発見ノ年月日

延宝九年九月上葺老宇建立ト記セリ

此時始メテ建テ、其以前ハ果シテ建物ナカリシヤ否ヲ知ルニ由ナシ、且此内ニ祀レル一社殿アリ、創造年代詳ラス、思フニ上葺建立ヨリ早キモ、決シテ晩キニアラスト推測セラレタリ

一考証トナルヘキ書類ノ抜書及其書名

棟札ノ写左ニ

別当昆陽寺宝持院

延宝第九天

神主大工

長右エ門

五右エ門

奉建立上葺老宇諸願成就祈所

西九月吉祥日

大願主

善左衛門

又七郎

又

年寄宮座中

聖主天中天迦陵頻伽声 別当昆陽寺

奉修覆皇謙天皇社頭一宇村内繁昌祈所

哀愍衆生故我等今敬礼 宝持院覚心

其裏ニ 享保四己亥歲

二月廿九日 宮座衆等

又

天下泰平五穀

奉修覆孝徳天皇雨覆老宇村中安全祈所

成就風雨順時

其裏ニ文政五年二月廿八日トアリ

右ハ本社雨覆建立修覆ノ際、張付ケタル棟札ノ写ニシテ今尚保存セ

リ、又タ本村古老ノ口碑ニ伝フル所ヲ聞ケハ、古来ヨリ孝謙天皇御陵ナリト唱ヘ奉仕セシ処、文政五年雨覆普請願ノ節、大阪町奉行所エ孝謙天皇御陵ト書上ケタリ、然ルニ社人有之哉ト御尋故、無御座段答申セシ処、御取調ノ上、右ハ孝謙天皇ニテハナク孝徳天皇ナルヘシト申聞カサレタリ、依テ其節ヨリ孝徳天皇御陵墓ト称シ奉ル事トハナレリ、然レトモ其際確乎抛ルヘキ所アツテ奉行所ヨリ申聞カサレタル言ナルヤ否ニ至テハ村民等ノ知ル所ニアラズ、且塚ノ中服北手ニ黄金ノ松ト唱ヘ廻リ老丈余リ古松ノ切株アリ、此下ニ黄金ノ鳥ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松ヲ切りタル年代ヲ知ル者本村ニ無之、又五六拾年前、樹木ヲ植ヘントシテ東北ノ方塚服ヲ掘穿セシニ、口径七八寸斗リノ壺壹個現出ス、其時或人ハ御陵ノ墓ノ周圍ニ必ス拾二個ノ壺アリ、此壺ニハ拾式ノ侍女頭髮ヲ切り壺ニ納メテ埋ムノ例アリト聞ケリ、此ヲ以テ考フレハ、此壺ハ彼ノ拾式個ノ一ツニシテ、其他ニ必ズ拾壹個(埋脱)アルハ疑ヲ容レザル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云シコトアリ、値テ壺壹個現出ノ際、掘穿人ノ身体動カサルノ障リアリト云フモノアリ、此言ノ果シテ当レルヤ否ヲ知ラズ

一未タ確定セサル処其要略

明治八年九月頃兵庫本県社事係リカミ谷氏官吏官見分巡廻ノ際、当山陵ノ御尋ニ相成候処、本村ニテハ確タル書類無之ト前陳ノ如ク申述候エハ、カミ谷氏官吏ノ仰セニハ、普通ノ社ニアラズ、依テ今当一尚応堀穿シ其實験ヲ見ルガ好シト被申候ニ共、我本村民ニシテハ此山陵ニ鋤鉄ヲ以テ堀穿ナドハ、聞伝ニヨリ手ヲ触ル等シテハ即座ニ身

山トモ云フ一社アリ、合セテ三社ナリ、我小部落三社ヲ保存スルノニシテ〇村社一社而已ヲ以来御守祭来リ、其雨覆修復等其他ニ係ル推持法大井〇ニ心苦ヲ尽シ候而已ナラズ、就中該同神社ハ境内外敷地小丘状ニテ載面ニ神祠建立シ、現況ヲ拝シテモ他ノ二社トハ大井ニ異ルコト大差ナリ、付テハ先キニ差出シタル往古以来書類上申書ニ付添へ、此雨覆往古修繕タルヤ、年号不詳、御領主安倍豊後守様より金五百疋御寄付ニ相成リ、且岡野孫一郎様より金百疋御寄付ニ相成リ候寄付札発覚仕リ、考ルニ往古ハ御上様より（若）箴干之御補助有之候哉ト存、値テ御高貴之由緒ニ御座候ト相察シ候テハ、甚ダ恐多キコトニ有之、猶去レト保護スルニ不敬之至リニ候得共、何分小部落ニシテ右様之次第ニ而完全ナル保存到抵難出来候間、何卒保存法方御下付請求伺云々

【資料8】 上申書（資料4と同様につき省略）

【資料9】 （罫紙使用）

備 上申書

川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ亀井山ト称シ奉ル社祠、古来ヨリ孝謙天皇御陵ト云ヒ、或ハ孝徳天皇御陵トモ申伝候ニ付、今般取調候処、別紙之通ニ有之、其証跡トスル処明確ナラスト雖モ、既ニ享保年間ニ於テ孝謙天皇タルコトヲ明記シ奉ル棟札ニ掲ケ、且明治八年堀穿シタル当時ノ形跡ナリ口碑ニ伝フル所ナリ、又タ該塚状況ナリ参照スルトキハ果ベ御陵タランカノ感ヲ与フルモノ有之候ニ付テハ、両天皇御陵墓無之トモ、必ズ高貴ノ御墳墓ニ有之様被存候、右ハ村民等ニ於

テ堅ク御山陵ト信シ、現今ノ姿ニシテ打過タランニハ甚タ不敬ニシテ、且将来世ニ明ナルノ時来ナラサルヲ患へ、依テ遺憾之至リニ存候間、最一回堀穿ヲ御許可被成下度、此段氏子惣代・区長連署ヲ以テ御伺奉申上候也

明治三十拾貳年三月十四日

氏子惣代

北市十郎

篁熊治郎

篁和三郎

区長

本田熊次郎[㊦]

【資料10】 （罫紙使用）

御陵墓及有名家ノ墳墓故跡取調書

名称 所在地名

掛塚 川辺郡稲野村ノ内御願塚村字上掛塚

抜免塚 同郡同村ノ内同村字抜免塚

破レ塚 同郡同村ノ内同村字上池ノ上

三ツ塚 同郡同村ノ内同村字トテラ

以上ノ四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之カ原因ヲ詳ニセス、口碑ニ拠レハ此四塚ト外ニ御願塚ヲ合セ五ツノ塚アルヲ以、素ト五ヶ塚ト称セリ、然ルヲ昆陽寺開基僧行基ナル者、法弘ノ為メ此塚ニ祈願シタルコトアリ、其縁由ヲ以テ、后チ御願塚村ノ改メタリト云フ、且現時ノ景況ハ田間ニ小丘状ヲナシ、雑草ヲ生ス

一名 称 御願塚

体恐障アル故辞退シ、左様ナル事決シテ無之、此現場出勤スル故、堀穿ノ仰セニテ人民其力ヲエ、最初人足一ヒ・二フ・三ツ之合声ニテ堀穿ニ着手ス、凡六尺余リ下ニ濃栗色之油分ヲ含ミタル、日光ニ映セハ光ヲ発スベキ様ナル漆喰ヲ山高之形チニ平坦に敷キ、其下ニ野面石ヲ以テ亀甲ノ形チノ石垣ヲ組立アリ、其頂面同一ニシテ周圍ニ厚サ七八寸斗リノ漆喰、巾五尺程敷流アル現場ヲ官吏実見ノ上、此俣ニシテ該形状ヲ伺出ベク様被申付、其伺書ハ左ニ

伺書

第拾区川辺郡

御願塚村

当村神社之内現今孝徳天皇ト相唱居候神社ノ境内、往古孝謙天皇ノ御陵ト申伝ヘ居候ニ付、文政年中ニ右雨覆修覆大阪町奉行所エ孝謙天皇神社ト書上候処、孝謙天皇ナラバ社人可有之哉ト御尋有之、右御守人無御座候段奉申上候得バ、社人無之ニ付テハ孝謙天皇ニテハ無之、孝徳天^(皇脱)ト唱替居、然ル処、御一新後度々神社御調之節、村方ニ於テ確書等モ御座ナク候ニ付、孝徳天皇ト奉申上来リ候工共、当節ニ至リ御上様ニモ孝謙天皇御陵無御座候由粗承リ、就テテハ村中者共往古ヨリ聞伝ノ廉モ有之、然ルニ万一山陵ニ御座候処、我々猥リ^レニ登リテハ恐入義、右ニ付村中書類段々取調候処、寛保年中ニ大阪奉行所ヘ孝謙天皇神社ト書上候控書、当節見当リ候ニ付、当否明瞭ニ仕度故、右古墳中央堀穿候処、別紙絵図面之通り石垣積立、石炭ニ詰込メ有之候間、此上ハ現地御見分之上實際御取調被成下度、尤モ本文之義、孝徳^謙天皇御陵ニ無御座候トモ、御歴代之御陵墓ニ相違間敷ト奉存候間、更ニ皆境内御取調被成下度、即チ絵図面相添、此段奉願候也

右村神主
鞍谷繁右エ門
副戸長
北 市十郎
戸長
篁 惣右エ門
明治八年
十月廿五日
兵庫県令神田孝平殿

十二号十月卅一日
甲第千百三拾五号

陵所之儀ニ付上申

当県下第拾区川辺郡御願塚村孝徳天皇神社境内堀穿、下夕ニ石垣組立有之旨等別紙之通り申出候ニ付實際取調候処、記録等ハ無之、塚形周圍七拾間程、樹木林立有之、今般六尺程堀穿候処、石垣有之候義ト書面之通り相違無之候ニ付、右村方ヨリ差出候書面・絵図共相添ヘ、此段上申候也

兵庫県令神田孝平

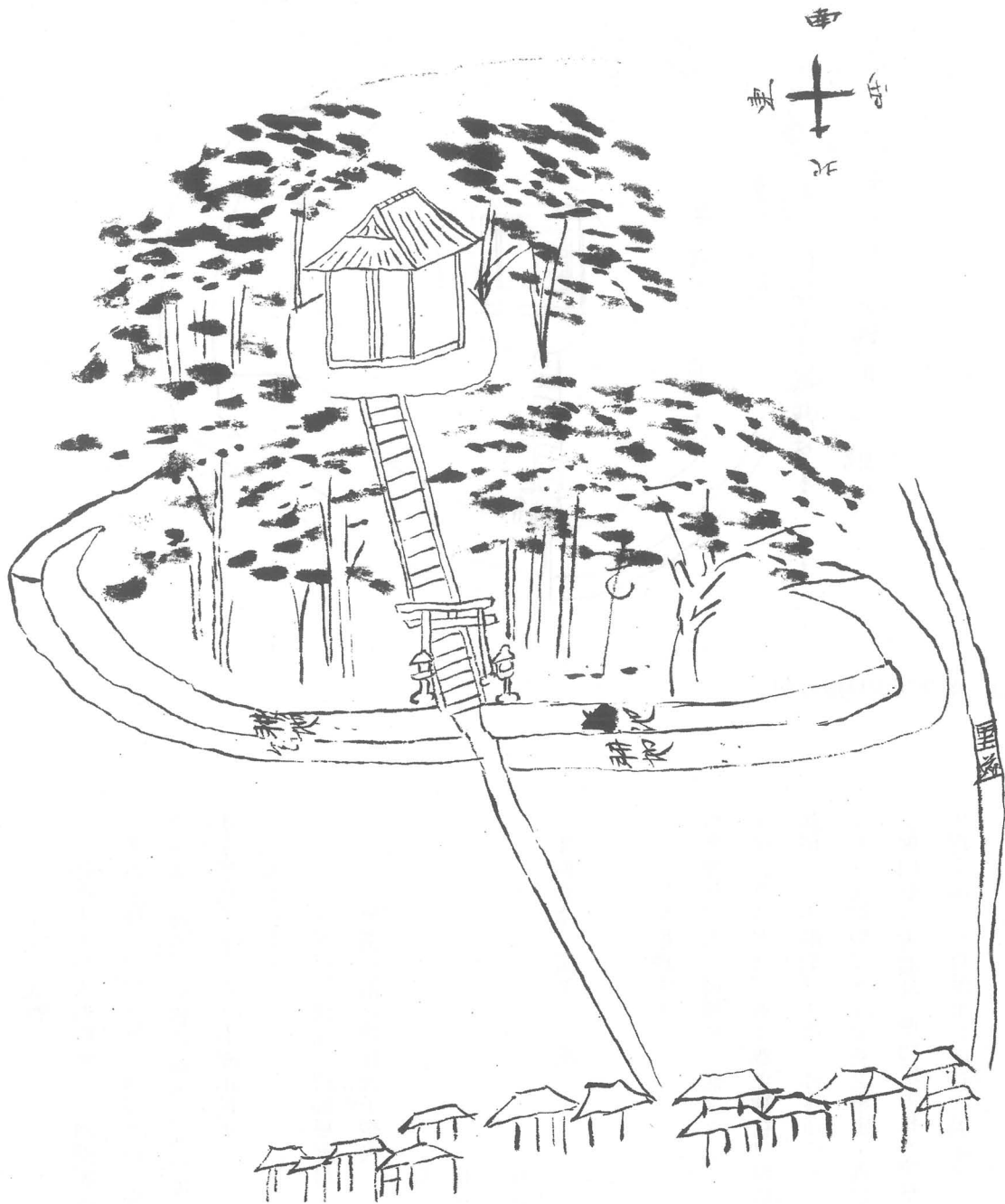
明治八年十一月廿七日

教部大輔穴戸磯殿

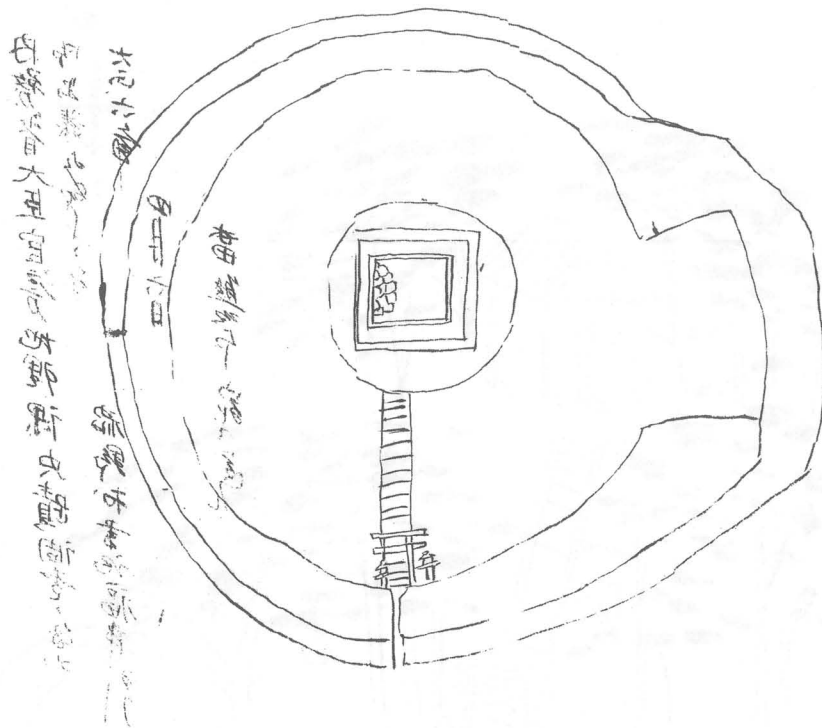
書面御願塚村孝徳天皇神社ト申伝候社内古塚之義ハ従前之通り埋置可申、尤モ孝徳・孝謙両天皇山陵之儀ハ、別紙ノ通り確定相成居候事
明治八年十二月七日

孝徳天皇

河内国石川郡



図C 古墳見取り図



図D 堀穿状況見取り図

【資料14】 (野紙使用)

丘陵発堀願

兵庫県摂津国川辺郡稻野村ノ内御願塚村字宮廻リ無格社南之神社龜甲山車塚丘陵、村民一同一致協力以テ発堀ヲ試之度度希望ニ付、何卒御許可成シ被度、別紙丘陵古伝来口碑由緒取調書及発掘理由書相添エ氏子惣代連署ヲ以テ右願出候也

大正四年参月

兵庫県摂津国川辺郡稻野村ノ内御願塚村

無格社南之神社氏子惣代

篁 熊次郎 ㊦

本田熊次郎 ㊦

尾部岩次郎 ㊦

兵庫県知事 服部一三殿

発掘理由書

仮令歴代之天皇御陵墓ニ無之クトモ、必ズ往古之高位貴官之御墳墓タルヤ言ヲ待タズ、斯ル尊キ神社ヲ現時之状態ニ放棄シ置クハ、敬神上如何ニモ不敬窮リ人倫ニ悖ル所ナレバ、再度発掘ヲ試ミ、御陵墓タルヤハタ又御墳墓タルヤ其之事実・真相ヲ検査シ、且発掘ニ依リ土中ヨリ掘出セシ古器却レ埋物以テ我方国歴史上故実調査之資料ニ供シ、聊カ以テ国家ニ貢献セン所存ニ過ギズ

II. 御願塚古墳に関する史料（古文書）から

大阪磯長陵 山田邨
孝謙天皇 大和国添上郡
高野陵 山上邨

【資料11】（罫紙使用）

十二号十月卅一日
甲第千百三拾五号

陵所之儀ニ付上申

当県下第拾区川辺郡御願塚村孝徳天皇神社境内堀穿、下夕ニ石垣組立有之旨等別紙之通り申出候ニ付實際取調候処、記録等ハ無之、塚形周囲七拾間程、樹木林立有之、今般六尺程堀穿候処、石垣有之候義ト書面之通相違無之候ニ付、右村方ヨリ差出候書面・絵図共相添へ、此段上申候也

明治八年十一月廿七日

兵庫県令神田孝平

教部大輔宍戸璣殿

書面御願塚村孝徳天皇神社ト申伝候社内古塚之義ハ従前之通り埋置可申、尤モ孝徳・孝謙両天皇山陵之儀ハ、別紙ノ通り確定相成居候事

明治八年十二月七日

孝徳天皇 河内国石川郡
大阪磯長陵 山田邨
孝謙天皇 大和国添上郡

高野陵

山上邨

【図C】（古墳見取り図）

【図D】（堀穿状況見取り図）

（図D裏書）

〔内務省大臣官房地理課史蹟調査ノため御出張相成候ニ付
稲野村書記福井ヨリ

大正六年四月六日

本田熊次郎宛ニ送ル

【資料12】（兵庫県川辺郡稲野村役場）罫紙使用）

拝啓

先達テ内務省ヨリ史蹟調査ノため御出張相成候節、御足労ニ相成、奉拝謝候、其節拝借致候別紙取調書、謄写ノ上内務省大臣官房地理課へ發送致候ニ付、御了承被下度、別紙御返付致候間、御落手被下度、右得貴意候、拝□

四月六日

福井□□印

本田熊次郎 殿

（欄外）

〔大正六年〕

【資料13】

亀甲山車塚丘陵

無格神社由緒調査書（資料18と同様につき省略）

奉修履孝徳天皇雨覆一字村中安全祈所
成就風雨順時

其裏

文政五年二月廿八日

以上、本社雨覆建立修履ノ際、張付タル棟札ノ写ニシテ、今猶保存セリ、又タ本村古老ノ口碑ニ伝ル所ヲ聞ケハ、古来ヨリ孝謙天皇御陵ナリト唱奉仕シ^(候脱)文政五年^雨覆普請ノ節、大阪町奉行所エ孝謙天皇御陵ト書上タリ、然ルニ社人有之哉ト御尋故、無座無ト答申セシ^候御取調ノ上、右ハ孝謙天皇ニテハナク孝徳天皇ナルベシト申聞サレタリ、依テ其節ヨリ孝徳天皇御陵墓ト称シ奉ル事トハナレリ、然レトモ其際確乎抛ルヘキ所アツテ奉行所ヨリ申聞カサレタル言ナルヤ否ニ至テハ村民等ノ知ル所ニアラズ、且塚^車ノ中服北手ニ黄金ノ松ト唱ヘ廻リ壺丈余リ古松ノ切株アリ、此下タニ黄金ノ鳥ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松ヲ切りタル年代ヲ知ラズ、又々社殿ノ東軒下ニ往古ヨリ老大杉樹アリ、延宝年間落雷ノ為メ遂ニ枯死ス、是レ御屍埋没ノ際植付タルト昔ヨリ言ヒ伝フ、猶五六拾年前、樹木ヲ植ヘントシテ東北ノ方塚服ヲ堀穿セシニ、口径七八寸斗リノ壺一個現出ス、其時或人ハ御陵ノ墓ノ周圍ニ必ズ拾式個ノ壺アリ、此壺ニハ拾式侍女頭髮ヲ切り壺ニ納メテ埋ムノ例アリト聞ケリ、此ヲ以テ考フレハ、此壺ハ彼ノ拾式個ノ一ニシテ、其他必ズ拾壺埋捨シアルハ疑ヲ容レサル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云シコトアリ、且近傍に左之四塚アリ

掛 塚 川辺郡稲野村之内御願塚村字上掛塚

本陵ヨリ去ルコト七拾間

拔メ塚 同 郡 同村之内同村字拔メ塚

破レ塚 同 郡 同村之内同村字東野代

本陵ヨリ去ルコト百間

三ツ塚 同 郡 同村之内同村字三ツ塚

本陵ヨリ去ルコト百五拾間

以上四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之ヲ原因ヲ詳ニセズ、口碑ニ抛レハ此四塚ト外ニ本陵ヲ合セテ五ツノ塚アルヲ以テ、素ト五ヶ塚ト称セリ、然ルヲ昆陽寺開基ノ僧行基ナル者、法弘ノ為メ此塚ニ祈願シタル事アリ、其縁由ヲ以テ、后チ御願塚村ト改メタリト云フ、且現時ノ景況ハ田間ニ小丘状ヲナシ雜草ヲ生ズ、明治八年九月本県社寺係員宮見分巡廻ノ際、当山陵ノ御尋ニ相成候処、本村ニテハ確タル書類無之ト前陳ノ如ク申述候エハ、吏員ノ仰セニハ、普通ノ社ニアラズ、依テ一応堀穿シ実見セラルニ当リ、凡ソ六尺余下タニ濃栗色ノ油分ヲ含ミタル、日光ニ映セハ光ヲ発スベキ様ナル漆喰ヲ山高ノ形チニ敷キ、其下ニ野面石ヲ以テ亀甲形チノ石垣ヲ組立アリ、其頂面同一ニシテ周圍ニ厚サ七八寸斗リノ漆喰、巾五尺程敷流アル現況ヲ認メラレ、大二御陵墓ノ感ヲ起セラレ、県令ヨリ教部大輔迄上申ニ被及候処、両天皇御陵ハ最早確定後、其旨被達、実ニ遺憾ニ御座候、仄ニ聞ク、昔シ摂州長柄ニ帝都在ラセラルノ際、有馬王子有馬温泉エ御入浴ノ御道中、当村ニ於テ薨去アラセラレシトモ云フ、兔ニ角高貴ノ御墳墓ト被認候ニ付、一度發鑿ノ上、其実証確認致度事、年来本村ノ希望ニ御座候^(ママ)保存方法

当村ニ氏神三社アリ、一ツヲ亀甲山或ハ御願山トモ云フ、是即チ当社ナリ、然ルニ本村ハ小部落ニシテ三社ヲ保存スルモ資力乏シキ為メ、

【資料15】（野紙使用）

経歴及沿革之概略

延宝年間ニ上葺建立シ、享保四年ニ至リ社頭修覆、文政五年雨覆修覆云々ト棟札ニ記載シ之レアリト雖モ、其時建テ換タルモノ、如ク見エタリ、現在之建物ハ文政五年之建換ニ係リ、本年迄百有余年之星霜ヲ経タルモノナラン、且塚之周囲ニ幅四間乃至五間余リノ堀アリ、然ルヲ今約八拾年程前ヨリ漸次開墾シ九分迄田ニ変ズ、残り壹部ハ今尚ホ蓮池トシテ存ズ
現在之景況

塚之周囲凡ソ八拾間、高サ斜面凡ソ七間、服部雜木林立シ鬱蒼タリ、北手ニ石段ヲ設ケテ参拝人ノ便ニ供ス、塚上ニ式間四方之祠北面ス
其他普通神社之体裁ニ異ナラス

【資料16】 川辺郡訓令第壹号（大祭執行の模様届け出ること。省略）

【資料17】 内務大臣等連名（省略）

【資料18】

御陵墓故跡取調書

名称 亀甲山車塚天皇
所在地 川辺郡稲野村之内御願塚村
広表 壹段参畝廿五歩

地種目 官有地第一種

現況 小丘亀甲形ヲナシ頂上迄九間余、別紙図面ノ如キ樹木

繁茂シ御陵ノ態ヲナス

縁由概略 亀甲山車塚ハ延宝九年九月上葺一宇建立ト記セリ、此

時始メテ建テ、其以前ハ果シテ建物ナカリシヤ否ヲ知ルニ由

ナシ、且其内ニ祀レル一社殿アリ、創造年代詳ナラズ、思フ

ニ上葺建立ヨリハ早キモ、決シテ晚キニアラスト推測セラレ

タリ

考証トナルベキ証類抜書及ビ其書明

棟札写左ニ

別当昆陽寺宝持院

延宝第九天 神主大工 長右エ門

奉建立葺（上脱）一宇諸願成就祈所 五右エ門

西九月吉祥日 大願主 善左衛門

年寄宮座中 又七郎

又

聖主天中天迎陵頻伽声 別当昆陽寺

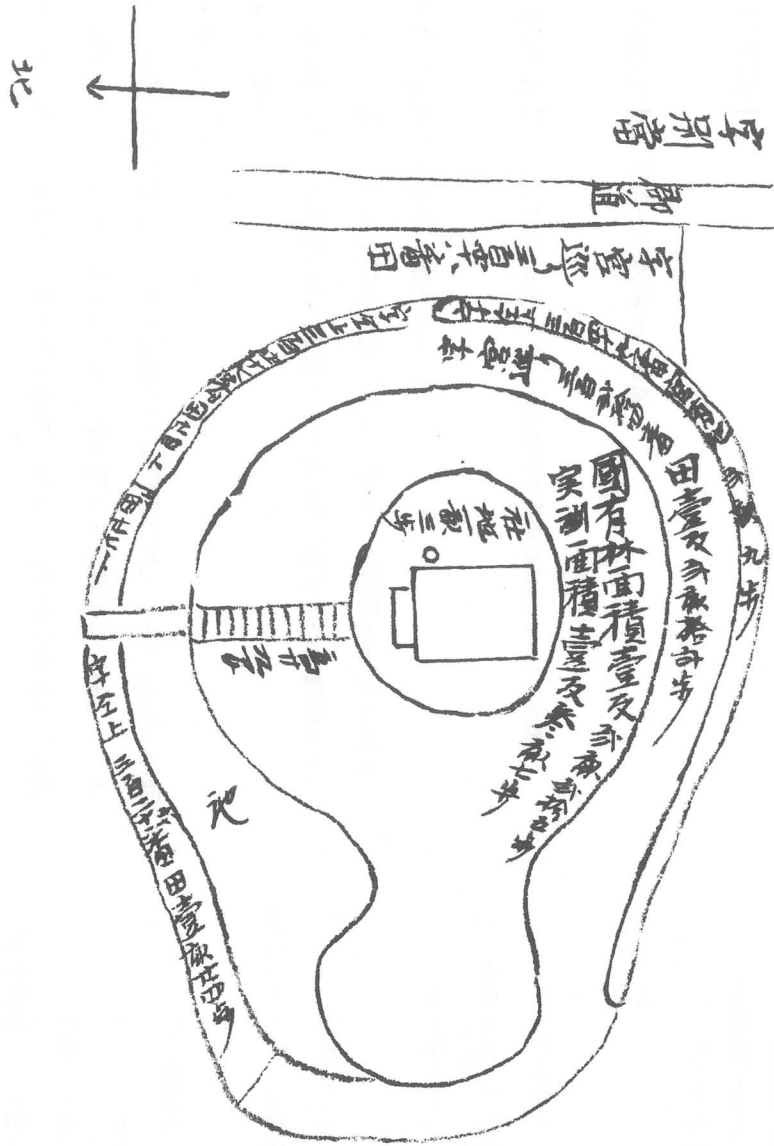
奉修覆皇兼天皇社頭一宇村内繁昌祈所

哀愍衆生故我等今敬礼 宝持院覺心

其裏 享保四己亥歲 宮座衆等

又

二月廿九日 天下泰平五穀



大正三年七月十四日
國有林野法ニテ特賣ヲウリ

図G 南之神社境内周辺図

充分ノ保存法ヲ講スル不能、往古ノ修繕タルヤ、当御領主阿部豊後守様ヨリ金五百疋御寄付ニ相成リ、旗本岡野孫一郎様ヨリ金百疋御寄付ニ相成リ、或ハ協議費ヲ募リ、夫是ノ資金ヲ補修シ来リタルモ、当今ニ至リ大荒廢シ、到底民力ノ不及ル処依リ、金四百円補助ヲ受タルナラバ、年々ノ修補ハ其利子ニテ維持シ得ラルルニ依リ、何卒特別ノ御詮議ヲ以テ御補助被下度、此段奉願候

兵庫県川辺郡稲野村ノ内御願塚村

明治参拾貳年三月廿七日

区长 本田熊次郎 ㊤ ㊤

前書之通相違無之、依テ奥印候也

川辺郡稲野村長

前田半兵衛 ㊤

明治参拾貳年参月式拾七日

内務大臣 西郷従道殿

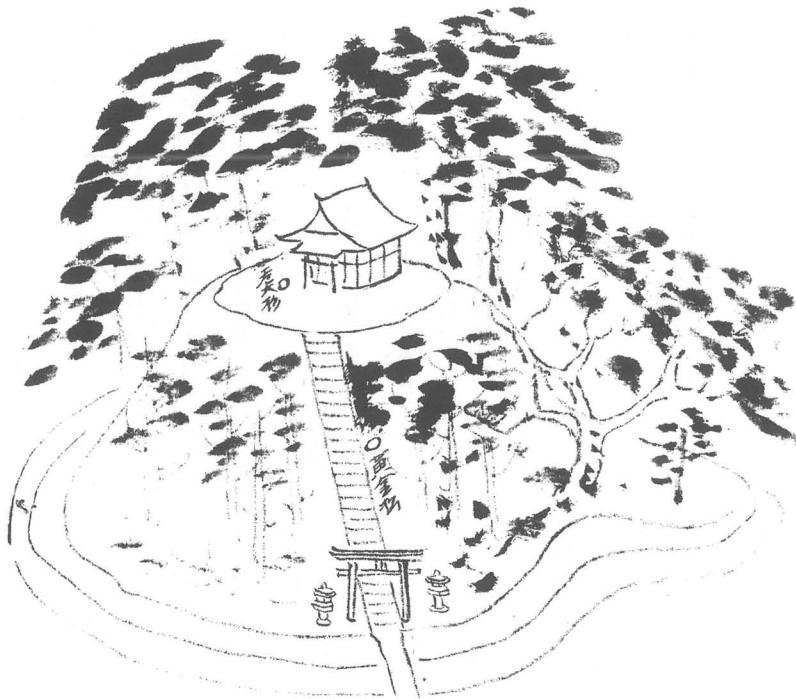
【図E】 南之神社拜殿（省略）

【図F】 南之神社覆屋（省略）

【図G】 南之神社境内周辺図

【図H】 古墳外形図

【資料19】



図H 古墳外形図

川辺郡稲野村之内御願塚字宮廻り

参百式拾五番無格社南之神社

一 祭神 孝徳天皇

一 由緒

一 考証 撰陽群談ニ御願成就塚ハ御願塚村南之方壺丁斗リ、周圍七拾間余リ、高サ参間半程地ナリ、天平勝宝年中聖武天皇勅願ニ依テ行基菩薩四拾九院ヲ開テ熊野權現ノ神靈ヲ勸請セリ、此時天皇是ニ行幸、四拾九所ノ中央タルヲ以テ此塚ヲ築シメ、御願塚成就^塚ト称名アリ、則地名是ニ因ルト申伝、現今^塚ノ上ニ御願宮ト唱、勸請ノ由来年曆相知ト雖モ、孝徳天皇ヲ奉祭伝来セリ

一口老伝説

御願墓タル一証ナリト云シコトアリ、近傍ニ左ノ四塚

アリ

一字掛ヶ塚 御願塚村字上掛塚 本陵ヨリ七拾間

一字拔メ塚 同 村字拔メ塚 同ヨリ百五拾間

一字破レ塚 同 村字東野代 同ヨリ百 間

一字三ツ塚 同 村字ドテラ 同ヨリ百五拾間

以上四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之ヲ原因ヲ詳ニセズ、口碑ニ拠レハ此四塚ト外ニ本陵ヲ合セテ五ツノ塚アルヲ以テ素ト五ヶ塚村ト称セリ、本陵中服北手ニ黄金松ト唱エ、廻リ壺丈余、古松ノ切株アリ、此下ニ黄金ノ鳥ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松を切りタル年代ヲ知ラズ、又社殿ノ東軒下ニ往古ヨリ老大杉樹アリ、延宝年間落雷ノ為メ枯死ス、凡九拾年前霧島五月樹木ヲ植シトキ、東北方塚服ヲ堀穿セ

シニ口径七八寸斗リ壺現出ス、其時或人ハ御陵墓ノ^(周)圍ニ必ズ拾式個ノ壺アリ、此壺ハ拾式侍女頭髮ヲ切り壺ニ納メテ^(埋)理ムノ例アリト聞ケリ、而テ此ヲ考フレハ此壺ハ彼ノ拾式個ノ一ニシテ其他必ズ拾壺個理捨シアルハ疑ヲ容レサル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云

尚又大正式年七月拾四日付ヲ以テ国有林法第八條第参号ニ依リ^(特)下ヲ受タリ、大正参年三月中旬、桧・杉木式千木余植込^(本)ノ際、地中ヨリ円筒埴輪ニ相似タル種々ノ土器破片現出セリ

一 此ヲ以テ考レハ、御陵墓無之トモ高位高官ノ墳墓タルコト明ニセリ

一 社殿瓦葺造 壺棟 此建坪六坪

一 境内地 参拾参坪

川辺郡稲野村之内御願塚無格社

南之神社信徒総代

本田熊次郎^(印)

大正六年七月

【資料 20】 (北之神社祭神等。省略)

第4章 総括

前章で述べた第8・9・10次調査の調査成果に若干の考察を合わせ、ここにまとめとしたい。

1. 旧地形

当古墳築造前の旧地形については、第8次調査墳丘部（造り出し）調査時に、古墳築造時の旧表土を検出した。上面の標高は9.6 mである。その直下は地山上層（粘土層）となる。地山上面は標高9.4 mを測る。第2～8、10次調査で外濠部の調査時に検出された堤と外濠外側は、後世の削平を受け、地山下層（礫層／標高8.7～8.9 m）での検出となった。

2. 墳丘

墳丘は旧表土を残したまま、地山を掘削し、墳丘裾・濠を形成している。墳丘は旧表土から上はすべて盛土で、後円部は2段築成である。第1段テラスは標高10.2 m、テラス幅は約2 m以上となる。残存する墳頂は標高15.0 mを測る。もとの墳頂は、神社建築時に削平されたと考えられる。墳頂周囲と第1段テラスには円筒埴輪・朝顔形埴輪が樹立されていたことが確かめられたが、形象埴輪は出土していない。墳丘の斜面は、傾斜角30度を測る。基底石を含め原位置での検出はならなかったが、葺石が施されていたことが確かめられた。但し、墳丘全体に葺かれていたものではないようである。

後円部北西側、第1段テラス下に地山削り出しの造り出しがとりつくが、その前端は失われている。

埴輪列が2方向に現存する。形象埴輪（蓋）・須恵器が出土した。須恵器は出土状況から破碎された可能性がある。

造り出しから一段下がった北側にも、造り出しと後円部をつなぎ、造り出しを載せる格好の平坦面が用意されており、そこでもマツリが行われたと推測できる。

3. 周濠

当古墳は、内濠・外濠の二重の濠をもつ。猪名野古墳群内で同様な二重周濠をもつ古墳の報告された例はない。

造り出し正面や前方部に近い堤上では、形象埴輪を樹立させたことが、外濠の調査から推定できる。第8次調査地点（造り出し正面）では蓋・家などの形象埴輪が、第10次調査地点（前方部正面）では外濠埋土内より馬・馬子の埴輪がセットで出土している。群馬県保渡田八幡塚古墳例のような形象埴輪樹立区があった可能性が考えられる（群馬町教育委員会2000）。

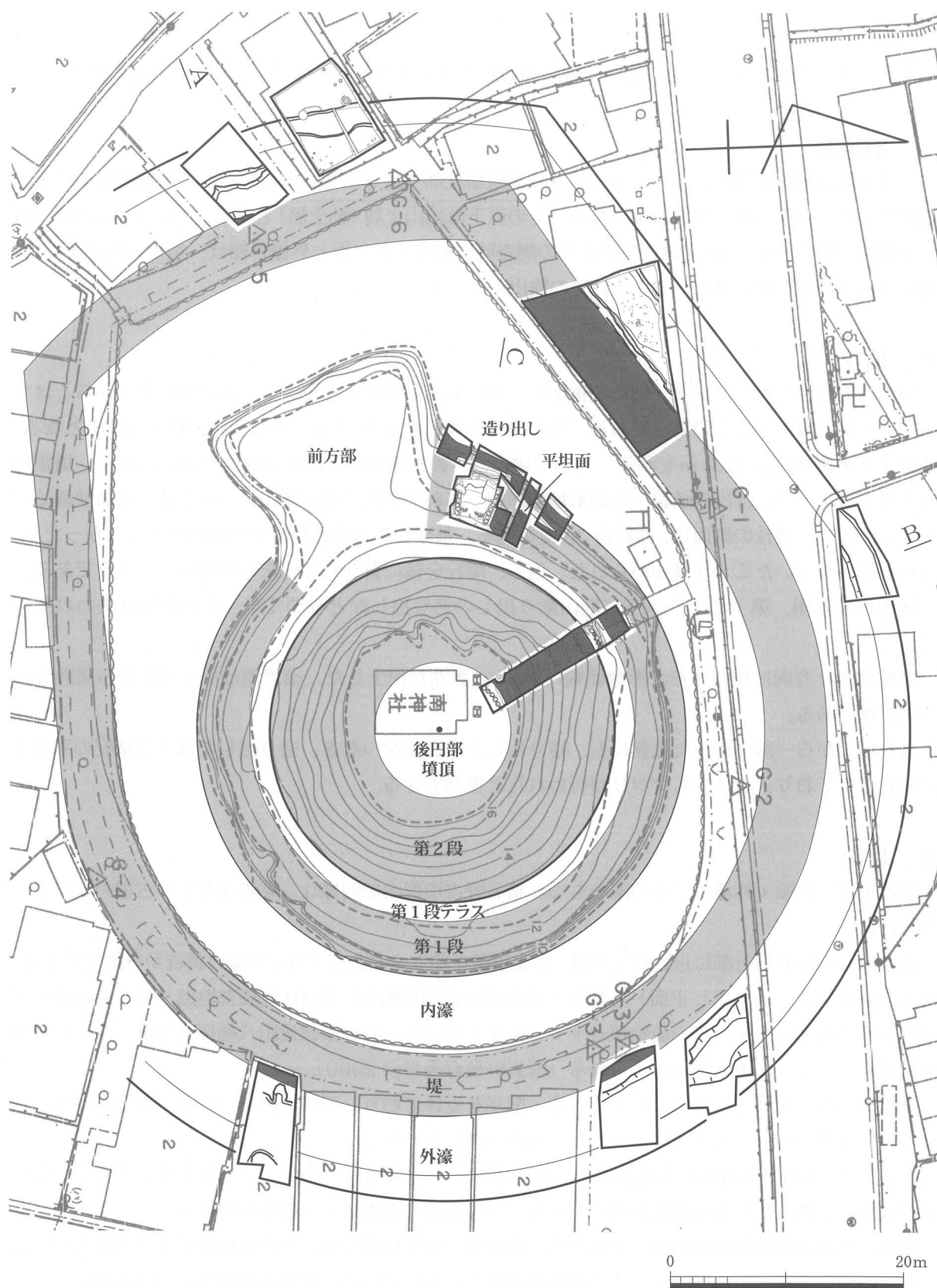
周濠は、内・外濠とも後世に大きく改変・削平を受けており、現状の内濠の底面や外側端は築造当初の姿を残す箇所は極めて少ないことが、発掘調査からわかる。

今回、第10次調査成果にあるように、前方部側の外濠の形状については、従来復元されている直線ではなく、円弧になる可能性が考えられた。今後近隣の調査により確証を得たい。

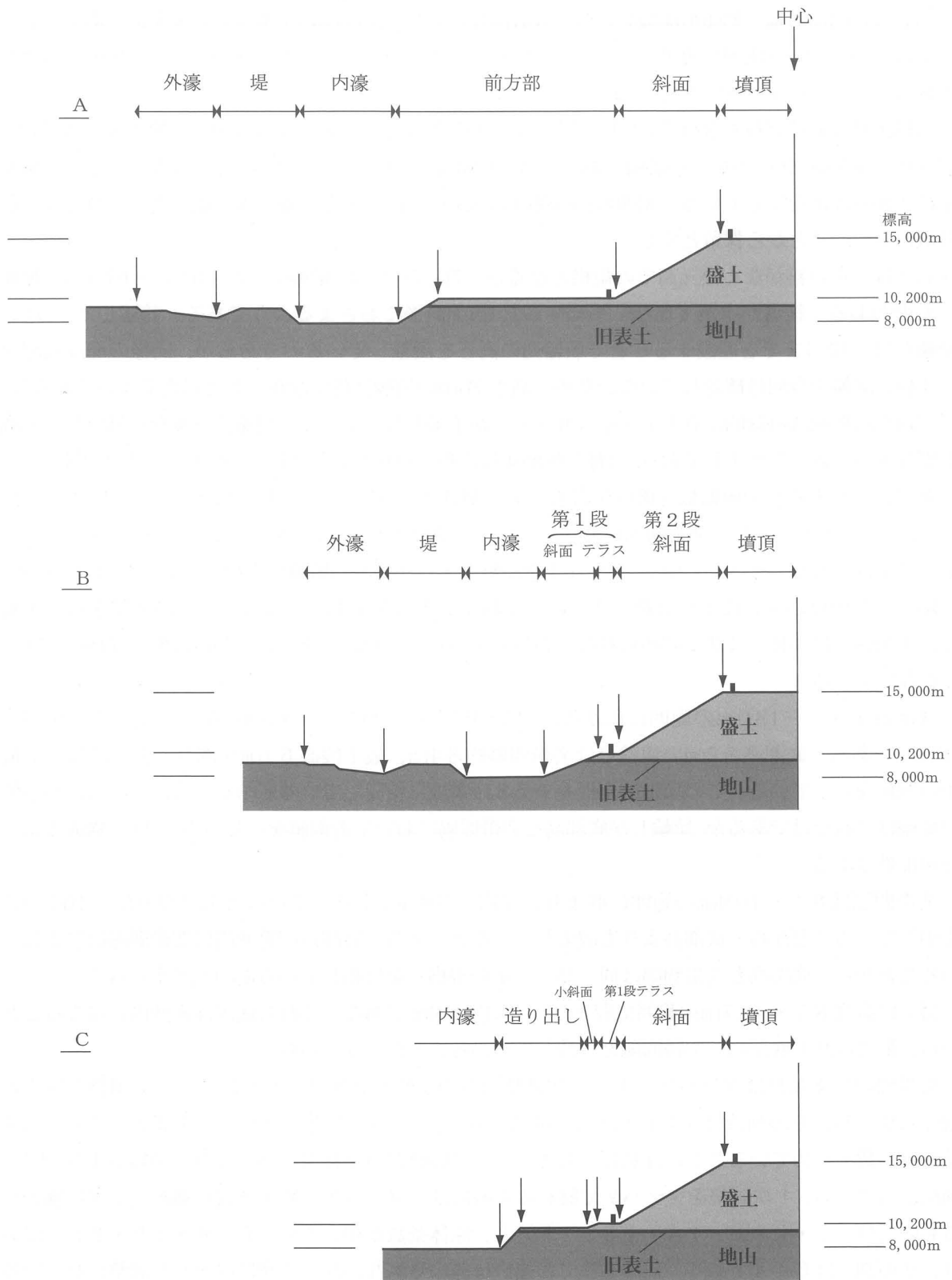
また、当古墳外濠外側法面は、下端から上端まで一度に傾斜せず、平坦な幅広いテラスをもつ。この形状については、加西市マンジュウ古墳の周濠と近似している（加西市教育委員会2007）。

さらには、現在明らかになっていない外濠外周の部分を調査し、外堤の有無を検討することも今後重要な調査課題であろう。

（中畔）



第40図 御願塚古墳平面図復元一案 (S = 1/500)



第41図 御願塚古墳断面図復元一案 (S = 1/500)

4. 埴輪

樹立していた埴輪を中心に、法量・形態・調整などについて観察表をもとにまとめておく。

出土した円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）は底部径が24～33.8cmの中型ないし大型品である。その中では30～31cmの範囲に集中していることがうかがえるものの、24～26cm（平均25cm）のやや小振りのものが約1/4を占めている。

口縁部径は破片資料も含めて31.4～38.5cm（平均34.8cm）の範囲に収まり、平均は35cmである。底部径が25cm前後の小振りの埴輪においては、口縁部径がともに小さいわけではなく、上方へ緩やかに広がる器形を呈している。朝顔の口縁部径は55.7～67.2cmで、細分は可能と考えられるが、資料数が少ないことから保留とする。

高さは完形資料がなく復元高での規格となるが、76cmのもの（埴輪C）と、61.7～67.1cmの範囲のものがある。後者が主流であり、平均すると65cm前後におさまるようである。前述したように、埴輪Cは2段目までを埋設することで埴輪列の高さを調整しているのであるが、同様の埋設状況を示す樹立埴輪を今回は確認していないため、高さ76cmの埴輪は他になかったと考えてよいであろう。

口縁部の形態は直線的に立ち上がる（b・c）が主流となっている。周濠部外濠から外反して上端が肥厚する（a）が出土しており、口縁を加飾する古相の埴輪がわずかに用いられていたと思われる。

突帯形状をみると全埴輪数（破片を含む）での割合は（a）4%、（b）54%、（c）10%、（d）24%、（e）8%を示し、突帯断面台形、あるいはややM字形を呈している、高さ0.8cm前後の（b・c）が主流である。そうした中で、丁寧な1次調整タテハケのみの埴輪の半数に（c）が認められる。

扁平で突出度の低い後出の突帯（d・e）が約1/3を占めており、特に（e）の突帯を持つ埴輪には1条目突帯に押圧技法が認められる。細長く突出する古相の突帯（a）が口縁部と同様にわずかに存在している。

底部高は8.2～13.0cmの範囲に広がるが、そのほとんどが8.5～11cmに集中している。平均は10.2cmである。底部高8.2cmの埴輪Oは突帯間隔約8.4cm、最上段高6.1cmを測り、全てにおいて最小の数値を示している。この埴輪は全形を7条8段構成に復元しているもので、今のところこの形態の埴輪はこれだけであるが、埴輪Lが底部高と突帯間隔において近似値を示しており、同じ構成であった可能性がある。

突帯間隔は8.4～10.9cmの範囲に収まり、平均は9.8cmである。そのほとんどが9.5～10.3cmに集中していることから、底部高よりも収束しているといえる。底部高の範囲内に突帯間隔は含まれていることから、底部高と突帯間隔は同一高（一定の規格）を目指しているものと考えられる。

最上段高は8.5～10.7cmの範囲に収まり、平均は9.9cmである。これも底部高範囲内に収まることから、最上段高も底部高・突帯間隔と一致しつつあることがうかがわれる。

突帯間の外面調整はタテハケによる1次調整のみの埴輪とB種ヨコハケによる2次調整を施す埴輪に大別され、その割合は4：6である。前者に対して、「ヨコハケを行う」一手間をかけている埴輪が過半数を占めていることに注意しておきたい。2次調整にCa種ヨコハケを施す埴輪が1基（1D）検出されている。1次調整をタテハケで終わるものには、タテハケの原体条数が細かく丁寧に施されるもの（H・I・L・N・1A・1B・1F）と、原体条数が粗いもの（E・K・1E・2D）があり、その割合は6：4である。他の属性での違いは認められないが、丁寧にタテハケ調整されているものが多い傾向にある。B種ヨコハケにはBb種・Bc種・Bd種の3種が見られ、その割合は2：5：3である。Bd種が一定量を占めてはいるが、Bc種が過半数を占めており、その充足率が高い。Bc種の静止痕の間隔は相対的に狭い印象を受ける。また、古い要素であるBb種が含まれている。

1 段目の外面調整は、1 次調整のタテハケのみのもの 66.6%、2 次調整に B 種ヨコハケを施すもの 16.7%、ナデ上げするもの 16.7% である。2 次調整を省略するものの比率が高い。1 段目は埋められて見えないため、突帯間の調整よりも簡略化が進んでいるようである。

内面調整は、斜め・タテ方向の指ナデ、あるいはハケナデを施すもの 73%、タテハケを施すもの 19%、ヨコハケを施すもの 8% で、ハケ調整を行う比率が低いといえる。ナデ調整を施すものはいずれも突帯貼り付け位置に指オサエ・ナデ調整を行っている。タテハケ・ヨコハケには外面調整のハケ工具を使用している。ヨコハケを施さない埴輪の中で、最上段（口縁部）にのみヨコハケを施すもの（O・2D・2E）が認められる。

焼成は埴輪の外面に黒斑が見られないこと、須恵質に焼き上がっているものがあることから、窖窯焼成によるものと判断される。

以上の諸要素から、御願塚古墳出土の埴輪は川西編年Ⅳ期（川西 1978）の範疇で理解できる。

さらに、外面調整をタテハケ 1 次調整で終わるものが増加する中で、B 種ヨコハケがまだ優位であること、そしてそのヨコハケでは Bc 種ヨコハケが目立つ存在でありながらも Bd 種ヨコハケが一定量存在する。また、Ca 種や Bb 種ヨコハケを施すものがあること、ばらつきは認められるが底部高・突帯間隔・最上段高で一定の規格が存在すると想定されることなどの特徴から、古市古墳群出土資料を基準とすれば上田編年Ⅳ-3 段階（上田 2003）に相当するものと考えておきたい。

埴輪は個々を見ていくとそれぞれが独自の特徴を持っており、まとまり（型式）では捉えられなかった。「補論Ⅰ」にもあるように、埴輪の胎土からは複数の製作地から供給されたことが推測されるが、製作地を越えて形態は規格化されているようで、同一古墳内にはほぼ同一規格の埴輪を集めて、並べている様子が理解できる。

5. 須恵器

造り出しで出土した須恵器の器種として杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・器台・甕を確認している。置かれた状態を保っていた資料はない。したがって、個体数を把握することが難しいが、破片の接合状況から器台は 2 個体、口縁部形状などから判断して甕は 8 個体であったと考えられる。それ以外の須恵器については、高杯蓋のツマミ、高杯脚部でそれぞれのおよその個体数をつかむことが可能である。それによると高杯蓋 7 個体、有蓋高杯は 15 個体、無蓋高杯は口縁部片 1 点のみの出土であるが、最低でも 1 個体の存在が推測される。

前述したが、杯・蓋・高杯の口縁部や高杯脚部部の形状は一様ではなく、かなり多様な様相を呈していることから、ある程度の時期差があるとも考えられる。しかし、全形の分かる資料が少ないため断定できない。今のところ同時期内でのバラエティーであると捉えておきたい。したがって、これらの須恵器を TK23（田辺 1966）併行期のものと考えておく⁽¹⁾。

（瀬川）

6. まとめ

御願塚古墳は、5 世紀後半に築造されたと認識されてきた。今回の調査により、造り出し・後円部第 1 段テラスに樹立していた円筒埴輪を検討した結果（前述「4. 埴輪」参照）、Ⅳ期後半、5 世紀第 3 四半期と考えられる⁽²⁾。また、前方部正面堤上に置かれていたと考えられる馬・馬子が合わせて出土したことも、築造時期を考える重要な要素である。

出土した円筒埴輪は、小振りのものが少なく、中型ないし大型のものが全体の 3/4 を占める。当古墳が 50 m ほどしかない帆立貝式古墳にもかかわらず、供給された埴輪の立派さが目を引く。埴輪

の特徴は市野山古墳を含む古市古墳群の埴輪と似通っているが、生産地は異にする可能性がある（「補論Ⅰ」参照）。

造り出しに樹立していた円筒埴輪の中に、据えた時の高さを揃えるために底部を割って短くしたと考えられるものがあったことから、当古墳に使用された円筒埴輪が、1地点の窯で統一した規格によって作られた製品でなく、数地点の窯から集められた埴輪が使用されたとする調査時からの推察は、様々な供給元をあげた「補論Ⅰ」に合致する。

造り出しは、墳丘と同様、旧表土・地山を削り出しその上に盛土して築造されており、マツリの場合が当初から計画され用意されたものであることはまちがいない。なお、今回、造り出し上から出土した須恵器は、TK23 併行期のものが占める（前述「5. 須恵器」参照）。埴輪から市野山古墳築造期としたが、市野山古墳の築造時の須恵器は TK208 併行と想定されており、御願塚古墳出土の須恵器は埴輪の時期と微妙に合致しない。古墳の築造と埋葬（マツリ）に時間差があるものと考えたい。さらには追葬や継続祭祀の可能性もあろう。

今回の3次の調査から、当古墳について非常に多くの情報を得たが、主体部・前方部・外濠の外側が未調査であることから、多くの課題も残った。埴輪の供給元は古市古墳群のそれとは異なるようであるが、埴輪は地域（地方）色をもつものでなく、むしろ中央色を帯びた特徴をもつことから、中央王権と深い関係にあったことが窺える。しかし、被葬者論を含めてこれ以上に踏み込むには材料が少ない。当古墳の周濠が、二重・内堤をもつという、一地方にある帆立貝式古墳にしては特異な特徴をもつ点についてもこれからの検討が必要である⁽³⁾。

この報告書を通じて、当古墳を含めた猪名野古墳群の重要性が再認識され、広く研究の対象とされることを期待したい。

（中畔）

註

- (1) 埴輪・須恵器については高橋克壽氏、埴輪検討会の方々に実見していただいた。埴輪に関しては、市野山古墳（伝允恭陵）出土埴輪と類似しているとのこと指摘をいただいた。
- (2) この築造年代観は、あくまでも埴輪のみをもとにしている。主体部の副葬品などを含めての総体的な検討については、今後の調査を待たなければならない
- (3) この報告書作成中、ほぼ同時期の帆立貝式古墳である金津山古墳の周濠（馬蹄形）が二重であることが判明した（平成20年1月18日芦屋市教育委員会記者発表）。

参考文献

- 浅岡俊夫 「信長に消された猪名野の前期古墳—上臈塚古墳—」『実証の地域史』 大阪経済法科大学 2001
- 尼崎市役所 『尼崎市史』第1巻 1966
- 尼崎市役所 『尼崎市史』第11巻 1980
- 尼崎市教育委員会 「尼崎市中ノ田遺跡2」『尼崎市文化財調査報告書』第18集 1987
- 尼崎市教育委員会 「平成8年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」
『尼崎市文化財調査報告書』第27集 1999
- 尼崎市教育委員会 「平成10年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」
『尼崎市文化財調査報告書』第30集 2002
- 尼崎市教育委員会 「平成11年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」
『尼崎市文化財調査報告書』第32集 2003
- 尼崎市教育委員会 「平成14・15年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」
『尼崎市文化財調査報告書』第34集 2005
- 伊丹郷町研究会 「伊丹郷町遺跡の陶磁器の様相」(第1回伊丹郷町研究会大会発表要旨集) 2003
- 伊丹市役所 『伊丹市史』第1巻 1971
- 伊丹市役所 『伊丹市史』第4巻 1968
- 伊丹市教育委員会 「御願塚古墳環境整備に伴う発掘調査概報」『伊丹市文化財調査報告』 1971
- 伊丹市教育委員会・伊丹市文化財保存協会 「ふるさとのこころをたずねて 破塚の碑(御願塚古墳)」 1974
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅰ」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第15集 1992
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ 御願塚古墳外堤部の調査」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』
第17集 1993
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅲ」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第19集 1994
- 伊丹市教育委員会 『伊丹の文化財』 1995
- 伊丹市教育委員会 「高台遺跡第4地点第1次発掘調査実績報告書」 1998
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第23集 1999
- 伊丹市教育委員会 『伊丹の歴史的建造物』 2000
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第24集 2001
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第30集 2005
- 伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第32集 2007
- 伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会 『有岡城跡発掘調査報告書X—第11次～第16次・第18次～第22次調査の概要』
2003
- 伊丹地名研究会 「御願塚の地名」『地域研究いたみ』第15号 伊丹市立博物館 1985
- 一瀬和夫 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』V
大阪府教育委員会 1988
- 上田 睦 「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会 2003
- 大阪大学文学部考古学研究室 「鳥居前古墳—総括編—」『大阪大学文学部考古学研究報告』第1冊 1990
- 大阪府教育委員会 「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』第30輯 1978
- 大阪府教育委員会 「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書』第39輯 1992
- 大阪府教育委員会 「土師の里遺跡—土師氏の墓域と集落の調査」『大阪府埋蔵文化財調査報告』 1999
- 大塚古墳発掘調査団 『摂津豊中 大塚古墳第3次調査概要報告書—大阪府豊中保健所建替工事に伴う発掘調査』 1992
- 岡山市教育委員会 『造山第2号古墳 付伝・千足古墳出土遺物』 1992
- 奥田 尚他 「応神陵古墳外堤出土円筒埴輪の研究」『研究紀要』第4集 埴輪検討会 1998
- 小長谷正治 「御願塚古墳最近の調査」『地域研究いたみ』第18号 伊丹市立博物館 1988
- 加古川市教育委員会 「行者塚古墳発掘調査概報」『加古川市文化財調査報告書』15 1997
- 加古川総合文化センター 『行者塚古墳の時代 博物館常設展示あんない 別冊』 2001
- 加西市教育委員会 「マンジュウ古墳」『玉丘古墳群Ⅲ』 2007

- 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号 日本考古学会 1978
- 川西市教育委員会 『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』 2006
- 韓式系土器研究会 『韓式系土器研究 I』 1987
- 韓式系土器研究会 『韓式系土器研究 II』 1989
- 群馬町教育委員会 「保渡田八幡塚古墳群」『群馬町埋蔵文化財調査報告』第 57 集 2000
- 神戸市教育委員会 『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』 2006
- 古代の土器研究会編 『古代の土器 1 都城の土器集成 I』 1992
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 「瓦谷古墳群」『京都府遺跡調査報告書』第 23 冊 1997
- 堺市教育委員会 「百舌鳥古墳群 鎮守山塚古墳-CJY-1 地点 堺市百舌鳥赤畑町 5 丁-」
『平成 9 年度国庫補助事業発掘調査報告書』 1998
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 「千僧供古墳群」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財
管理業務報告書』 2002
- 出土銭貨研究会 『出土銭貨』第 16 号 2001
- 世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会 『野毛大塚古墳』 1999
- 高橋克壽 「古墳の葺石」『文化財論叢 III 奈良文化財研究所学報』第 65 冊 2002
- 高橋克壽 「埴輪の世紀」『歴史発掘』9 講談社 1996
- 田辺昭三 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古クラブ 1966
- 中世土器研究会 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
- 名古屋市教育委員会 『志段味大塚古墳・大久手古墳群』 2006
- 沼澤 豊 「前方後円墳と帆立貝古墳」『考古学選書』52 雄山閣 2006
- 野上丈助 『特別展 大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館 1982
- 埴輪検討会 『埴輪論叢』第 4 号 2003
- 羽曳野市教育委員会 「羽曳野市内遺跡調査報告書-平成 8 年度-」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』38 2000
- 羽曳野市教育委員会 「羽曳野市内遺跡調査報告書-平成 6 年度-」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』45 2002
- 羽曳野市教育委員会 「羽曳野市内遺跡調査報告書-平成 11 年度-」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』46 2002
- 廣瀬 覚 「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』55-9 2003
- 兵庫県 『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 2 輯 1925
- 兵庫県教育委員会 「温塚古墳跡」『昭和 59 年度 年報』1984
- 兵庫県教育委員会 「片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書-山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 XVII」
『兵庫県文化財調査報告』第 143 冊 1995
- 兵庫県教育委員会 「南本町遺跡」『平成 7 年度 年報』1996
- 兵庫県教育委員会 「南本町遺跡」『平成 8 年度 年報』1997
- 兵庫県教育委員会 「南本町遺跡」『平成 9 年度 年報』1998
- 兵庫県教育委員会 「伊丹市 南本町遺跡」『兵庫県文化調査報告』第 179 冊 1998
- 兵庫県教育委員会 「有岡城跡・伊丹郷町 III」『兵庫県文化財調査報告書』第 207 冊 2000
- 兵庫県教育委員会 「伊丹市所在 有岡城跡・伊丹郷町 IV」『兵庫県文化財調査報告』第 301 冊 2006
- 兵庫県教育委員会 「南本町遺跡・北村遺跡」『兵庫県文化財調査報告書』第 320 冊 2007
- 埋蔵文化財研究会 『中期古墳の展開と変革-5 世紀における政治的・社会的変化の具体相(1)-』
(第 44 回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集) 1998
- 埋蔵文化財研究会 『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-(第 52 回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集) 2003
- 松阪市教育委員会 「史跡宝塚古墳」『松阪市埋蔵文化財報告書』I 2005
- 三木文雄編 「はにわ」『日本の美術』19 至文堂 1967
- 遊佐和敏 『帆立貝式古墳』同成社 1988
- 養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 「象鼻山 1 号古墳-第 3 次発掘調査の成果-」『養老町文化財
調査報告書』第 3 冊 1999

報告書抄録

| ふりがな | ひょうごけんいたみし ごがつかこふんはくつちようさほうこくしょ | | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|------|---------------------|------------|-----------------------|--------|--------|
| 書名 | 兵庫県伊丹市 御願塚古墳発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 第8・9・10次調査 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 伊丹市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第34集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 中畔明日香 | | | | | | | |
| 編集機関 | 伊丹市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒664-8503 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2008年3月 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 御願塚古墳 第8次調査 | 伊丹市 御願塚4丁目326-1 他 | 28207 | 61 | 34°46'46" | 135°25'02" | 19980529 ～19980821 | 180㎡ | 環境整備事業 |
| 御願塚古墳 第9次調査 | 伊丹市 御願塚4丁目325-1 他 | | | | | 20001117 ～20010131 | 33.75㎡ | |
| 御願塚古墳 第10次調査 | 伊丹市 御願塚4丁目322-2 | | | | 135°25'01" | 20050201 ～20050218 | 52㎡ | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 御願塚古墳 第8次調査 | 古墳 | 古墳時代 (中期) | | 造り出し 堤・外濠 埴輪列 | | 円筒埴輪 形象埴輪 須恵器 | | |
| 御願塚古墳 第9次調査 | | | | 墳頂・第1段テラス 埴輪列 | | 円筒埴輪 形象埴輪 | | |
| 御願塚古墳 第10次調査 | | | | 外濠 | | 円筒埴輪 形象埴輪 | | |
| 要約 | <p>本報告書では、伊丹市御願塚4の御願塚古墳で行われた第8・9・10次発掘調査の成果を報告する。</p> <p>第8次調査では、後円部に取り付く「造り出し」が発見された。また、堤・外濠を確認した。第9次調査では、後円部墳頂と第1段テラスから埴輪列が発見され、2段築成であることが確認された。第10次調査では、外濠が確認され、埋土より馬・馬子の埴輪が出土した。</p> <p>3回の調査により、当古墳が、5世紀後半に築造された二重周濠、造り出し付帆立貝式古墳（2段築成）であることが明らかになったが、外堤については再考を促すこととなった。</p> | | | | | | | |

図版 1



1. 第I・IIIトレンチ全景（西北より）



2. 第Iトレンチ全景（西北より）



3. 第Iトレンチ南壁断面と平坦面（西北より）



4. 第Iトレンチ石列検出状況（北東より）



5. 第Iトレンチ石列検出状況（西北より）

図版 2



1. 第Ⅱトレンチ全景（西北より）



2. 第Ⅱトレンチ拡張前（西北より）



3. 第Ⅱトレンチと第Ⅳトレンチ（北より）



4. 第Ⅱトレンチ北壁断面（南西より）



5. 第Ⅱトレンチ埴輪列検出状況（東南より）



1. 第Ⅱトレンチ北側埴輪列
埴輪A～H（南西より）



2. 第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪I～N（北東より）



3. 第Ⅱトレンチ北側埴輪列
埴輪A～H（東南より）



4. 第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪I～N（東南より）



5. 第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪I～N（西北より）



6. 第Ⅱトレンチ北側埴輪列
掘り方（東南より）



7. 第Ⅱトレンチ南側埴輪列
掘り方（東南より）



8. 第Ⅱトレンチ南側埴輪列
掘り方と埴輪O（西北より）

図版 4



1. 第Ⅲトレンチ全景（西北より）



2. 第Ⅲトレンチ北壁断面と葺石転落状況（南西より）



3. 第Ⅲトレンチから造り出し（第Ⅱトレンチ）を見る（北東より）



4. 第Ⅳトレンチ全景（西北より）



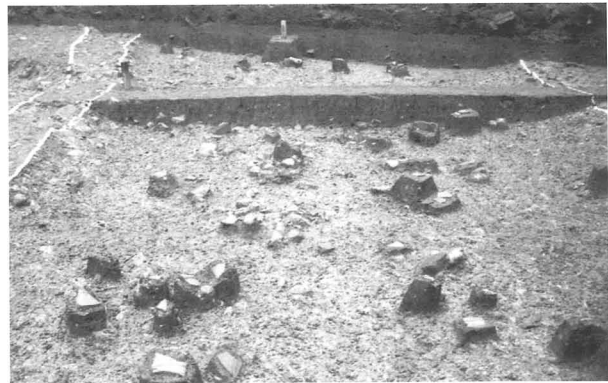
5. 第Ⅳトレンチ南壁断面（北東より）



1. 外濠部全景（東より）

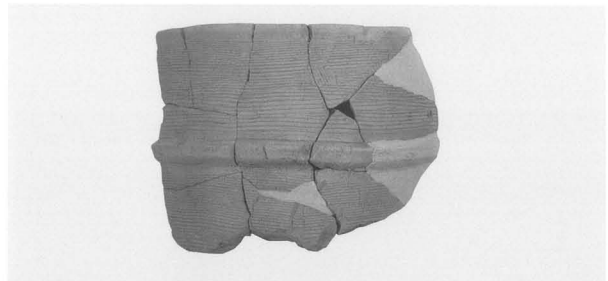


2. 外濠部西壁断面と外濠畦断面（東北より）

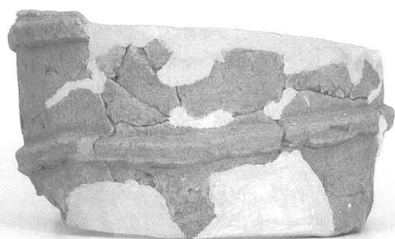


3. 外濠部外濠内埴輪出土状況（東北より）

図版 6



図版7



埴輪 E



埴輪 F



埴輪 G



埴輪 H



埴輪 I

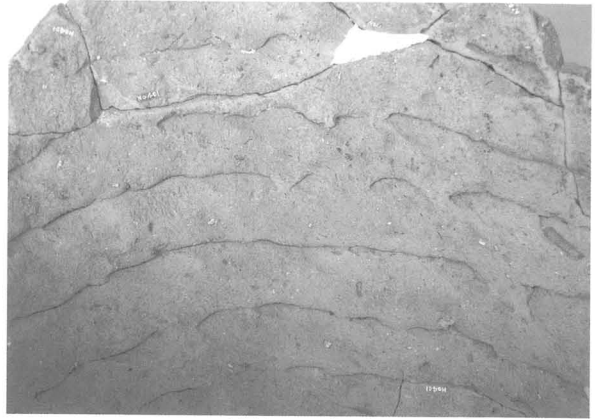


埴輪 K

図版 8



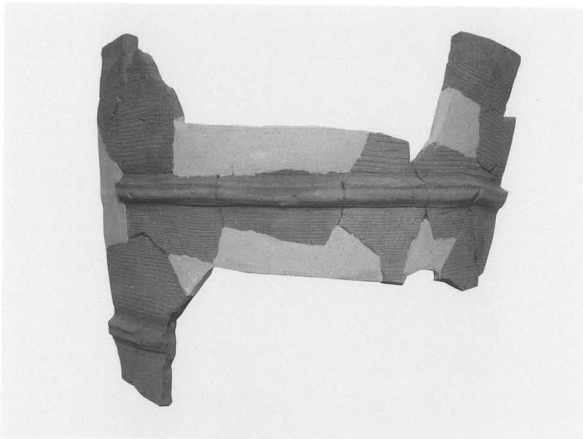
埴輪 L



埴輪 L 内面



埴輪 J



埴輪 M



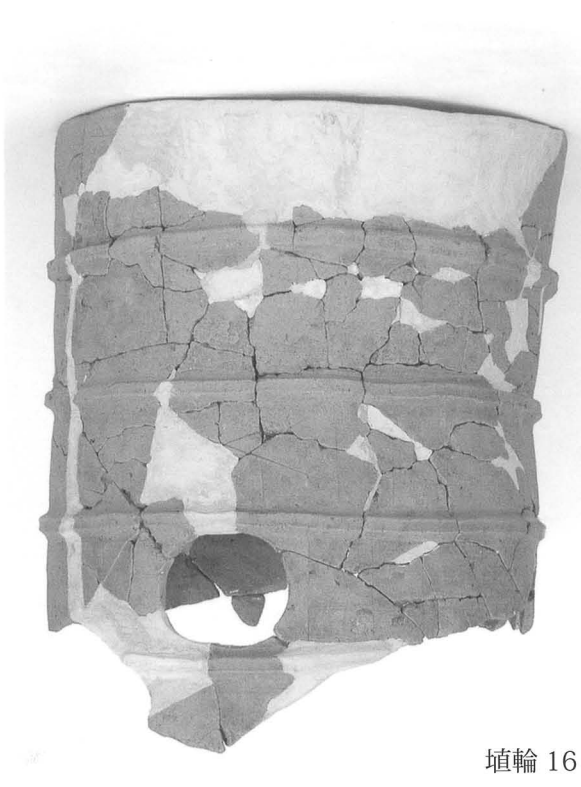
埴輪 O



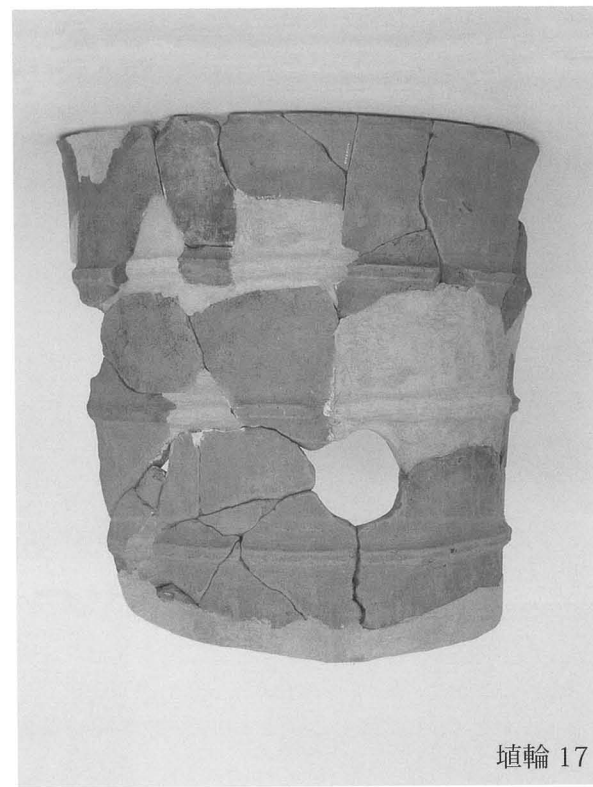
埴輪 N



埴輪 18



埴輪 16



埴輪 17



埴輪 19



埴輪 20

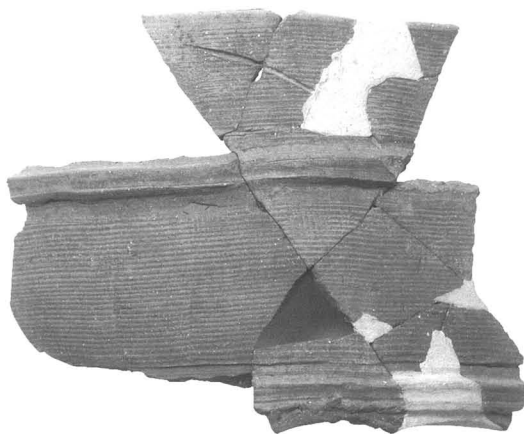


埴輪 21

図版 10



埴輪 22



埴輪 26



埴輪 23



埴輪 29



埴輪 31



埴輪 32



埴輪 34



埴輪 39



埴輪 27



埴輪 40

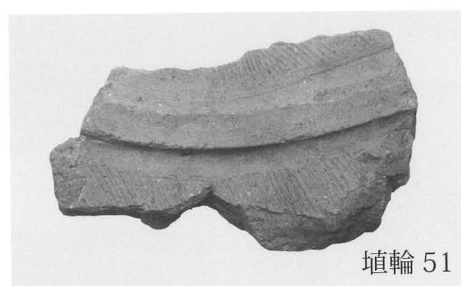
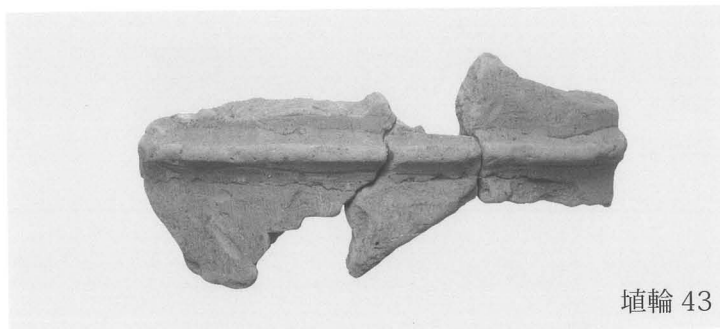


埴輪 37

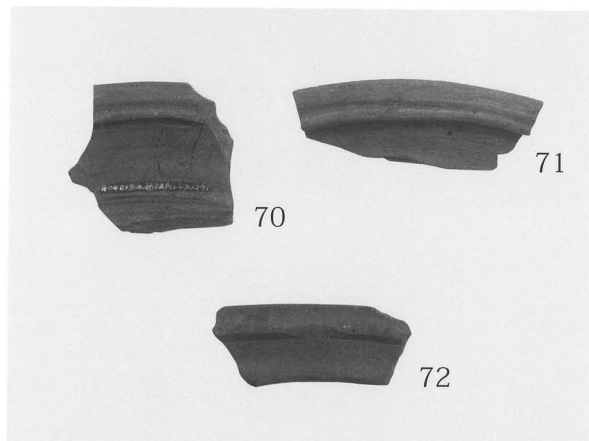
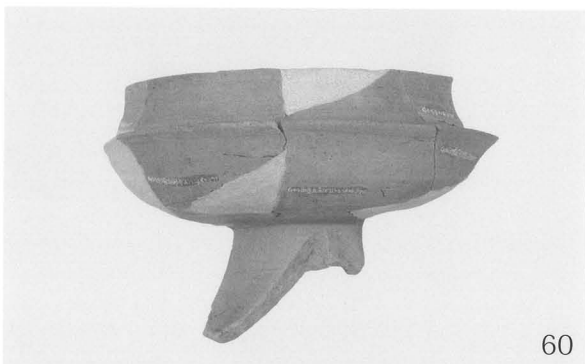
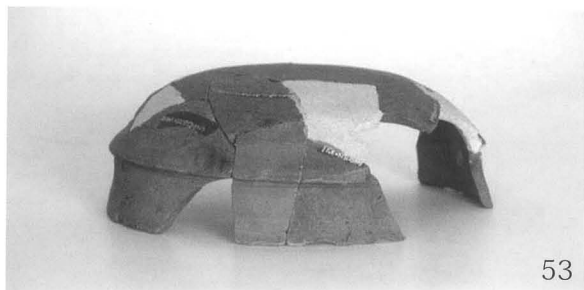


埴輪 41

図版 11



図版 12



第Ⅱトレンチ出土 甕口縁部片



63



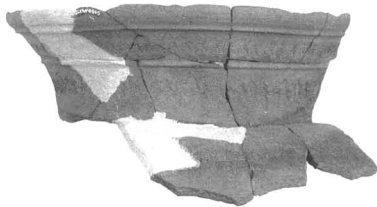
66



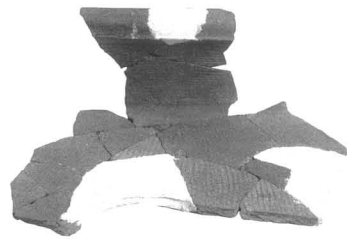
62



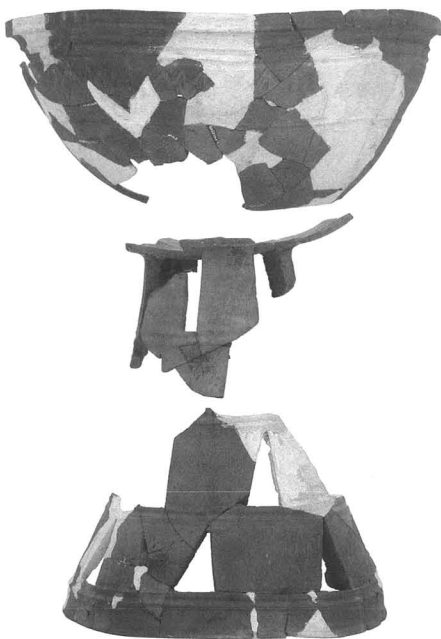
73



64



65



67



68

図版 14



埴輪 1



埴輪 15



埴輪 2



埴輪 4



埴輪 6



埴輪 16



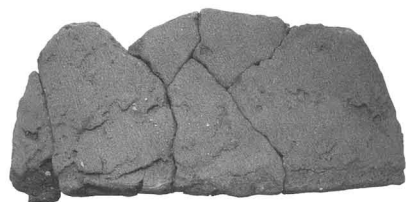
埴輪 3



埴輪 18



埴輪 17



埴輪 19



埴輪 7



埴輪 8



埴輪 20



埴輪 21



—



埴輪 22



|



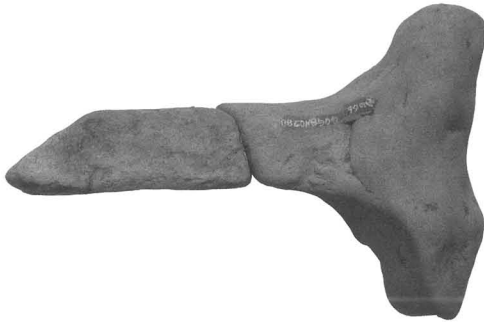
—



埴輪 23



埴輪 26



|



|



埴輪 24



埴輪 25



埴輪 27

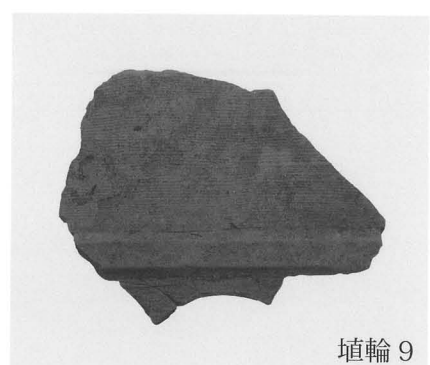
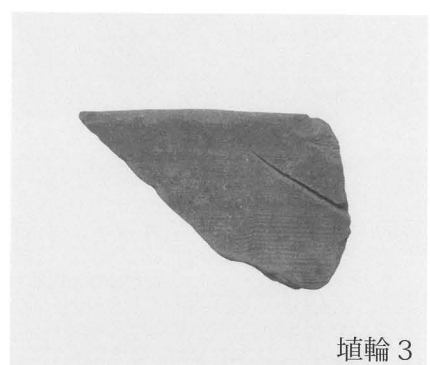
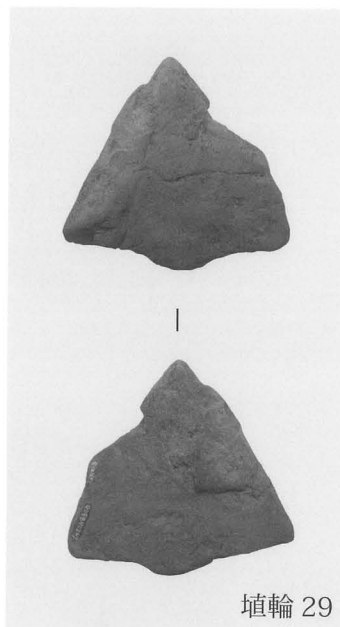
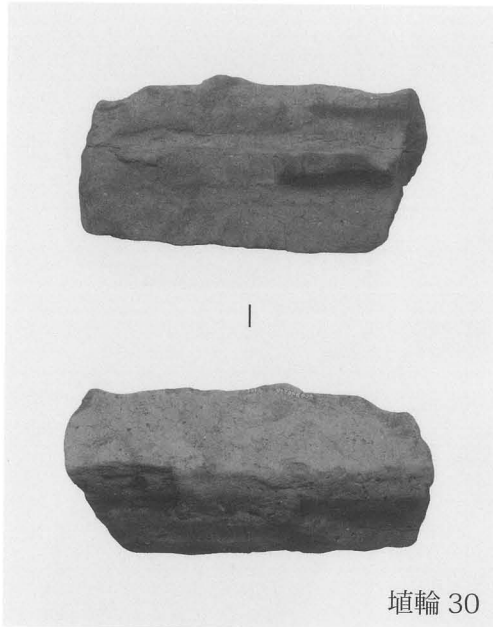


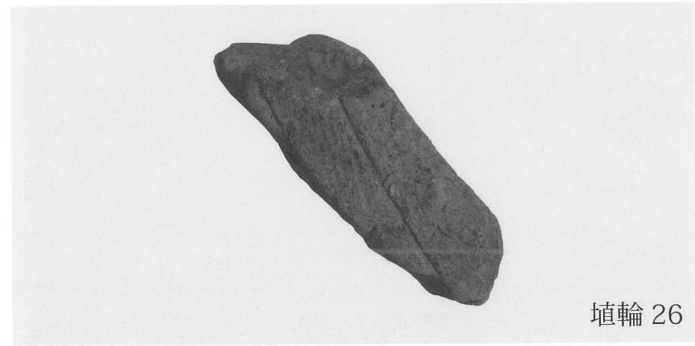
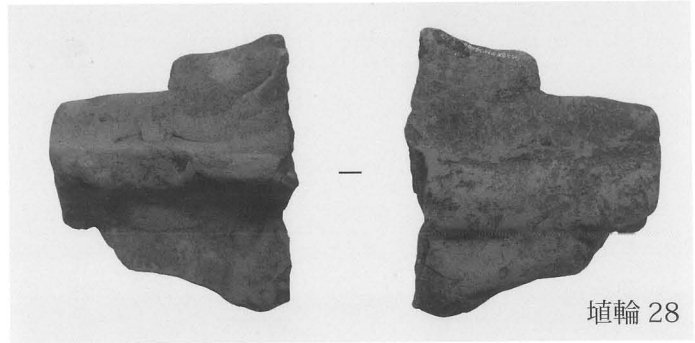
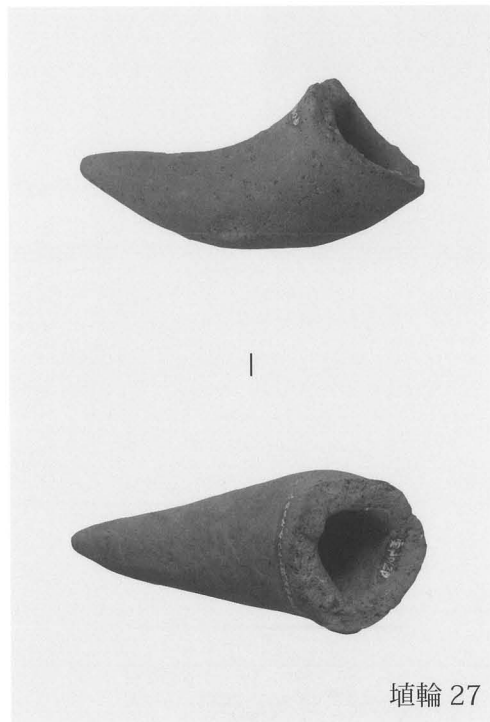
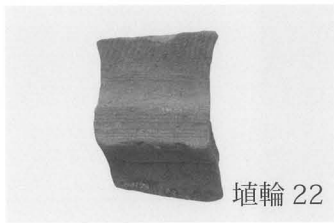
埴輪 28



埴輪 31

图版 16







1. 調査時航空写真
(南より)
兵庫県立考古博物館提供



2. 全景 墳頂部から段築部を
望む (南東より)



1. 埴輪部の埴輪列 (南東より)



2. 埴輪部の埴輪列と東壁断面 (西より)



3. 埴輪部の埴輪列 (東より)



4. 埴輪 1A と東壁断面 (西より)



5. 埴輪部の埴輪列掘り方 (西より)



6. 埴輪部の埴輪列掘り方 (東より)



1. 段築部の埴輪列と葺石（北西より）



2. 段築部から埴頂部を見る（北西より）



3. 葺石と葺石転落状況（南東より）



4. 段築部の埴輪列と東壁断面（西より）



5. 段築部の埴輪列（西南より）



埴輪 1 A



埴輪 1 D



埴輪 1 B



埴輪 1 F



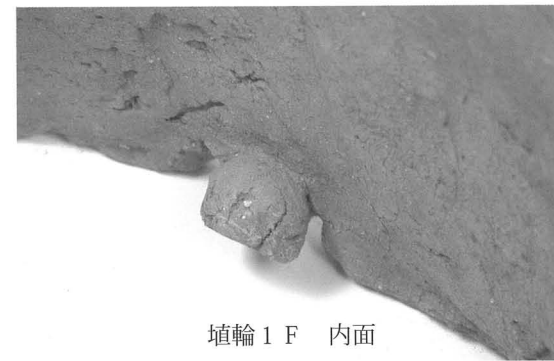
埴輪 1 C



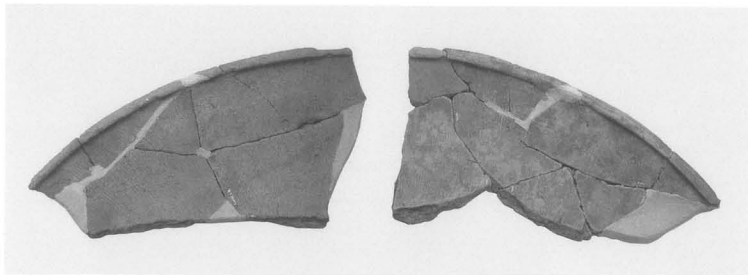
埴輪 1 F 外面



埴輪 1 E



埴輪 1 F 内面



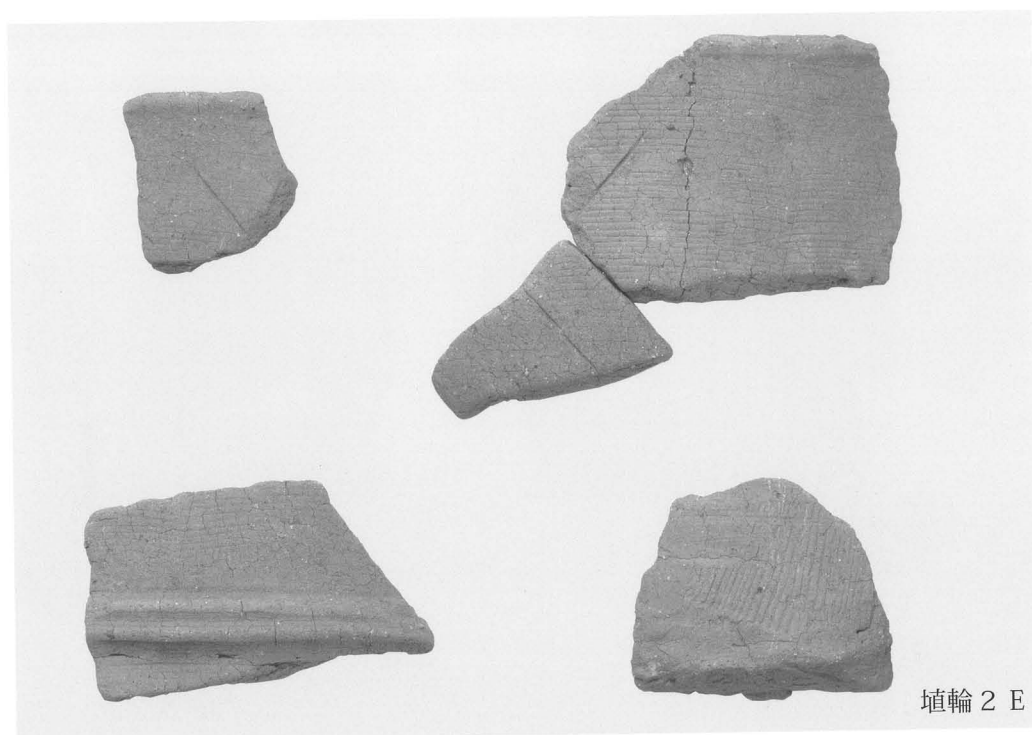
埴輪 2 A



埴輪 2 C



埴輪 2 C 外面



图版 24



埴輪 12



埴輪 13



埴輪 17



埴輪 18



埴輪 16



埴輪 19



埴輪 21



埴輪 20



埴輪 22



埴輪 25



埴輪 24

図版 25



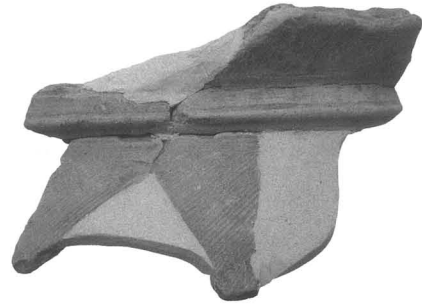
埴輪 27



埴輪 28



埴輪 30



埴輪 32



埴輪 31



埴輪 33



埴輪 35



埴輪 34



埴輪 36



1. 全景（南西より）



2. 外濠検出状況（南西より）



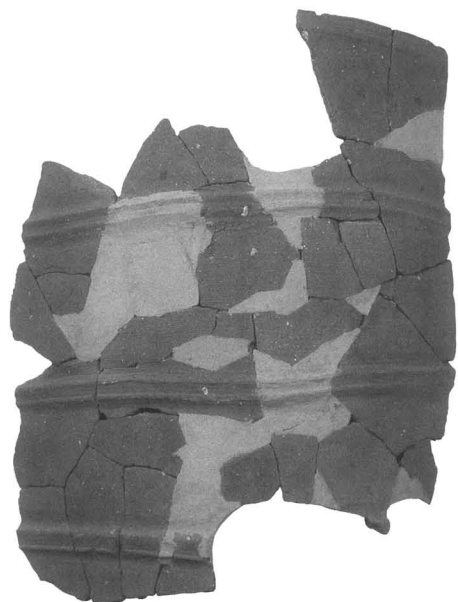
3. 埴輪・須恵器出土状況（北より）



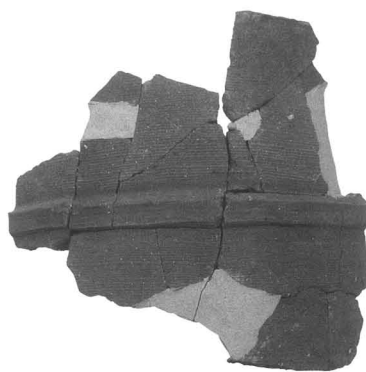
4. 北壁断面（南より）



5. 東壁断面（西より）



埴輪 1



埴輪 2



埴輪 4



埴輪 5



埴輪 8



埴輪 9



埴輪 12



埴輪 15



埴輪 20



埴輪 23



埴輪 24

图版 28



埴輪 25



埴輪 31



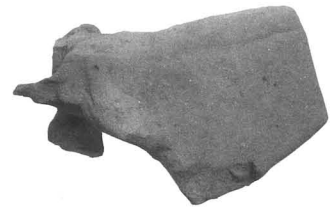
埴輪 26



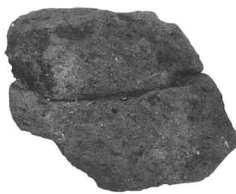
|



埴輪 27



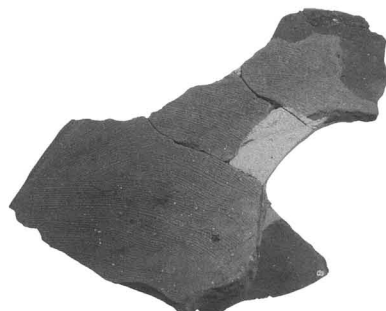
埴輪 28



埴輪 30



埴輪 32



埴輪 39



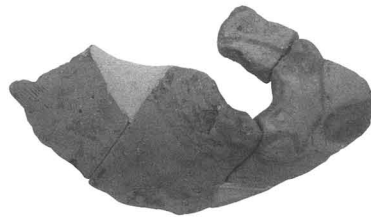
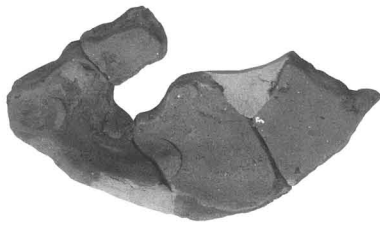
埴輪 33



埴輪 40



埴輪 34



埴輪 35



埴輪 36



埴輪 38



埴輪 41



埴輪 37



埴輪 42

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第34集

兵庫県伊丹市

御願塚古墳発掘調査報告書

—第8・9・10次調査—

2008年3月

発行 伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目1
TEL 072-783-1234

印刷 弘栄堂印刷所
伊丹市中央4丁目1番11号
TEL 072-772-8111

